

読谷村民話資料集 8

高志保の民話

沖縄県 読谷村教育委員会
歴史民俗資料館編

読谷村民話資料集第八集「高志保の民話」が発刊されました。

民話集発刊事業も回を重ねること八回、誠によるこぼしく発刊の仕事に情熱をそそいで下さいました関係者に心から敬意を表する次第であります。

民話は、その地に住む人々の先祖が、代をついで語り伝えて来た民衆の文化遺産であります。この本の中にある民話を読む時、われわれは先人の素朴で純真な心や、説話、教訓、社会的規範（人間の生き方）に触れ、郷愁にもた沖繩の昔の心に接することができるのであります。それは遠い祖先との対話の回復であり、あずに生きる人間の灯ともしびともなり、勇気ともなるのであります。同時に、ふるさとへの愛着の情を抱かせるものであります。

人間の教育の中で、古里（生まれた地域の歴史等）を教えることは大変重要なことであります。この民話集が、家庭教育、社会教育、学校教育の中で、素材として活用され、子ども達や青少年の心の糧となり、更に新しい文化創造への基になりますよう期待するものであります。

「温故知新おんこちしん」とありますように、古き文化遺産を若い人々に伝え得るのは、お年寄りの方々であります。老人の昔を語る話の中に、人間の生き方の道があり、新しい文化創造への土台があるのであります。

高志保のお年寄りの皆さんが、話者として語って下さったおかげで、こんな立派な本ができたのであります。今や「地方の時代」「文化の時代」といわれており、つぎつぎと発刊される民話集が、「読谷ルネッサンス」の一環として、読谷村の「人間性豊かな環境・文化村」づくり大きく寄与するものと信ずるものであります。

村民の歩いた跡あとが道となり、その道がやがて文化となります。村民は道みちを拓き、文化を創造するため、今後とも歩み続けることが大切であります。

最後に、このような素晴らしい民話集が発刊できますのも関係者の深い情熱と努力のたまものであり、心から敬意と感謝の意を表しご挨拶いたします。

あいさつ

読谷村教育長 新崎 盛 繁

読谷村民話資料集8「高志保の民話」が、発行されることになりました。採話から翻字整理、製本と丹念に作業を進められた皆さんに心から感謝いたします。

昭和五十一年に高志保の先輩の方々のご協力を戴いて採話したテープから、話者の皆様が語られたお話を一語のききもらしもないように、そのまゝを忠実に文字に改めていく事を翻字といっておりますが、大変に辛抱のいる作業であります。読谷村歴史民俗資料館の職員をはじめ「ゆうがおの会」のメンバーの深い理解と強力な推進によって仕上げることができました。

人類が始まって、部族を固め社会をつくり今日へと、人々の心の中に育ち伝承された民話は、ある時は笑いと和をかもし又ある時は、倫理道徳を培って共同社会の深いきずなを形成し、生活文化を豊かにしてくれました。幼ない子供達にとつては唯一の心の糧であったし、人間味あふれた素朴な心のふれあいでありました。

近年は高度な経済成長下にあつて都市化現象は核家族化をうみ、地域での対話欠如連帯の弱さを浮きぼりにしつつある折、一方で、ふるさとを求める動きが台頭し地方の民族文化を掘りおこして温かい心をとりますことは有難いことでもあります。先に学校教育の中に、多くの民話が学校劇として創作上演されたり、紙芝居で親しまれている事を申し上げましたが、この度は、NITテレホンサーブス八―四一三〇よいみんわで毎週交替で「よみたんのみんわ」が聞けるようになりました。みんなの会のご協力で読谷村民話資料集の中から次々と語り届けられる事でありましょう。このように、人々に温かい古里の薫りとして届けられております事も人間性豊かな環境文化村をめざす村人の新たな動きであり喜ばしい次第であります。

終りに本誌発刊に当り高志保の先輩方をはじめ関係者ご一同に深甚なる敬意を表してごあいさつといたします。

高志保部落の概況―序にかえて―

館長 名嘉真 宜勝

高志保部落は、読谷村における古層の村の一つである。高志保部落の名が登場して来るのは、一六七三年以前に編集された『琉球国高究帳』で、それには「たかしふ村」と表記され、『中山伝信録』（一七一九年）や『琉球国旧記』（一七三二年）には、現在使用している「高志保」の漢字が当てられるようになった。行政上の読み方は「たかしほ」であるが、方言では「たかしつぷ」である。

高志保部落の地名の由来が本書の中に納められているが、それを要約すると次のようである。

昔、高志保部落の名は、最初はマチヂカサ、ウチドウマイと称していたが、その後にはタカムチという名に変わり、そして現在のタカシツプ（高志保）になったと云う。

現在、人口一六八〇人、戸数三三〇戸である（昭和六一年一月末現在）。人口の推移は、明治十三年に四七五人、戸数九〇戸で、明治二九年には人口六六一人、戸数一一六戸、明治三六年には人口七〇〇人、戸数一三七戸と漸次発展してきた。現在の人口は二十二字中五位の位置にある。

現在、高志保部落には読谷郵便局、読谷小学校、読谷農協、沖縄相互銀行、歯科院等をはじめ、薬局、酒造所、印刷所、鉄工所、自転車店、書店、衣料品店、靴店、製菓店、理容店、クリーニング店、スポーツ用品店、スーパー、雑貨店等、ほとんどの商業が県道六号

線沿いに立ち並んでいる。読谷村ではもつとも賑やかな商店街をなしている。

高志保部落の旧家はイリヘンサジグワー（喜友名繁安）で、根所の神は同家に祀られている。一九四八年五月に調査された『連記土地台帳』（一筆限調査）によると、当時の戸数は一八九戸で、それらは表(1)のような門中（または一門ともいう）に分類できる。

その中で喜友名門中が根所の神を祀っているところから、もつとも古い門中だと考えられる。その他、大城門中、安富祖門中、疋口門中、知花門中、前字座門中、恩納門中、松田門中、仲門門中等も古い門中である。国吉門中や奥原門中、津波門中、新垣門中、前門中、西門門中、伊口門中、上地門中、波平門中、喜瀬門中、島袋門中、仲村渠門中等は比較的新しい門中である。

屋号はヤーンナー（家の名）と称され、現在でも盛んに使われている。表(1)には屋号も記載しておいたが、これも前述の『連記土地台帳』によるもので、漢字が当てられている。方言での読み方を若干しるしてみると、ミーヤアラカチ（新屋新垣）、メージョウ（前門）、イリヘンサジグワー（西南風佐事小）、ミーヤミンダカリ（新屋新村渠、新屋前村渠）、ントーウフグシク（武戸大城）、アガリハシグチ（東疋口）等がある。大まかに整理すると、①戸主名と姓による方法、②男子の統柄による方法、③姓名による方法、④本家を中心

大 城										仲 門										喜 友 名			門中										
大城	東大城	真志大城	蒲大城	蒲大城新屋	前大城	新大城	武戸大城	樽大城	三男大城	乳牛屋	新屋仲門	蒲仲門	前仲門	西仲門	仲門	新屋東仲門	後仲門	真佐仲門	上仲門	龜新垣	東仲門	東仲門新屋	加那仲門	龜南風佐事小	南風佐事小新屋	幸栄喜友名	前南風佐事小	西南風佐事小	東南風佐事小	蒲南風佐事小	屋号	氏名	
大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	知念	知念	知念	知念	知念	知念	知念	知念	知念	知念	知念	知念	知念	知念	喜友名	喜友名	喜友名	与那覇	喜友名	喜友名	喜友名	喜友名	市太郎	市太郎
秀春	カマド	真志	吉次	盛善	カマ	シゲ	利徳	武哲	賀進	正助	正助	栄秀	正哲	三七	マサ	正男	平助	春吉	幸助	常孝	正吉	寺助	幸助	秀雄	武雄	幸栄	保彦	佐太郎	正徳	市太郎			

缸 口		安 富 祖															門中																
東缸口	前缸口	前缸口新屋	缸口	蒲仲安富祖	西蒲安富祖	西門安富祖	蒲安富祖	牛安富祖	新屋蒲安富祖	新屋前安富祖	午前安富祖	新屋仲安富祖	新屋安富祖	前安富祖	加那安富祖	安富祖新屋	蒲前安富祖	仲加那安富祖	西安富祖	龜前安富祖	樽安富祖	龜安富祖	真佐安富祖	仲安富祖	加那安富祖新屋	森安富祖	上安富祖	新安富祖	前大城小	大城新屋	屋号	氏名	
大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	大城	盛善	盛善
カマ	菊太郎	正栄	盛栄	清吉	重信	正幸	清順	重輝	幸次郎	平昌	龜次郎	清吉	幸太郎	盛繁	貞保	信治	カマ	カナ	トミ	カツ	弘	平正	信治	トヨ	泰一	三八	弘	田留	盛善				

恩															納										缸 口		門中					
蒲美村渠小新屋	蒲首里比嘉	比嘉新屋	前比嘉	新屋恩納	首里比嘉	美村渠小	上門	真佐美村渠	仲比嘉	蒲恩納	武戸恩納	龜吉上門	東恩納	恩納	樽恩納	後比嘉	新恩納	龜恩納	西恩納	新屋美村渠	仲恩納	首里比嘉新屋	比嘉	龜比嘉	真佐美村渠	新屋比嘉	西缸口	樽缸口	新屋缸口	当缸口	屋号	氏名
比嘉	比嘉	比嘉	比嘉	比嘉	比嘉	比嘉	比嘉	比嘉	比嘉	比嘉	比嘉	比嘉	比嘉	比嘉	比嘉	比嘉	比嘉	比嘉	比嘉	比嘉	比嘉	比嘉	比嘉	比嘉	比嘉	比嘉	大城	大城	大城	大城	清太郎	清太郎
徳吉	盛助	カマ	マサ	光栄	徳好	ツル	栄輝	ツル	寅吉	カナ	亀吉	カマ	徳助	ウト	真志	正一	元利	ント	元栄	清鑑	徳三郎	スミ	平三	義男	三八	マカト	徳盛	清太郎				

前 字 座					知 花										恩 納		門中														
西前字座小	東前字座小	前又前字座	前字座	前字座小	新屋前字座小	西新屋	前知花	徳新屋	蒲知花	三男真佐知花	後又上地	新知花新屋	蒲知花新屋	二男真佐知花	新屋真佐知花	牛知花	真佐知花	徳知花	新知花	真佐前知花小	知花	新屋知花	西知花	武戸知花	上知花	蒲美村渠小	前恩納	蒲恩納新屋	真佐恩納	恩納新屋	屋 号
知花カマ	知花マサ	知花清吉	知念武善	知花周一	知花清	知花ナヘ	知花正治	知花盛安	知花正治	知花蒲助	知花又四郎	知花キヨ	知花正光	知花重吉	知花ハル	知花好雄	知花清隆	知花トキ	知花ハル	知花蒲一	知花柳二	知花真徳	知花元太郎	知花ヤス	知花徳吉	比嘉太郎	比嘉虎三郎	比嘉ハル	比嘉三郎	比嘉武治	氏 名

新垣	津 波				国 吉				奥 原				松 田				門中														
蒲新垣	新垣	新屋新垣	蒲松田	前兼久新屋	浦津波小	津波	新津波	前津波	松国吉	前又国吉	三郎国吉	新屋国吉	国吉	仲国吉	次郎国吉	山奥原小	浦奥原	奥原小	後奥原	加那奥原	森奥原	前又松田	亀松田	新屋松田	松田	東松田	仲松田	松田新屋	樽松田	加那前字座	屋 号
新垣トシ	新垣平次郎	新垣盛孝	津波清吉	津波健徳	津波平助	津波明吉	津波広吉	津波トミ	国吉真正	国吉真孝	国吉真清	国吉真康	国吉真助	国吉真次郎	奥原宗清	奥原宗善	奥原宗盛	奥原ヨネ	奥原宗信	奥原宗信	松田正久	松田信考	松田芳清	松田英一	松田政太郎	松田光政	松田武雄	松田亀次郎	知花武善	氏 名	

その他		仲 村 渠 島 袋				喜 瀬		波 平		上 地		伊 口		西 門		前 門		門中									
与久田	国頭小	屋良小	亀山内	玉那覇	西松田	仲村渠	仲村渠	加那美村渠	島袋小	東島袋	島袋	新屋喜瀬小	喜瀬小	波平主田	牛波平小	前又上地	東上地	伊口小	伊口	西門新屋	蒲西門	樽西門	西門	新屋前門	前門	真佐新垣	屋 号
比嘉元利	山城英一	屋良朝繁	山内松栄	玉城蒲助	仲村渠カマ	仲村渠トミ	仲村渠真牛	仲村渠真	島袋宗元	島袋宗嗣	島袋宗繁	喜瀬普栄	喜瀬三郎	大城武光	大城亀雄	大城カマ	大城武雄	大城次夫	大城清康	大城ウサ	大城ウサ	大城清新	大城伊清	宮平武雄	宮平シズ	新垣太郎	氏 名

分家者の方位、方向による方法、⑤職業による方法、⑥本家・分家による方法、⑦出身地名による方法、⑧門中名による方法等がある。

その中で特徴的なものは、浦大城とか亀安富祖とかいうふうに入名に姓名もしくは門中名を接合した屋号が、七八例と全体の約四割を占めている点である。

姓は、昭和五八年度の住民票によると五四姓もある。もつとも多い姓は大城姓の九六軒である。続いて知花姓(四九軒)、比嘉姓(四七軒)、松田姓(二三軒)、知念姓(二〇軒)、新垣姓(十三軒)、喜友名姓(十軒)、與那覇姓(九軒)、津波姓(八軒)、国吉姓(八軒)、宮平姓(七軒)、山城姓(六軒)、仲村渠姓(五軒)、玉城姓(五軒)、山内姓(四軒)、奥原姓(四軒)、照屋姓(四軒)、仲村姓(三軒)、屋良姓(三軒)、島袋姓(三軒)、與那嶺姓(二軒)、当山姓(二軒)、一軒だけの姓は、宮里、崎濱、與久田、池原、梅田、仲里、當真、名嘉、喜瀬、前島、上原、屋直、上地、稲嶺、安里、宜野座、具志、新城、西村、與座、譜久村、喜屋武、石川、高安、富田、謝花、諸見里、翁長、波平、花城、平敷の三一軒である。

昭和三年の前記の『連記土地台帳』によると、十八姓しかない。要するに十三軒の姓は、近年の他字や他村からの移入者である。

戦前の高志保部落は純農村で、換金作物としてのキビ作と、主食としての甘藷作、それにわずかながら稲作が行われていた。キビ作は、シマウージ(島荻)から、明治十九年頃にユンタンジャヤー(読谷山種)が普及し、そして昭和六年には大茎種P O J 二七二五号が導入された。戦後昭和二八年にはN C O 三一〇号が導入され現在に至っている。戦前は、栽培したキビは部落共同のサーターヤー(製糖場)で黒糖にして出荷していた。サーターヤーは部落西方に一番館から七番館までのがあった。国吉屋取にも一カ所あった。

水田はナーシル原にナーシルダー(苗代田)があり、本田は喜名

や親志、宇加地方面に持っていたが、戦後はこれらの水田も小学校が出来たり、軍事基地になったため全く行われていない。

住居

住居は、戦前は一八九軒のうち一〇三軒が茅葺で、残り八七軒が瓦葺であった。図(1)は、戦前の松田武雄家の屋敷及び家屋間取り図である。敷地は現在の屋敷と同じである。茅葺で井戸はなかった。屋敷囲は西側は石垣で畜舎の壁に利用された。南側は六〇センチ位石積みし、その上にシマダキを植えていた。一番ジョウ(門)は正門で、二番ジョウは馬車の出入口であった。東側はチチビチ(土盛り)したアムトウ(畦)でガジマル等を植えていた。北側もアムトウで山原竹等が生えていた。母屋がほぼ屋敷の中央にあり、畜舎と便所があった。西南隅にはアナガと称する溜池が設けられ、野菜等を洗うのに利用されていた。大きさは二間に一間半位、深さは膝位であった。フルヤーは豚小屋兼便所であった。ウシヌヤー(牛小屋)とウマヌヤー(馬小屋)の間にはクエーヤー(堆肥小屋)があり、フルヤーとウマヌヤーの間にはシーリがあって、牛、馬の小便等を溜めて水肥とした。また、台所の水甕の側には使用水を溜める穴を掘り、そこに糞を敷き、人間が踏みつけてグジングエー(御人肥)を作った。松田家にはアサギはなかったが、イリアサギ(西アサギ)を持っている家庭も多かった。アガリアサギ(東アサギ)はあまり好まれなかったが、波平家などは両方のアサギを持っていた。間取りはウフグイ(一番座)、ナカメー(二番座)、クチャ(裏座)、ジール(地炉)、シム(台所)等からなっていた。台所と母屋との間はティールヤーと称し半間程隔てており、橋げたをかけ、天井もトタンでつないでいた。ジールは日常の湯沸かしと、御産の時の産室に利用された。クチャは穀物を入れたカメ類の保管場所であった。

結婚のことをニービチと称している。昭和初期までのニービチは、当人どうしの意志によらず親どうしの相談によって決めた。当時の女性の理想的な嫁入り先とは、その男の姑や兄弟もなく、ただ家のヒヌカンがあればよいということだった。もし、離婚などしたら、ソイランヌー（魂がない）と言われてとても嫌われた。

葬制

戦前までは、死者が出るとニーセーガシラ（二歳頭）がブラ（ほ

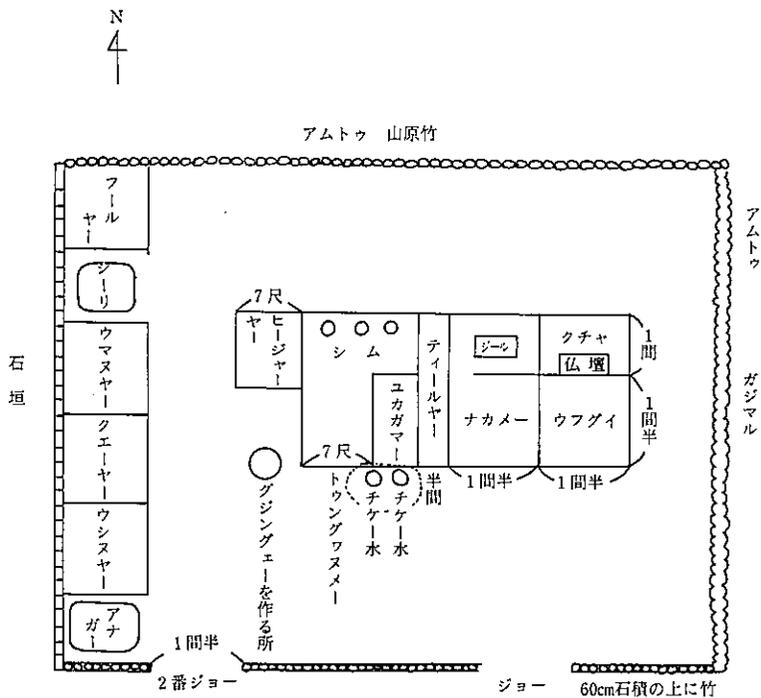


図 戦前の松田武雄家・屋敷・間取り概略図

ら貝）を吹いて知らせた。また、早朝からニンプチャー（念仏者）を頼んで、軒下に戸板でファフー（破風）の小屋を作り、その下で鉦を打ち鳴らしたので、その鉦の音でも死者が出たことが分かった。ニンプチャーは隣部落の瀬名波から頼んでいたが、ある時、賄いが悪いということで途中で帰ってしまった。やむをえずその場はニンプチャーなしで葬式を行った。その結果、ニンプチャーがいなくても葬儀が成り立つということで、以後ニンプチャーを頼まなくなつたという。

死者が出ると、朝のうちにニーセーガシラが各戸から葬儀料として一銭ずつ集めた。

死亡届けは、死ぬ三日前に医者（診断を受けてない場合は、医者を呼び検視を受けてから出す）を呼び検視を受けてから出す。

湯灌に使う水は、ウフガーから汲む。二人で行きオードーにヒザイナー（左繩）を巻いたウーキ（桶）を乗せ、ナーカナーシー（桶を棒の中央に吊るして担ぐ方法をいう）して汲んできた。その時に魔除けとして鎌か包丁を携えて行った。汲んで来た水は鍋蓋をしながら水を三回かけてから浴びせる。死装束のことをグソータバジタク（後生旅仕度）と称し、白い着物をケーシマージー（裏返しにして着せること）させる。女はグソーへ行つてからも針仕事をすると、うことで、左右の衿に糸を通した針を七本ずつ刺す。盛装させると、仏壇の前に座らせ手を合わせる。そして膝を立て、手を胸の上にあわせてイリマツクワ（西枕）にしてナカムシル（中央の筵）を抜き取つてそこへ寝かす。顔はティサージで覆う。死者の着物はまとめめて風呂敷に包み、四十九日間仏壇へ供えておく。その後は親戚の人達で分け合う。

副葬品のことを、グソーヌナーギムン（後生のおみやげ物）と称

し、酒、タオル、石けん、タバコ等をクワンチエーバク（棺箱）の中に入れる。タオルやタバコ等は、親戚の人々が焼香に来る時に、先に亡くなった祖霊へのお土産として持って来る。

遺体をクワンチエーバクに納めると、印だけのクギを打つ。三〇年前までは火葬でなく、従来の風葬であったので、ガン（籠）に遺体の納まったクワンチエーバクを乗せ、青年が四名で墓まで担いで行った。葬列は、ティンゲー（天蓋）を先頭にして数本の旗が続き、そしてイーヘームツチャ（野位牌持ち、長男など）もとも血縁の近い者が持つ、身内の人々、ガン持ち、そして一般会葬人と続いで行く。葬列はグソミチ（後生道）と称するところを通る。高志保部落ではシマミシの風習はなく、ガンは墓まで休まず運んで行く。

遺体を墓へ納めた後、墓口を閉めて、重箱を供え線香を焚いて焼香する。以前は、たくさん御馳走を供え、ウサンデーして会葬者が食べたというが、ある人のダビの時に、ニーサー達は仲間の死の悲しみのあまりか「ウントウカマリンナー（このようなものが食べられるか）」と言って、次々に手に持っていた物を畑の中に投げつけたという。それ以来、御馳走を墓へ持つて行くのは廃止されたという。また、以前は八〇歳以上の高齢者が死んだ場合は、墓で「トウシヌアヤカイ」（歳のあやかり）と称して酒がふるまわれた。

葬式の済んだその日の夕暮れ時、ボーフィ（棒振り）と称される穢祓の儀式があった。家族や親戚などが部屋を中心にかたまつて座り、そのまわりを数人の棒や小石を持った者が、「アネークネーアネークネー」と唱えながら、壁をたたいたり小石を投げつけたりして、そして部落境までヤナムン（悪魔）を追って行った。もし途中でウス（潮）豆腐の製造に使用したを汲みながらこのボーフヤーに出会った場合は、担いでいるウスはこぼさなければならなかった。

死者が死ぬ直前に着けている着物は、その日のうちに海や川に洗

いに行った。翌日はミジマチ（水祭り）と称して朝早く墓参りに行く。墓口は仮に閉めてあるだけでこの日に漆喰を塗る。夕方も同じように墓参りする。三日目は近親の人が集まり、マブイワカシ（魂分かし）をする。四日目頃に身内の人数名でユタの所へ、死者のことについて訪ねに行く。ところによつては四十九日すぎでから行く場合もある。ナンカの焼香は、ハチナンカ（初七日）、タナンカ、ミナンカ、ユナンカ、イチナンカ、ムナンカ、シンジュウクニチ（四十九日）の七回行われ、ムナンカとシンジュウクニチは、墓参りせず、家で焼香が行われる。シンジュウクニチは家にあるもう一基のシルイーフェー（白位牌）を焼き捨てる。その後死者が出れば、洗骨することが出来る。四十九日内ならば洗骨することが出来ず、その際は新しく亡くなった者の棺は下にし、先に亡くなった者の棺を上にして重ねる。

年忌は、ユニー（一年忌）、ンチヌユニー（三年忌）、シチニンチ（七年忌）、ジュウサンニンチ（十三年忌）、ニジュウグニンチ（二十五年忌）、サンジュウサンニンチ（三十三年忌）の六回行われる。三年忌は満二年目に当たり、他の年忌も数えて行っている。

死者が出た場合、墓の顔面に小屋掛けの風習はない。また、死者との別れ遊びの風習もない。

ガンヤ（倉屋）は、戦前は高志保一六二番地にあつたが、戦後は三七〇―二番地に移してある。高志保部落のガンは、松田武雄（大正三年生）が五く六歳の頃に造られた。ガンヤの壁は石積みで、屋根は瓦葺きであった。現在のガンは、一九五四年に大城幸次郎（明治三六年生）によつて造られた。ガンを造った年に盛大にコーヌスージを催した。その時に部落の最長老であつたトリーイチのタンメーが、字事務所からガンヤまで乗つてスネー（行列）をした。戦後の場合にはスネーはしたけれど人間は乗せなかつた。

写真(1)は、昭和三二年に作製した部落共有の葬式用の幕でカチャ(蚊帳)と称されているものである。公民館に保管され、現在でも死者が出た家が借り受けて使用している。

信 仰

高志保部落には、巻頭の戦前の民俗地区に掲げていた次の九カ所の拝所がある。

- ①ウタキ ②カミアサギモー ③イリヘンサジグワーのウカミヤ(西南風佐事小の御神屋) ④フドウヌカミ(不動明神・四カ所)
- ⑤ネッツ(根人) ⑥イリメーウザグワー(西前字座小)

ウタキは部落の北端にあつて、戦前そこにノギ神社を勧請してあつたが、戦災で消失した。カミアサギモーも同じ敷地内にある。戦前はカミアサギモーにはアタトヤーという祠があつたが、現在はない。西南佐事小の御神屋にはアシビガミが祀られている。フドウヌカミは、伊口家の屋敷内と前之上地家の屋敷内、比嘉家の隣(一八番地)、旧字事務所とほぼ南北に分布している。ネッツ(根人)は高志保部落の先占開拓者玉城家であるが、絶家になり、旧屋敷にウカミヤを造り祀っている。西前字座小にはンムウス(芋大主)が祀られている。

神井戸としては、メーヌカー、シリミジガー、ナコーガー、ミীগー等があり、旧暦一月九日のハチウグワンの日に拝んでいる。神墓としては、ヤマトウンチュバカ、バテインジョーバカ、テーガニクの墓、喜名のダキヤマの墓等があり、戦前は旧暦三月の村清明祭に拝んでいたが、現在はやっていない。

次に旧暦十二月二四日のトゥミウグワン(止め御願)の呪文を紹介する。供物は、米、塩、酒、線香十二本である。

チユーヌユカルヒーマサルヒー、シワーシニ二四日ヌヒーヌウガン
トウミ、ウグワンヌヒーニ、タカシホヌクワ、ンマグワヌチャーニ

カワティ、七〇イーヌ、イキガヌチャー、ハイスリテイ、ウシリガ
フーウンヌキーガユシリトーピン、ウミキ、ウザキ、クガニマース、
ウンデハナグミンマジテイ、十二本ヌウコーウサギテイアイビーグ
トウ、ウキティフクイシチクミソーリ。

ユーヌハジマイカラ、クヌユーニナルマデイ、タカシホヌクワン
マグワヌ、サケーハンジョウ、ムラマチヌウサカイ、ウナムイシチ
クイミソーリ。ムラジュウヌウミンクワヌチャー、ウシリガフー、
ウガドーヤピンサイ。

クリカラサチ、ユーヌチジクカジリ、チュクイムジユクイ、マン
サクウタピンソーチ、ジンカニンマサテイ、ムヌカミジユクン、ユ
タカニウガマシソーチ、ユーデークニデー、シキンウマンチュトウ、
エースエーゴアラチクイミソーリ。サリウートトウ。

(以上の呪文を唱え終わると、参列者に向かつて「テイウサギミソー
リ。サリ、ウサンデーサギヤビラ」と唱えて、供物を下げる。

「今日の良日、吉日に、師走二四日の御願止め、御願の日に、高
志保の子や孫達に代わつて、七〇歳以上の男子が勢揃いして、感謝
の念を申し上げるためにやつて来ました。ウミキ、お酒、黄金の塩、
花米等を混ぜて、十二本の御香を供えてありますから。

世の始まりから、現在に至るまで、高志保の子孫が大いに繁盛し
て、村や町の繁栄を護り育てて下さい。村中の人々が御多幸あるこ
とを祈っています。

これから先、世の続く限り、農作物の豊作をさせて下さい。お金
も儲けさせて、食糧も豊富に与えて下さい。世の続く限り、世間の
多くの人々と仲良くさせて下さい。サリ・ウートトウ。」

年中行事(旧暦)

一月一日

ソীগワチ(正月)

高志保部落では昭和二八年に

新正一本化運動がおこり、その後拾数年後に新正一本に統一され現在に至っている。戦前は公民館の近くにあるメーヌカー(ウブガーである)からワカミジ(若水)を汲んだ。女はカリーがないから男が汲むべきだというが、その限りではない。誰でも若水を汲みに行きたいので兄弟げんかも絶えなかつた。最初に汲む人は芋を供える。「ワカミジンケイビラ」

(若水をお迎えます)と、手を合わせてから汲む。

水の重さを計りユガフードウシ(豊年)を占う。若

水で御茶湯を作り仏壇に供え、家族は若水で洗顔す

る。ワカマーチ(若松)と竹・菜の花(大根の花で

もよい)を大晦日に取つて来て、門の両脇に立てる。

ワカマーチは火の神(台所)、仏壇、床の間にも飾る。

松・竹・菜の花のことをスーチクベ(松竹梅)とも称している。

ニントウウガミ(年頭拌み)には、ウサギムン(供

え物・茶・タバコ等)と線香を持つて本家などに行

く。正月の御馳走は豚肉、豆腐、テンプラ、水芋、

里芋等があり、お年玉はハークガニーと称し、十三

歳以下の子供に一〜二銭が普通で、人によっては五

銭もあがる場合があつた。十三歳の祝いには二〇〜

三〇銭もあげた。子供たちには正月用の木綿の着物

とか、ゲタを買つて与えた。ゲタを買つてもらうと、

とても喜んで一日中家の中からはいたりした。子供

たちはまりつきをして遊んだ。正月の歌として、「ワ

カマチミドウリ、トウクヌメーニカザテイ、ユラミ

一月三日

リバナシヤ、シンヤクガニ(若松の緑、床の前に飾つて枝を見れば銀、芯は黄金)という歌がある。

ハチバル(初原) 初仕事の儀式。朝畑に行く前に、「ミツチャミー チャワキウサギテービンドー」

(三日目の茶請けを供えてあります)と仏壇に手を

合わせる。畑を見に行くだけで実際には仕事はしない。また、その日はハチアギーと称し、豚小屋の掃除をした。

ナンカンシーク(七日の節句) ジューシーメ(稚

炊)と、豚の耳や頭を料理して仏壇に供える。この

日に正月の飾り物を片付ける。

ハチクニチ(初九日) 五〇歳(戦後は七〇歳)以

上の男子はウグワンウスメーと称され、公民館に集

まりこの一年間の村の繁栄を祈願する。

ジュールクニチャー(十六日) 死者が出て三年内

の家では、ミイサ(新仏)と称し墓参りをする。仏

壇に赤黄の紙でトウール(燈籠)を作つて飾り、その後燃やす。

ウジューグワー(お重小) 女の子のいる家では重

箱に御馳走を詰めて、友達同士で好きな場所に集まつ

て楽しく語らいながら食べた。

トウシビー(年日祝い) 一日から十二日の間に、

その年の干支の日に、十三歳、二五歳、三七歳、四

九歳、六一歳、七三歳、八五歳、九七歳の生まれ年

の人々はトウシブリースージがある。八八歳はトールカ

チと称し、八月八日に行つてゐる。九七歳の祝いは

一月吉日

一月十七日

一月十六日

一月九日

一月七日

カジマヤーと称し、部落あげて盛大に行われる。チガヌジと称して、赤飯を四角に型取りして客に出す。七三歳の時には、ツルやカメの形のコーグワーンシをアヤカーイとして出す。

一月二〇日 ハチカー(二〇日) ハチカソゾグワチとも称す。

この日正月の終わりで、塩漬けにして保存されている豚のチマグ(足)をヒランメー(押し麦)に入れて炊く。それらの夕食を仏壇に供える。

二月吉日 ヒンガン(彼岸) 春分の日から四日目にやる。餅

とチャワキ・ウチカビ(打紙紙銭)三枚を仏壇に供える。家内安全と豊作を祈願する。祈願が済むと、ウチカビは洗面器の上で燃やし、仏壇に供えている酒や御茶湯を少し注ぐ。仏壇に供えたチャワキ等をウサンデー(下げる)とする。その日に使用した入れものと、火ばしを門のところに翌日まで置いておく。

三月十五日 ウユミ(折目) 仏壇のある家は御馳走を作り、仏

壇に供える。アワ、マージン等を炊いて食べた。伝説によると、百姓はせつせと働いただけでは可哀相と思つて具志頭親方という政治家がウユミを作つたという。

三月三日 サングワチャー(三月) 女の人は浜に降りて潮干

狩り等をして遊んだ。昔、浜下りをしなかつた女の人はアカマターにだまされて妊娠したという伝説がある。

三月イリヒ シーミー(清明) 三月の清明の節に入った四日目

に行う。戦後は村清明は行っていない。戦前は村清

四月十五日 アフシバレー(畦払い) 朝チャワキを仏壇に供え

る。楚辺兼久では村中の名馬が集まって、ウマハラシー(馬走らし)が行われた。

五月五日 グングワチグニチー(五月五日)、アマガシ(麦のせ

んざい)を作つて食べる。

五月十四日 イシナギエー(石投げ合い) 戦前は高志保と波平

の小学生の男子が石合戦をした。

五月十五日 ウマチー 一名カミウグワン(神御願)とも称する。

門中ごとにムートウドウクル(元所↓本家)に集まつて祖先を拜む。この日に針仕事をしたり、堆肥を運んだりするとハブに咬まれるという。

六月十四日 ウユミ(折目) 以前は東西に分かれて綱引きが行

われた。各戸から藁を出し青年が綱を作つた。直径十二センチ位の綱を六本束ねた太さで、長さはそう長いものではなかつた。

六月二四日 カシチーウユミ 新米で、アカマミー(赤豆)や、

マージン、アワ等を混ぜたカシチー(強飯)を作つた。翌二五日には渡慶次のカタノーでウマハラシがあり、そこへ見に行った。その日には、各戸の井戸と村の井戸を掃除した。

七月七日 タナバタ(七夕) 墓と仏壇の掃除をする。着物の

虫干しもした。この日から十五日まで、ヒルマミジ

(昼間水)と称し冷水を仏壇に供える。

七月十三日

ウンケー(お迎え) 墓に在る祖霊を仏壇に迎える日。仏壇に昼食や夕食を供える。最近では果物だけになったが、以前はキビや粟、米、ソーローボーチ(はぎ)等を供えていた。

七月十五日

ウークイ(お送り) 盆の最終日で、祖霊を送る日。夜の十二時頃、仏壇に供えてあるものを下げ、洗面器でウチカビを燃やし、酒、御茶湯を注ぐ。その時に祖霊は元のところへ帰るといふ。ウークイには親戚も集まる。キビは二〇センチ位に切つて束ねたその対と、一メートル位の二本供えてあるが、その長い方はグーサンウージ(杖のキビ)と称され、祖霊がグソー(後生)へ帰る時の杖に用いられると考えられている。また、供えてあつたソーローボーチで、この日に手足などにあるイボをなでると直ると言われている。翌十六日には青年会によるエイサーが行われる。現在は公民館広場で行われているが、戦前はカリーと言つて、各家庭をまわつていた。最近では、エイサーの他に年齢別による歌や踊り等の余興があり、審査し表彰を行っている。

八月八日

ヨーカビー この日にはヒータマ(火玉)が上がる日だとされ、ヒータマが上つた方向の家は凶とされ、それを見た人はその家に知らせる。その家ではサンジンソーなどの家に行き厄払いをする。

八月十五日

ジュウグヤ(十五夜) フチャギと称し細長く握つた餅に赤豆をくつつけたものを作る。村のアシビナーで村芝居、棒術、獅子舞い等が演じられた。現在は

村アシビは行っていない。

九月九日

チクザキ(菊酒) 主として大工の人々の祭りで、けがなどをしないようにと酒に菊の葉を浮けて安全祈願をする。

九月十六日

ナーウグワン(庭御願) 昭和四五年頃まで行われていたウユミで、各家庭に庭を敷いて食台を置き御馳走を食べた。

十一月イリヒトウンジ(冬至)

冬至の入り日にトウンジージュシー(冬至雑炊)を作つて仏壇に供える。

十二月八日

ムーチー(餅) サンニン(月桃)の葉に包んだ餅を作る。どの家庭でも作るが、とくに出産のあつた家ではハチムーチと称して七個ずつの対をひもに吊るして飾る。子供のいるところでもその年の数吊るす。その時チカラムーチと称して、ひとまわり大きい目のものを一番下の方に結ぶ。三日間は、吊るしておき、その後毎日一個ずつ食べた。食べた殻で十字形を作り戸口に吊るす。またオニの足を焼くと称して炊いた汁を庭にまく。

十二月二十四日トウミウグワン(止め御願)

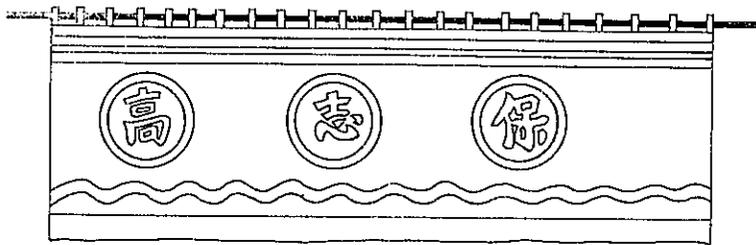
各家庭では大掃除をする。火の神にこの一年間の一家の安泰を感謝する。カミアサギには五〇歳以上の男子が集まつて、部落の繁栄を祈願する。(信仰の項参照)。

十二月二十七日ウワークルシ(豚殺し)

正月用の豚を屠殺し、塩漬にする。血はその日で大根の葉などといったためて食べる。二六日にする家もある。

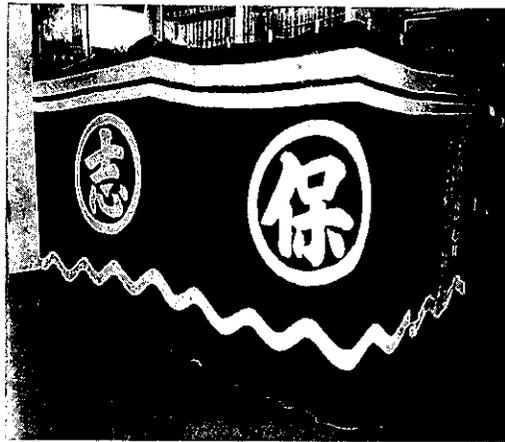
十二月三〇日トウシヌムール(年の夜)

大晦日で、スーチカー(塩漬)の豚肉(赤肉)の煮付けを各自の分皿に入



0 50 100cm

図 高志保の葬式幕

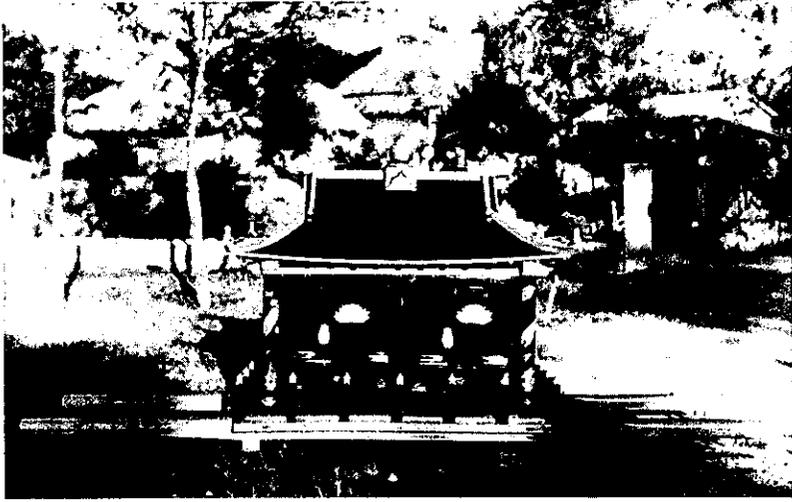


高志保の葬式幕



高志保のガンヤー

れて出す。その肉のことをトウシトウイジシ（年取り肉↓歳魂）と称す。豚汁の御馳走が出る。



高志保のガン



根人を祀った祠

目次

あいさつ……………読谷村長 山内徳信
 あいさつ……………読谷村教育長 新崎盛繁
 序……………館長 名嘉真宜勝

『高志保の民話』伝説地名地図

『高志保の民話』地名地図

高志保民俗地図

第一編 翻字資料

〈動物昔話〉

1 雀孝行……………	比嘉カメ……………	1	9 キジムナー……………	大城利徳……………	10
2 雀孝行……………	知花トキ……………	2	10 キジムナー……………	知花トキ……………	12
3 雀孝行……………	比嘉徳太郎……………	3	11 キジムナーへ魚取り……………	松田芳英……………	13
4 雨蛙不孝……………	比嘉カメ……………	4	12 鬼婆の話……………	比嘉徳太郎……………	14
5 十二支由来……………	大城利徳……………	6	13 化け物寺……………	比嘉カメ……………	16
6 猿の赤尻……………	大城利徳……………	8	14 アカマタ簪入……………	大城ウサ……………	17
7 犬の足……………	大城清一……………	9	15 アカマタ簪入……………	国吉真次郎……………	19
〈本格昔話〉			16 鍋蓋とアカマタ……………	松田長秀……………	20
8 鬼餅由来……………	奥原崇善……………	9	17 アカマタと小便……………	喜友名市太郎……………	21
			18 美女に化けたアカマタ……………	奥原崇善……………	22

19 天人女房	大城利徳	23
20 天人女房	比嘉カマ	25
21 子供て幽霊	大城ウサ	26
22 子供の寿命	比嘉カマ	28
23 真玉橋由来	知花ハツ	29
24 死んだ娘	喜友名市太郎	31
25 石マーマの話	松田長秀	32
26 城間仲	山城英一	34
27 城間仲	大城利徳	37
28 孫の生肝	比嘉カマ	39
29 継子話	知花ハツ	40
30 継子の麦つき	知花スミ	43
31 継子話〈茶腹飯腹〉	大城ウサ	44
32 継子の芋掘り	津波輝	45
33 継子話〈カラスと味噌〉	新垣ゴゼイ	46
34 継子が歌った歌	知花ハツ	47
35 継子と二十日月	喜友名ヨシ	48
36 継子と二十日月	知花ナヘ	48
37 継子とにが菜	知花スミ	49
38 継子と爪	知花ナヘ	50

39 継子とそら豆	山城英一	50
40 歌い骸骨	屋良ツル	51
41 猿長者	松田長秀	52
42 大年の客	知花スミ	55
43 大年の客	知花ハツ	56
44 遊郭通いをやめさせた話	喜友名市太郎	57
45 兄弟の仲直り	松田長秀	58
〈笑い話〉		
46 勝連バーマ	山城英一	60
47 渡嘉敷ベーク	山城英一	61
48 喜屋武ミীগわ	山城英一	63
49 喜屋武ミীগわ	大城利徳	67
50 喜屋武ミীগわ	国吉真次郎	69
51 本部サールー	山城英一	70
52 佐久川三良と 喜屋武ミীগわ	山城英一	72
53 白銀堂由来	奥原崇善	73
54 主人と下男の話	知花ハツ	75
55 下男が歌った歌	知花ハツ	78
56 モーイ親方	大城利徳	80

57	モーイ親方	大	城	利	徳	84
58	モーイ親方	国	吉	真	次	郎
59	姥棄山	知	花	ナ	ヘ	87
60	姥棄山	大	城	利	徳	89
61	姥棄山	大	城	カ	マ	ド
62	松川童	比	嘉	徳	太	郎
63	稲苗の根洗い由来	山	城	英	一	98
64	トグチクラニーの 富を滅らした話	比	嘉	徳	太	郎
65	坊主御主	山	城	英	一	101
66	肝試し	大	城	利	徳	103
67	屁こき嫁	大	城	ウ	ト	105
68	山原と団亀	大	城	重	輝	106
69	つんぼ夫婦の話	知	花	周	一	107
70	犬の足跡	松	田	長	秀	108
71	犬の罰があたった夫婦	喜	友	名	市	太
72	犬と女	喜	友	名	市	太
〈伝説〉						
73	沖繩の始まり	喜	友	名	市	太
74	夫振岩	大	城	利	徳	112

75	井戸水比べ	知	花	周	一	115
76	阿麻和利と護佐丸	比	嘉	徳	太	郎
77	阿麻和利へ網発見	松	田	長	秀	121
78	並松を植えた国頭親方	国	吉	真	次	郎
79	高志保城の話	大	城	重	輝	122
80	普天間権現由来	大	城	ウ	ト	126
81	前寺の由来	比	嘉	徳	太	郎
82	明ぬ王の由来	比	嘉	太	郎	129
83	位牌由来	比	嘉	カ	メ	130
84	お茶二杯	大	城	利	徳	132
85	同年生を見舞うものではない奥	原	崇	善	134	
86	ハジキ由来	大	城	利	徳	134
87	ハジキ由来	奥	原	崇	善	137
88	ハジキ由来	比	嘉	ン	ト	138
89	逆立ち幽霊	比	嘉	徳	太	郎
90	墓から聞こえる歌	比	嘉	太	郎	140
91	久良波首里殿内	比	嘉	徳	太	郎
92	久良波首里殿内	山	城	英	一	142
93	多幸山フェーレー	山	城	英	一	146
94	多幸山フェーレー	大	城	利	徳	149

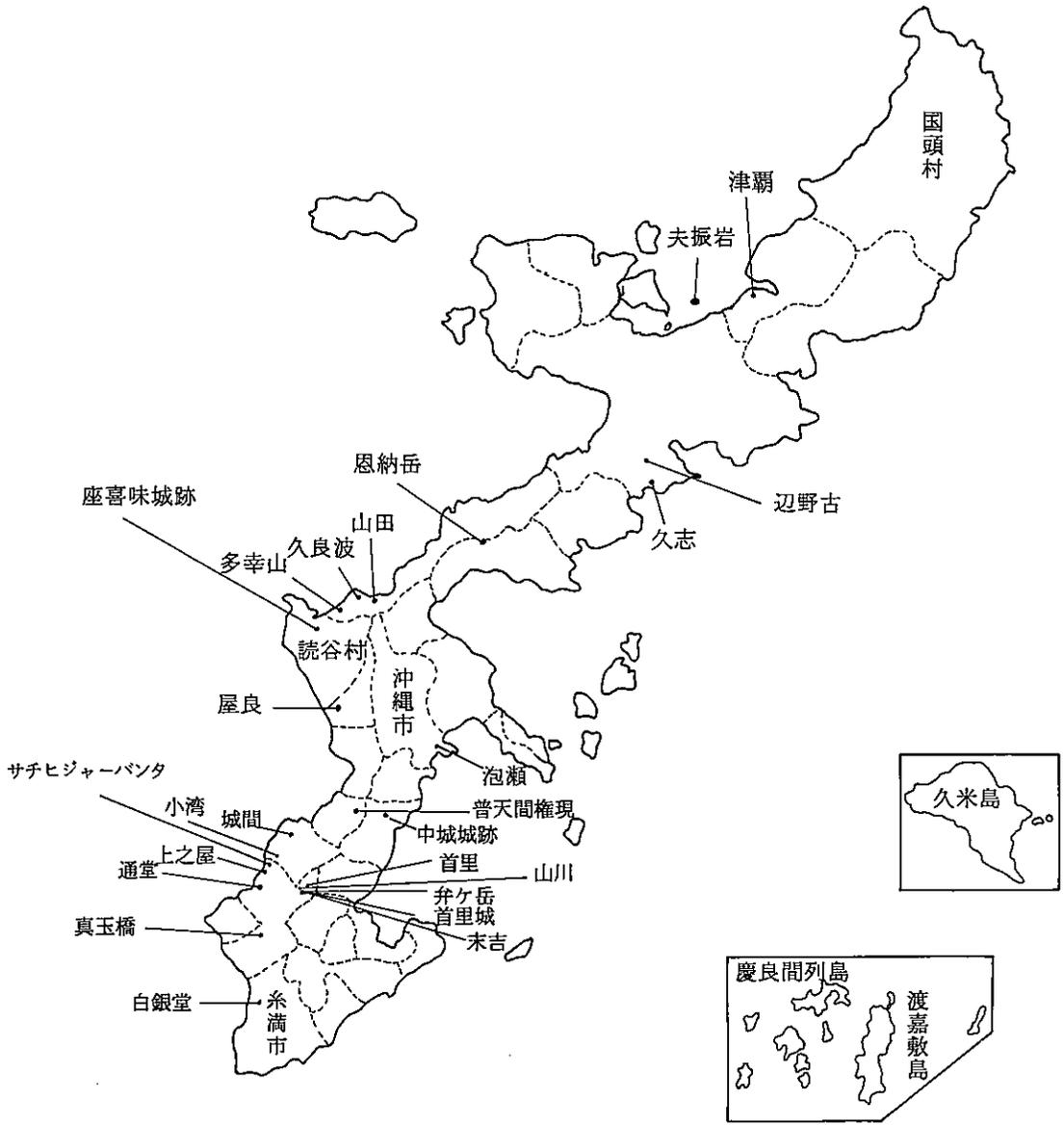
95 多幸山フェーレー	大城重輝	150
96 吉屋チルー	奥原崇善	152
97 トウムシシチチャの話	比嘉徳太郎	154
98 チーグー王	大城幸太郎	155
99 勝り山田	国吉真次郎	155

第二編 資料

話者別一覧表	175
話型一覧表	187
話型別梗概一覧	189
調査者名簿	224
翻字者一覧	225
参考文献	227
編集後記	228

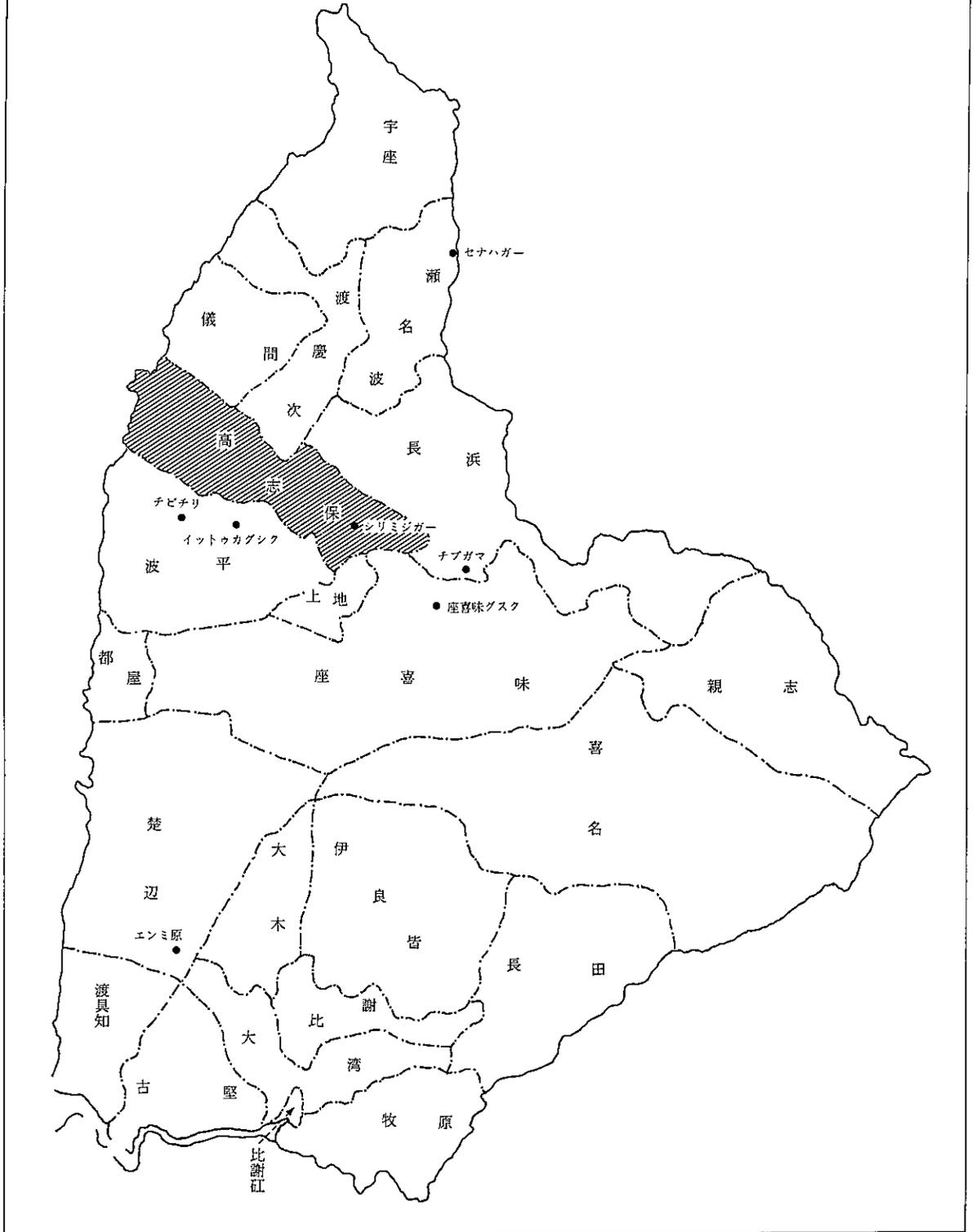
100 花売の縁	比嘉徳太郎	157
101 手水の縁	比嘉徳太郎	161
102 亀甲墓偽装	知花ナヘ	167
103 チャーギの実	知花ナヘ	169
104 座喜味城を造った話	比嘉徳太郎	169

〔高志保の民話〕 伝説地名地図





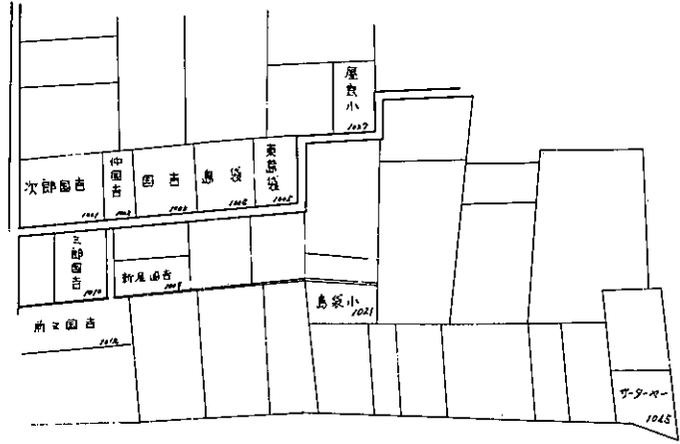
〔高志保の民話〕地名地図（読谷村全図）

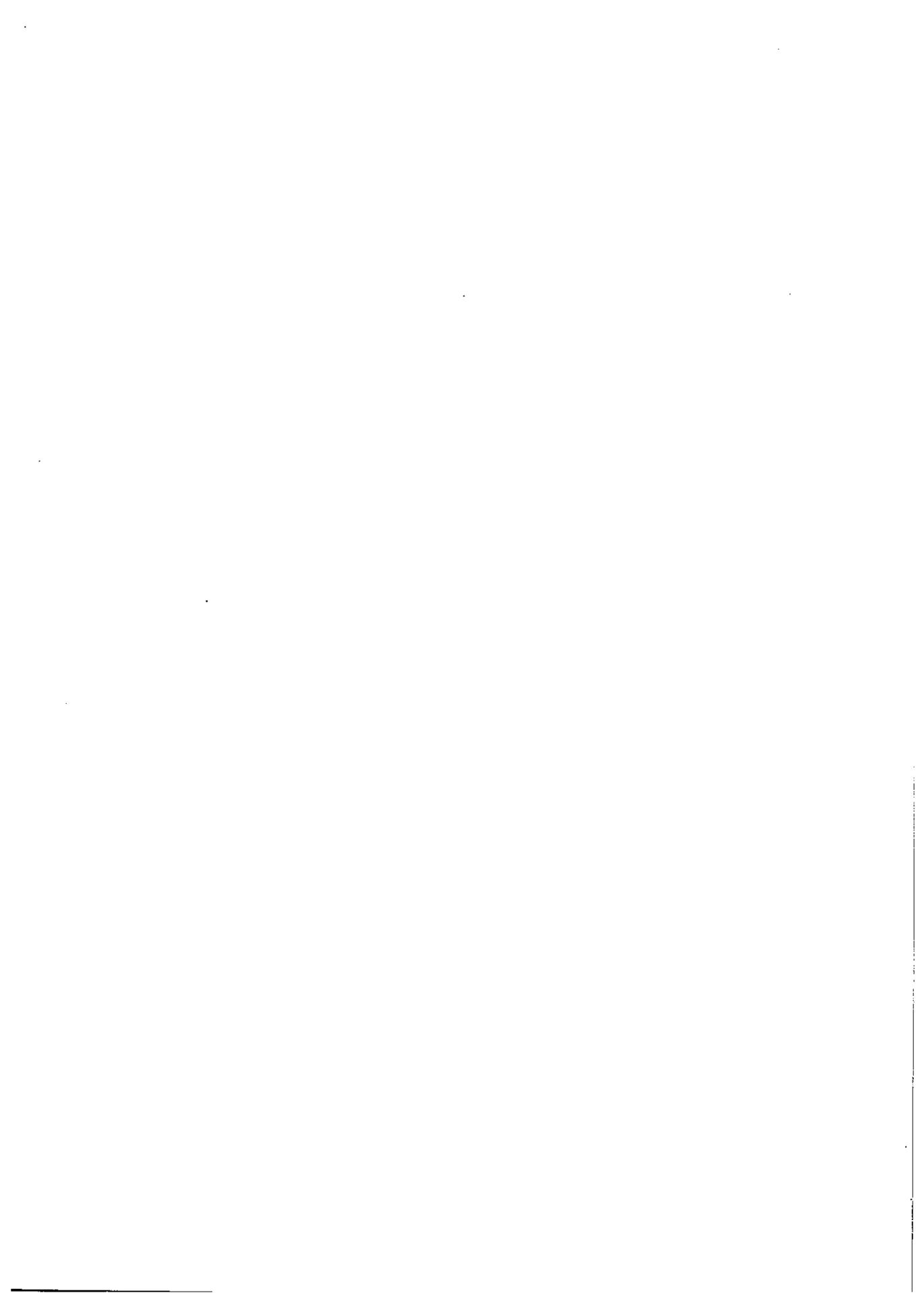


高志保民俗地図

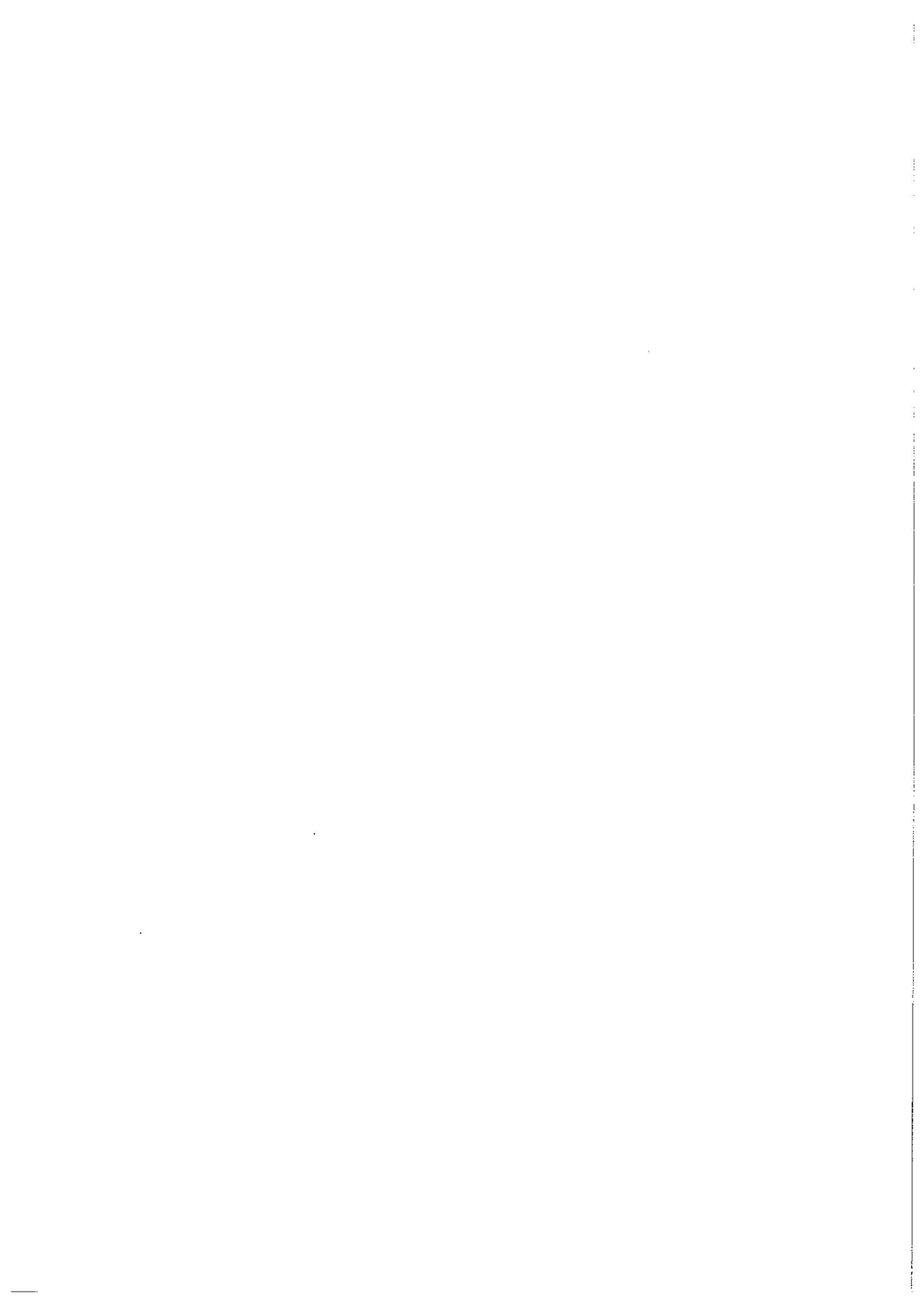



 国吉屋取
 2-101





第一編 翻字資料



一、翻字対象話の選定基準

- ① 昔話（動物昔話、本格昔話、笑話）伝説を翻字対象とした。
- ② 聴取できたすべての話型（話型として認定される可能性のあるものも含む）を網羅すべく、断片的な話でも翻字の対象とした。
- ③ 類話がある場合は、最も良い語りと思われる話を選定した。
- ④ 方言・共通語両方の語りを収録してある場合、原則として方言の語りを翻字対象とした。

二、翻字について

- ① 語りに忠実に翻字することを原則とした。
- ② 語りの場面を反映している事柄や、話の伝承に関わる事柄については、すべて翻字した。
- ③ 話者の語り口調に区切りがない場合、翻字者の判断により、適宜句読点を打った。また、話の展開に従って適宜段落を設けた。
- ④ 語り手自身が、補足的に説明しているところはそのまま翻字し、△▽で示した。

三、方言表記について

- ① 表記は漢字仮名混じり文とし、漢字には全て読み仮名（平仮名）を付けた。また、漢字のあてられる箇所にはできるだけ漢字を用いたが、無理にこじつけた当て字は避けた。
- ② 民俗行事や特殊な民俗語彙などは、片仮名で表記した。
- ③ 引き音（のばす音）はーで表わした。但し、引き音に助詞（は、が、の、を、くに等）が含まれている場合は、助詞の部分を小文字で表わした。

例 牛え先頭やしがよ

四、対訳について

- ① 方言（共通語混じりも含む）翻字には、共通語の対訳をつけた。
- ② 対訳は方言翻字に忠実に行い、できるだけ意訳をさけた。また、勝手な付加や削除はしなかった。
- ③ 共通語語りの場合でも分かりやすくするために、下段にその話を清書したものもある。
- ④ 難解な語句や抽象的な表現を避け、できるだけわかりやすい言葉で対訳した。
- ⑤ 対訳上、補足説明の必要な箇所には（ ）を付して補なった。
- ⑥ 方言翻字文と対訳文の行数を調整し、段落を揃えた。

五、本文について

- ① 上段に方言翻字文、下段に対訳文の二段組みにした。題名の上に通し番号を付した。

②話の初めには題名、話者名、話者の生年月日、翻字者名を明記し、話の終りに採集年月日、調査団名、採訪者名を明記した。

題名は「日本昔話名彙」(柳田国男監修)、「日本昔話集成」(関敬吾著)によったものもあるが、多くは方言翻字に即した題名を付した。

③語りの中の会話部分(文脈上、会話と判断される部分も含む)や、思慮している部分には「」を用いた。「」は会話中の会話を示す。但し、会話部分は特に改行しなかった。

④歌の部分は、改行して全体に二字下げて書いた。一行には二句程度記入し、句間は一マスあけた。

六、注記について

①人名、地名、年中行事などについては可能な限り注記して説明した。但し、地図で補える分については省略した。

②地域独特な意味をもつ語句については、注記して意味を説明した。

③注記は、できるだけ読谷村高志保の民俗を中心に行ったが、中には文献を参考にしたものもある。参考文献はまとめて示した。

1 雀すずめ 孝こう 行こう

話者 比嘉カメ(明治三十四年十一月三十日生)

翻字 津波古米子

クラユムドゥヤーには雀すずめといつてゐるが、あれ、あれとうやー、またジーケーといつて田たの上うへから飛とり行いちゆるきれいな鳥とりがゐるさー、赤あかじゅーぶーぐわーありとう二人姉妹にいとうだんだやたんり。あんさくとう、うったーや一人ちゆいや親不孝うやふこうな者、一人ちゆいや親孝行おやこうこうやてーんてー、かんやたんり。

親おやんちやーがやー、男いなかぬ親おやりがらやー、女いなかぬ親おやりがらーやー、やんりしが行いぢやれーよー男いなかぬ親おやぬよ、うりやたんり。

「りか、親おやあ亡きしがたやみせーんりーぐとうやー、親おやぬ面めん会かいしちくー。」りち、しちやくとうよー。くぬクラユムドゥヤーがてー、またうりがあん言いちやくとう、くぬ田たんかい飛とりあつちゆるきれいな鳥とりえよー、「私わんねー着物ちんちゆう織ういんりやー、布ぬめ織ういんりー、忙いぢゆなさくとう行いかんどーりーたんり。あんさくとう、うれーようやく行いかんくとうよー、うぬクラユムドゥヤーや行いぢやくとう親おやぬ

クラユムドゥヤーというのは雀すずめのことだね、またジーケーといつて田圃の上を飛んでゐる尾の赤い鳥がゐるがこの二人は姉妹であつたそうだ。一人は親不孝者、他の一人は親孝行者であつた。このような話があつたよ。

親がね、父親であつたのか、母親であつたのかよく知らないが、行つてみると、男の親がね、こうだつたそうだ。

「おい、あのな、親はもう死に近づいてゐるということだし、二人で親に会いに行こう。」と、雀がジーケーに言つたらね。田の上を飛んでゐるきれいな鳥は、「私は今、布を織ることでも忙しく、行くことはできない。」しかたがないのでクラユムドゥヤーは一人で行かなくて行き、そこで親の死に目に立ち会うことが出来た。その後、このジーケーはきれいな着物を着け親の所へ

みーとういまでい見ちゃんり。あんし、うれー美ら
着物着ち来がえーまねーやー、親あ亡しちめんせーた
んり。うぬ話やさ。親不孝なうれー。

あんしあれー、親ぬ遺言てー、いやーや倉ぬ上から
歩ち米食り暮らちいきよー、またあれー、地から飛び
よーりちぬ教え語やんりー、くれー昔ぬ、その話さ。

やって来たが、すでに親は死んでいた。こういう親不
孝な話さ。

そして親の遺言の中に、雀は倉の上から米を食べて
暮らして行きなさい。またジーケーは地面すれすれに
飛びなさいという話です。この話は昔の孝行の教えだ
よ、これだけ。

採集S 52・8・15 読谷村民話調査団第四班 八運天悦子・天久節子V

2 雀 孝 行

話者 知 花 ト キ (明治三十八年十月十五日生)

翻字 島 袋 フジエ

あるところにね、アンマーが病氣、ハナヒチかかっ
て、もう重病になつていたので、二人の女ん子ん達
がうたるちむ。

あんさーい、しーじゃ女ん子やハイカラーなてい、
身なりすんでい親ぬ病氣ぬ看護もしないで、また妹の

あるところに母親が病氣、かぜをひいて重病であつ
た。そこには二人の娘がいたそうた。

上の娘はおしゃれで、身のまわりをきれいにするた
めに、親の病氣の看病もしなかつたが、妹の雀は親孝

チヨツチヨローは親孝行ですぐ駆けよつて来て、親の孝行したから。

お母さんの亡くなる時に、子供達二人んき、遺言のー「いやーや親不孝者やぐとう、川端ぬやな水びかーん吸うてい、チヨツチヨツチヨツしち歩ち。」また「チヨツチヨローは親孝行だから、いつも屋根の上からお米の倉から飛んで幸福にしなさい。」と、遺言が、言い残し言葉があつたそうです。

3 雀 孝 行

「うちゆなだやしく、わたいぶしやあらは、まくとうゆい他ぬ道や踏むな」でい言ち、祖父から聞ちよーしやいびーんどー。

「まくとうちゆーなだやしく渡いぶしやーあらはまくとうゆい他ぬ道や踏むな」人を助きてーあだーな

行者ですぐに駆けて来て看病することができた。

お母さんが亡くなる時に子供達二人に、遺言として（姉へ）「おまえは親不孝者だから川端の悪い水を飲んで暮らしなさい。」また、雀には「親孝行者だから、米倉のまわりから飛んで幸福に暮らしなさい。」との遺言があつたそうです。

採集 S 52・2・22 読谷村民話調査団第十五班 八遠藤庄治

話者 比 嘉 徳太郎（明治二十五年一月十日生）

翻字 名嘉真 宜 勝

「世間の中を波風を立てず渡ろうと思うならば、真実一路より、他の道を踏むな」という諺を、祖父から聞いて知っています。

「ほんとうに世の中を平穩無事に渡ろうと欲するならば、真実一路より、他の道を踏むな」人を助けて損

らん人助ちゆたしきてーあだーならん」

フクター着ちちよーていん、親うやぬくとーしちやんでい。

あぬ、カーラガンターや美ちゆら着物げんち着やーに、親うやぬ孝こやさんなたくとう、「いやーや」、クラーぐわーんかいやーさい、「いやーや親うや孝こ行こうしえーくとう、倉くらぬ側そば守まもてい、うまとーていうりし、育すだていよー。」でいる遺言いごんやんでいーる話はなし。

クラーや、フクター着ちちよーていん、親うやぬくとーしえーくとう。「いやーや、まーさむん食かでい、倉くらぬ側そばとーてい生育ふさいーりよー。」でいちやる、やたんでいる話はなしや聞きちよーる。

採集 S 52・8・14

読谷村民話調査団第十一班 八知花利江子・上江洲康子・名嘉真宜勝

になることはない」という諺を聞いています。

(雀は)フクターを着けていても親孝行をしたそうだ。あの、カーラガンターはきれいな着物を着けて、親孝行をしなかつた。雀に、「おまえは親孝行者だから、倉を守つて、そこで育ちなさいね。」という遺言であつたという話を聞いています。

雀はフクターを着けていても親の面倒を見たので、おまえは倉の周辺でおいしい物を食べて、育ちなさいよ。」という話を聞いています。

4 雨あま 蛙がえる 不ふ 孝こう

話者 比嘉カメ(明治三十四年十一月三十日生)

翻字 津波古 米子

アマガクというのひとりむすこは一人息子がいたつて。潮うすく汲くり来くりねー、水汲みじくりち、水汲みじくり来くりねー、潮うすく汲くり来くりねー

雨蛙には一人息子がいたそうだ。親が潮を汲んで来なさいと言うと水を汲んで来るし、水を汲んで来なさい

てー。あんしやんりしが。

あんしからアマガクリせーや、うりやたんり。お父さんがよし、私ねー、私が死んだら、川ぬ側んかいうれー、本當ぬ事言いねー、反対すぐとうち、川ぬ側んかい送りよーんちしちやくとちやー。また川んかい送らんさりちやてーんてー。あんしやたしが、また反対言るはじやくとち、お父さんがーやてーるばてー。

あんししちやれー、うりやたんり。死じやくとちやー、うにーねー、反対やさんぐとち、アマガクリしえーよー親孝行すんりちやくとち。アマガクやあまのじやくしなていアマガクーなたるちむり。川ぬ側んかい送りよーりーねー、送らんどうはじんちしちやくとち。川ぬ側んかい送っているあんりれー、うにーねーまた反対にあんさぐとちやうぬ川ぬ側んかい送とーしえーありりー。

なー、雨ぬ降いがたーねー、アマガクや、ガークガークし鳴ちゆんたくとち、私達あお父さんのーやーしちよ、私達あ父ややーしち昔ぬ言葉あ父ややー、しち鳴ちやくとち、アマガクリち付きらつとーるちむやんり。アマガクぬ話。

いと言うと潮を汲んで来る始末であつた。

それからアマガクというのはこういう話があるよ。お父さんが、「私が死んだら川の側に埋めてほしい。」と、自分の本心を話すといつものように反対の事をすであるうという事で、そうすれば川の側には埋めないであろうと思つてお父さんは息子の蛙に言つたそう

だ。
そうしたらば、こうだつたそうだよ。父親が死んだので、その時は反対の事はせず、親孝行するつもりであるものだから、川の側に親を埋めたそうだよ。雨蛙はあまのじやくだったので、アマガクーと付けられたそうだよ。川の側に埋めなさいと言つと、葬らないだろうと父親は思つて彼にそう言つたら、川の側に葬つてあつたそうだよ。その時は反対のことはしないで、(言われた通り)川の側に送つたそうだよ。

それからというもの、雨の降りそうな時、雨蛙はガーク、ガークと鳴くそうだよ。雨が降りそうになると「私のお父さん、お父さーん。」と鳴くようになったのでアマガクと言われるようになったそうだよ。

翻字 村 山 友 江

あぬー、世ぬ中んかいやてし、くぬ動物ぬ、名ちきー
 入り、昔、殿様がよ、ある場所んかい集まりんち、全員
 んかい話いさーま集まいるくとうぬあたぬばーてし。
 集まとーるばーてし。

あんさーい、うまんかいあぬー名前ちきーぐとう、
 集まりりちしさぐとう。今度お、子、丑、寅……子か
 らいじてい、子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、
 酉、戌、亥といつてこれ十二、干支があるでしょう。
 で、そこに一番着いたものは、すぐ一番ぬ番号でやる
 から、一番から十二番まであぐとう、一番来るものに
 一をとらす。

あんさーい、今度はもう、「さあ今日はもう、動物の
 集まりり言ち、殿様が言ーてーぐとう、今日や集ま
 る日やぐとう、早く行きわるやる。」りち、なー動物お、
 うまんかい全員集まとーるばーてし。あんさーい、く
 ぬ子ぬうまから牛ぬ、なー牛え先頭やしがよ、牛ぬ一番

あのう、世の中にはね、この動物の名をつけるため
 に、昔、殿様が、ある場所に集まるようにと、全員に
 話をして集まることになった。集まったのである。

そうして、名をつけるからそこに集まりなさいとい
 うことであつた。今度は、子、丑、寅……子から始ま
 て、子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、
 亥というふうに十二支があるでしょう。だから、そこ
 に一番先に着いたものから一番というふうにするから、
 一番から十二番まであるから、もう一番先に来るもの
 に一番をやるからと。

そうして、今度はもう、「さあ今日は、動物の集まり
 があると殿様がおっしゃっていたので、今日は集まる
 日だから、早く行かないといけない。」と、もう動物は
 そこに全員集まったわけだ。そうして、この牛がそこ
 からこの牛は先頭であるけど、牛が一番先に歩いてい

先歩ちはいたしがやー。鼠りせー、鼠りせー、なー牛見ちやーま、「いえーいえー牛待つちよーけーいひぐわー、私にん一緒行ちゆさ。」りち。なー鼠お、牛ぬ耳んかい乗とーてい、なー集まいる場所んかい行ちゆるばーてー。

あんさーい、うぬ集まいる場所んかい行ちやぐととう。

「とーひやー、今ねー来しえー。」りち。鼠お牛ぬ耳から飛ん降りやーま、うぬ鼠お一番なとーるばー。あんし牛え二番。うんぐととうーし子から丑、子、丑、寅んかいち、あんし順番のー子、丑、寅や、なーうまんかい順番しれー先ちゆーしんれー、なー番のーちきたぐととう。

あんし、猫りせーやー、猫ぬむのーねーんしえーやー、干支や。うれー殿様のーてー、鼠んかい「あぬ猫ん連絡しーよーやー。あれーなーだ聞かんぐととう、猫んかい合図しーよーやー。」りち、鼠んかい言ちえーんりしが、うぬ鼠おなー猫とー敵うりやしえーやー。なーうぬ鼠お、猫んかい何りん言らんたるばー。黙たぐととうなー、うぬ鼠りせー知恵のーまんり、「なー猫や、うつちやんなぎとーけー」。あんさーい猫、猫一匹え干支

ただけどね。鼠が牛を見て、「おいおい牛、ちよつと待つてくれ、私も一緒に行くから。」と。もう鼠は牛の耳に乗って、集まる場所に行ったわけだ。

そうして、その集まる場所に行ったら、「はい、今着いたよ。」と、鼠は牛の耳から飛び降りて、その鼠は一番になった。そして牛は二番。こういうことで子から始まり、子、丑、寅という順番である。そこに先に来た順に番をつけた。

それから、猫は干支にはないでしょう。これは殿様がね、鼠に「あの猫にも連絡しなさいよ、あれはまだ聞いてないので、この集まりがあるという話は、聞いてないから猫にも合図しなさいよ。」と、鼠には言ったんだが、この鼠はもう猫とは敵であるから、もう鼠は、猫には何も連絡しなかったのである。鼠というのは、利口であつたので黙っていた。「もう猫は、おいていけ！」と、それで猫一匹は、干支に入つてないというわけで

んかい入らんり。入つてーねーらんばーてー。

ある。

採集 S 52・2・22 読谷村民話調査団第十五班 〱新垣修子〱

6 猿の赤尻

話者 大城利徳(明治四十一年四月二十四日生)

翻字 村山友江

猿はね、もう利口であつてよ。もう他の動物とは違つて、一歩この頭の知恵がいいのか、よかつたのかな。その猿がよ、もう山の上行つても、もう他の動物と一緒にまあやつておつたんだが、他の動物をいじめて。

で、それであのう今度は、他の動物はね、あの猿にはもう乱暴されてはいかないといつて。あのう他の動物達がね、あの石を焼いて、焼け石、石を焼いてね。もうその猿は、他の猿をいたずらしたんだから、もうこの石の上で、ちよつと一服しようか、休もうかりち、休んだわけさー。

しかしこの石にはもう、熱くて熱くて、熱い石だから、この石の上に座つたんだから。猿の穴はまっ赤つ赤でそういう話は聞かされた。ほんとあつたかどうか分からないが、焼き石の上に猿はもう安心して座つたわけさー。

採集 S 52・8・14 読谷村民話調査団第十三班 〱新垣修子・上間京美・知花千代子〱

7 犬の足

話者 大城清一（大正三年十月二十一日生）

翻字 島袋 フジエ

三本では、どうも不自由でいかないということ、ウコールの足を一本ちようだいして四本に授けられたと。おかげで非常に便利になって、歩くことも非常によくなったということでありませぬ。そこで小便を垂れる場合は、やはり、これは神様からあずかった足だから濡らしてはいけないということ、大事にして小便垂れる場合は足を上げるんだと、まあそういう伝説を聞いた覚えがあります。

採集 S 52・2・22 読谷村民話調査団第十五班 八遠藤庄治

8 鬼餅由来

話者 奥原崇善（明治三十二年四月十日生）

翻字 知花春美

兄さんがもう鬼、ほんとの鬼ではなかったでしょう。小さい子供を、生まれてじきの子を取って、殺して食べた。あんまり世間に知られて。

それから十二月八日に、旧の、妹の方が、餅が好きであつたらしい。お兄さんは。そして餅を作つて、あのお首里の東の、弁の御獄ではない。向こう、谷底になつておるから、そして向こうに座わらして、兄さんは餅をあれして、そして妹の方が自分の恥を、この兄さんに見せたからもうびっくりして、向こうの谷底に落ちて死んだという話を

聞いたんです。

あれからのムーチー、鬼ゲージというて、ほんとに兄さんがもうあんまり人を食うから鬼になつて、そういう由来記です。ムーチーというのは。

採集 S 60・2・24 読谷ゆうがおの会 〆知花春美・村山友江〷

注 ムーチー 高志保部落では旧曆十二月八日にムーチーと称する行事があり、現在でも行なわれている。巾約五センチ、長さ十二センチぐらいの餅を作り、月桃の葉に包んで大鍋に蒸して作る。魔除けとして煮汁は庭にまき、餅を食べた後のサンニンの殻二枚をあせて十字型にし軒先に吊るす。子供のいる家庭では子供の分をひもで吊るしたり、男の子には力餅を作つてあげたりする。

キ ジ ム ナ ー

話者 大 城 利 徳(明治四十一年四月二十四日生)

翻字 知 花 春 美

あぬー、昔よ、私達あ村んかい、おばあさんがじこー海上手なてい、なー夜海かい行んしえーたるばーてー。

あんさーい、うぬおばあさんのー、なーキジムナー

とう友達がやたらー、おばあさんが行ちーねーやー、魚ん出来てい、また他ぬ人お何ん手柄あなんじゆ多くおねーんばーてー。

あのう、昔ね、私達の村に魚捕りの上手なおばあさんがいて、もう夜、海へ行つたようだ。

それで、そのおばあさんはキジムナーと友達であつたのか、おばあさんが行くと、いっぱい魚が捕れるが他の人にはあまり手柄はなかつた。

あんさーに、うぬおばあさんが言ひ分の、「えー私
ねー今日ん海かい行ちーねーやー、私ねーあんし魚か
ら何からだてーん捕てゐる来るむんぬ、ぬが貴方達や
あんし、何んうれーうっぴーなる捕てい 来んなー。」
り、うぬおばあさんは、他のおばあさんに話するわけ
さ。

「あんし、おばあさん、貴方や、すぐ行ちーねーやー
自分しる捕いんなー。」「んー、自分しる捕いんろー。
ぬぐわうまんかい魚ぬうしえー、うまんかい魚ぬう
しえー。」りち、なー魚あだてーん捕ていめんしえーる
ばーてー。

あんやし、家かいなー夜どう、夜海どう行ぢめー
ぐとう、家かいめんしえーに、なーまた夜明き方とう
か家来ねー、うぬテイルぬ魚あよ、目玉あむるけー
ぬがつていねーらん。

「ぬが、おばあ、うれー魚あうつさなーあしが、う
ぬ目玉あむるねーびらんでー。」りちよーるばーてー。
あぬおばあさん、「んー、ねーに。ぬぐわうれー手間ぐわー
やさ。ありが手間やいびーが。」「キジム
ナー、私あ友達えーやー、キジムナーりちうぬ友達ぬ

そのおばあさんが言うには、「私が今日も海へ行くと、
私はこのように魚やら何やらたくさん捕ってくるのに、
どうして貴方達はそのぐらいいしか捕れないのか。」と、
他のおばあさんに話をした。

「それで、おばあさん、貴方は（海へ）行くと、自
分で（魚を）捕っているのか。」「んー、自分で捕るん
だよ。どうして、そこにも魚がいるよ。ここにもいる
よ。」と、もうたくさんの魚を捕つて来たようだ。

そうだが、海へ行くのは夜なので、家に帰るのは夜
明け方になるが、テイル（籠）に入っている魚の目
玉はぜんぶ抜かれてなかったそうだ。

「どうしてかね、おばあさん、魚はいつはいあるが
目玉はぜんぶないよ。」と言ったようだ。おばあさんは
「んー、ないのか。なぜそれは手間賃だよ。あれの手
間賃。」「何の手間賃ですか。」「キジムナー、私の友達
でしょう。キジムナーという友達がいるでしょう。そ

うしえーやー、とーうりがる『魚ん何んくい、うまん
かいうんどー、くまんかいうんどー、おばあさん捕み
そーりよ。』し、あんし捕らちえーる魚てー、でいきやー
ま、家んかい持つち来ぐとうぬ目玉やキジムナーぬ
分りちキジムナーがむる目玉ぬじねーらん。』り。

採集S 52・8・14

読谷村民話調査団第十三班 八新垣修子・上間京美・知花千代子

注 キジムナー 木の精、古木に宿るといわれ、人間と友達になつて魚取りを手伝つてあげる。タコや屁が嫌いだとされる。

10 キ ジ ム ナ ー

話者 知 花 ト キ (明治三十八年十月十五日生)

翻字 知 花 春 美

キジムナー話です。戸口を開けて入つち来しまでー
分かいが、来るなーといつて、塩つけてはいるが、
うぬ後から、むる分からん、うすらつてい。どーに
し、イーイーしちゃんでーまん、重くなてい何ん分か
らんりーしが、後お気え付ち、自分ぬなーいひぐわー
感付ちやんり思いねー、なんくる逃げていない。

キジムナーの話です。戸口を開けて入つて来るまで
は分かるが、来るなあと思つて塩も準備しているが、
その後からはおさえられて何も分からない。ンーン
とうめいているが、後は気がついて自分がちよつと感
づいたと思つたら、(キジムナーは)いつのまにか逃げ
ていない。

あんし、うぬ話、親んちやーから話しいしちやらー「う
れーやー、いちばんキジムナーぬ恐るさすしえー海ぬ
海松、ちむいやー海松下ぎとーき。」りーし、何回うり
下ぎたる事んあん。

あんさーにむしか、海んでーん、まーんじ、魚ん捕
てい、宝ん持っちよーねー、すぐ屁んでーひーねー、
プーんでーひーねーや、すぐうりしーじー一緒、海
かいうすくり、プーループールーしみーんりぬ話やん
どーやーりち、親んちやーからぬ語い話。

そして、その話、親に話をしたら、「それはね、キジ
ムナーのいちばん恐いのは海の家松だからそれを下げ
ておきなさい。」と何回かそれを下げたことがあった。

もしも、海かどこかで、魚を捕って、宝を持ってい
るとき、屁をこくと、すぐ宝といっしょに海に沈めら
れるという話だよと、親からの語り話である。

11 キジムナー／＼魚取り

話者 松田芳英（明治四十五年五月十日生）

採集S52・2・22 読谷村民話調査団第十五班 八遠藤庄治

翻字 島袋喜美子

こういう話を聞いた事があります。私が、五つ六つぐらいのじぶんですが、うちのおばあさんが、そのおばあさ
んは今いらつしやれば、百三十、四十ぐらい、百四十五、六ぐらいなりませんかな。
自分が幼い時に聞いた話ですがね。海上手であつて、海に漁しに行つて、キジムナーというものと友達になつて
手柄をよくかせいできた。という話をよく聞いた事がありますよ。

これはほんとのキジムナーであつたか、またそのおばあさんが海上手であつて自分でやったものを、キジムナーと友達せんとその手柄をあたるかという冗談話だつたか何か分かりませんがね。そういう話を聞いた覚えがあります。

採集S 52・2・22 読谷村民話調査団第十三班 八宮里光雄・知花春美

12 鬼 婆 の 話

話者 比 嘉 徳太郎 (明治二十五年一月十日生)

翻字 知 花 春 美

鬼婆の話。泊新垣りしが公儀んかい勤みてい。一番妻え妊娠たぐとう、いえりん縁ぬねーんてーるばーてー。

鬼婆の話。泊新垣という人は公儀に勤めていた。最初の妻は妊娠したが、いわば縁がなかつたのでしようね。

妊娠とーる子あ、くぬ舟持ちんかい頼りち手間とうらち、慶良間ドゥーんかい溺くわちとうらしりさぐとう。うぬ舟持ちん儲きわじややぐとう、手間あ取やーい、慶良間ドゥーんじえー溺くわーちえーるばーてー。溺くわちやれー、うりが飼なとーる犬ぬ、サチヒジャーバンタとーてい見ち、溺くとーしえー見ちやぐとう、

妊娠している妻を舟主に頼んで、手間賃をあげて慶良間ドゥーで溺れさせてくれと言つた。この舟主も儲けを考えて、手間賃をもらつて、慶良間ドゥーで溺れさせたようだ。そうすると、その人が飼っている犬が、サチヒジャーバンタから見えて、泳いで行き、助けて山田に上がった。

犬ぬ泳じ行ぢ、山田んかい泳じ上がたなり。^{注①}

泳じ上がたれー、山田んじ、「山田ヌン殿内、スリ、

入口やあしが、出口やねーらん」りぬ、昔歌ぬあしえーや。「入口やあしが出口やねーらん」りち。

くぬ新垣りーしが、鬼婆妊娠らさーい溺くわちえーる子あ女ん子。山田んかいゆい上がてい、泳じ上がてい産ちえーる子あ女ん子、また、後妻とう、とうめーてーる子あ男ん子やたなり。

泊新垣い子あ男ん子なたれー。あんされー、くぬ年頃なてい、後とうめーてーる男ん子あ田舎んかい作得ぬ催足しーが行ちゆる時やぐとう。

うぬ前やうまんかい、人ぬあるうつきー殺ち食いたんり、くぬ鬼婆あ。あんさーに、うぬ女ん子ぬ、男あうまんかい、山原から来に泊またぐう、「あんあんし私たー親あ、うまんかい来るうつきーすぐとう、うぬ心しとうらしよー。」りち。

いいるんさー、男ぬ親ていーちぬ姉弟やるはーてー、姉弟ぬ知らさーにる、あんしみてーならんりち、公儀ぐとうなやーい、鬼婆あまた公儀から政令しち。

鬼婆ぬ墓りち、今山田んかいあんよー。儀間真常お

その後、山田では、「山田ヌン殿内、入口やあしが出口やねーらん」という昔歌があるでしょう。「入口はあるが、出口はないと」ね。

この新垣という人が、鬼婆を妊娠させて溺れさせ、生まれた子は女の子であった。山田にたどり着いてから生んだ子は女の子、また、後妻との子は男だったそ

うだ。泊新垣の子は男であった。そして、いい年頃になつて、後妻の男の子は田舎に作得の取り立てに行つた。

それまでは、鬼婆は人のいるだけ殺して食べていたそう。それで、男の子は山原からの帰りにそこに泊つたので、鬼婆の娘が「こうこうで私の親はここへ来るお客さんをみんな殺してしまうので、そのつもりでいなさい。」と言つた。

いわば、異母姉弟であった。姉さんが弟に知らせてこうではいけないと、公儀で問題になり、鬼婆のことで公儀から政令が出た。

鬼婆の墓というのが、現在山田にあるよ。儀間真常

墓と一・二ち並ど一んよ。うまんかいあしが、鬼婆ぬ。

あんさーにる、自分ぬいいるんさー姉弟ぬ語やーにる

鬼婆ぬ政令ちきたんりる話。

の墓と二基並んでいるよ。そこにあるよ、鬼婆の。い

えば、自分の姉さんに告げられて鬼婆の政令をしたと

いう話。

採集S 52・2・22 読谷村民話調査団第十四班 八伊芸弘子V

注① 山田ヌン殿内 久良波首里殿内のこと。子孫は絶えてその屋敷跡が、元山田ドライブイン敷地内に残っている。そこには、戦前

まで久良波部落があつた。

注② 作得 地頭、役人などが役地から取得する穀物。

13 化 け 物 寺

話者 比 嘉 カ マ (明治三十九年三月二十五日生)

翻字 天 久 加代子

御箸、ミシゲー(しゃもじ)、サラゲー(杓子)というもの、かつてに捨てたら、あのいけないということは、昔、あるお寺の坊さんが、あの坊さん勤めているが、もう夜は、あまり化け物が来て、これは不思議に思つて、もうこんなにしたら、どうしても自分は、こつちに勤めることはできないというてやめて、また別の坊さんが来たから、やっぱし、この化け物は現れて、珍しいねとして、確かめるために、見たから、夜が明けるときにはちゃんと、床下に入つていたって。だから、こんなもの捨てたらいけないねえという話が今もあるということでありました。

採集S 52・2・22 読谷村民話調査団第十三班 八宮里光雄・知花春美V

14 アカマタ 聲入

話者 大城 ウ サ (明治三十三年七月十日生)

翻字 山内源徳

注①

三月三日ぬ遊びぬ、あぬ若者が友だち連れて遊んで、くぬ、美男子に打ちほれてさーや、あんし惚りたぐとう。うぬ女のーな、うれー本当ぬ人間でいちな、惚りてい毎夜つき合いやせーるばーてー。

あんさぐとうな、皆が、疑てい、「うれー人おあらんどーやー。」りちやしが、な、美男子やぐとうな、人んかい見たぐとう、毎夜、毎夜うりとう、つき合いちちやぐとう、とうとう、妊娠した訳。

あんさぐとうな、うまぬ人達ぬ、とーあんせーくれー確かみーるたみね、りちな、誰が、確かみーさんなたぐとう、ウーバーラんかい續みにたみてーるウー、うりんかい、ひも付きやーに、うりが髪んかい、引つかきたぐとう、うりが行方、通てい行く行方な、追てい行ぢやぐとう、調びーる、確かみーが行ぢやぐとう、洞窟、やたんでいち、「アハ、あたまにんちや、くれ、アカマターやてーさやー。」りち。

三月三日の浜下りの話、若者が友だち連れて遊んでいた。一人の美男子がいて、この美男子にある女が惚れてしまった。この娘は、美男子を普通の人間と思つて毎夜つき合つていた。

しかし人々は、この男を疑つた。「これは、人間ではない。」などとうわさしていたが、娘には美男子に見え、どこから見ても人間に見えた。毎夜つき合つていた。そして、妊娠してしまった。

そこで、娘の家族が、その男の身元を確かめようとしたが、誰もその男の正体を確かめられなくて、とうとう、ウーバーラに一杯入つた芭蕉に、針をつけて、その男の髪に引っかけ、その男の行方を追つて行く、その男の行つた先は、洞窟だつた。「ああ、これはやっぱり人間ではなくて、アカマタだつたのか。」とその男の正体が分かつた。

あぬ、うりから、あんせーくれー、妊娠、かんしみ
てーならんむんりち、浜遊びーしち、だー、うれー、
だー、何りんたが、浜遊びーかい行ぢやーま、りーか
ら言ちやぐとう、んまんじ、浜んじ、墮るちえーたん
でい、肥桶ぬ一杯産ちえーたんでいさ、でいぬ話や
うれー、聞ちやる覚てー。

あんさぐとう、うぬ女でいせー、浜ぬ砂踏らみーねー、
あんやんでいぬ、悪いことぬぎいんでいくとう、くれー、
うぬ三月三日えかんなじ女お浜んじ遊ばち、うぬ厄は
らちよーるふーじーなてい、三月三日ぬ浜遊びえ、うり
からぬ、伝えやんでいさでいち、少ぐわーや分かいた
るばー。

それから、娘の妊娠をなんとかしなくてはと思い、
浜へ下りて、浜遊びをして、身を清めたらどうにかな
ると思つて、浜遊びに出かけた。そして、浜辺でアカ
マターの子を肥桶の一杯墮ろしたという話を聞いた覚
えだがね。

それで女は皆、浜辺の砂を踏んだら、厄ばらいにな
るといつて、三月三日に必らず、浜で遊んで厄ばらい
する習いになったという事をすこし知っていた。

採集S 52・2・22 読谷村民話調査団第十一班 八大宜見光一▽

注① 三月三日 現在でも、旧暦三月三日はハマウリーと称する行事があり、特に女子は浜下りをすべきだという信仰がある。このアカマターと浜下りの伝説は広く語り継がれている。

注② アカマター 琉球列島中部の固有種で奄美大島、加計呂麻島、喜界島、徳之島、沖永良部、与論島、久米島、渡名喜島、沖縄本島とその属島（浜比嘉島、伊計島、宮城島）に広く分布している無毒蛇で体長一三〇cm内外である。人家周辺から耕作地及び山地にかけて、広い範囲に生息している普通種で、主として夜間活動する。

15 アカマタ 聾 入

話者 国 吉 真次郎 (明治二十七年二月八日生)

翻字 大城 純 子

あんしえー、今ねー、アカマターぬ話。アカマターが女しぬだんりぬ話からんぢてい。そして、しぬばつたれー女おしかとう美人さんやてーるぐとーしが、えーあんしし、うぬアカマターが来んでいる夜おどうにかその女お具合悪くなてーるぎさぬ、翌日あ寝んでいさぐと。

時々そういうことがあつて、親ぬちやー、心配し、「くれーかんすしがりち、是非、さとうてい、かちみりわるやる。」りち、しそーねー、ある物知りのお婆さんが、「かんかんぬ、くとうやいびんでー。」言うたから、そのお婆さんが返答の「あんやらー、ウーバーラぬ糸んかい、先んかい針ぬち、そして、うりから、さとうてい行けー。どうにかぬくとうぬあいさーに、まづ一応あんしんだんなー。」言うて、やつて。その翌日にそのものが来たから、お婆さんが言う通り針、ちょんまげの上ぬいて、そして翌日それ糸さとうていさ

今度はアカマターの話(をしよう)。アカマターが女を騙したという話である。騙された女はものすごい美人であつたらしいが。そして、アカマターが来た夜は、その女は、体の具合が悪くなつて翌日は寝ていた。

時々、そういうことがあつて、親たちは心配し、「この娘は気分が悪くなり、寝たりするので、どうしてこのようなことになるか、是非相手をさとつてみよう。」ということになった。そうしている内に、ある物知りのお婆さんへ「実はこういうことになっている。」と相談をもちかけた。そのお婆さんの返答は「そのようなことであれば、ウーバーラの糸を針の先にぬいて、その後を追つて行きなさい。何か分かるだろう。」と云つて、まず、やつてみようということになった。その翌日にそのものが来たので、お婆さんが言う通りに、ウー

16 鍋蓋とアカマタ

ぐとう、ある洞窟ぬ中んかい、アカマターぬうてい、
そしてアカマターぬ人んかい化きていやてーさやりち、
この話だけ聞いた。

昔え畑から芋を掘つて煮ち食るーびさ、ハンメー、
食糧。

そして、そのカマンタが破りーねー、地んかい置ちー
ねー、うりが下とーていしりーぬアカマターや人騙す
ぐとう、やつぱし捨ていーる時ねー木ぬ枝んかい下ぎ
りりちやるばー。

あんすぐとう、それ毎日、人の食う、食べる芋ハン
メー、熱気をそれが吸うておるから、土地には置かん
で木の枝に下ぎりり。そして、カマンタの下とーてい

バーラの糸を針に通し、男のちよんまげの上にさして、
その糸をたどつていくと、ある洞窟の中に入っていく、
そこにはアカマターがいた。アカマターが人に化けて
いたという話を聞いた。

採集S・52・8・14 読谷村民話調査団第八班 八山城悦子・坂崎弘

話者 松田長秀 (明治四十二年十二月二十七日生)

翻字 知花春美

昔は畑から芋を掘つて、食糧として煮て食べました
よ。

そして、そのカマンタが破損して、地面に置くと、
その下で孵化するアカマターは人を騙すので、捨てる
時は木の枝に下げなさいということである。

毎日、人の食べる芋を煮るときの蒸気をカマンタが
吸収しているので、地面には置かんで木の枝に下げな
さいということである。カマンタの中で孵化するアカ

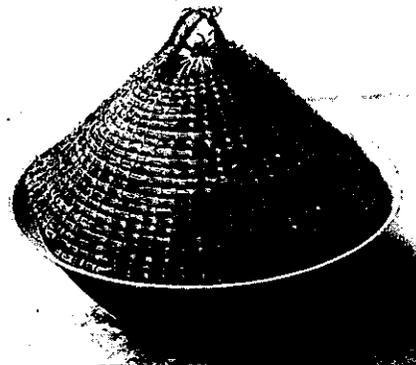
しりーるアカマターや赤サージかんてい人騙すぐとう
りちぬ話、聞ちよーるばー。

マターは赤手ぬぐいをかぶつて人を騙すという話を聞
いているよ。

採集S52・2・22 読谷村民話調査団第十五班 八遠藤庄治

注 カマンタ 農家で芋等を煮るシンメーナービ (四枚鍋) 等の鍋蓋。

茅や藁を竹ひごで編んで作る。



カマンタとシンメーナービ

17 アカマターと小便

話者 喜友名 市太郎 (天正元年十一月二十三日生)

翻字 知花春美

アカマターよ、なんでアカマターがね、女ぬ、あのう女はあつちこつちでもな小便していかないいう話もあつた。
そんで、アカマターはね、女でない。そのアカマターや、まあ男だ。そんで女がね、あつちこつち小便したら昔の
人がね話しよつた。そんであのう女はね、あつちこつち小便しちやいかんね。りっぱな守つて小便するべきで、

女おんなが小便しょうべん、女おんなが小便しょうべんしたからねアカマターは男おとこに、赤あかハチマキ、化ばけた、男おとこに化ばけた。そんで女おんなはそこに小便しょうべんをしたからねそのアカマターにまよわされたよ。騙だまされて、そういう話はなしがね、女おんなはあっちこちでもね、小便しょうべんしていかないいう、前まえ、親おやもと、あのう先輩せんぱいの方かたから話はなし、私わたしは聞ききました。

採集52・2・22 読谷村民話調査団第十班 〱山城悦子〱

18 美女びじよに化ばけたアカマター

話者 奥原崇善 (明治三十二年四月十日生)

翻字 村山友江

うれー元もとお首里しゅいぬ侍さむらいぬ、うぬアカマターやなー女いなかん
かい化ばきたぐとう。なー首里しゅいぬ侍さむらいのー、アカマターれー
思おもいみそーらん。なー美ちゆら女いなかりち、うりさぐとう。後あとお
うりつし、なーなげーんうりしからるなーアカマター
やさやーりち。

あんさーになーアカマターや、むるうぬ侍さむらいぬ所ところんか
いうりしえーういさぐとう。後あとおなー、坊主ぼうちぬ法文ほうもんは
んちゃーに、うにーから居うらんりちぬ話はなしい、私達わつたや聞き
ちよーん。

これ(アカマターの話)は、首里の侍がいて、この
アカマターが女に化けたからね。もう首里の侍は、ア
カマターとは知らなかった。美しい女だと思っていた。
もうずっと後になつてから、人の話を聞いて、アカマ
ターだということが分かった。アカマターだねと。
それで、このアカマターは、いつもこの侍の所に通つ
ていたので、後に坊主が法文を唱えて、それからいな
くなつたという話を、私達は聞いた。

なー美らかーぎー女ぬうまんかい降りていちやーまや、うま川うてい浴みーし、浴みるときにや、うぬ女ぬ着物ちるかーでいしえー、またうぬ侍ぬ、なー着物ぬのー取やーま。他ぬ羽衣んちやーや皆着やーま、天ぬんかい上いしが、うぬ、なー一人ぬ羽衣や「なー私が着しえーねーらん、天ぬんかい上いさん。」なーあんししあわりさぐとう。

今度おなー、侍が来るばーてー。「ぬぐわー、何りちうまうてい、とうーちあんし、あんそーが。」でいちやぐとう、「実え私ねーやー、私が着ち、衣装やねーらん、うぬ衣装ぬあれー、私ねー天ぬんかい上いしやし、が、上ていん上ららん、かんし、うまうてい、むぬ考えそーんでー。」りちやぐとう、「りかあんしえー」緒、行ぢやーま着物ちるかーん着しーぐとう、なー着しらやー。」りち、なー行ぢえーるばーてー。

なー行ちる中ねー、夫婦なやーまよ、夫婦なてい、

もう、きれいな女が (天から) 降りて来て川で水浴びをしていた。(そこに掛けてある) 女の着物がある侍が取ってしまった。他の天女は羽衣を着けて天に上がって行つたが、もう一人の天女は「私が着るのはない。天に上がることはできない。」と心配していた。

すると、そこへ侍が来たようだ。「どうしてそこで、何を心配しているのか。」と聞くと、「実は、私が着ける衣装がなくて、その衣装があれば私は天に上がっていくのだが、上がるうにも上がれず、こうしてここで考え込んでいます。」と言った。「それじゃ、一緒に行つて着物を着せてあげようね。」と行つたようだ。

そうしているうちに、二人は夫婦になつて、子供も

な―産しむんぬ子ん二人産ちえーあしがや。天ぬんか
い上らんねーならんぐとう、うぬ夫ぬる衣装や隠ちえー
しがや、な―ボージャーん産ちから子ん二人産ちから、
じひとう、うれ―「私ね―くぬ世うていん暮らさらん
や。な―あまんかい上りわるやる。子ぬちや―ん産
まりと―い、私が初め着ちうたる衣装ぬうまんかいあ
ら―や、うれ―私にんかいきうていとうらさんな―。」
りち、言ちえーるば―てー。

あんさ―い、うぬ男あうぬ産しむんぬ子ん二人な―
産ちるあぐとう、うりが天ぬんかい上がいな―。上が
らんはじり思や―ま、今度おありが着ちちえーる衣装
て―、出じやちやぐとう。

やつぱし、うり衣装着や―ま、子二人産ちるあしが、
な―天ぬんかい上がていはんしえーたなり、羽衣。

うり若はぬば―にいるうまんかい来、ちやつさがら―
うしが、一人ぬむの―、うぬ衣装ぐわ―や親方ぬ、侍
がな―隠みの―ちや―ま、うり一人残ちえーるば―てー。
あんさぐとう、うり一人残ちやぐとう、着しえ―ね―
んしえ―。皆あ着ち行ちや―ま天ぬんかい上がいしが、
うり一人やうまんかい残たぐとうや。

二人生まれた。衣装は夫が隠してあつた。子供も二人
生まれているが、天に帰らないといけないう思
で、「私はこの世で暮らすことはできない。もうあそこ
へ上がらねばならない。子供も生まれたし、私が最初
に着けていた衣装がそこがあれば、私に返して下さい
ませんか。」と言つたようだ。

そこで、その男は、子供も二人いるし、それが天に
上がるかな。上がるはずはないと思つて、女が着てい
た衣装を出してあげた。

すると、衣装を着けて、子供二人いるのに、もう天
に上がつて行つたようだ、天女はね。

天女は若いときに大勢の仲間とここに来て、一人
の衣装だけ、親方、侍が隠してしまつて、一人だけ
残されてしまつた。一人残されて着るものもないでしよ
う。皆は着けて天に上がったが、一人だけ残つてしまつ
た。

あんしきぐとう、うぬ侍や自分や妻し、な一産しむ
んぬ子ん二人産ち、あんそーしが、なーうりが天ぬん
かい上らんさにでいち、思てーうしが、またうぬ羽衣
ぬて、「私が若はに着ちちえーる衣装ぬあいさに。」「う
れーあんどー衣装や。」な一子二人産ちえーぐとうな一
天ぬんかい上らんでる思てーさに、うぬ男あ衣装
とうつてーるばーてー。うにーからうぬ衣装着ち、子
二人やうつちやんなぎやーまた天ぬんかいちやー上いや
んり。うれー羽衣の話。

そうして、その侍は（天女を）妻にして、子供も二
人できていた。それで、天に帰ることはないだろうと
思っていた。ところが天女が、「私が若い頃に着けた衣
装があるでしょう。」「その衣装はあるよ。」と、子ども
も二人いるのでまさか天に上がるはずないと、その男
は衣装を取り出したようだ。すると衣装を着けて子供
二人を残して天に上がっていったそうだ。これは羽衣
の話である。

採集S 52・8・14 読谷村民話調査団第十三班 八新垣修子・上間京美・知花千代子V

20 天人女房

話者 比嘉カマ（明治三十九年三月二十五日生）

翻字 島袋喜美子

ある男が、川のほとりを通ったから、いい匂いがするねと思つて上を見たから、きれいな着物が置いてあつたか
ら、それを取つて又見たら女の人がこつちで浴びていたから。これの着物かねえと思つたが、自分は大に家
に隠して。

この人を自分の家に連れていって長らく住んで、子供二人できて、姉さんが妹の子守りをする時に、どこか隠し

である上等の着物がああるからあれ着けさすと歌つたという話です。

そしてその女はその話を聞いて確かに隠されてあるねといつて自分で捜して、自分でこの羽衣を着けて、自分の子供おいて天に上つていったというが、そうして子供が、「お母さん、お母さん、おりてきなさい。おりてきなさい。」と言う。空高く舞い上がつて子供二人もおとうさんも涙を流して天まで行くのを見送つたつて。

そしてもうどうしても、そのお母さんはもう自分の行く所は天であるから羽衣着けたから天に舞い上がつて行つたということである。

あれするときね、「お母さん、お母さんはあの松の上か。お母さん、今から泣きませんからどうぞ降りておいで、もう今からお母さんのこと何でも聞くから、お母さん、お母さん！」と叫ぶ声を、叫んだけどね、もう見えなくなつたつて。

採集 S 52・2・22 読谷村民話調査団第十三班 八宮里光雄・知花春美

21 子育て幽霊

話者 大城ウサ (明治三十三年七月十日生)

翻字 山内源徳

うれし、ある所んかい、あたる事ていちよーるばーてー。な、言いるんせー妊娠そーる、持ちたきー亡せーるばーてー。持ちたきー亡ひちやくとう、うぬ子供え後生んじ産まりてーるばーてー、後生んじ産まりたぐ

これは、ある所であつた事だという話だ。いわゆる妊娠していて、身ごもつたまま死んだ。妊娠したまま死んだので子供は後生で生まれた。後生で産まれたので、死んだ親は何も食べさせる物が無くて、たぶん後

とう、うぬ親あ、ぬーん食せー無らん、いやりん、後生
りち有てーるやはに。うぬ子供ぬ物、毎夜、ある所ぬ
店一カ所にかい、毎晩、アップリ買いが行ちゆたんでい
ちよーるばー。

あんし、アップリ買ていなー、後、不思議なてい、
んまぬ店ぬ人ぬ、毎夜、かんし、アップリ買いが来せー
何やがやー、不思議やつさーでいち、後みしちやぐとう、
墓んかい入つちはいたんでい。あんしちやぐとう、行
ぢやぐとう、うぬ子ぬ、カウカウ泣ちゆたんでい。墓
ぬ内うてい泣ちやぐとう、「アハー、くまーいひえー
不思議やつさー。」でいち、開きたぐとう、うぬ子あ生
ちち、そーてーたんでいるばーてー。

あんさーにうぬ、又、一番店ぬ人ぬ不思議思たせー、
買らりちアップリえ買てい銭でいち取いしが翌日ない
ねー、ウチカビやたんでい、ウチカビなたぐとう、く
れー不思議でーむんなー、後みー探らんねーならんり
いち、行ぢやぐとう、墓やたんでいち、行ぢやぐとう、
うぬ子供え、墓ぬ中うてい泣ちゆたんでい、あんしさ
ぐとう、うぬ泣ちゆる子あ開きていそーてーんてー。

あんし成長たる人ぬ、「アハ、やつぱし後生ぬ、くぬ

生というのがあったのでしよう。その子供のために毎
晩、ある店に行つて、アメを買つて来てその子に与え
ていたそうだ。

毎晩アメ玉を買つてゆくのを不思議に思つた店の人
が、毎晩アメ玉を買つて行くが何だろう、不思議だ、
と後を追つて行くと、墓に入つて行つた。そして、墓
に近づいて行くと中から「カウカウ」と子ども泣き
声が聞こえてきた。墓の内で赤子の泣くのを聞いて、
「ここは少し変だ。」と、店の人が墓を開けて見ると赤
ん坊が生きていた。

店の人が一番不思議に思つたのは、その女の人がア
メ玉を買つてお金を支払い、金だと思つて受け取つた
のは、翌日になって見るとウチカビつた。それで不思
議に思つて、いつか後をつけて確かめて見なくてはと
思つていた。それで後をつけて行くと墓だつた。子供
が墓の中で泣くのを聞いて、墓を開けて、助け出し育
てた。

そうして成長して立派になつたそうだ。それで、「ア

ウチカビでいせー、後生ぬ銭やさやーでいち、感じた
んでいしが。うぬ人おなまん生ちちよーんでいんでー、
後生戻いでいせー、うぬ人やんでいち、後生から行ぢ
戻ていぢやるくとうお分からん、聞かぢやる人んうら
んしが、うぬ人びかーじえー後生から戻とーるん人や
んどー、でいち、今ん生ちちるうんでいがぬーでいが
言んせーしが、今生ちちえーもーらんさー。

ハ、やつぱりウチカビあのお金なんだな。」と感
じたそうだ。その人は今でも生きてるとかいいう話だ
が、後生戻りというのはこの人だよとね。後生から戻つ
て来たということは分からない。聞かした人もいない
が、その人だけは後生から戻った人だと、今も生きて
いるとかというが生きてはいないでしょうね。

採集S 52・2・22 読谷村民話調査団第十一班 八大宜見光一V

注① ウチカビ 紙銭のことで、以前は店から褐色のウチカビを買って、それに丸い銭の型をしたウチカビウツチャーと称するもので

縦五個横七個に打って使用したが、現在では、打たれたものが店で用意されている。焼香事や清明祭等に用いている。

22 子供 の 寿命

話者 比嘉カマ (明治三十九年三月二十五日生)

翻字 島袋喜美子

自分の子供が、あのう十八になったら、自分のもうあのう次々になくなつたから、これは、どうしようかと思つて、ある人に相談して、米という字を作つて、八十八をお願ひしたという話は聞きました、これはもうはつきりしたことはあんまり分かりません。

23 真玉橋由来

話者 知花ハツ (明治四十二年六月九日生)

翻字 村山友江

人先物お言なよーりせー、啞やないんなよーりぬう
れーあらん、慎み。慎み、なー持つちよーる子んかい
慎みやてーるばーてーや。

あんさぐとう、うぬ女お親ん前なち、夫子んうりし
やしが。いんねーすんねー、なー人先物お言ち。また
自分がる七色ムーティー。七からくいからくとーる女
りせー居らん。ただうり一人なてい。いよいよ自分ぬ
上んかいあたてい。あんさぐとうな、うぬ橋んかい
うり埋まらんかじれー、うぬ橋えまとうまらんりち。

いよいよなー持つちよーる子ん生ち、埋まとーるばー

人より先に物を言つてはいけないというのは、啞に
なるんではないよということではなくて、(言葉を) 慎
みなさいということである。もうお腹の中にいる子に、
(言葉を) 慎みなさいということである。

そうして、この女の人は親もいて、夫や子もいるん
だがね。そうこう言っているうちに、人より先に物を
言ってしまった。また七色ムーティーをしている女は
自分であった。村中、国中捜しても、七色ムーティー
をしている女は(他に) 見つからなかった。ただその
女の人一人であった。いよいよ自分の身の上にはふりか
かってきた。そうして、その橋に(この女の人を) 埋
めない限り、橋は完成しないということであった。

いよいよ子供も産み、その後、(橋の下に) 埋められ

てーや。埋^{うず}まていうりしちやぐとう、うぬ持^ちちよーる子^こんかいいぬ遺^{いごん}言^{ごん}。「人^{ちゆまぢわの}先^{ちゆまぢわの}物^いお言^いなよー。よんなーる人^{にんじん}間^{かん}のー考^{かぎ}てい物^{もの}お言^いんろー。私^{わん}ねー人^{ちゆまぢわの}先^{ちゆまぢわの}物^い言^いんりかんなてい、親^{うや}ん捨^ひてい、子^こん捨^ひてい、かんしかんしかんなていや。なー世^{ゆい}持^ちつちゆる私^{わん}るやいやすしがや。仕^{しかた}方^{かた}あならんぐとう。人^{ちゆまぢわの}先^{ちゆまぢわの}物^いお言^いなよー。」りち。子^こんかいい伝^たえていしちやぐとう、うぬ子^こあ慎^{つし}り。

今^{こん}度^どおなー、育^{ふる}いーてい結^{けつこん}婚^{しき}式^{しき}しち、する時^じ期^きなたぐとう。「容^{かう}姿^ざえ美^{ちゆ}らはしが、物^{もの}お言^いらんるあんむー結^{けつこん}婚^{しき}式^{しき}すがやー。」り、親^{うや}のーやしがや。男^{いなか}ぬ方^{かた}ぬ親^{うや}のーやしがや、「やていん私^{わん}ねー是^じ非^ひとうれー結^{けつこん}婚^{しき}しーるする。」りぬくとうなたぐとう、式^{しき}場^{じやう}うてい

飛^とびたちゆるハベル物^{もの}言^いらちたばり
私^{わん}ね今^{なま}立^り身^{しん}ぬ道^{みち}くまうていすぐとう

りち、うぬ生^なちやる子^こあ、言^いちやるばーてー。あんさぐとう口^{くち}え開^あち、結^{けつこん}婚^{しき}のー良^{ちゆ}ら結^{けつこん}婚^{しき}しち、幸^{さいわい}な結^{けつこん}婚^{しき}式^{しき}なとーたるばー。

た。埋^{うず}められたからね、その子供^{こども}への遺^{いごん}言^{ごん}である。「人^{にんじん}より先に物^{もの}を言^いうんじやないよ。人^{にんじん}間はね、ゆつくりよく考^{かぎ}えてから物^{もの}を言^いうんだよ。私^{わん}は人^{にんじん}より先に物^{もの}を言^いつたためにこうなつてしまつて、親^{うや}も捨^ひて、子^こ供^{ども}も捨^ひてて、こういうふうになつたんだよ。もう世^よのためになる私^{わん}ではあるんだがね。仕^{しかた}方^{かた}がないんだよ。人^{にんじん}より先に物^{もの}を言^いうんじやないよ。」と。子^こ供^{ども}に遺^{いごん}言^{ごん}したので、その子^こは（言葉^{ことば}を）慎^{つし}んだ。

今^{こん}度^どはもう、（その子^こが）成^{せい}長^{ちやう}して結^{けつこん}婚^{しき}する年^{ねん}頃^{ころ}になつた。「美人^{びじん}ではあるが、物^{もの}は言^いわれないのに結^{けつこん}婚^{しき}するのさ。」と、親^{うや}は思^{おも}つていた。夫^{つま}の方^{かた}の親^{うや}はそう思^{おも}つていたが、「そうであつても私^{わん}は是^じ非^ひ結^{けつこん}婚^{しき}する。」ということになつたので、（その結^{けつこん}婚^{しき}式^{しき}の）式^{しき}場^{じやう}で

飛^とんでいく蝶^{てつ}よ物^{もの}を言^いわせておくれ

私^{わん}は今^{いま}この場^ばで立^り身^{しん}の道^{みち}を歩^あむから

と、その子^こ供^{ども}は言^いつた。そうしたら口^{くち}は開^あき、その結^{けつこん}婚^{しき}式^{しき}は大^{だい}変^{へん}良^{りやう}い結^{けつこん}婚^{しき}式^{しき}となつたということである。

注 真玉橋 国場川にかかつている橋で、那覇市と豊見城村を結ぶ橋。十六世紀の尚真王が三山の按司を首里城下に集めて、中央集権

を固めたころから代官の往来やらで、南山の豊見城間切と中山の那覇を結ぶ要路としての重要な橋であった。

24 死んだ娘

話者 喜友名 市太郎 (大正元年十一月二十三日生)

翻字 知花春美

あのう、島尻のね、具志かいね、そこで、あのう、娘がね、十九なる娘が死んだらしい。昔はね、今みたいにこのポロ石で墓こう積んで、昔のことだから、その女は十九の年に。

ある青年がね、草刈りに行ったらしい。その墓のそこから通つたらね、この石の所から声をかけたらしい。穴ぐわーから手を出してね、そんで行ってみたら、その青年が行ったら、呼びよつたつて。そんで、「さつそくうちの家族に知らしてくれ。」言つて、知らしに行つたらしい。すぐもう、たつしやだから、女はそれでもう親戚いっしよに行つてね。そんで女は戻してね。

それがあのう後生返りして、その男がね、その男に助けられて、青年もまだ、一人とも未婚、その男がね、もうまたどうしても、親から、本人と、家族も、その人の命を助けられたと言つてね、その青年がね、その後生返りのね女を嫁にしたらしい。嫁にしてね、そうして、とつてももう成功してね、子も七、八名できたらしい。

そんで、その女はね、後生から帰つてね、もう七十六がまでね生きておつたらしい。もう孫もできてね、その青年は長男ではないが、次男、三男、その嫁をもらつてからね、とても成功して、あのう、安謝に、二人あれから働いて、そういう話聞いたんですよ、島尻の人から。

そんでその話からね、後生戻いもおるから、これはないがね、もう昔のことであつたらしい。それで人間はねその理由によつてね、息ぎれてから二十四時間ね、時間が経たないとね葬式できないという、そういう理由がその時間をはかつたという話も聞いたんですね。

採集S 52・2・22 読谷村民話調査団第十班 八山城悦子V

25 石マーマーの話

話者 松田長秀 (明治四十二年十一月二十七日生)

翻字 島袋フジエ

夫婦ないねー、やつぱし貧乏な者やいびーたんり。
食かんでいすぬあたいぬ家庭やいびーたんりしが、何とか働ち、食みるするりち、夫婦なていさびたぐとう。
うりからな一カ年たつちやぐとう、子供がでいき
ていやいびんよー、妊娠ていさぐとう。海や上手やていぬぐとーびんてー、海上手なたぐとう男あ。「やしが私ねー、宝見ちよーしがや、うぬ宝あ取ららん。うりが取らりーねーな、瓦屋ん造てい、なーいやーん楽にしみーるあたいやするはじやしが、うぬ宝あ私ねーいちからん見ちよーしが取ららんるあんれー。」りち、

(ある男は)結婚してもやはり貧乏であつた。食べるのもない程の家庭であつたそうですが、何とか働いて食べていけるだろうと夫婦になつたそうだが。

やがて一カ年過ぎ、(嫁さんは)妊娠した。その男は、漁が上手であつたそうだ。「私は(海に)、宝を見つけたが取ることができない。その宝を取ることができたら、瓦葺の家も造り、あんたも楽にすることができるとのだが……。その宝は、ずっと以前から見つけているのだが、取ることができないのだよ。」と夫婦で話していた。「そうですか。」と、それから分月日も過ぎ、

夫婦話さぐとう。「あんやん。」りち、なうりから
ながながなたぐとう、妊娠のーしちやぐとう、子ぬ生
まっていたい。

あんさぐとう、取いが行かわん行かわん、七、八カ
月なていん取ららん。さぐとう、十月月にどう子あ生
まりーさいやー。子ぬでいきたぬ日や、「とー今日やゆ
かる日やさ。子生する日やれー、まじ、今日行ぢんだ
ひー。誰かん見ちんうらん。私一人どう見ちよーぐ
とう。あねだー私がる分かいくとう。今日や行ぢやー
ま、子生まりーぬ日やていから、まじなうぬ宝が取
らりーねー、ンバギーんうりさーま、宝りちえー分か
とーぐとう。」りち、さぐとう。「とーあんしえー行ぢ
んり。」夫婦話しち。

いいるんしえー海行ぢやーま来る時間ねー、なう
ぬ宝あ取らつてい、子ん生まりていさぐとう。門行ちー
ねーすぐ生まりたぐとう、なあ、うりが食徳るやぐとう、
「りい、門太郎付きら。」りち、門から入しとう当たやー
ま、門太郎付きたんり。あんさーま、うりから宝ん取つ
てい、でえふくなたんりぬ話。

(嫁は) 妊娠していたので、子供も生まれた。

それから、何度も宝物を取りに行ったが、七、八カ
月かかっても取ることができなかつた。十月月で子供
は生まれるでしょう。子供が生まれる日に、「今日は、
子供が生まれる日だから良い日だよ。まず今日行って
みよう。誰が見てないし、私一人しか見てないから。
私がか分らないんだよ。今日は子供が生まれる良
い日であるから、まず行ってみよう。今日行って、そ
の宝が取れば、その宝で産飯も作ることができるし、
宝であるということは分かっているんだから。」と。「そ
れでは行ってごらん。」と、夫婦は話した。

海に行つて宝も取り帰つてくる時間には、もう子供
も生まれた。門に着くと、すぐに生まれたので、これ
は食徳があると、「よし、門太郎にしよう。」と、門か
ら入ると同時に生まれたので、門太郎と名付けた。そ
うして、宝も取り、大金持ちになったという話。

注① 城間仲の富は、昔、山原にね、山原に旅したそうですよ。そして、二人連れておつたらしいなあ。旅人が、一人はもう姓は聞いてない。

注② 城間仲のおじいさんは、あの鉾山を通つてね。石グー山の側を通つたら、あれが目から見たら黄金、その一緒に歩いてる旅人から見たら、石グー、石グーであつて、持つていったら、あれ、黄金なとーたんり。

それから、だんだん大きくなって、金持人、豊富になつたわけさ。それからね、その人は百姓であるから、あつちこつちにそのお金で、むだづかいはせんで、拾つてあつてもむだづかいはしない。あつても。城間の、城間は、田圃と言つて、今のあの団地があるでしょう。この、何団地かね、城間団地かな。あつちはみんな田圃だつた。昔は、そのときは、みんなあつちのものだつたらしいね。

城間仲の富は (こういうことである。) 昔、山原に旅したそうですよ。二人連れの旅人がいて、一人は姓は聞いていない。

城間仲のおじいさんが、鉾山を通り、石灰岩の山の側を通ると、城間仲のおじいさんの目から見ると黄金に見え、一緒に歩いてる旅人から見ると、石ころであつた。(城間仲のおじいさんが) その石グーを持ち帰ると黄金になつていた。

それから、(城間仲は) 金持ち、豪農になつたらしいよ。それから、その人は百姓であるから、あつちこつちでお金はあつてもむだづかいはしなかつた。城間、城間の田圃と言つて、そこに団地があるでしょう。何と言ふ団地かね、城間団地、そこはみんな田圃だつた。昔、その田圃はみんな城間仲のものだつたらしいね。

そして、その拾ったじいさんは、非常に誠、貧乏し、あぬ、なー、貧乏な者助けーるあたいぬ誠人。

だつて、人夫十何名かね。芝居で見たが、人夫十何名、十三名であつたかな。十三名使つて年忘り、

今言つたら年忘れ言つたら、忘年会かな。それをやるときに、泥棒が入つておつたらしい。家に、それはそのじいさんは感じておるわけさ。入つておるといふことは感じておるから、その年忘れに「なー一人が物の、しこーれ。」と、言うたら、もううまぬ女中や「珍しいむん。人おうつさるうしが、なー一人しこーり、と言みせーしが。」しこーていうつちやきたぐとう。

うるうつさー食びやーい、あとー家かいはちえーるばーてー、人夫るやぐとう、家かい行ぢやぐとう、うるつさが別れてから、「いえー、いやーうまんかい下りていくわー。」言つて、「天井ぬローソクぬ上んかい上とーし、いやーん下りていくわー。」りち、「いやー何りち、私たんかいへーりんちちやが。」りちやぐとう、「事情ぬあてゐるやいびーる、自分一人さーに子供達あ育ていんりそーしが、なー働ちん、じよーい間に合わん。し、貴方達やまなりめんせーんりち、盗みーが来

そして、その拾ったじいさんは非常に誠な人で、貧乏人を助けるほどの誠な人であつた。

人夫は十何名だつたかね。芝居で見たが、十三名であつたかな。人夫十三名で年忘れ、今で言えば忘年会である。その時、城間仲に泥棒が入つていたらしい。そこのおじいさんは泥棒が入つてゐることに気が付いていた。入つてゐることは分かつて、年忘れの日にそれで、おじいさんは、「あと一人分準備しなさい。」と言つと、もうその女中は「珍しいことだ。人はそれだけしかいないのにもう一人分準備しなさいとは。」と、（一応は）準備しておいた。

そこにゐる人は皆、食事をして家に帰つた。みんなは人夫なので家に帰つた後、「おい！おまえ、ここへ下りてきなさい。天井に上つてゐる人、おまえも下りてきなさい。」と言つた。そして、「あなたはどうして、私達の家に入り込んだのか。」と聞くと、「事情があつてのことです。自分一人で子供を育てようとしてゐるのだが、働いても間に合わない。それで貴方の家にはたくさんあるだろうと盗みに来ました。」「ああ、そうか。おまえは子供は何名か。」と言つと、「五人です。」

びたん。「あはーあなるやるい。いやー子供達や幾人が。」りちやぐとう、「五人やいびーん。」とー、五人やるしじやらーや、いやーや、うまうてい沢山食りはれー、子供達物の私が考いぐとう。」りち。

また、自分くるー、女中ん家かいはちうーらんるあぐとう、自分くるー台所んかかめんそーやーい、「とー、くつき、くつきー子供達んかい持つちんじ食ましよー。」りち、さぐとう、「とー、今からやー、今からなー、いやーやうんぐとうーやすなよ、なー、いやーがふしがらんないねー、くまんかい来わや、他所んかや行くな。ふしがらんないねー、くまんかい来わ、他所んかいや行くな。」りやーい、子供達あむん全部持たさぐとう、うぬ入つちやる盗人お、なー、涙んそーそーそーてい、ありせーるばーてー、「にふえーでーびる。なー、貴方達や世代万代まで栄えていきみせーびりよ。」りち。

さーい、うりんなー、コツコツ働ち、子供達かい言い伝え話えさーま、「あんあんし、私ねー城間仲んじ、盗みーがりち行ぢやし、盗まんまーるうてい、うまぬじいさんのー、私が入つちよーしえー分かやーい、

「子供五人だったら、おまえはここでたくさん食べて行きなさい。子供達の物は考えるから。」とおっしゃった。

お手伝いさんも家に帰ってしまったので、自分で台所に行つて、「これだけは子供達に持つて行つて食べさせなさい。」とおじいさんが分けてくれた。「これからもうこういふことはするなよ。どうしようもない時には、他所に行かないでここに来なさい。他所には行かないですよ。」と子供の分まで分けてあげたので、盗人は涙を流し、「ありがとうございます。もう貴方達はいつまでも栄えて下さい。」と言つた。

そして、盗人はそれからコツコツ働いて子供達に伝え話をした。「私はこうこうで城間仲へ盗みに行つたが、盗まないうちに、そこのおじいさんは私が入つていることを分かつて、おまえたちの分までこのように持た

うつき、うつきー持たちえーんしえーぐとう、いったー
やいつペーそーいつち、城間仲あやかーやーい、そー
いりよー。」りち、うぬ親あ遺言さーい、亡しんりぬ遺言
てー。あんあんやてーぐとう、そーいりよーりち。

さーまさぐとう、うぬ子供達やなー、うつきぬ子供
達や、皆心ぬ思すみてい、なあ毎日仕事さわん、毎日
心ぬ中んかい毎日城間仲、城間仲りぬ心ぬあていうぬ
しんかー、うすまさ成功しち、城間仲んうすまさ成功
し、だんだんふるいーてい、今ぬ城間仲なたんりぬ話し
聞ちよーるばーよ。

注① 城間仲 浦添市城間にある富豪の屋号。

注② 山原 沖縄本島北部、国頭地方のこと。山が多いのでそう呼ばれている。

27 城間仲

私達が聞ちやしえー、城間仲りぬ家庭や、んちやなー

してあるので、あなたたちは城間仲をあやかつてしつ
かりやりなさい。」と、亡くなるときに遺言をした。こ
うこうだからしつかりしなさいとね。

それから、子供達は皆、肝に銘じて、毎日仕事をし
ている時も、いつも心の中に城間仲、城間仲のことを
忘れずにがんばり成功した。城間仲もますます成功し、
今の城間仲になったという話を聞いている。

採集 S 60・2・28 読谷ゆうがおの会 八知花春美・村山友江 V

話者 大城利徳(明治四十一年四月二十四日生)

翻字 村山友江

私達が聞いたのはね、城間仲という家庭はね、もう

金持ちぢやない、な—だて—ん田舎田舎からぬ下男子使
や—。ちや—言ひいるんせ—な—、田舎ぬ困と—ぬ所ぬ
儲きれ—や—り思ていん、人使いる所んね—らん。城間
ぬ仲行け—、ちやつさやていん人夫達使いぐとう、あ
まんじ働ち来わりち。田舎からな—、あま—取持
たつてい。ある仲城間仲、あぬ城間仲んかい行け—、
あまんじえ—儲きらり—さ。あまんかい行ち、儲きてい
来わりち。

あまぬ下男奉公そ—ぬ、城間仲うてい働ちよ—ぬ
人夫達が、と—今度ぬ正月えみな正月んしち来わ。
正月し—が行ちるんさ—行ちゆるぐとうし、小遣ぐわ—
ん使すさりちぬふ—じ—し、な—親父の—、下男子ん
達んかい、言ちえ—るば—て—。

あんしが、な—遠さ所んかいや行ちゆしんうらん。
ある下男子ぬ一人や、な—何十年るうたら—分からん
しが。うぬ人達ぬうちから一人が、「な—田舎ぬ親達
ん正月で—びるむん。」りち、「親ぬ顔ん拝りちや—び
らな—。」り言ち。「正月し—が行ちやびん。」り言ち、
親父んかい話いさぐとう。「と—あんしえ—、な—正月
んし、あぬ親ぬ顔見ち来わ。」りち。

金持ちであり、あちらこちらの田舎の人達を下男とし
て使っていた。ということは、田舎の困っている所の
人達は儲けようと思つても、働く所もない。城間仲に
行けば、何人でも人夫を使うからね、あそこに行つて
働いてきなさいと。田舎から（城間仲は）頼りにされ
ていた。城間仲に行けば、あつちでは儲けられるから
ね。あそこに行つて儲けて来なさいと。

そこで、下男奉公している、城間仲で働いている人
夫達に、今度の正月はみんな（田舎に帰つて）正月も
して来なさい。正月しに行くんだつたら、そのように
小遣いもあげるからねと、もう親父は、下男達に言つ
たわけ。

そうだけでもう遠くに帰る人はいなかった。ある下
男の一人は、何十年ここにいたか分からないが、その
人達の中の一人が「もう田舎の親達も正月ですから、
親の顔も見てきましょう。正月しに行きます。」と言つ
て親父に話をしたからね。「それならば、正月もして親
の顔も見て来なさい。」と。

さーいうぬ下男子ぬ、田舎んかい帰いぬ旅費から、正月物しいじい金御馳走ん何んくい、城間仲ぬ親父ぬ只し、うぬ下男子んかい、持たちやらちえーさりぬ話や聞ちよーしが。盗人ぬ入つちよーんりぬ事お聞かん。正月しつ来わりち、下男子んかい、バス賃からな、御馳走から持ち行ち、正月しち来わりちぬ話や聞かさつたん。

そうしてこの下男が、田舎に帰る旅費や、正月に使うお金や御馳走やらを、城間仲の親父が只で、この下男に持たしたという話は聞いたが。盗人が入ったという話は聞かなかつた。正月して来なさいと下男達に、バス賃やら御馳走やら持たして、正月して来なさいという話は聞かされた。

採集S 60・2・24 読谷ゆうがおの会 八知花春美・村山友江▽

28 孫の生肝

話者 比嘉カマ (明治三十九年三月二十五日生)

翻字 知花春美

むかし、あるところに三人の息子を持つたお父さんが病氣になられて、「もう私の病氣は何を飲んでも治らない。何を食べても治らない。やっぱし人間のお乳を飲まないと病氣は治りませんから、長男、どうかしてお父さん助けて、あなたの子どもはもう捨ててもお父さん助けてくれないか。」と言ったから、長男、「これはもうどうしようもできません。こんなことはもうお断わりします。」と言ったから、また次男に言つて同じことを話したから、次男もわたしもこんなことはできません。」と言ったから。

次はまた三男に言うたから、「子どもはまたもできますから私らが親の孝行します。もう子どもはいなくてもまた

生んだらできますから、お父さんのために子どもを捨てます。」と云うて。

そのお父さんが、「明日は、子どもをね永眠するためには、お父さんの印してある所にあのう、置きなさいよ。」と云うたから、お父さんの言うとおりにして、で、もう歟をひとつひとつ落としてもその子はニッコリニッコリ笑つてどうしようもなく、これを握っている間にこつちからも、お父さんの宝物が出て、「この宝物は誰の物でもない。あんた達のものだから子どもは育てなさい。もう心試しであるからね。これはあんた達に上げる。」と云うて子どもも助かり、また宝もたくさんもらったという話であります。

採集 S 52・2・22 読谷村民話調査団第十三班 八宮里光雄・知花春美

29 継子話

話者 知花ハツ (明治四十二年六月九日生)

翻字 知花孝子

継子あ、あのーかしまはんでいてー、かしまはんでいなし、ちやーしちやらー殺ちどうきらりーがやーりち。

下男頼まーに、七月たなばたに墓みーしみやーに、あんさーにやらすぐとう、継親ぬて、やらすぐとう、うぬばーに下男のー頼まーに、下男さーにうち殺ち来よーりちやるばーよーやー。

だが、やっぱしこの継親あ、悪。この義理の子は誠

(継親が) 継子を目ざわりに思つて、目ざわりだから、どうしたら殺してしまえるだろうかと考えて。

下男に頼んで (継子を殺すことにした。) 七月たなばたに墓参りをさせ、継親が継子を墓参りにやるから、その時に殺してくれるように下男に頼んだわけだよ。

ところで、この継親は悪人、継子は誠実な子供。で

だから、やっぱし、子を^こ残^{のこ}して死ぬのもつらい。この運命^{うんめい}で死^しに別^{わか}れしたわけだからや。

あんさーにあとー、うぬ下男^{げなん}ぬ、殺^{ころ}しーが^りち行^いぢやぐとう、墓^{はか}ぬマユてい、上^{うへ}にこうこうしてあるでしよう。マユぬ上^いから、あれ本^{ほん}当^とに、お母^{かあ}さんでもない。やっぱし信^{しん}仰^{ごう}もつたから、昔^{むかし}はそう思^{おも}つていた。「お母^{かあ}さんがや^かつておるねー。」と思^{おも}つていた。だが今^{いま}信^{しん}仰^{ごう}もつたからね、お天^{てん}道^{どう}様^{さま}のイ^いエ^えス^す様^{さま}が悪^{あく}をつかつて。

あ^あの^のう^う、^いん^んマ^マユ^ユい^いう^うて、後^ご生^{せい}ぬ^ぬい^いん^んマ^マユ^ユい^いう^うて、その^{その}い^いん^んマ^マユ^ユい^いう^うて、マ^マユ^ユの^の上^{うへ}か^から^らみ^みせ^せら^られ^れて^て。その^{その}下^げ男^{なん}に。下^げ男^{なん}は^は継^ま親^{つや}か^から^ら使^{つか}わ^われ^れて^てい^いる^るよ。下^げ男^{なん}は、殺^{ころ}して^てき^きな^なさい。「七^{しち}月^{がつ}七^{なな}夕^{ゆふ}に^に花^{はな}持^{もち}つ^つち^ち墓^{はか}め^めし^しみ^みて^てーぐ^ぐとう、う^うぬ^ぬば^ばーに^にい^いや^やー殺^{ころ}ち^ち来^こよ^よ。」^へ昔^{むかし}ぬ^ぬ金^{かね}持^{もち}ち^ちや^や下^げ男^{なん}使^{つか}と^とーて^てい^いう^うり^りや^やし^しえ^えーや^やー。悪^{あく}心^{しん}し^した^たわけ^{わけ}さ。▽

その^{その}下^げ男^{なん}が、その^{その}墓^{はか}ぬ^ぬマ^マユ^ユぬ^ぬ上^{うへ}か^から、「い^いや^やー……。」^りち^ちす^すん^んり^りし^しー^ね、マ^マユ^ユぬ^ぬ上^{うへ}か^から^ら襲^{おそ}わ^わつ^つた^たさ。い^いん^んマ^マユ^ユり^りし^しが、い^いん^んマ^マユ^ユり^りし^しが、う^うぬ^ぬ下^げ男^{なん}襲^{おそ}わ^わつ^つた^たわ^わけ^けさ^さー。あ^あん^んさ^さぐ^ぐとう、う^うれ^れー^なー、^うど^どろ^ろ、^しョ^ョッ^ック

も^もや^やつ^つぱ^ぱり^り運^{うん}命^{めい}で^で死^しに^に別^{わか}れ^れた^たに^にし^しろ^ろ子^こ供^ごを^を残^{のこ}し^して^て死^しぬ^ぬの^のは^はつ^つら^らい^いこ^こと^とで^であ^ある^る。

そ^それ^れで^で、(継^{けい}子^しを^を)^{殺^{ころ}す^すた^ため^めに^に下^げ男^{なん}は^は(墓^{はか}へ)行^いつ^つた^た。}墓^{はか}の^のマ^マユ^ユ、上^{うへ}に^にあ^ある^るで^でし^しょう^う。マ^マユ^ユの^の上^{うへ}か^から^ら、死^しん^んだ^だお^お母^{かあ}さん^{さん}で^では^はな^ない^い。「お^お母^{かあ}さん^{さん}が^が助^{たす}け^けた^た。」と^と昔^{むかし}は^は思^{おも}つ^つて^てい^いた^たが^が、今^{いま}、信^{しん}仰^{ごう}を^をも^もつ^つて^てい^いる^るの^ので^で、お^お天^{てん}道^{どう}様^{さま}の^のイ^いエ^えス^す様^{さま}が^が助^{たす}け^けて^てく^くれ^れた^たの^のだ^だら^らう^う。

あ^あの^のう^う、^いん^んマ^マユ^ユと^とい^いつ^つて^て、マ^マユ^ユの^の上^{うへ}に^に後^ご生^{せい}の^のイ^いん^んマ^マユ^ユと^とい^いう^うの^のが^が現^あわ^われ^れた^たの^のを^を下^げ男^{なん}は^は見^みた^た。下^げ男^{なん}は^は継^ま親^{つや}に^に使^{つか}わ^われ^れて^てい^いる^るん^んだ^だよ。「七^{しち}月^{がつ}七^{なな}夕^{ゆふ}に^に花^{はな}を^を持^{もち}つ^つて^て墓^{はか}参^まり^りに^にや^やる^るか^から^ら、そ^その^の時^{とき}に^に殺^{ころ}し^して^て来^こな^なさい。」と^と言^いわ^われ^れた^た。^へ昔^{むかし}の^の金^{かね}持^{もち}ち^ちは^は下^げ男^{なん}を^を使^{つか}つ^つて^てい^いた^たで^でし^しょう^う。悪^{あく}い^い心^{しん}を^を持^{もち}つ^つて^てい^いた^たわけ^{わけ}さ。▽

そ^その^の下^げ男^{なん}が^が墓^{はか}の^のマ^マユ^ユの^の上^{うへ}か^から、「お^おま^まえ^えは^は……。」と^とや^やろ^ろう^うと^とし^した^たら^ら、マ^マユ^ユの^の上^{うへ}か^から^ら襲^{おそ}わ^われ^れた^たわけ^{わけ}さ。い^いん^んマ^マユ^ユと^とい^いう^うの^のが^が、そ^その^の下^げ男^{なん}を^を襲^{おそ}つ^つた^た。す^する^ると^と、(下^げ男^{なん}は^は)^{驚^{おど}ろ^ろい^いて^て、し^しョ^ョッ^ック^クを^を受^うけ^けた^た。下^げ男^{なん}が^が大^{だい}変^{へん}な^な目^めに^にあ^あつ}

受^うきてい、やっばし、うりがる大事^{だいじ}なたる。この継子^{ままつくわ}助^たかてい。

婦^{けい}ていちゃぐとう、下男^{げなん}のーいじめらつてい、女主人^{いなくしゆじん}んかい。「いやーや、うつき金取^{きんとう}らち言^いいちきてーるむん、殺^{くち}ちえーちーさんてーさやー。」さぐとう、「要所^{ようしよ}、要所^{ようしよ}、聞^ちちみそーりよー。かんかんやたんろー。」うぬ人がすしえー悪^{わつ}ささりちてー、なーうぬ下男^{げなん}が^{ちか}ん使^{ちか}らんなてい。

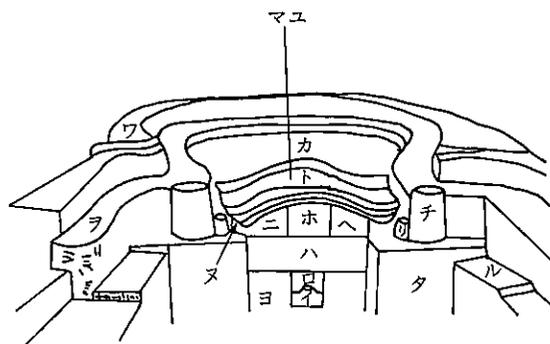
て継子は助かった。

下男は家へ帰ると、女主人にいじめられた。「おまえにこんなにお金をあげて使ったのに、殺すこともできなかつたとは。」と怒った。(下男は)「要所、要所、聞いて下さい。こういうことでした。」と言って、その人がやることは、悪いことだと、その下男もそこをやめた。

採集S 52・8・14 読谷村民話調査団第四班 〆運天悦子・屋比久直美〰

注 マユ マユ(盾)とは亀甲墓の顔面の上部に腕曲して突出した

部分名称。亀甲墓は俗に母体を象つたものだと言われ、各部に人体の名称が採用されている。



亀甲墓の各部名称

- イ コールイシ (シーチ) (香炉石) ロ ヒラチ
- ハ ジョーカブイ ニ・ホ・ヘ カガミイシ (鏡石)
- ト マユ (盾) チ ウーシ (トゥール) (白)
- リ クウウーシ (クワトゥールグワ) (子白)
- ヌ ヌンチャ ル チンパ (ナージミー) (庭積み)
- ヲ ワラビヌティ (童の手) ワ ヤジョーマーイ (ウスデイマーイ) (袖回り) カ チジ (ポーズ) (頂上)
- ヨ シミイシ (ハシラ) (牌石) タ ソデイシ (袖石)

30 継子の麦つき

話者 知花スミ (明治三十九年八月十七日生)

翻字 山内源徳

昔、継親ぬ、継子んかい、麦搗かち、くれー本当や水入つてい、搗ちゆしどうやし、継親ぬ、粗末んするたみにかい、空搗ちしみたぐとう。

うぬ麦え、いつちん実ならん、えーな、うぬ継子あ、な、涙たらして、涙たらちよーていな、搗ちやぐとう、うぬ涙ぬたいん所んかい実なてい、んぢやで、又うぬ継子あな、考てい、あいくれ、水入つてい、搗ちゆしやさやーりち、あんし、水ちち、搗ちやぐとう、直でーま実なてい。

な、うぬ、又うぬ継親あうれ、誰が教すがでい、又すぐ悪さつたんでいぬ話。それから、又な、水入つてい搗ちゆしやつさ、でい分かたんでいぬ話。

昔、継親が、自分の継子に対して、麦搗きを言い付けた。麦を搗くためには、水を入れて搗くのだが、継親はいじわるをして、水を入れず空つきさせた。

それで麦はいつまでたつても実にはならないで、困つてしまい、とうとう泣いてしまった。継子の目から涙がこぼれ、それが臼に入つて麦をきれいに搗くことができた。そこで継子は「これは水を入れて搗くのか」と分かつて、次からは水を入れて麦を搗いた。すると、たちまちきれいな実になった。

この継親はびつくりして、これは誰が教えたのかと聞いてまたすぐいじわるをされたという話だよ。それから麦は水を入れてつくと良いということが分かったという話。

採集S 52・2・22 読谷村民話調査団第十一班 八大宜見光一V

話者 大城ウサ(明治三十三年七月十日生)

翻字 国吉トミ

ある所にかいて、継子とう継母とうぬ話。朝起き
て遠い所に、たとえば今の遠足ふーじーやるばーて、
行く時であった。その時に継子はお茶ばかり、朝だか
らお茶ばかり飲ませて。実の子は、御馳走をたくさん
腹いっぱい食べさせて出したのに。向こうとどくまで
には、継子はどうして大丈夫だったが、この実の御馳
走食べた子供はお腹が痛くて、もうへつてとどけなかつ
たから。

あはー本当に欲ばつて、この方が良かったねー。で、
このお茶のちくんというのは、こんなにあるかねーと
いつて。昔のおばー達が、お茶、朝お茶というのは、
この道理から朝ちくんつて、朝茶ぐわーということに
なつたという話を聞いたわけ。

ある所の、継子と継母との話である。朝起きて、た
えば今の遠足みたいに遠い所に行く時であった。そ
の時に継子には、朝だからお茶ばかり飲ませた。実の
子には、御馳走を腹いっぱいたくさん食べさせて出し
た。向こうに着くまでには、継子は大丈夫だったが、
御馳走を食べた実の子は、お腹が痛くて着くことがで
きなかった。

そうか、本当に欲ばるよりは、この方がよかつたね
えと。で、このお茶の気力というのはこんなにもある
んだねえと。昔のおばあさん達が、朝のお茶で気力が
であるということは、この道理からきているという話を
聞いたわけだよ。

採集S52・2・22 読谷村民話調査団第十一班 大宜見光一

32 継子の芋掘り

話者 津波 輝（大正二年三月十八日生）

翻字 天久 加代子

側ばた芋お掘らちやぐとう、そゝむん産ちえゝる子あまん中掘らちやぐとう、ゆぬ家かいちちやゝてい、来よりちるやしが、継子先るなとゝびたんりせゝ、はた芋お大はぬ、あんし話あいびゝたしえゝ、昔話やさ、ぬぐわうれゝ。

側はしゝ残いさゝ、草もあるし、芋はこれだけ入つていたつて。まん中はね草もない、何もなし、芋は小さく入つていたつて、同じザルですがね。側芋掘てゝし、側継子はね、先なつてゝ話があるさ。まん中は、側ばたより、後になつてゝ話があつたわけさ。

（継子には）畑の側で芋掘りをさせた。実の子には中心で芋掘りをさせた。いっしよに家に来なさいということであつたが、継子は先になつてゝいた。側の芋は大きかつた。そういう昔話があつた。昔話だよ、これは。

側の方は掘り残しがあつて、雑草も生えてゝいたが、芋はたくさん入つてゝいた。畑のまん中は雑草もないが、芋は小さく入つてゝいた。同じザルだが、側の方から掘つてゝいた継子は（ザルがいつぱいになつて）先に帰つてゝいたという話がある。まん中は側を掘つたより遅くなつてゝいた。こういう話があつたらしい。

採集 S 52・2・22 読谷村民話調査団第九班 八上聞京美・前田逸子 V

継子 話〈カラスと味噌〉

話者 新垣 ゴゼイ（大正元年十二月二十日生）

翻字 島袋 智子

昔えあぬ、継子んけー味噌お生味噌とう、生水ちぢやーに食まぢやーに。また、自分ぬ子んけー、カラス食まぢやぐとう。あぬ継子あ太てい、自分ぬ生ちえーる子あ、あぬよーがりとーたんりさりぬ話やたん。うつぴやさ。

生味噌と生水ちぢやーに食まぢやーに、また、自分ぬ生ちえーぬ子んけーカラス食まぢやぐとう。あぬ、うぬ継子あ太てい、自分ぬ生ちえーる子あよーがりとーたんりさぬ、うつさる聞ぢやん。

昔ね、継子には味噌、生味噌と、生水を注いで食べさせたんだね。また、自分の子には、カラスを食べさせたんだ。すると、継子は太っていき、自分の生んだ子は、気づいたときには、やせ細っていたという話だよ。これだけね。

（継子には）味噌と生水を注いで食べさせ、また、自分の生んだ子にはカラスを食べさせた。そうして、その継子は太っていき、自分の生んだ子はやせ細っていたという、こんな話を聞いたよ。

採集 S 52・2・22 読谷村民話調査団第十五班 〈新垣修子〉

注 カラス スクガラスとイチヤガラスがあり、スクガラスは鰯の幼魚を塩漬にしたもので、鰯は旧暦六月から八月にかけて寄ってくる。イチヤガラスはトビイカをその墨と塩を混ぜて漬けたもの。副食物として利用する。

34 継子が歌った歌

話者 知花ハツ (明治四十二年六月九日生)

翻字 知花孝子

あきたきたチバナ 踏らみりば痛い

継親ぬひれーや かんがあゆる

チバナンジ、知らないでしよう。あんた方は。あれ、牛の草さ。浜辺なんか道の側なんかあるさ。昔は、じこーあてるーばーてー。うれーはだしてーさいや、はだしだから、なー草刈いがやらさったーに、踏らみたぐとう、じつこう痛しえー。とげがたくさんあるさ。チバナンジ。それでそのとげ草に体たたつて、この継子が

あゝ痛い痛いチバナ 踏めば痛い

継親扱いは この様なものか

チバナンジ知らないでしよう、あんた方は。それは牛の草だよ。浜辺とか道の側にあるさ。昔はたくさんあつたのだろう。その時ははだしてしよう。はだして草刈りに行かされて、踏んだので、とても痛い。とげがたくさんあるさ。チバナンジ。それでそのとげ草にたとえてこの継子が

あきたきたチバナ 踏らみりば痛い

継親ぬひれーや かんがあゆる

なー、なんどうちやからんあんし、うりさつてい草刈やー使さつたるむんがやらー。

あゝ痛い痛いチバナ 踏めば痛い

継親扱いは この様なものか

もう、何時からでも使われていた。草刈りに行かされてね。

注 チバナ シマアザミのこと。

採集 S 52・8・14 読谷村民話調査団第四班 八運天悦子・屋比久直美

継子と二十日月

話者 喜友名 ヨ シ (大正元年八月十日生)

翻字 天久 加代子

十九日じゅうくにちより先さきに上あがるそうです。それ何なにかと言いつたら、やつぱし継親まもろうやかね、あの、昔むかしは田たうちがあるでしよう。田草たぐさ取りがそれに行いつた時ときに、あの、やつぱし食しょくじ事じをするしやもじ、おつゆ入いれるのとかご飯はん入いれるしやもじがあるでしよう。それを忘わすれたつて、その継子ままこが、それに取りとに行いかしたとか、それを捜さがすために、二十日はつか以後いごは、月つきは十九日じゅうくにちより早はやく上あがったつて、それだけ捜さがすつて。

(二十日月は)十九日より早く上あがるそうです。どうしてかというとき、昔、田圃たのぼを耕かやしに田草たぐさを取りに行いつた時ときに、食しょくじ事じをするときにしやもじ、おつゆを入いれたり、ご飯はんをついだりするしやもじがあるでしよう。それを忘わすれたので、継子ままこに取りとに行いかした、それで、しやもじを捜さがすために、二十日以後いごは十九日より早く月つきは上あがったそうだ。

採集 S 52・2・22 読谷村民話調査団第九班 八上間京美・前田逸子

継子と二十日月

話者 知花 ナヘ (明治四十年一月三十日生)

翻字 島袋 守成

継子ままつくわんかいよー、ちゃんなげーん、畑はたけ仕事しごとんしみ

継子には長い時間も畑はたけの仕事しごとをさせて、また、夕御ゆぐら

てい、また、夕飯ぬん遅くまでい食ますんりち、十九日
かーね、二十日あ早く上がいんりる言やびーたさに
月え、あんいぬ、話どう、聞かしんしえーたんでー。

37 継子とにが菜

継親ぬ私あ病氣えあぬ岩ぬ上ぬンジャナ葉取てい
くーでいわる治いるでいち、うぬ継子ああが遠うぬ岩
ぬ上んかい、登いぬーな、あまんかい落ていてい、
死にどうすすさいでいち、いつペー、あぬだー、心配
しーながら、な、親ぬ病氣ん治いぬ事やていからでい
ち、登てい取いが行ぢしちやれー、うぬ子あな、ん
まから、涯んかい、落ていんでいしーね、神んかい
助きらつたんでいぬ話やさ。

飯も遅く食べさせていたんだつて。それで、十九日よ
りは二十日の月は、早く出たそうだよ。そういつて話
をして下さつていたよ。

採集S 52・2・22 読谷村民話調査団第十四班 八運天悦子

話著 知花スミ (明治三十九年八月十七日生)

翻字 山内源徳

継親が、私の病氣はあの高い岩の上に生えているに
が菜の葉を取つてそれをたべないと治らないと、継子
に言った。それで継子は取りに行くことになったが、
高くけわしい岩山に登つて落ちたら死んでしまうと、
とても心配した。しかし、親の病氣を治すためだと、
登つて薬草を取りに行った。その子は涯から落ちそう
になったところを、神様が助けてくれたという話だよ。

採集S 52・2・22 読谷村民話調査団第十一班 八大宜見光一

継子と爪

話者 知花ナへ（明治四十年一月三十日生）

翻字 知花春美

継子よ、その女はや、うぬ継親やや、妊娠そーたん
 りるばーよー。あんさぐとう、うぬ子ぬ、継子ぬやん
 ちゃしちやとう、あぬーウーキよ、トーフサーウーキ
 ぬあしえーや。ウーキさーまうすてーたんりよや。あ
 んさぐとう、うぬ子あ、継子あ、うぬウーキえガサガ
 サしいつペーかち、死じよーたんりよーやー。あんさ
 ぐとう、うぬ妊娠てーる、産ちえーる子あ、爪えねー
 んぬ子、産ちえーたんり、爪えねーらんよ。

継子のね、その母親、継親は妊娠していたそう
 だ。それで、継子がやんちゃしたので、あのう、桶、豆腐
 用の桶があるでしょう。その桶を継子にかぶせたそう
 だ。そうすると、その子は、継子は、桶をガサガサと
 必死に爪でかいて、死んだようだ。それで、妊娠して
 いる継親が産んだ子は、爪のない子だったそうだ。爪
 はなくてね。

採集 S 52・2・22 読谷村民話調査団第十四班 八運天悦子

39 継子とそら豆

話者 山城英一（明治四十五年一月十三日生）

翻字 天久加代子

うりん、兄弟、継子連れてい行ぢやーい植いてーるばー

これも兄弟、継子を連れて（畑へ）行ってそら豆を

てー。教すせー「植いせーかんしる植いんどーや。」り
ち、二人んかい教ちやぐとう。かんし、粗末にさつてい
んりち、言いがーちー、踏だみてーるばーてー。
あんさぐとう、うりがりきとーたんり。トーマーミー
やりきたぐとう、あー、トーマーミーや踏らみーしやつ
さー。

40 歌い骸骨

東風ぬ吹きばみからじん痛さ

さんか水欲さやかんがあゆだ

北風ぬ吹ちーね、うぬ東風ぬ吹ちーね、みからじん
痛さでいねー、うりがうていやーにかい痛ん。治いん
りぬ意味で、サンカ水欲さや、かんがあゆだ。りち、
なー、水欲さとう、たとうとーてーるちむて。

植えたようだ。「植えるのはこうしてやるんだよ。」と
二人に教えたが、(継子は)こんなに粗末に扱つてと言
いながら踏みつけたようだ。
しかし、そんな風に植えたそら豆が成功したので、
ああ、そら豆は踏みつけて植えた方がいいんだと分かっ
た。

採集S 60・4・16 読谷ゆうがおの会 〆知花春美・村山友江〴

話者 屋 良 ツ ル (明治三十八年七月五日生)

翻字 天 久 加代子

東風が吹けば頭痛い

里の水が欲しいとはこういうことだ

北風が吹いて、東風が吹けば頭痛いということは、
その風にうたれて痛い。治るといふ意味だね。里の水
が欲しいとはこういうことかと、水が欲しいたとえで
ある。

採集S 52・2・22 読谷村民話調査団第十三班 〆宮里光雄・知花春美〴

翻字 具志堅 タケ

ある所んかい、良いおじいさんと悪いおじいさんが居つたそうですな。正月であつたそうですがね。何ん食むしえーねーびらん、うぬ良い所のおじいさんは、何ん食むしえーねーらんなたぐとう、「なーあぎたーや何ん食むしえーねーらん。火正月さーやーおばあ。」りちさぐとう。パーパーりちやいびんてー。あんさぐとう、「なーあぎたーや、何ん食むしえーねーんるあぐとう、火正月さーやー。」りち、なー夫婦ぐーりー火やあたとーてーぬぐとーびん。

あんさぐとう、神様が来て、初え良い家庭ぬ 隣ぬ、金持ん人んかい行ぢやぐとう、「年ぬ晩げーな、人泊まらすぬ事おならん。」りちやぐとう。あんしえー、泣く泣く「縁ぐわーんかいやていん泊まらさんな。」りちやぐとう。「ならん。」りちやぐとう。

隣ぬ貧乏者んかい行ぢやぐとう、「今日や正月げーなーやしが、何ん食むしんねーらん私達や火正月し。

ある所に、良いおじいさんと悪いおじいさんがいたそうだ。正月であつたそうだが、何も食べる物がなくて、この良いおじいさんの所には、何も食べる物がなかった。「もう私達は、何も食べる物がな。火正月をしようね、おばあさん。」と言つたそうだね。「もう私達は、何も食べる物もないんだから、火正月しようね。」といつて、夫婦二人で火を焚いていたようだね。

そうして、神様が来て、最初は、良い家の隣にある金持ちの家へ行くと、「大晦日だというのに、人を泊めることはできない。」と言つた。それで、泣く泣く「縁側にも泊めて下さいませんか。」とお願いすると、「できない。」と言つた。

今度は、隣の貧乏者の所へ行くと、「今日は正月であるんだが、何も食べる物がなくて、私達は火正月をし

寝じ筵んねーらん、敷筵ぐわーんねーらんしが、あん
しやていんゆたさらー泊まみそーり。」りち。

初え、「金持ん人あまー金持ん人、敷物んまんり食み
物んまんりるうぐとう、あまんじ泊まていとうらしみ

そーり。」りちやぐとう。「あまー行ぢやしが断わらつ
ていならんぐとう、貴方達んかい泊みていきり。」りちや

ぐとう。「私達やなー敷物んねーらのーあしが、あん
しえーあんやていから泊まいそーれ。」りちさぐとう。

「なー今日や正月やししが、何ん食むしんねーらんぐ
とう、火正月、火る夫婦、パーパーん私にん二人ぐー

りーあたとーんでー。」りちやぐとう。「あんしえー鍋
ぐわー洗てい来わ、おぼー。」り言ちやぐとう。なー

貧乏者、御飯、紙ぐわーぬ三粒入りーしえーたんり
しが、鍋一杯御飯のー炊ち。あんさぐとう、「なーう

りさーま年んとうみそーれ。」りち、神様が言みそー
ち。あんさぐとう年とうやーま。

明かとうんち、立つち行ちーねー、「貴方達や、金持
ちないしとう年若くないしとー、じろーましやいびが。」

りちやくとう、「金のー年ぬ若くないねー儲きらりー。
年のーなー若こーならんむー。」りちやぐとう。あん

ている。寝る筵もない。敷筵もないんだがそれでもよ
かったら泊まって下さい。」と言った。

最初は、「あそこは金持ちで、敷物もたくさんあり、
食べ物もたくさんあるから、あそこで泊まって下さい。」

と言ったが、「あそこへ行つたんだが断わられたので、
あなた達に泊めて下さい。」「私達はもう、敷物もない

んだがね、それでよければ泊まって下さい。」と言った。
「もう今日は正月であるが、何も食べる物もないから、

おぼあさんと私の夫婦二人で、火を焚いているんだよ。」
と。「それなら、鍋を洗つて来なさい、おぼあさん。」

と言った。もう貧乏者で、紙切れに包んだ三粒しか入
れなかつたが、鍋一杯の御飯ができた。そうして、「も

うこれで正月を迎えて下さい。」と神様がおっしゃった。

明け方、出て行く時に、「あなた方は、金持ちになる
のと若くなるのと、どれがいいですか。」と聞くと、「お

金は、若くなれば儲けることができる。年が若くなる
ということはないから。」と答えた。若水を沸かさせて、

しえー、若水沸かしみそーらち、水あちらしみてい、風呂入りんそーちやぐとう。「貴方達や、元ぬ十七、八んかいないんろー。」りち、葉ぐわー入つてい。さぐとう、あんしから昔ぬ、あぬ若水迎たんりぬ話いん言やびたん。

あんさぐとう、隣ぬ良い所んかい居るおばー達や、「いい正月でーびるやー。」りち、行ぢやぐとう。ぬぐわ 隣ぬ悪いおじいさん達や、「ぬぐわ、いったーや、何りち若くなとーが。」りちやぐとう。「私達や昨夜、あぬ神様ぬもーちや、うぬ人ぬ若水迎らちやぐとうるあんしうりそーんろーやー。いったーん若くないばーはらー、うぬ人お今あうまる行ぢめーぐとう、呼びていち若くなれー。」りちやぐとう。「いえーあんしえー私達んあんさひー。」りち、呼びていちやぐとう。「いったーや、昨日え私ねー泊みらんでーぐとうや、いったーや、猿るなていいちゆんろーやー。」りちやぐとう。「あんしん浴みーばーはぐとう。」りちやぐとう、あんやん猿尻なてい、あんしから猿や赤尻なたんりぬ話い。

水を熱し、風呂に入れられた。「あなた方は、元の十七、八になりますよ。」と、葉を入れた。そういうことから、昔の若水の話がありました。

それから良い家のおばあさん達は隣へ、「よい正月ですな。」と、行った。隣の悪いおじいさん達は、「どうして、あなた方は若くなっているか。」と言った。「私達に昨夜、神様がいらつしやつて、その人が若水を迎えさせたから、そういうふうになったんだよ。あなた達も若くなりたかつたら、この人は今その辺にいるはずだから、呼んで来て若くなりなさい。」と言った。「それなら私達もそうしようね。」と、呼んで来た。

そこで、(神様は)「あなた方は、昨夜私を泊めなかつたから、あなた方は猿になるんだよ。」と言った。「それでも浴びたいです。」と言ったので、猿になつて、猿の尻は赤くなつたという話。

昔、金持ん人とう貧乏な者ぬめんせーたんりるむんぬ。金持ん人ぬ所んかい、乞食、物乞らーすーな人ぬ「今日私ねー、くまんかい泊まらし。」り言ちやれー。金持ん人ぬ人お「いやーふーじーな者のー、くまんかい泊まらさん。」りち、戻さつてい行ぢやぐととう。

貧乏な者ぬ所んかい「今日くまんかい泊まらし。」りちやれー。あぬー泊らしり言ちやれー。「私達あ貧乏な者なてい、枕ぬあたいん石どう枕ぞーぐととう、あんしんしむらー泊まていきいみそーり。」りち、泊まらちやぐととう。

あんし翌日起きたれー、うぬ人おうらんたとーしが、うぬ枕ぞーせー全部黄金なちえーたんり。それは神どうやたんりぬ話い。

昔、金持ちと貧乏者がいたそうだ。金持ちの所に、乞食みたいな物乞いが、「今日、ここに私を泊めて下さい。」と言った。金持ちの人は、「おまえみたいな者は、ここに泊めることはできない。」と追っ払われた。

今度は貧乏者の所へ行つて、「今日ここに泊めて下さい。」と言うと、「私達は貧乏者で、枕もなくて石を枕にしているんだよ。それでもよかつたら泊まつて下さい。」と言ったので泊まった。

そうして翌日起きたら、その人はいなくなっているんだが、石の枕が全部黄金になっていた。その人は神様だったという話。

話者 知 花 ハ ツ (明治四十二年六月九日生)

翻 字 村 山 友 江

正月そとぐわちげーな一物むぬくーや乞あきが、朝あきぬまーる物むぬくー乞あきいが来ちやぐ
 とう。ある家庭かていや、うにーに喜よろこびむよろこつちやーに、「いっ
 たーん正月そとぐわちしえーわやー。」りち、しえーわすむてー
 るむんぬ、たくさん御馳走ごちそう持もちつち行いかしえーすむてー
 るむし、あねーさん「いっつたー紙かひじらーひやー、あか
 とうんちなーげーな一、正月そとぐわちぬあかとうんちげーな一、あか
 私わつた達ちやうかい来ちやうんりちんあんな一。」りち、湯ゆひつかきてい
 うりひちやぐとう。

うぬ物むぬくーや乞あき達ちやうあ恨うらめえ、ただ一、二カ年ねんむつたん
 まーる、うぬ家庭かていんかい恨うらめーちやーに。今こんど度どお、う
 ぬ家庭かていぬ家族かぞくぜんぶ全部ぜんぶ、癩らいび病びやう患者かんにや者やなたんりぬ家庭かていぬ話はなし
 昔むかし話はなしやたるば一。

正月だというのに、ある家に朝あきつばらから物むぬくー乞あきが
 来た。その時に喜んで、「あなた方も正月そとぐわちしなさい。」
 と、そういうふうにしてたくさん御馳走ごちそうもあげればよ
 かったのに、そうはせず「おまえ達ちやうみたいなくずは、
 朝あきつばらから、正月そとぐわちの朝あきつばらから、私わつた達ちやうに来るとい
 うことがあるか。」と、お湯ゆをかけてしまった。

この物むぬくーや乞あき達の恨うらみは、一、二カ年ねもしないうちに、
 この家庭かていに恨うらみが来た。そして、この家庭かていの家族かぞくぜんぶ全員ぜんびん、
 癩らいび病びやう患者かんにや者やになったという家庭かていの話はなし。昔むかし話はなしさ一。

那覇の上之屋ね、そこにずっと、七、八十年もなるか分らない。そこで、とつてもね、婿さんは、遊びごとが好きで、いつも晩になったらね、日が暮れたら、雨が降つても晴れても、いつも花島に行くような気持ちが向いて、それから酒ももちろん好きだよ、あの、遊び事しているから、その男がね、もう晩になったらね、会うた毎日いう気持ちだったかもしれないね、男の気持ちは毎晩。

その女がね、ある日、工夫を考えて、今度は、嫁さんも婿さんはたくさんおらないでしょう。自分ひとりやけ焦がれて、ひとり寂しくしているもんだから、自分もね、今度、何か、丸木舟ね、それを買う金あつたかどうか知らないが、その舟を買うて、女が、舟を買うてね、女が魚釣りなんかね、魚釣り道具買うて。

晩はね、最初、婿さんは花島行っているでしょう。遊びに、そこで女ひとり、もう寂しいもんでしょう。だからあの時は、夫婦、子はおらないかも知らんね。子がおつたら寂しいことないから。

それで、女は丸木舟ね、乗つて、もう泊から上あの辺海岸に、夜間、魚釣り、そうしてから、その女がね、人を連れてきて、いつも、自分、月夜なんか海にそこに出かけて、そこで町に、自分がそんだけ釣つた魚は食べきれないから、町ぐわーに行つて、その金でね、またこしらえて、舟も先買うてあるが、まあ、借りたかどうか知らん。その丸木舟は。

そうしたから婿さんは、昼どこか仕事行つたかも知らんね、仕度ね、ちゃんとさしみしてね、女は、酒も買うて、だんだんしてやつて、毎晩そうしてから、男はね、あつ女でもこんだけ魚釣れるのか、私もやつてみようかと、言つて、後から、夫婦、晩もね、魚釣り行つて、魚をまた町ぐわーに出して。

それから二人仲良くなって生活も安定して、酒代も、自分の魚を売った金で買うて来て、それから花島行くことは、その男はもうやめたらしいですよ。それが女の気持ちで、その男は心をなおして、それから二人ともいい仲間になって、産し繁盛したらしい。

採集S52・2・22 読谷村民話調査団第十班 八山城悦子V

45 兄弟の仲直り

話者 松田長秀(明治四十二年十一月二十七日生)

翻字 安里和子

やつぱし、兄弟二人やいびんよ、なーじこー、固てーるぐとーびん。固さぬなー、銭ぬ取りん、食物やたんでーまん、兄とー固ぬ、ねーらんでーぎさが。人とうんまる平生ぬ仲間友達とうなーいー仲間やいびんよ。やてーんぐとーしが、なーにーちきたくとう……。

「私ねー人殺ちえーぐとうや、片付きていとうらさんなー。」り、友達ぬ家かい行ぢやくとう。「あーうれー、私ならんれー。」りち、なーまる平生ぬいー友達、食らい銭貸らちやい、じこーうりそーしが、「うぬ事やれー、

やつぱり、兄弟二人はねー、もう大変仲が悪かったそう。仲が悪くて金も貸さなければ、食べ物についても兄とは仲が悪くつきあいもなかったそう。しかし常日頃の仲は、他人や友達ともういい仲間だったそう。そうだったそうだがいざという時には……。

「私は人を殺してしまったので、片付けてくれないか。」と友達の家に行つたらね。「ああ、それは私には出来ない。」と言って、もう常日頃はいい友達、食べた金を貸したり大変よくつきあっているが、「その事な

な、私ねーならん。「りち断わていさくとう、「えー
あんやんなー。」りち。

な、平生や固さぬ兄弟やしが、泣く泣く自分ぬ肉
親ん前かい折りてい行ぢやくとう。「あんやていから、
うれー早く片付きらんねーならん。」りち、な、自分ぬ
兄弟やくとうてー兄弟や泣く泣くに、兄ぬ片付きてい
一緒見ちやくとう、人間ではないウナギるやたんり。

あんさくとう、うぬ後からる「指えーまーかい折りー
が後んかい折りんなー。」^{注①}「肉え切つちん切つちん寄合
いん。」^{注②}りしえー、うりからぬ例え話やたんり。

ら、もう私には出来ない。」と断わった。「ああ、そう
か。」と。

それでもう、平生は仲の悪い兄弟なんだが、泣く泣
く自分の肉親のところへ折れて行くとね。「それなら、
それを早く片付けなければいけない。」と、それで、も
う自分の兄弟なんだから、弟は泣く泣くに（お願いに
行くと）兄が片付けて一緒に見ると、人間ではな
くウナギだったそう。

それで、その後からは「指はどこに折れるんだ。後
に折れることがあるか。」「肉は切つても切つてもまた
もどおり寄り合う」等と言われているようにこれか
らの例え話なんだそう。

採集S52・2・22 読谷村民話調査団第十五班 〔遠藤庄治〕

注① 「指え何処んかい折りゆが 指や内んかいどう曲がゆる」と同じ。身内のことを先に考えるのが自然の人情である。肉親は肉親
と結ぶ。

注② 「肉や切りば 寄合ゆん」と同じ。体の肉は切つても再び寄り合つて一つになるように、肉親は縁を切るとしても、また一体と
なるもので、血縁は切つても切れるものではない。

翻字 知 花 春 美

勝連バーマリーしえー徒名やるばーてー。徒名、徒名付きらつとーるばーてー。やなんじやり者なやーい、アカマクなたぐとう、勝連バーマりち付きてーてーるばーてー。ちゃー叱いくじらつたぐとう。うりん下かた使らつとーてーるばーるやさし主人ぬ。

朝寝しつち、下男子んちゃー集まてい、うるつさ畑かい行ぢとーしが、あれーよいよい主人ぬ家かい行ぢやぐとう、うれー、「今日なまりー。」りちやぐとう、「今日朝寝そーびーさー。」「いやーやちやーあん言いびけーん。」言ち、「とーあんしえー、今日ぬ仕事お私ぬー月ぬ上がい限りーさびーぐとう、なーうつさしぬがーらししえーみ。」「いやーが月ぬ上がい限りーんれーはまいぬむんやらー、ぬがーらすさ。」りちさぐとう。

うねー太陽ぬ落ていらんまーる月え上がいさーち「ハイサイ、御主人加那志、なー月え上がとーびんやーさい。私ぬー行ぢ、休くいびらひー。」りち、ちゃー家か

勝連バーマというのは徒名なんだね。徒名、徒名を付けられたようだ。横着者だったので、勝連バーマと付けられたようだ。いつも叱られてばかりいた。勝連バーマは下つ端で主人に雇われていた。

下男たちはみんな畑へ行つたが、(勝連バーマは)朝寝をして、遅れて主人の家へ行くと、「今日はこんなに遅いのか。」と言うと、「今日は朝寝してしまった。」「おまえはいつもそう言っている。」「それでは、今日の仕事は、私は月が上がるまでするのでそれで勘弁して下さい。」「おまえが月の上がるまで頑張るのであれば見逃してやろう。」と主人は言った。

さあ、太陽が沈まないうちに月は上がったので、「ハイサイ御主人様、もう月は上がっていますね。私は帰つて休みましようね。」と、家へ帰った。

い。

あんさぐとう、やな理屈りくちな者ものかい勝連かつちんバーマぬぐ
とうし、勝連かつちんバーマりる人ひとお頭ちぶるおちりとーしが。フユー
ナーやてーるばーてー。あんしる勝連かつちんバーマ今いまちきてい
知恵じんぎんじゆーさしえー勝連かつちんバーマぬぐとーるりる言いいさ
い、年寄としんちやーが。

それで、理屈りくちばい人に勝連かつちんバーマのようだと。勝連
バーマは頭ちぶるがいいが、なまけ者ものだったのしょうね。
今いまにつけて悪知恵あくちえがある人には勝連かつちんバーマのようだと、
年寄としりは言うがね。

採集 S 60・4・16 読谷よんがゆうがおの会 〆知花ちか春美・村山友江〱

注 勝連かつちんバーマ 尚穆王時代の人。前浜三良、一七〇四年に勝連村平安名に生まれ、浜掟はまおし(浜の行政責任者)をしていたので、勝連かつちんバーマと呼ばれた。後に勝連間切地頭代となる。

47 渡嘉敷ペークー

話者 山城英一 (明治四十五年一月十三日生)

翻字 天久 加代子

あぬ、家やふちぬ話はなしからやしがて。家やふちぬ話はなしからやし
が、皆みな反対はんたいがんちかとーてい、頭あたまあちりとーしが。
あんさーい、始はじめまいや、家やや上うわびかからるふちゆるり
ち、論議ろんぎそーし、いやーが言いんねーしえーならん。下しちや

家造りの話である。渡嘉敷ペークーは頭あたまはいいが皆
と反対はんたいのことを言いっていた。
それで、最初は(渡嘉敷ペークーが)家は上うわから造
るものと論議ろんぎしていた。あなたが言うようには造られ

からるふちゆるりち、論議えさしが、あんしん、仕事おさんばーよ。うぬ人お。

「あんやるしじやるんさー私ねー、今日や月ぬ上がいるえーか仕事おさびーぐとう。」りちやぐとう。役人のー何時に月が上がいんりち、計算のーいつてーうらんばー。うぬ役人のー。

うれー前やちやぬふーじがやたらー分からん。ただ家ふちぬ話びけーんやしがてうれー。

「あんせー私ねー、今日や月ぬ上がいがえーが働ちやびーぐとう、月ぬ上がいるんさー休くわーしみせーらやー。」りちやぐとう、「うん、月ぬ上がいがえーが、いやーが、はまいるんせー休くわーすさ。」りちさぐとう。月え、太陽ぬ落ていらんまーるうてい、月え上がいさーちよーるばー。

あんすぐとう、太陽んあいるすしが月えかーまあま上がていちやるばー、「ハイサイ、月が上がとーぐとう、私ねーな、休くわーちとうらしみそーり。」りち、あんなやたりぬ話聞ちよーるばー。

渡嘉敷ペークーりしうぬ人おあんしなあ、頭あちりやーやたりぬ話どー。渡嘉敷ペークーやあんしどう

ない。下から造るものだ論議したが、それでも仕事はしなかった。この人はね。

「こういうことであるなら、私は今日は月が上がるまで仕事します。」と言った。役人は何時に月が上がるのか計算はしてなかった。

この話は最初はどうか分らない。ただ家造りの話だけであるがね。

「それでは私は、今日は月が上がるまで働きますから、月が上がったら休ませてください。「うん、月が上がるまであなたが、一生懸命働いたら休んでいいよ。」と言った。月は太陽が落ちないうちに、月が上がった。

それで、太陽も出ているが月はずっと上がっているので、「月が上がったので、私はもう休ませて下さい。」という話を聞いた。

渡嘉敷ペークーという人は頭が良かったと話を聞いている。それで、昔から頭のいい人には渡嘉敷ペークー

昔むかしから頭ちびぬちりーしえー、はー渡嘉敷とがしきペークーあやかー
とーさー、りぬ昔言むかしことば葉はあたるばーよ。

をあやかっているねと昔ことばがあった。

採集 S 60・2・27 読谷ゆうがおの会 八天久加代子・村山友江

注 渡嘉敷ペークー 渡嘉敷親雲上。尚敬王三一年（二七五〇年）首里赤田村の渡嘉敷兼倫の三男に生まれ、和名を兼副という。兼副は長じて花当の職を奉じていたが、二七歳の時鹿兒島へ行き、和歌、書道、生花、謡、剣道、茶道等の諸芸道を修得して七年後に帰朝し、尚穆王の世子、尚哲公の仮右筆となり、翌年右筆となった。尚育王十四年（二八四一年）九二歳のとき、北谷間切真栄城の名島を賜わり、「真栄城」に改姓。尚育王十七年（一八四四年）旧曆三月二十四日九五歳で桑江之前的庵で死す。

48 喜屋武ミীগわー

話者 山城 英一（明治四十五年一月十三日生）

翻字 村山友江

あれー読谷よみたんしゆつしん出身しんやんしえーぐとう。だいたいや私達わつた
尋常じんじょうなんねん何年なんねんやたがやー、尋常じんじょうなんねん四年ごねんか五年ごねんまんぐらやた
るはじやつさー。渡慶次とけししよがつごう小学校しょうがっこううてい空手からてちかみそー
ちよ。うにーから喜屋武ちやんミীগわーやんしえーんりぬ注①
話はなしや分わかてい。

やしが、ありが一番いちばん生おい立たちぬ話はなしぬ、かーま前めいぬ生お

あの人は読谷出身であった。私達が、喜屋武ミীগわーと分かったのは、尋常四年か五年の頃だったと思う。（喜屋武ミীগわーが）渡慶次小学校で、空手を披露してね。その時から、（その人が）喜屋武ミীগわーであることが分かった。

（喜屋武ミীগわーの）生い立ちの話は、伝え話は

い立ちぬ話ん、話 伝え話や聞ちやし、元お馬車持つ
ちやーやんしえーたんりしがや。あぬー、家や今ぬ
比謝缸、空地なとーる所ぬうまんかい、材木屋しめん
しえーたんよ。な、うれー年寄ていからぬ話いるや
しがよ。

一番ぬ話いからそーかや、馬車持つちやーし。泡瀬
ん人達がよ、あぬー那覇んかい荷載ちつち、那覇か
ら家かい帰いにや、泡瀬馬車持つちやー達とう、あり
しみそーちやんりぬ話いさぎーたん。

あんさーま賭さーい。品物ぬ塩お専売やつせーやー。
くれー泡瀬から、巡いや那覇から泡瀬んかい巡てい、
塩買ていちよーし、巡査ん達が捕みてーるふーじてー
約束、捕みたぐとう。「あんしえー、私物ぬ塩やいねー
私ねーちやーさびんやー。むし塩あらんねー、いったー
ちやーすんどーやー。」りち、巡査ん達あ鼻うすじとう
らちえーんしえーたんりぬ話聞ちやし。うり実や
いがすらー、何がやらーうれー、本人のー出会でーう
らんぐとう分からんりち思いが、うぬ話。初まい
や馬車持つちやーやんしえーたんり。

うりから、青年時代がやたらー、あれー、あぬー今あ

聞いたんだが、以前は馬車引きであつたらしいがね。
あのう、家は今の比謝缸、空地になっている所がある
でしょう。空地の所に材木屋を営んでいた。もうこれ
は年をとつてからの話だよ。

最初の話は、(喜屋武ミィぐわーは)馬車引きであつ
た。泡瀬の人達がね、那覇から荷物を載せて、那覇か
ら家に帰る時にね、泡瀬の馬車引きの人達と、(賭を)
したという話をなさつていたよ。

そういうふう賭をした。その品物の塩は専売であ
るからね。那覇から塩を買つて、泡瀬に帰る途中に、
巡査に捕まえられたようだ。そうすると、(最初で賭は
してあつたので)「私の品物が、塩だつたら私はこうい
うふうにするよ。もし塩でなかつたら、あなた達はど
ういうふうにするんだよ。」と、巡査達の鼻をへしおつ
たという話は聞いたんだがね。この話が、本当である
かどうかは、本人には会つてないので分からないと思
うんだが。最初の頃は馬車引きであつたそうさ。

それから、青年時代であつたのか、あれは今の嘉手

嘉手納、嘉手納町のやさによ。元ぬ屋良、嘉手納町にかい入つちよーらやー。屋良ぬ林堂ぐわーぬ、奥さんの林堂ぐわーぬやみしえーたんりぐとう。

うり忍ぶんり、村中ぬ人達しん捕みーさんたんりぬ話ん聞ちやん。モーアシビすんとうくるからはいうすてい、はいうすていさぐとう。奥さの脇んかいひつくわーさーい、捕みーんりしーね、うぬ家からまた前ぬ家んかい、うつ飛でーしーしーし、しちぬ武勇伝ぬあみしえーたんり。

背丈、高さあ五尺未満るやたるはじやつさー。あんなりるあたぬ武勇伝ぬあみせーる人やみせーしが。

うぬ後から、また県立農林学校があたしが、あまぬ空手ぬ先生なみそーちよ。先生なみそーち、学生教ちえーるばーてー。あんさぐとう、なー学生達や熟練そーんりちさーまでー、忍びーがちよーしがちやー何十回ぬん負きてい。

また、うまうていん賭事、ちやーうぬしきし賭事し。橋ぬ欄干ぬんかい上みそーち、△あまぬ石橋やたしえーいつたーあてーねーらんらやー。▽「いつたーがやー、いつたーが私三人さーい、すぐあまんかい潮ぬ中ま

納、嘉手納町でしようね。元の屋良は嘉手納町に入っているでしよう。(喜屋武ミーぐわーの)奥さんは、屋良の林堂というところの(娘で)あつたそうだ。

それを忍ぶのを、村中の人達でも捕まえることができなかったという話は聞いた。モーアシビしているところから、連れ去つていつたからね。奥さんは脇にはさんでね。捕まえようとすると、家から家へ飛んでいったという武勇伝もあつた。

背の高さは五尺未満であつたと思う。それほど武勇伝のある人であつた。

またその後、県立農林学校の空手の先生をなさつていてね。先生になつて、学生に(空手)を教えたわけだ。そうしたら、もう学生達は(自分の空手の腕)は熟練していると思つて、(喜屋武ミーぐわーの所に)忍んできたが、何十回も負けてしまった。

また、そこでもいつもと同じように賭事をした。橋の欄干に上つて、△あそこが石橋だつたことは、あなた達は分からないでしよう。▽「おまえ達がね、三人ですぐむこうまで、潮の中に落とすことができるんだつた

でい、くみんちーるんさー。なーいったーんかい首ま
ぎーさ。」りち、話やしんそーちやぐとう。

うれー学校時代、高校時代、今ぬ高校以上るやぐとう
やー。元ぬ中学校りねー、農林学校りねー中学校や
てーぐとう。

三人、頑丈者達が、空手習てーぬ人達ぬ試ししー
が来よー、うりやたんり。三人さーい、かんし力いっ
ち、押し落とうちよーしがてし、うぬ人おあんさーい
落とうちやんり。自慢し首ぬしきとーが間ねー、橋ぬ
下から三人ぬ下から飛び上がていちゃんりち、うし落
とうちやんりぬ話。あんさぐとう、なまなまー私達が
うゆばらんりちやたんりさりぬ話や聞ちえーい。

ら、もうおまえたちにあやまるよ。」と、話をなきた。

その時の（県立農林学校といえは）今の高校以上で
あるからね。

三人の空手を習っている頑丈な人達が、（喜屋武ミ
ぐわーのところ）に試しに来たわけだ。こうして三人
で力を入れて、（橋の欄干から）落としてしまったそう
だ。そうして自慢して、首をのぞかしている間には、
橋の下から、三人の下から飛び上がてきて、（その三
人を反対に）落としてしまったという話。だから、今
は私達がはどうてい側に寄ることはできないという話
は聞いた。

採集 S 60・4・16 読谷ゆうがおの会 八知花春美・村山友江

注① 喜屋武ミぐわー 本名は、喜屋武朝徳。チャンミぐわーとあだ名され、大正、昭和にかけて空手の名人として有名であった。

首里儀保町にある喜屋武殿内の三男で、三〇才の頃読谷村比謝橋南橋通りにある本永家の養子となり、嘉手納にあった沖縄県立
農林学校で、空手の教官として六カ年務めた。昭和二〇年九月、七七歳で石川市石川にて死亡。妻は屋良の林堂家の娘カマド。

注② モーアシビ 沖縄で戦前まであった野原や浜辺における青年男女による夜遊び。

あれは馬車持つちやー、砂糖うーさーであつたらしいですよ。そういう話は聞いています。あの人でももう砂糖運搬、那覇んかい砂糖持つちやーし。あの時代に、とにかく喜屋武のターリー馬は、小さい馬で普通の馬車持つちやー馬のように大きい馬ではないし、力もまあない。背が小さいから、力ももうやっぱし大きい馬のように力もなかつたわけでしょう。

で、このナナヒー、那覇の手前に、読谷山から砂糖積んで行つて、もうすぐ那覇着くナナヒーという坂があつたらしい。もう昔のね、ナナヒーという坂があつてその坂を上る時に、後からついてくる普通の大きな馬車持つちやー馬に、あの一砂糖うーさー馬持つちやーが、喜屋武ミ一の喜屋武のターリー馬は先であつて。で、また力もないし背も小さいし。もういつもやつたら喜屋武のターリーは、もうそこから自分の馬は力はないから、自分も喜屋武のターリーも一緒に、この馬

喜屋武ミীগわーは、砂糖運搬の馬車引きであつたらしいです。そういう話は聞いています。あの人には、那覇に砂糖を運搬する馬車引きであつた。喜屋武のターリーの馬は、小さい馬で、普通の馬車引きの馬のように大きくもなければ力もなかつた。背が小さいので、大きい馬のように力もなかつたわけでしょう。

このナナヒーというのは、読谷から砂糖を積んで、那覇にもうすこしで着くという所にあつたらしい。ナナヒーという坂があつてその坂を上る時に、喜屋武のターリーの馬は、力もないし背も小さいけど先になつて、普通の大きな馬車引きの馬は後からついてきた。それで、喜屋武のターリーは、自分の馬は力もないし小さいので、いつも自分は馬車から降りて、この馬と一緒に坂を上った。馬と人間と一緒にナナヒーの坂を上ったという話もある。

と一緒にナナヒーは坂上がるまではもう喜屋武のターリーも一緒に、馬と人間と一緒にナナヒーの坂を上がつたという話もあるし。

また次は、まあいつの日か分からないが、これもあつたらしい。あのナナヒーの坂を上る時に、もうあんまりこの荷が重たいから、まあ普通のようにには上がらなかった。しかし後からついてくる後の馬車持ちちゃーが、「あの前ぬ馬ぐわーよ、何やがあれー側んかいかちどうきれー。ダラダラしうまんかいかちゆしれー。」というふうにならされて。喜屋武のターリーは、あのー怒られたようなこともあつたらしい。

で、あれはもう馬車持ちちゃーの話であるし。また今度は、馬車持ちちゃーのではなくて、比謝橋の近辺で、あのーお酒を飲んでその比謝橋を通つたらしいが。またあつちからお酒飲みみここを通つて、酒飲みみので争いであつたんだが、分からないが。もうそこで、あのー比謝橋の側で喜屋武のターリーと、また他の酒飲みみの人と争う、口喧嘩ですね。いわば喧嘩して、喜屋武のターリーと口争いしたのが、喜屋武のターリーは一人であつた。また他の人は四、五名、喜屋武のターリー

また、いつの日かはつきり分からないがこういうこともあつたらしい。あのナナヒーの坂を上る時に、あんまり荷が重たくて、(喜屋武ミ一の馬は)普通のようにには上がらなかつた。後からついてくる馬車引きに、「あの前の馬よ、何をしているんだ！側によけなさい。ダラダラしてそこに退けなさい。」というふうにならされた。喜屋武のターリーは、怒られたこともあつたらしい。

で、今の話は、馬車引きの話である。今度は、馬車引きの話ではなくて、比謝橋近辺でお酒を飲んで、比謝橋を通つたらしい。また、あつちからもお酒を飲んだ人がここ(比謝橋)を通つて、酒を飲んでの争いであつたかどうか分からないが。もう比謝橋の側で喜屋武のターリーと、また他の酒飲みみの人と口喧嘩をした。喜屋武のターリー一人と口争いをした。他の人は四、五名で、喜屋武のターリーは一人であつた。口争いであつたんだが、相手が腕力で乱暴したもんだから、自

ひとり、あとの口争くちあそいした四、五名と口争くちあそいしたもんだからもう乱暴らんぼう、腕力わんりき出して相手が腕力わんりき出したもんだから、もう自分じぶんはそれにこたえきれず、もう抵抗ていこうしたわけ。であつて、喜屋武ちやんのターリーは、相手の五名ごめいの乱暴者らんぼうものを比謝橋ひしゃばし川がい、突き落おとしたようなこゝろ話はなしもあつた。

50 喜屋武ちやんミーぐわー

ただ、今いま、喜屋武ちやんミーぐわーぬ話はなし、私が覚うへるだけ、まじ歌うたぐわーからしてみよう。

喜屋武ちやんぬ里主さとめしが 歌うたげうちじゃしわ

なかびとうび鳥とら ゆるりちさり

こうして歌うたも聞いた覚おぼえですが、そしたら、その人ひとはひじょうに歌うた好きであつたらしい。それもいえば、

分は、それに耐えきれず抵抗したわけである。で、喜屋武のターリーは、相手の五名の乱暴者を比謝橋に、突き落としたような話もあつた。

採集 S 60・2・24 読谷ゆうがおの会 八知花春美・村山友江

話者 国吉 真次郎 (明治二十七年二月八日生)

翻字 知花春美

今、喜屋武ミーぐわーの話、私が覚えているだけ、まず、歌からやってみよう。

喜屋武ぬ里主が 歌を歌いだすと

まるで鳥がすいすい飛ぶように 聞きごとである

ことよ、鳥のさえずりのように

こうして歌も聞いた覚えですが、その人はひじょうに歌好きであつたらしい。それも昔のことだと思いま

昔のことと思います。

51 本部 サールー

本部御殿ぬ生しん子やんしえーたんりぬ話やし
や。やつぱし、空手ぬ上手なやー、あま飛びくま飛び
さぎてい、本部ザールーりち付きらつとーんりぬ話聞
ちやしがや。

本部御殿ぬサールーが、ジョンケン、テルという兄
弟、今いいねーボクサーあらんたがやー。うぬ人とう
試合し、台湾ぬんかい行ぢやーい。うぬ人お台湾ぬん
かいぬんしえーたんり。あまうてい試合さーいよ、「む
んちきていとうらさやー。」りち、しえーるふーじやる
ばーてし、ジョンケン、テルが。手真似し、言葉あ分
からん。あんさー試合し首きりぬじ、本国までー届か
んたんりぬ話やあたさ。本部御殿ぬサールーぬ戦みそー

す。

採集 S 52・8・14 読谷村民話調査団第八班 八山城悦子・坂崎弘

話者 山城 英一 (明治四十五年一月十三日生)

翻字 村山友江

本部御殿の子孫であつたという話ですがね。やつぱ
り、空手が上手で身も軽かつたので、あつち飛びこつ
ち飛びしたので、本部サールーと名付けられたという
話を聞いたんだがね。

この本部御殿のサールーが、ジョンケン、テルとい
う兄弟、今でいえばボクサーだつたと思う。台湾に行つ
て、その人と試合をした。その人は台湾にいたそうだ。
あそこで試合をした時、「ねじ伏せてやろう。」と、ジヨ
ンケン、テルが、言葉は分らないので手真似でやつ
たらしい。そして試合し、(ジョンケン、テルは)首を
折られてしまい、本国へは帰ることはできなかつたとい
う話があつた。本部御殿のサールーが戦かつたとい

ちゃんりしえーうつさる聞ちよーさ。

ジョンケンりしとう、テルりしとう兄弟やたんばー。

兄弟がただ名びかーんとうらつとーるふーじやたん。

兄さんのージョン、弟おテル。うぬ二人や私達や見ちや

んよ現に。

台湾でやつたらしい。「私達とう、試合ないしがうい

るんさー出じり。」りちやくとう。台湾うてい出じてい、

サールーが出じみそーちゃーい。くんじじていすんり

さーい、くんじじてーしが、あれー空手やぐとう。反動

さーい肩んかい飛び乗ぶやーい、首絞みていよー。く

まつていてー脇んかい足え引つかきやーい、くまさー

い投げーんりする力さーい、ぶつたかち飛んじやーい。

力さーい、くまさりぬじ首きり折らりやーい、ジョン

ケン、テルりしえー死じやんりぬ話。ただ、うつさる

聞ちやる。なーうにーからぬ、うぬ人ぬ武勇伝のーあ

まりさーじやーとー聞かんださー。

うことは、これだけは聞いたよ。

ジョンケンと、テルというのは兄弟であつたそうだ。

兄弟で、兄さんはジョンで弟はテルだという名前だけ

が伝えられている。この二人は私達も見たよ。

台湾で（その試合は）あつたらしい。「私達と試合で

きる人がいたら出て来なさい。」と言つたから。本部サー

ルーが（試合に）出た。おしまげてやろうとするんだ

が、あれは空手であるからね。その反動で、肩に飛び

乗つて首を絞めた。脇に足を引っかけ、投げようと

する力を利用して首を折つてしまい、ジョンケンとテ

ルは死んだという話。ただそれだけしか聞かず、その

後は（本部サールーの）武勇伝は、あまりはつきりは

聞かなかつたね。

採集S 60・4・16 読谷ゆうがおの会 八知花春美・村山友江V

注 本部サールー 本名本部朝基（一八七一年〜一九四四年）武人。本部御殿家の本部朝茂の三男として、首里赤平に生まれる。自己

流の空手修業に専念し、その後、松茂良興作に師事した。京都で拳闘大会に飛び入り出場し巨漢の外人を倒した逸話がある。

佐久川三良と喜屋武ミ〜ぐわ〜

話者 山城 英一 (明治四十五年一月十三日生)

翻字 村山友江

嘉手納んかい佐久川三良りち、催眠術さ〜がうたんり。な〜うに〜に限り、うぬ人おありね〜負きてい。だ〜催眠術り〜にから〜、文化ぬ習え方やしえ〜や〜。あんさ〜い、今ぬ、あぬ〜何りが嘉手納町立マンションるやがや〜あれ〜、道ぬ側んかいちやつペ〜ぬあしえ〜。あれ〜元お警察やて〜ぐとう。うりが後んかい、松ぬ十四、五本あたるば〜よ〜や〜。あんさ〜いうまうてい、佐久川三良とうしえ〜るば〜て〜。初めえうまうてい、戦たぐとう。

三良や催眠術、な〜三良りちやんで〜ん、な〜ありやさや〜、九十歳以上、約百歳近くなんしえ〜るはじやつさ〜あぬ人お。うぬ人お、佐久川三良りんしえ〜たる人お、本写真屋やんしえ〜たんよ。

あんさ〜い、二人試合し。さぐとう、な〜うぬ人ね〜負きていよ。木ぬあるつさ松、突かさつていよ〜。「ハイサイ!ヤッチ〜、ハイサイ!ヤッチ〜。」りち、喜屋武

嘉手納に佐久川三良という、催眠術師がいたそうだ。もうそれ限り(喜屋武ミ〜ぐわ〜は)その人に負けてしまった。催眠術といえは文化的なものであるからね。そうして、今、道側に大きな建物があるのは嘉手納町立マンションかね。あそこは以前は警察であった。この後に、松が十四、五本もあつた。そうしてそこで、佐久川三良と試合をしたようだ。最初はそこで戦かつた。

三良というのは催眠術師といつても、九十歳以上百歳近くになられるはずよ。その佐久川三良という人は、本当は写真屋であつた。

そうして、二人で試合をした。そしたら(喜屋武ミ〜ぐわ〜は)負けた。松のあるだけ全部突かされてね。「ハイサイ!ヤッチ〜、ハイサイ!ヤッチ〜。」と、喜

さんがぶつたかちめーねー、パツたかち術おうつかきてーしーしー、松突かち。あんし、翌日あ「ちやーやみしえーが。」りち、三良や、三良りぬ人おもーちえーるふーじ。「はあ、昨夜えいやーねーさつたさー三良。」「なー今からー、うんじゆがー私にんかい勝なみそーらんらやー。」りち、うにーにかじり、なーうぬ人お全然空手えしみそーらんたんり。

53 白銀堂由来

糸満に、これもたぶんあつたんでしよう。ありがあるんですから、それが由来は、男は、旅に行つたんでしよう。それから、母親と、この自分の娘が、そしてこの、夜、もう女家族だからと言って、男がしので来てするから、母親は男の装いして。

それからまた娘はやつぱり女いうて、とうとうそう

屋武さんが突いてくると、パツと術をかけたりにして、松を突かした。そして翌日は、「いかがですか。」と三良は（喜屋武ミーぐわーの所へ）いらつしやつたようだ。「はあ、昨夜はおまえに負けたよ、三良。」「もう今からは、あなたは私に勝てませんよ。」と、それ限り、もうこの人は全く空手をなさらなかったということである。

採集S60・4・16 読谷ゆうがおの会 八知花春美・村山友江V

話者 奥原崇善（明治三十二年四月十日生）

翻字 天久加代子

糸満にあつたんでしよう。その由来は、男は旅に行つたんでしよう。それで母親と娘が、夜は女だけしかいないということ、男がしので来たらいへんだと、母親は男の格好をして寝ていた。

そのときに、（旅に出ている）夫が帰ってきて、（妻

いう時に夫が帰つて来て、それから、もう殺すというすじに、それから、母親が、「意地ぬ出じらー手ひき 手ぬ出じらー意地ひき」そういうのを言つて、それがまた、この夫の方がそういう母親の話を聞いて助かつたつて。

それからまたあのう、借金しておつたらしいですな。

それが向こうから、内地から借金取りに来た人がもう親は払わんから殺すてー。

それから、むこうその意地になつてから「意地ぬ出じらー手ひき 手ぬ出じらー意地ひき」あれがとめて、だからもう、その男が糸満に祭られておる話を聞いたんです。白銀堂ですよ。祭られたのは。「意地ぬ出じら手ひき」と糸満にあつたという話を聞いています。やっぱり向こうであつたでしょう。

が男と寝ていると勘違いして、殺そうとするときに、「意地ぬ出じらー手ひき 手ぬ出じらー意地ひき」という諺を思い出して、手を出すのをやめ助かつた。

それからまた、借金していたらしい。内地から借金の取り立てに来て、親は払ってくれないので内地の人が殺そうとした。

その人は意地になつていたので、「意地ぬ出じらー手ひき 手ぬ出じらー意地ひき」と止めた。その男が糸満に祭られているという話を聞きました。祭つたところは白銀堂ですよ。「意地の出じらー手ひき」と糸満にあつた話を聞いています。やっぱり向こうであつたでしょう。

採集S 60・2・28 読谷ゆうがおの会 八知花春美・村山友江▽

注 白銀堂 国道三三二号線から報得川を渡つたところ、糸満の入口にある。古くから糸満の人々は、出漁や旅立ちの時に、この白銀堂に無事を祈つた。ハリー競争も、この氏神への奉納行事のひとつ、又、空手の守護神でもあり、空手を志す人々の参詣も多い。

54 主人と下男の話

話者 知花ハツ（明治四十二年六月九日生）

翻字 天久 加代子

なし、昔の下男の一、五十銭取いしが、あぬ、ぬーりが、がんにじゅーばー、三十銭とうか、二十銭とうかどうやたんだりさいや。だから、あんさぐとう、ちやーなし、気やうぬ気なてい、また銭のー払てーていん、あいよ、元お残てい、日雇しちやんていん、元おちやー残いんでいーたんだりーぐとうや、利ぬ代わりやてーてーやー、利ぬ代わりやてーんてー。

あんさぐとう、ある田うつちーに、ある人ぬ、なし使とーぬ人ぬなし、くまぬ、田圃んかい、まん中んかい、トウツクイりちてー人今はいろいろ酒瓶もあるさ。壺屋に作たるトウツクイりち、腹ぶたーぐわーがこんなにしてあつたよ。うり、持つちる酒買いがん行ちゆたさい。カラカラぐわーとか、なんとか言うて。V
あんさぐとう、うり田ぶつくわぬまん中んかい置ちきてい。なし、うつびなーぐわーるとういぐとう、あんちゆかはまらんでーるばーるやさきに、日雇さーん。

昔の下男はよくできる人で五十銭、普通は二十銭か三十銭で雇われていた。だから気持ちにはいつも（賃金が安いという）のがあつた。そこで、日雇しても借金はそのまま残っていた。利息の代わりであつたのだらう。

それで、ある田んぼを耕すときに、その主人が田圃のまん中に、徳久利を置いた。人今はいろいろ酒の瓶もあるよ。壺屋で作っていたトウツクイといつて、腹のところが大きくてね、それを持って酒を買いに行つたそうだ。カラカラぐわーとかいつて。V

それで、この田んぼのまん中に徳久利を置いた。もう（賃金も）安かつたので、それほどまでには働かなかつたようだ。日雇いもね。

うぬまん中んかい置ちきてい、朝ご飯、朝むん食ま
ちやーに出じーるばーに、「今日や、はまいしがたまし
どうやんどー。」り口え言ちえーてーるばーてー、本人
のー。「うれー何りち、あん言んせーがやー。」りち、
言ちやぐとう。なー、あんせーぐとう「あんそーらわ
ん、口でーるよー。何がやらー分かின்なー。行ぢち
ぬ夕飯がていでーいらー、何がきーがやら、分かின்
なー。」

中いんかい入いせーや、四、五、六人しんか、ある
一人ぬ者のーヒヤーない田んうっち、前んかい、前ん
かい進だんりるばーてー。

あんさぐとう、んぶぎださんよーていー、うぬ、ぬー
りが、一升入ちちよーる酒、トゥックイぐわー、まん
中んかい、置ちやきてい、とーんちやなー、くれーなー、
主人がわい、あんしわるはまいるりちやんせーてーさ
ひやーりち。うねひやー、あつしえーひやーりちよー、
主人の口えなー、むるからんさーりちよ、田ぶつくわ
からなー、うりんがんじゅーはてーんてー、当たてー
る人。

「くれーなまー飲まさんどー。」いがたーなーかじゃ

田圃のまん中に（徳久利を）置いて朝食をあげて、
出かけるときに、「今日は頑張る人のものだよ。」と主
人が口に出した。「どうしてこう言うのだろう。」日雇
いは言った。「そう言っても口だけのことだ。何なのか
分かるか。帰って来て夕食を御馳走にするのか、何な
のか分からない。」と（下男たちは）言い合っていた。

田圃の中へ、四、五、六人で行ったようだ。ある一
人の者は、いっしょうけんめい田を耕やして前へ前へ
進んだようだ。

すると、（田圃の中に）沈めないように酒が一升入っ
ている徳久利を、田圃のまん中に置いてあった。そう
なんだ。これは主人のかわりである。そうしたら頑張
るだろうという考えだったのでしようね。主人の言う
ことはただ聞いてはいけない。当たった人は働き者だっ
たのでしよう。

「これは今はあげないよ。」と、においをすれば分か

せー分^わかいせー、今^{いま}あ飲^ぬまさんどー、しー上^あぎてい
 かる、主人^{しゅじん}ぬうれーうりするりちよー。うりから、ちゃー
 はまいやたんり。主人^{しゅじん}の作^{さく}戦^{せん}、作^{さく}戦^{せん}。どこの人^{ちゆう}使^{ちか}や
 がやたらー、何^{なに}がやたらー、道^{みち}すじは知^しらないが、う
 ぬ、話^{はなし}やたるばー。

注 カラカラー 沖縄く九州南部特有の酒器。基本的には吸
 呑^の型^がだが、膨^ふらんだもの、平^{ひら}べつたもの、角^{かく}張^はつたも
 のとある。



徳久利

るでしょう。今は飲^ぬまさないよ。終^{しま}わつてからあげる
 んだよと主人^{しゅじん}は言^いつた。それから、頑^{がん}張^はつていたそ
 うである。それは主人^{しゅじん}の作^{さく}戦^{せん}で、どこの雇^こい主^{しゅ}であつた
 か知^しらないがこつうい話^{はなし}があつたそつうだ。

採集 S 60・3・1 読谷^{よみ}ゆうがおの会 天久^{あま}加代子^{かよこ}・村山^{むらやま}友江^{ともえ}▽



カラカラー

55 下男が歌った歌

話者 知花ハツ（明治四十二年六月九日生）

翻字 村山友江

昔ぬ何りが、下男とう、下男の道と金持ちの道。

ちよつと、あのー、下男が伝えたあのー歌を言うわけ。

歌をするわけ。話すわけ。

わん童とうむてい くなすらばくなせ

くなしたる稲ぬ あぶし枕

あぬどうくから下男粗末にしちやぐとうやー、うぬ

金持人ぬ下男使やーが、あんされーくぬ人おなー、

あぬだー銭ぐわーん何んねーんりち、大變うせーてい。

ちやーしるすんろー、かーしるすんろーりち、馬鹿に

しんせーしがやー。

くぬ歌心うくち、やっぱしうぬ下男ぬんかい返さつ

てい、金持人ぬ主人のー、あーくれーなるほど頭あ

私かーにん上るやさやー。んちや「くなしたる稲ぬあ

ぶし枕」りせー、「実ぬ入らー首折り」りち。粟も昔の

粟もマージンというのも、もういつぱい実がなるだけ

下がるさーね。頭折れるさー。

昔の何と言うか、下男の道と金持ちの道。その下男が伝えた歌を話すわけ。

私を童だとバカにして こき使うだけ使え

踏みつけられた稲は 畔を枕にして実っているよ

この金持ちの下男を使う人が、あんまり下男を粗末

にした。この人はもう、お金も何もないと大變馬鹿に

した。こういうふうにするんだよ、ああいうふうにする

んだよと、馬鹿になさるんだがね。

この歌に心を打たれ、やっぱりこの下男に返されて、

金持ちの主人は、あゝこれはなるほど、頭は私より上

である。「踏みつけられた稲は 畔を枕にして実つてい

るよ」というのは、「実がつけば首も折れる」と。昔の

粟やマージンというのも、いつぱい実がつくと垂れ下

がるでしょう。頭が垂れてしまうよ。

だからいかな頭の強い方でも、同じように世の中は手を取つて語り合つて歩いて行かないと、人間の道にはならないということを、この下男に。金持人ぬタシメーが、うぬ下男のーむつたつていてー。あげなくれー童りる思たんむし、大変なとーん。伝えたわけよ、この主人に、金持ちの主人に。

わん童とうむてい くなすらばくなせ

くなしたる稲ぬ あぶし枕

もう、田植えの田の稲は、もうよく肥やしも入れて、一生懸命こんなにしてこやしよつたさー、すぐ稲植いりーねー、寒くてもよ、自分らも非常にやつたよ。ぶーかーぶーかーしてすぐ肥やしも入れて。「稲はもう、実がなつて下がるさーね。下がるなーか、あんすぐとうでいきいてん、首え、首えちやー折りりよー」、やんしえーるばーてー。

でいきやーん子生ちん、でいきらんぬー子生ちん、金持ちでも貧乏人でも、誰が金持坂ぬ金持貧乏や、坂ぬうり登いろーりるばーてー。坂道似たようなものよ。この世のあの金持貧乏は、いっちゃん金持んあらん、いっ

だからどんなに頭のよい方でも、(みんな)同じように世の中は手を取つて語り合つて歩いて行かないと、人間の道ではないということを、この下男に知らされたわけです。この下男は、金持ちのタンメーから見直された。この子は、子供だとばかり思つていたのに、大変なことになった。(人間の道というのを歌で)この金持ちの主人に伝えたわけです。

私を童だとバカにして こき使うだけ使え

踏みつけられた稲は 畔を枕にして実っているよ
田圃の稲は、よく肥やしも入れて一生懸命耕やしたよ。田植えといえは、寒い時にも私達もよくやつたよ。たくさん肥やしも入れてね。「稲はもう、実はつくと、下がるでしょう。下がれば下がるほど豊作であるから、(人間も)頭が良くてもいつも慎しむことですよ。」ということである。

頭のよい子を生んでも、頭の悪い子生んでも、金持ちでも貧乏人でも、金持ちと貧乏は坂を降りたり登ったりするようなものである。坂道に似たようなものであるよ。この世の金持ちと貧乏というのは、いつまで

ちん貧乏^{へんず}んあらんろーりぬ理屈^{りくつ}、うりんかい教^{なご}さりん
そーちゃんり。

も金持ちでもなく、いつまでも貧乏でもないよという
理屈は、下男に教えられたそうだ。

採集 S 52・2・22 読谷村民話調査団第七班 八仲村渠清美・佐和田茂美 V

56 モーイ親方

話者 大城 利 徳 (明治四十一年四月二十四日生)

翻字 村 山 友 江

モーイ^注やよ、あぬー人^{ちゆ}かーじえー知恵^{じんぶん}持ちやし^むがや。
頭^{あたま}ん利口^{ちり}ていや人^{ちゆ}かーじえー知恵^{じんぶん}持ち。あんさーいく
ぬモーイ^注りしえーや、人^{ちゆ}かーじえー知恵^{じんぶん}のーまんどー
ぐとう。「なーくれー私^{わん}ねー片足^{かたひき}あ草履^{まばく}履^くり、片足^{かたひき}あ
下駄^{げたく}履^くり、くぬ町^{まち}え通^とていんだ。」りちなー、村^{むら}ん町^{まち}ん
通^とてーるばーてー。やぐとう人^{ちゆ}のーてー、「あぬモーイ
や、いひえーちがてーうらに、あれーやー片足^{かたひき}あ草履^{まばく}履^く、
片足^{かたひき}あ下駄^{げたく}履^くりやー町^{まち}ぬ中^なかから歩^あちゆんれー、あれー
ちがとーんれー。」り、りちやるばーてー。
あんしーねー、あるうんじんねー今^{こん}度^どおあがたー
琉球^{りゅうきゅう}んかい、鹿兒島^{かごしま}ぬ薩摩^{さつま}からやー、あぬー三^みちぬ

モーイはね、人よりは利口であつたんだがね。頭も
秀れていて人よりは利口であつた。そうしてこのモー
イというのはね、人よりは利口であつたから。「もう私
は、片足は草履をはいて、片足は下駄を履いて、この
町を通つてみよう。」というこゝで、村や町を通つたの
である。だから人がはね、「あのモーイは、少しは頭が
へんになつたんではないか。あれはね片足は草履、片
足は下駄を履いて、町の中から歩いているよ。あれは
ちがつているよ。」といったわけだ。

そうしているうちにある時、今度は琉球に鹿兒島、
薩摩からね、三つの難題事が来た。琉球の国からね、

難題事ぬかんし鹿児島から琉球んかい、琉球ぬ国
からや鹿児島んかい、三ちぬ品物難題事や、いった
が琉球ぬうりしうするんさーな、鹿児島ん沖繩ん
平等うりすぐとうりち。鹿児島からな、あんし難題
事持つちめんそーちよーるばーよー琉球んかい。

あんさーい、あがたー琉球ぬ国王ぬ武士達や、く
れーじこー心配し、うぬ難題事お何やがやーり言ちや
ぐとう。三ち言るんしえー、何ぬ灰繩縋てい持つち来、
又雄鶏ぬ卵持つち来、なー一ちえー恩納岳持つち来り
ち。鹿児島からーあんし難題事ぬ来んれーりち、今度お
琉球ぬ人達や、じこーなーかんし知恵ちかてい
やー。かんし考え問えさしが、なかなか琉球国王ぬ
部下達や、全員うれーうぬ事お考やしいうさん。

伊野波ぬモーイりしえーや、とーとーまじいえー
あれー道からーや、あぬふーじーしる歩ちゆしが、いえー
うれーあがたー人達のーや、あがたー侍方のー考
うーさんむー、モーイんかい問ていんり。まじよーま
じ問ていんり。モーイが何りが言らー分からんむんぬ
モーイんかい問ていんり。」り言ち。

鹿児島に三つの難題事の品物を準備することができ
ら、鹿児島も沖繩も平等にするからということ、沖
繩に鹿児島から、三つの難題が来ているわけである。

そうして、私達琉球の国王や武士達は、もう大変心
配して、この難題事とは何かと言うことになった。そ
の三つの難題事とは、灰繩を縋って持つて来なさい。
又雄鶏の卵を持つて来なさい。もう一つは恩納岳を持
つて来なさいということであった。鹿児島からさうい
う難題事が来ているよと、今度は琉球の人達は、もう大
変知恵を働かせた。いろいろ考えたりしたが、なか
か琉球国王の部下達は、全員そのことを考えることは
できない。

伊野波のモーイというのはね、道からはあのように
して歩いているんだが、それは、私達侍では考えるこ
とはできないからね、まずモーイに聞いてごらん。ま
ず聞いてごらん。モーイがは、何と言うか分からない
のにモーイに聞いてごらん。」と。

城元しろむとうからや、あぬ城元しろむとうんかい勤ちとみとーるう侍さむらぬ、

「モーイよ。」「何なにやいびが。」りちやぐとう、「いやーんかい問といしがよー。鹿か兒ご島しまからや、三みちあがたー琉りゅう球きゅうんかい難なん題だい事じぬかんしあしがや。うれーちやーしさらーましやがやー。モーイや考かんやしーうーさに。」りち、モーイんかい問とてーるばーてー。

あんどとうモーイや、「あー三みちぬ難なん題だい事じ、あーうれーないるさびる。」あんさーい「うれー難なん題だい事じおじこーるーやつささ。」りちやぐとうや。「ちやーしさらーましやがやー。」「いーとーうれーよー、あぬ灰あ縄じなしのいしえーやー、灰からしえーんちや縄ちなあの縄のららんしえー。あぬ灰あ縄じなりせーやー、藁わら縄じなやーまやー。うり焼やちあぎていすぐうぬまーまー鹿か兒ご島しまんかいうさぎれー。あんしえー一ていちえーうぬ灰あ縄じなぬうりがふとうちよーさ。」り言いちや。

さぐとう、今こん度どおな一ていちぬ難なん題だい事じ、くれー何なにやがりちやぐとう。雄うし鷄じゅうの卵たまご二ふた持もつち来きりちやるばーてー。「雄うし鷄じゅうぬ卵たまご、はーなーやうれー雄うし鷄じゅうぬん卵たまご産なするばーい。」とーうりん知ちん恵げんちかてい。雄うし鷄じゅうぬ卵たまご、とーあんしえー私わ達だや、くぬ王おう様さまあやーお産さん半はんはやくとう、なーいへー待まつちよーていきいみそーれー。」り言いちや

城元しろむとうからね、あの城しろに勤ちとめている侍さむらが、「モーイよ。」

「何なにでしようか。」といったから、「おまえに聞くんだがね。鹿か兒ご島しまからね、私わ達だ琉りゅう球きゅうに三さんつの難なん題だい事じがこのようにしてあるんだがね。これはどのようにすればよいのだろう。モーイは考えることはできないか。」と、モーイに聞いたわけだ。

そうしたらモーイは、「あゝ三さんつの難なん題だい事じ、あゝこれはできますよ。」そうして「この難なん題だい事じは、大だい変へん簡かん単たんだよ。」といったからね。「どうしてやったらよいだろう。」

「これはね、あの灰あ縄じなというのはね、灰あでは縄じなは縄じなえないでしよう。あの灰あ縄じなというのはね、藁わらで縄じなを縄じなつてね。これを焼やきあげてすぐそのまま鹿か兒ご島しまにさし上げなさい。そうしたら灰あ縄じな（一つの難なん題だい）は解とけているよ。」といってね。

今こん度はもう一つの難なん題だい事じ、これは何かねといったらね。雄うし鷄じゅうの卵たまごを二ふた個こ持もつて来きなさいというのであった。

「雄うし鷄じゅうの卵たまご、もう雄うし鷄じゅうがも卵たまごを産なめるか。」と、これも知ち恵げんを働はたらかせた。「雄うし鷄じゅうの卵たまご、それなら私わ達だの王おう様さまは、今こんお産さん中ちゆうであるからね。もう少しは待まつていて下さい。」と言いったから。「なに！お産さん？殿との様さまはお産さんもなさるんで

ぐとうやー。「はーお産、殿様あお産しんせーん。はー
いやーや、男ぬん子産すりちんあんなー。」りち、
鹿兒島あ言ちやるばーて。「とーやいびらやーさい。
とーあんしえー雄鶏ぬ卵あ持ち来り言んしえーん
なー。」り言ちやぐとう、うりんなー通てい。やさんちや
男のー子あ産さんしえー、今日やなー雄鶏ぬ卵二ち
持つち来りちるやぐとう。いーうりんあたどーさ、う
りんなー通とーん。んちや雄鶏ぬ卵二ちりしえーや、う
れーあるはじえーねーらん、うりんあたとーん。
なー「ちりしえー何やがりれー、」とーさい、なー「
ちえー恩納岳持ち来りちるやいびんれー。」「恩納岳？
うりんるーやつしー。恩納岳や、いったーが持ちいちー
るんさーや、鹿兒島からや恩納岳載しーる船、くまん
かい沖繩んかい琉球んかい持つちめんそーれー。あ
んしえーあぬ恩納岳、琉球から壊ちうさぎてい鹿兒島
んかい持ち返さびさ。」あんなさーい鹿兒島達や、恩納岳
載する船えねーらん負きとーたんり。とーなーうれー
恩納岳、うっペーる船え鹿兒島んかいやねーらん。
三ちぬ難題事おや、なー沖繩ん琉球んやー鹿兒島
んや、うったーがなーうつさ考ていなーしえーぐとう。

すか。おまえは、男がも子を産むということがあるか。」
と、鹿兒島の人達は言った。「そうですよ。それなら
どうして雄鶏の卵持つて来なさいとおつしやるんです
か。」と言ったから、それも解いた。男が子は産めな
いでしよう。今日はもう雄鶏の卵を二個持つて来なさ
いということであるから。これも正解だよ。雄鶏の
卵を二個というのはね、これはあるはずがない、これ
も正解である。

もう一つは何かといつたら、「はいもう一つは、恩納
岳を持つて来なさいということですよ。」恩納岳？これ
も簡単だよ。あなた達が恩納岳を持つていくんだつた
らね、鹿兒島から恩納岳を載せる船を、ここ沖繩・琉
球に持つて来て下さい。そうすればあの恩納岳、琉球
から壊して鹿兒島に持たしますよ。」そうしたらね。鹿
兒島の人達は恩納岳を載せる船はなくて負けてしまつ
た。鹿兒島には、恩納岳を載せるような大きな船はな
かった。

三つの難題事はね、もう沖繩・琉球も鹿兒島も、こ
の人達がこれだけ考えてやったからね。沖繩と鹿兒島

沖繩^{うちなー}鹿兒島^{かごしま}んゆぬぐとうとういけーいしなー、ゆぬぐとうし今^{いま}からー手結^{ていむす}でいいかやーりちやぬ話^{はなし}やるばーてー。

も同様に交際して、今からは同じように手を結んでいこうねという話である。

採集S52・2・22 読谷村民話調査団第十五班 八新垣修子V

注 モーイ親方 本名は伊野波盛平で毛氏八世。親方の位にあり伊野波親方と呼ばれ三司官職につき、知行高三百二十石都合四百石を賜う、同十月美御殿大親職に任ぜられる。

57 モーイ親方^{モーイ かん}

話者 大城 利 徳(明治四十一年四月二十四日生)

翻字 村 山 友 江

勉強^{べんきやう}するためにね。夜遅^{よるおそ}くまで頭^{あたま}に勉強^{べんきやう}しているわけさ。みんなはよー、夜^{よる}はもう寝^ねているでしよう。しかしモーイ親方^{モーイ かん}あや、みんなよりも秀^{すぐ}りやーならんれーならんりやーま、夜遅^{よるおそ}くまで起^おきて勉強^{べんきやう}している。それが一つ^{ひとつ}のモーイ親方^{モーイ かん}の、考^{かん}え方^{かた}、考^{かん}え方^{かた}つて。

(モーイ親方は)勉強するためにね。夜遅くまで勉強していた。みんなはね、夜も寝ているでしよう。しかしモーイ親方はね、みんなよりも、秀れないといけないということ、夜遅くまで起きて勉強している。それがモーイ親方の、考え方である。

採集S52・8・14

読谷村民話調査団第十三班 八新垣修子・上間京美・知花千代子V

翻字 大城 純子

あのう、モーイ親方えいかたいうのはお父さんとうが昔むかしの役人やくにんであつたそうさ。そうして、あのお父さんとうが役人やくにんであつて、それから、上方うへかたからいろいろな注文ちゆうもんがあつたらしい。

最初さいしょに私わたしが覚えておぼえているのは、黒繩御用くろじなやゆういうて、してからにお父さんとうは非常ひじょうに心配しんぱいしているらしい。「どうして、黒繩くろじなでいしえー見みちんーだん。どんなして何かね。」と心配しんぱいしていたらそのモーイ親方えいかたの子こになつておるか。「何故なにが、お父さんとうそんなに心配しんぱいするのか。」言いうたから、「かんかん事ことなてい黒繩御用くろじなやゆうでいちあしがうりちやーしすがやー、りちやんでー。」「あーとーとー心配しんぱいあしみそーんなよー、私わいが作つくていさぎーびさ。」「言いうて。」

昔むかしのスルガー繩ちな、あるいは黒繩くろじなあれー五尺ごしゃくばかり焼やくそうさだ。焼やいて、そうして灰繩へいちなになして、もう動かうごかしもないで、そのまま包つつんで、これ持もつちめんそーれ

あのう、モーイ親方のお父さんは昔の役人であつたそうさ。そのお父さんは役人であつたので、お上よりいろいろな注文があつたらしい。

最初に私が覚えているのは、黒繩御用といつて、お父さんは心配していた。黒繩というのを見たこともない。どんなものかと、たいへん心配した。モーイ親方が、「お父さん何をそんなに心配しているのか。」と聞くと、「実はこうこうで、黒繩を持って来いということになつてゐるが、どのようにすれば良いのか分らず困つてゐる。」と答えた。「あのそういうことですか、心配なさらないで下さい。私が黒繩を作つてさし上げますので。」と言つた。

昔のスルガー、又は黒繩を五尺ばかり焼いたそうさ。そして灰繩を作り、動かさぬよう、そのまま包んで持っていらいと持たせたそうさ。お父さんに。

し。そして持たしたそうさだ。お父に。

してから向こうに行つて、「これはあんたがやったのか。」「あー私がやった。」と返答し、そしてほめられたそうさだ。立派な賢い、上等やさ言うて、ほめられたそうさだ。

そして、それは終りにして、もう一言、また向こうから、また注文がある。「これ持つて行つて、雄鶏ぬ卵持つち来り、雄鶏ぬ卵持つち来。」りちやぐとう。またお父さんの、心配しみそーち。「また、かんかんしちよーんでー。」「とーとー、くりいーてー、私が行ぢ返答さびーぐとう、お父さんの、めんそーらんでいん、私が行ちやびん。」そしてモーイ親方が行つてさぐとう。

「何故、お父さんどうやるむんぬ、君が来せー、ちやーが、いやーや役人のーあらん。」「私達はお父さんの、産むゆーしみそーち、昨日からあんし休くていめんせーうさん、私がか来びたん。」でい言ちやん。「まさか、いやーや男ぬ産むゆーしすんりちえーねーらんのあらに。」「りちやぐとう。」「貴方達、雄鶏ぬ卵りしえー、まーんかいあいびーがやー。」「り。」「あーはー、も

お上に参上しに行き、(役人が)「これはお前が作ったのか。」と尋ねると、「はい、私が作りました。」と返事をした。そして、たいそう立派なものを作つてあるとほめられたそうさだ。

そしてそれは終つて、また、難題が出され「これを持つて行つて、雄鶏の卵を持つて来い。」ということになった。またお父さんはいそが心配なさつて、「実はこういうことで難題を与えられた。」「あゝそうですか。今度は、私が役人の所へ行つて難題を解いて見せます。」とモーイ親方は答えた。

そして、モーイ親方が役人の所へ行くと「どうしてか、お父さんに難題を出したのに、君が来るとうこうとはどうしてか、君は役人ではないのに。」と言われた。(モーイ親方は)「私達のお父さんは昨夜産氣づいてしまひ休んでるので、ここに来ることはできませんでした。それで私が代わりに来ました。」すると役人が「まさか男が産氣づくとうこうことないはずだが。」と言われ

つともし、うりん合格しちゃんり。

いえば昔ぬ人お頭、勝負りち政治いうのは改めてやるはず、あつたそうだが、しかしだいたいいえば知恵勝負。これだけ。

採集S 52・2・22 読谷村民話調査団第七班 八仲村渠清美・佐和田茂美

た。(モイ親方が)「貴方達の雄鶏の卵というのはどこにありましようか。」と言った。(役人が)「あゝ、もつとも。」とこれも合格したそうだ。
いえば昔の人は知恵勝負といつてあつたそうだ。政治というの改めてやるはずだが、しかし、だいたい知恵勝負だつたそうだ。

59 姥 棄 山

話者 知 花 ナ へ (明治四十年一月三十日生)

翻字 島 袋 千代

年取いねー何ん役おたたんりち、姥棄山んかい、うふあしち置ちーがる行ちゆたんりーさいや。その帰りの、ちゃーがら、がーくがーくやんてーな。またうぬ年寄ん人ややー。

年を取るとねえ、何も役に立たないといつて、姥棄山に、おぶつて置きに行きよつたそうだ。その帰りは、何か足どりも重かつたんでしよう。

え、支那からや、中国からや、いがたー沖繩んか いやー、注文ぬあたんりせーや、あぬ藁ぬ縄やー、また、電信柱や、水に浮かべてや、まーや根やが、まー

また、支那から、中国からね、私達の沖繩にね、注文があつたそうだよ。あの藁縄ね、また電信柱を水に浮かべてね。どこが根つ子で、どこが先かということ

やすーだやがりちやくとうや、うぬ年寄いんかい、姥棄山
んじ、聞ちゆたんりよーや、だが、その年寄りが教
えて、「沈むんとうくろー根やさ、浮ちゆんとうくろー
上びやさ。」なてい、聞かちえーんせーんてー。

あんさくとう、三つの注文があたんりよー。一ちえ
ー繩縋ていや、から灰や繩灰むち注文りち、一ちえ
うりしちやくとうや、また、雄鶏ぬ卵持つち来んり
ぬ注文。三ちぬ注文なたくとう、また、あんさくと
うや、うぬ年寄んかい聞ちーが、行ぢえーるばーてー。

あんさくとう、うぬ年寄ぬよー、「あんせーいっつた
ーや、雄鶏ぬ卵注文さつとーでーやー」「賣方達や、
男ぬん子、産すみ。」りちやうり返答せーわ。」んりち。

さくとう、はあ、なるほど、年寄や、亀ぬ功「年
ぬ功や、亀ぬ功。」あまんかい捨ててーならん。ち
けーちくー、あんしから、親孝行しーりちよー、あん
やたんりさ。や、やいびいたんりやー。

になったので、あの年寄りに、姥棄山に行つて、聞い
たようだよ。そして、その年寄りが教えて、「沈むとこ
ろは根つ子で、浮くところは先だよ。」と教えてくれた
そうだよ。

そうしたら、三つの注文があつたそうだよ。一つは
繩を縋つてね。灰で繩を縋つて持つて来なさいという
注文で、それは解いたようだ。また、雄鶏の卵を持っ
て来なさいという注文になったから、また、年よりに
聞きに（姥棄山に）行つたそうだよ。

そうしたら年寄りは、「お前達は雄鶏の卵を注文され
たんだつたら、『あなた方は、男でも子が産めるか』と
言い返しなさい。」ということになった。

それで、はあ、なるほどね、年寄りは亀の功、「亀の
功は年の功」ということになり、あそこに（姥棄山に）
捨ててはならない。おつれして、それから親孝行しな
さいと。そういうことだつたそうだよ。ねえ、そうだ
つたそうですよね。

採集S 52・2・22 読谷村民話調査団第十四班 八運天悦子

注 年ぬ功や亀ぬ功 年とつた人の経験は尊いものであり、深い体験をした人は尊敬しなければならぬ。

話者 大 城 利 徳 (明治四十一年四月二四日生)

翻字 村 山 友 江

ある家庭んかいや、くぬやぬや、「私あ親あ、畑ぬ
あもーちぬ片側んかいや、親なたるむのーや私がー捨
ていーが行ちーうーさん。私あ親あ、あぬ家ぬ中うて
い、床下ぬ下んかいな誰が分かんぐとうし、な
ー上ぬ官ぬ政府ぬ人達ぬな分かん考し、私ねー、
親あ自分ぬ家うてい、りつばわんらいがたーすん。」り
ち。ある二才やてー、男ん子やてー、自分ぬ床下んか
いちやんとう自分ぬ親ぬ住まーちえーたるばーてー。

あんさーい、今度おやー、鹿児島からやー、鹿児島
から難題ぐとうりちや。かんしなー沖繩んかい鹿児島
から、沖繩からやー何とう品物ぬ注文ぬ、鹿児島から
沖繩んかいちよーるばーよー。

あんしーねー、なーうぬあがたー琉球ぬ王や、「な
ーじこー考ていん考らん。なーうれーちやーすがや
ー。鹿児島からぬ注文のーやー、うれー考ていん考
らん。準備いしいさんしが、ちやぬふーじやがやー。」

ある家庭にね、その家の子供が、「私は自分の親たる
ものを、畑のあぜ道の片側に捨てに行くことはできな
い。私の親は、家の中の床下に、誰がも分らないよ
うに、私の親は自分の家でちゃんと面倒は見る。」とい
うことであつた。ある若者、男の子がね、自分の床下
にちゃんと親が住めるように作つて、そこに親を住ま
わせたようだ。

そうして、今度は鹿児島からね、難題がきた。鹿児
島から沖繩に、何と何の品物を持って来なさいという
注文がきたわけだ。

そうすると、もうこの私達の琉球の王は、「どんなに
考ても考えられず、どうしようか、鹿児島からの注
文は、考ても考えられず、準備することができない
が、どうすればいいんだらう。」と。

りち。

「じこー心配そーる半ばに、くぬ親床下んかい、か
んし養てい床下ぬ下うてい、養てーるうぬ子ぬやー
「ぬぐわ殿様、何りちうんぐとーしわじやんぴーり
ーしめーが、何事やいびーがやー。」りち、問たぐと
うや。「くれーじちえーやー、鹿兒島からかんしかんし
ちよーんれー。」りちやぐと。「何事やいびーが。」
りちやぐとや。「くれー灰繩綯てい持ち来やー。な
ー「ちえーや、恩納山、恩納山壊ち持ち来。雄鶏ぬ卵。」
三ちぬ難題ぐとぬあたんりー。

「あんしからや、「とーあんしえー、初めー灰繩。」り
ちやぐと。「灰繩？うんなむのー親あ隠くわちえーる
男んてー、考ていん考ららん。」とーとーんだんだ、
私達あ親あや、私あ男ぬ親あ、自分ぬ家んかいかんし
めーるすぐとや、んだ親から話物語聞ちんだひ
ー。「りち、うぬ子ぬ自分ぬ親から話聞ちやぐとや
ー。

「親加那志、鹿兒島から今あぬー難題事ぬ、三ちぬ
難題事ぬ入つちよーびーしがやー、うれー殿様んじこ
ー心配し、うまんかいちやーがらし親ぬ考え、知恵ん

大変心配しているところに、親を床下で養っている
この子供がね、「殿様は、どうしてそんなにしかめっ面
をしていらつしやるんですか。何事ですか。」と聞いた
からね。「これは実はね、鹿兒島からこうこう（難題が）
きているんだよ。」と言った。「どういことでしょうか
か。」と聞くと、「これは灰で繩を綯って持って来なさ
いといこと。もう一つはね、恩納岳を壊して持って
来なさい。雄鶏の卵。」と三つの難題があつたそう。

それから、「じゃ初めは灰繩だよ。」と言った。灰繩？
そういうのは親を隠してある男は、考えても考えても
分からなかつた。「どれどれ、私の親は、私の父親は、
自分の家に居るんだが、親から話を聞いてみようね。」
と、その子供は、自分の親から話を聞いたわけだ。

「お父さん、今鹿兒島から三つの難題がきているん
ですけど、これは殿様も大変心配していらつしやるこ
とですから、どうかお父さんの考えや知恵を借して下

何ん借らしみそーらんがやー。」りち、自分ぬ床下ぬ下んかい自分ぬ親あ、めんそーらちよーしんかい、自分ぬ親んかい問てーるばーてー。」「三ち難題事ぬあんなー、うん、とーうれーよー、んだんだ繩んりせーやー灰繩、から灰し綯てーる繩やー、とーうれーやーしーるんせーじこーるーやつささ。繩綯やーいやー、焼ちやーまやー焼ちままうぬ鹿兒島ぬ侍達んかいあぎれー。」あんし繩あ綯てい、藁繩あ綯てい繩あ焼ちやーまあぎたさ。くれー灰繩てー、灰繩ぬ一ち。

また「なー一ちえー何ぬあいびーが。」りちやぐとやー。「親加那志よー、またなー一ちえあいびんでー。うれーちやーしさびーがやー。」「とーうりんるーやつささ。うれーやー今やー、鹿兒島ぬ雄鷄ぬ卵二ち持つち来りちやぐとや。うれー雄鷄ぬ卵や、うれーやーじこーるーやしむんやさ、うれーてー、しぐ私ぬー今あ妊娠そーぐとや、うぬ卵あ卵あ持つち来うーさんどーりちよーけー。」「えつ。」男ぬ親あ、雄鷄ぬ卵やぐとらんちや。

「男ぬ親ぬ妊娠すんりちんあんなー、うれー妊娠のーあらんさ。」りち。「あんするむん、貴方なーたーう

さいませんか。」と、自分の家の床下にいる親に聞いたわけだ。「三つの難題があるのか、よしよしこれはね、灰繩というのはね、やろうと思えば大変簡単にできることだよ。繩を綯ったまま焼いて、そのまま鹿兒島の侍達にあげなさい。」と教えた。そして繩を綯って、藁で繩を綯って、それを焼いたままあげた。これが一つの灰繩である。

また「もう一つは何でしょうか。」と言ったら、「お父さん、またもう一つありますよ。これはどうすればよろしいんでしょうか。」「よし、それも簡単なことだよ。これは鹿兒島に雄鷄の卵を二つ持って来なさいということであるから。雄鷄の卵は大変簡単なことだよ。これはね、私は今妊娠しているから、この卵は、持つて来ることはできないといっておきなさい。」「えつ。」と男の親は、雄鷄の卵だからとびっくりした。

(鹿兒島では)「男の親が妊娠するということもあるか。これは妊娠ではない。」と。「そうするのに貴方は、

り分わかかいるむんぬ、雄うしど鶏ういぬ卵くがむ持もつち来くりちんあいびん
な。いえー私わつた達い男まぬん妊にん娠しんそーん、男いぬん妊にん娠しんそー
んりちんあんなし。りち、返へん答とうさぐとう。うれーやつ
ばし、雄うしど鶏ういぬ卵くがむりしえーねーんしえー。うりんていちえ
ーとうーてい。

今こん度どうお恩うん納な岳やま。とー恩うん納な岳やまな、持もつち来くるくとう
なとーんてー。「恩うん納な岳やま持もつちめんそーらすぐとう。あ
ぬ恩うん納な岳やまや、今いま壊こちやーま貴うん方じゆなたーんかい、持もつ
ちめんそーらすぐとう、恩うん納な岳やま積ししーる船ふね、持もつちめ
んそーれー。あんしえーくぬ船ふねんかい、私わあ恩うん納な岳やまや
持もつちめんそーらさびーさ。」り、言いちさぐとう。あー
んちやなるほど、恩うん納な岳やま積ししーる船ふねえねーらんしえー。
うつつびさーま沖うち縄なぬ難なん題だい事じおよ、勝かつちよーたんり。
三みちぬ難なん題だい事じや。

うりから親うやや、親うやぬ生いちちめーる間えい親まあ、ちやー
物む考かんや勝まさてい。六ろく十じゆ歳さいあまらわん、七しち十じゆ歳さいなていん、
めんしえーる間えいちやー宝たから。年とし寄よや宝たから、物む事じん何なん事じん
相そう談だんぬんないんや。生いちちめんしえーる間えい宝たからやぐ
とう、孝こう行こうしーよーや、子こ供わん達ちや、孫うま達がんちやりちぬ話はなし。

これが分かるのに雄鶏の卵、持って来なさいとおつし
やるんですか。えー私達男でも妊娠することができま
すか。」と返事をした。これはやつぱり、雄鶏の卵とい
うのはないからね。それでこれも一問は解いた。

今度は恩納岳。もう恩納岳、持って来ることになつ
た。「恩納岳を持たしますから、あの恩納岳を、今壊し
て貴方の所に持たしますから、恩納岳を乗せる船を持
つて来てください。そうすればその船に、私が恩納岳
を積んで持たしますから。」と言った。あゝなるほど、
恩納岳を乗せる船はないでしょう。これで沖縄の難題
事はね、勝っていた。三つの難題事はね。

それから親は、生きている間は、いつでも物考えは
上である。六十歳すぎようが、七十歳になろうが元氣
な間はいつも宝である。年寄は宝、物事でも相談する
ことができる。生きていらつしやる間は宝であるから、
孝行するんだよ、子供達、孫達という話である。

話者 大城 カマド (明治四十年八月二十四日生)

翻字 村山友江

根、枝、分かしりち持つち来ぐとう。うぬ子ぬ「ウール、水入りんそーれー、うりんかい浮きれー根元や沈り、枝あ浮ちゆさ。」りちやぐとう。あんししちやぐとう、うぬ通い「くまー根元やいびん、うまー枝やいびん。」りち、持つち行ぢやぐとう、「ちやーし分かたが。」りちやぐとう。

後おな「実え、親あたらーはぬ捨ていーさん、床下んかいなー親あ隠くわち、捕みらりーねー。」りちしちやぐとう。「あんし親から教たんろー。」りちやぐとう。昔ん人お宝りち、うにーから土手ぬ片側ありたしえーやー昔ん人から。

初まい何りち捨ていーさんてーがりれーや、山奥んかいうぬ親うふあし行ちーに、親ぬ木ぬ葉パチパチ折いしえーたんり。うぬ裏山んかい行ちーに「何やいびが。」りちやぐとう、「いやー家かい帰ていちーねーや、うぬ木ぬ葉落ていーしちー足追いし帰てい行きよー。」

根と枝とを区別しなさいと持つて来たからね、その子は「ウールに水を入れて下さい。それに浮かべたら根元は沈み、枝は浮くよ。」と言った。その通りにして「ここは根元ですよ、あそこは枝ですよ。」と持つて行ったら、「どうしたら見分けがつくか。」と問われた。

ついに「実は、親は愛しくて棄てることができず捕まえられたらいけないと、床下に親は隠した。」と言って、「そういうふうに関から教わたんだよ。」と言った。昔の人は宝ということで、その時から昔の人の言葉で土手の片側というのがあった。

初めどうして親を棄てることができなかつたかというとね、親をおぶつて山奥に捨てに行く時に、親が木の葉をパチパチと折つたそうさ。その山に行く時に、「どうしてですか。」と言つたら、「あんたが家に帰る時にはね、この木の葉の落ちている所から足で追つて

りち、教ならさつたぐとう。親うやあるく愛かなはぬ捨ひていーさん。
家やかい帰けいていつち床ゆか下さんかい親うやあ養やしなとーたんり。

あんし、うっペーぬ政府せいふ事ごとうはばちやぐとう、年寄としじい
やいつペー宝たからりち、いつペーな親うやあかーら六十一むくじゅういちな
ていん、親うやあ年寄としじいや宝たからりち捨ひていらんたんり。あんし、
いつペー親孝うやこうこう行ぎんな者ものりちいらつたんり。

62 松まち 川がわ 童わらび

首里すい山川やまがんかい、七才ななちないる童わらびぬ、有名ゆうめいな童わらびぬ、モ
イ親方えいかたやかん、くまー強ちやうくないさーりぬ物語ものがたい、聞ちちや
みそーらんでいー。

あれーよーさい、七才ななちないる童わらびぬよ、首里すい山川やまがんか
い有名ゆうめいな童わらびぬうたんり。有名ゆうめいな童わらびぬうたんりしが、首里すい
山川やまがんかい夫み婦とうぬ童わらびとう、かんし家ちねい庭にむつちよー

帰かえつて行くんだよ。」と教おしえられた。(そうしたら)親
があまりにも愛あいしくて棄すてることができず、家いへに(連
れ)帰かえり床下ゆかで親おやを養やしつていたということである。

そうして、政府せいふからの(難題なんだい)を)解といたので、年寄としじい
りは大変たいへん宝たからであるので、親おやは六十一むくじゅういち才さいになつても棄すて
ることはしなかつた。そうして(その子こ)は大変たいへん親孝うやこうこう
行者ぎやうじやといわれたそうだ。

採集 S 52・2・22 読谷村民話調査団第十五班 八新垣修子 V

話者 比 嘉 徳太郎 (明治二十五年一月十日生)

翻字 知 花 春 美

首里山川すいに、七才ななちになる子供こども、有名ゆうめいな子供こどもがいて、
モイ親方えいかたよりも頭あたまが秀ひれていたという物語ものがたを聞いた
ことがないですか。

あれはね、七才ななちになる子供こどもがね、首里山川すいに有名ゆうめいな
子供こどもがいたそうだ。有名ゆうめいな子供こどもがいたそうだが、首里
山川やまがに夫婦めづとその子供こどもといっしょに住すんでいた。

る家庭ぬ。

くぬ勝連親方から金のーじやつさが借とーたらー、
うれー分からん、金ぬ請求ぐわーしーが来るかーじ、
スーんうらん、アンマーんうらんなてい、うぬ童一人
うてーるぐとーびんやー。

「スーや何処かいが。」りちやぐとう、「来りわん来
りわん、いったースーんアンマーんうらん。スー何処
かいが。」りちやぐとう、「スーや冬青草に、夏枯り取
いが。」「アンマーや？」りちやぐとう、「ユンヌミー取
いが。」りーたんり。「ぬぐわ、あん言いしえー何やが、
冬青草に夏枯りりーしえー何やが、ユンヌミーりーしえ
何やが。」りち、問てーるぐとーびん。「あー親方とう
しうぬあたいん分かみそーらに。」「分からんさー。」
りちさぐとう。

「私達に借らちえーる金、ぬがーらしーるんさー聞
かすさり。」り、うぬ童ぬ。「とーあんしえー私ねー物
なれーるやんむー、金ぐわーやぬがーらすさ、聞か
しえー。」りちやぐとう。

「冬青草に夏枯りりーしえー稲よーさい、稲刈いが、
ユンヌミーりーしえー、トウブシよーさい。火ぐわー

ところで、(その家は)勝連親方からいくらのお金を
借りていたのか、それは分からないが、お金の請求に
来るたびに、お父さんもない、お母さんもない、
その子供一人いたようだ。

「お父さんは何処にか。」と、「来るたびに、おまえ
のお父さんもお母さんもない。お父さんは何処にか。」
と聞いた。「お父さんは冬青草、夏枯れ取りに。」「お母
さんは？」と聞くと、「ユンヌミー取りに。」と言った
そうだ。「そういうのは何か、冬青草に夏枯りとは何か。
ユンヌミーとは何か。」と聞き返したそうだ。「えっ親
方としてそのぐらいいも分からないのですか。」「分から
ないね。」と言った。

すると、「私達に貸してあるお金を見逃してくれるの
なら教えましょう。」と子供が言うと、「そうか、私も
勉強だから、金はいいいから教えてくれ。」と言った。

「冬青草に夏枯れということはね、稲刈りに、ユン
ヌミーというのは、トボシだよ。火を灯して夜の明か

ちぎていユンヌミーてー。」「あーあなるやんなー。冬青草
に夏枯りーりーしえー稲、ユンヌミーりーしえートウ
ブシやるばーい。」あれーうぬなー金のーぬがらちよー
しえーやー、取らんでいんしむん。

うぬ童んかいかんさつてーならんむんりやーい。鳥
ぐわーや持ちちやーい、「いえー、いやーがーくぬ鳥
ぐわーや生ちちるするい、死にるするい。」、くぬ勝連
親方ぬ鳥ぐわー見してーんてー。自分や片足あ外んか
い出じやーに、片足あ内んかい、「貴方がー、あんしえー
私ねー内んかい入るい外んかい出じーるい。」り
言ちやぐとう。

生ちちよーんりーねー殺すい、死じよーんりーねー
生ちきーぐとうや、勝連親方ぬ都合てー。

うぬ童ぬ頭ねー勝ん、んちや外んかい出じーんりー
ねー、内んかい入いん、内んかい入いんりーねー外ん
かい出じーん、うぬ童ぬ頭んかい勝んなやーいよ、あ
んさーいやたんり。

うぬ怒みち行ちーにん、男ぬ親あ、くぬ城んかい行
ちゆる途中うてい田あ耕ちーにん、「いえー、いやーや

りにするものだよ。」「あゝそうですか。冬青草に夏枯
れというのは稲、ユンヌミーというのはトンボなのか。」
と、お金のことは見逃して取らなくてもいいというこ
とになった。

しかし、勝連親方はこの子供にそうされてはたまら
ないと、鳥を持ってきて、「おまえから見て、この鳥は
生きるか、死ぬか。」と見せたようだ。すると、(子供
は)自分の片足は外に出し、片方は内に入れて、「貴方
は、それでは私は内に入ると思うか、出ると思うか。」
と聞いた。

(鳥のことは)生きていると言えば殺して、死んで
いるといえば生かすと、勝連親方の都合のいいように
(するつもりであった。)

その子供の頭には勝てず、外に出ると言えば、内に
入り、内に入ると言えば外にというふうな、その子の
知恵には及ばなかつたそうだ。

勝連親方は怒つて帰る時、城に行く途中で、男の親
が田を耕している所へ来て、「おい！おまえは鋤を何回、

うぬ田や幾回、歎やうとうちやんりち覚とーりよし。
うり返答しーさんらー打首ぬ罪どー。」りち、勝連親方
んかい行らさつたぐとうやーさい。

「昼飯みそーりよ。」し、「お父、昼飯みそーりよ。」
し呼びてーるぐとーん。「だーいやーがあん言ちやぐと
けー忘とーしえ。」りち、男ぬ親あ残念しえーるぐと
びん。「大丈夫、私が返答すん。」りちさぐと。

勝連親方ぬうまから来い、「幾回うとうちやが。」

「貴方ぬ馬ぬ足え幾回うつけーいたが。」りちやん、
うりが「幾回うつけーたん。」りねー、「幾回うとう
ちゃん」りぬ頭、童え頭ぬあてーんてー。

うぬ子供え生ちきとーてー。百姓生ちきとーてーな
らんぐとうりちよーさい、うぬ童一人やうまんかいサ
カグラうつちやーさいアジャンナトウアシビさしえー
うぬ童やいびんりさ。サカグラあうつち後んじー向けー
しみていアジャンナトウあしびりーしえー、うぬ童一人
やいびたんり。てーげー物思とーる人んちやーや旅は
なりんかい流さりーしが、七才るないぐと殺さつた
んりぬ物語やうりやいびん。

歎を何回振ったか覚えておけよ。それに答えきれな
れば打首の罪だぞ。」と言つた。

そこへ、子供が「昼飯だよ、お父さん、昼飯だよ。」
と呼んだようだ。「ありやー、おまえがそう言つたので
忘れてしまった。」と男の親は、残念がつたようだ。(子
供は)「大丈夫、私が答えてあげるさ。」と言つた。

勝連親方はそこへ来て、「何回振ったか。」と聞くと、
(子供が)「貴方の馬の足は何歩歩いたか。」と聞き返
した。「何回振ったか。」と聞けば「何歩歩いたか。」と
聞き返す頭、子供は頭が秀れていたのでしよう。

その子供は生かしてはならない。百姓を生かしては
ならないと、その子供ひとりをそこにサカグラ打つて
アジャンナトウアシビしたのは、その子供だそうだ。
サカグラを打つて後向きにしアジャンナトウアシビと
いうのはその子供一人だつたそうさ。ふつうはいい年
頃になつておれば島流しになるが、七才しかならない
ので殺されたという物語はそれである。

63 稲苗の根洗い由来

話者 山城 英一 (明治四十五年一月十三日生)

翻字 国吉 トミ

これは昔の苗代の由来記といったら由来記、その言
い伝え話だがね。昔、この大金持ちの主人がよ、苗代
を引いて取って、一人当て、何十束といって割り当て
して、担いで行けと言ったからね。その人夫が一人は、
なんだかフューナー、方言で言ったらフューナーであ
ったらしいが。

それが考えで、「あーぎじやびよー、土と一緒に担い
で行くよりは、もう植えて枯れようが生えようが、自分
のものではないから洗った方がよい。」と言って。自分
の物は洗って、担いで行って植えたから。皆が土と一緒に
に植えた物よりも、自分が洗ったのが良かったと言っ
て。それ以来稲は、洗った方がよいと言う事になつて
おるらしい。話聞かされたよ。

これは昔の由来記、言い伝え話だがね、昔、大金持
ちの主人がね、苗代から種を引いて取って、一人当た
り何十束といって割り当てて、担いで行けと言った。
その人夫の中の一人はなまけ者であつたらしい。

なまけ者が考えて、「なにくそ！土と一緒に担いで行
くよりは、植えた後に枯れようが根づこうが、自分の
ものではないから洗った方がよい。」と考えた。自分の
物は洗ってから、担いで行って植えた。そうすると、
皆が土と一緒に植えた苗よりも、洗った苗が良かった
そうだ。それ以来稲苗は、洗った方がよいと言う事にな
つておるらしい。そういう話を聞かされたよ。

採集 S 52・2・22 読谷村民話調査団第十一班 八大宜見光一

トグチクラニーの富を減らした話

話者 比嘉 徳太郎 (明治二十五年一月十日生)

翻字 島袋 智子

牛買いが行ぢよーるぐとーん。「二千やらー売いざ。」
りち、うぬ主ぬ、牛ぬ主ぬ、あらん、二千やらー売い
さりち。あー、買いさりち、買てーるぐとーん。二千
やらー売いさーりーぐとー、買たぐとー。

ニシングワンりれー四十円やるむんぬ、ニシンりち
やぐとー、一貫るなたさやー。一貫るなたれー。裁判
しちやれー負きてい。あんし、ニシンさーに、ニシン
さーに売いんりちやれー、二銭、一貫るやんどーやー
りち、負きてい、うぬ牛、一貫さーに牛買たる人ぬう
ん。うしがや……。

また、トグチクラニーぬエーキ、馬乗い友人えなた
ぐとー、読谷山あ山ぬ中んじる田んあるむん、私あ
港田やいやー買れーりちえーるふーじー。田あ、あ
んし売りよーりち、ゆぬタタナーから、船から運搬の
ーないぐとーりち、トグチクラニーや誠な者やんしえ
てーるばーてー。馬乗い友人えエーキン人おやぐと

ある男が牛を買いに行つた。「二千なら売つてやる。」
と、その牛の主は言つた。二千なら売ると言つたので、
その男は、ああ、買うことにすると、買つたようだね。
二千で売ると言つたので買つた。

二千貫と言えば四十円だが、二銭と言つたので一貫
になる。一貫になつたので裁判にかけてみたが、負け
てしまった。二セんで売ると言つたのだつたら、二銭
は一貫だよと、負けてしまった。もう牛を一貫で買つ
た人がいるよ。

また、トグチクラニーの富の話だが、ある人と乗馬
仲間になつた。読谷山は山の奥にしか田がない。私の
港の近くにある田をおまえが買わないかと言つたよう
だね。それじゃあ田を売ってくれと言つた。その田か
ら、舟で運べるからと、トグチクラニーは正直者だつ
たんでしようね。乗馬仲間は金持ちでもあつた。

う。

あんさぐとう、初めー、じめ田、私あていーかたら
ーやし、いやー買れーりち、田や見していちやーに、
あんしえー買らやー銭ぬん持つちち買らやーりち、昔
ぬ銭のーよー、千貫、二十円さーに百斤あたんり。斤
数や六十キロ、六十キロあたるばー。銭ぬあるつさ
ー。タタナーんかい積して行ぢやぐとう。

うれー嘘るやぐとう、またあとー、田やせー見し
ていくーやーりち、二ヶーん田や見しーが行ちゆるや
かねー、うぬ銭のー相談るやぐとう、船からけーひじ
みていねーらん。だー銭ぬありわる買いさやー、トグ
チクラニーや目はつばてい。トグチクラニーエーキ減
ちやる人おあり、誰え言やんしがよー、一貫さーに牛買
たん人んうんどー、昔え、うぬ明治時代や。

そして、初めは、私の田を買いなさいと言って、田
を見せた。そうしてお金を持って来て買うことにしよ
うということになった。昔のお金は、千貫、二十円で
百斤もあつたそうだ。斤数は六十キロあつたそうだ。
お金のあるだけタタナーに積んで行つた。

これは嘘をついていたのであつた。田を見せて来よ
うねと言って、二回にわたつて田を見せに行く間に、
そのお金は舟からすでに運んでしまつていた。もうお
金があればこそ買えるのだから、トグチクラニーは茫
然としてしまった。トグチクラニーの富を減らしたの
は、その人だよ。誰とは言わないけどね。また、一貫
で牛を買つた人もいるよ。昔はね、その明治時代は。

採集S 52・2・22 読谷村民話調査団第十四班 八伊芸弘子V

注 タタナー ラタナーともいう、伝馬船糸。前と後が平たい感じの舟で、カーラー(龍骨)やタナザー(ろつ骨材)がついていた。

坊主御主注はあれ、物乞んかい化きやーい、やちりんそーやーい、貧乏なーりー、人ぬ心試しすんりー歩ちみせーんりー。

ぬー王やみせーたがやー、坊主御主りしえー。尚瀬王やみせーるはじどー、ありが生いたちえ尚瀬王、坊主御主りち、ただな、坊主御主りちやしえー、ただ民間から付きてーる名なやーい。人民のーちやぬあたい生活そーがやー、ちやぬあたい心おありそーがやーりち、うり巡礼ふーじーし。今ぬ内地巡礼、うぬふーじし調びてーみせーる王様やみせーんりち、ただうつさる話し。うりから以上やあんまりさーじやーとー、私ぬー芝居うているうれー見ちやる。

芝居うてい見ちえーしえー、一カ所お御飯、食むる所んかい、「なー旅ぬ者やぐとう、どーりん……。」りちよーしが、「いったーぐとーる貧乏人にきうーるむんまでー無らん。」りち追ひ払りやーい。

坊主御主は、物乞に化けてやつれて、貧乏者のようにして、人の心を試すために歩いていったようだ。

何という王だったかな。坊主御主という方は、坊主御主という方は、尚瀬王だったはずだ。あの人の生い立ちは尚瀬王、坊主御主といって、坊主御主というのは、ただ民間から付けた名前である。人民はどの程度の生活をして、どんな心を持つているかと、巡回していた。今の、内地の巡礼、そのようにして調べておられた王様だったとただそれだけの話を聞いた。それ以上はあまりはつきり分らない。私は芝居でそれを見た。

芝居で見たのは、一カ所は御飯、食事をしている所へ行つて「もう旅の者ですが、どうか……。」と言つたが、「おまえたちのような貧乏人にくれる物まではない。」と追ひ払われた。

あんさーい、うぬ後しえー、また隣んかい行ぢやぐ
とう。隣んかいやなー、ンムニー食むん所はつかかて
い。「とーなーンムニーや全部うち食り無びらんしがち
やーさびーがやー。」りち、「やしが、芋がーや残とー
びん。」りち、「あんしえーうりやていんしむさ。」りち
やぐとう。白ぐわーんかい芋がーくしじやーい腹みち
るかうさぎたぐとう「ありがとう」し出じてい行ぢや
ーい。

後けーてい、なー首里城、うふ城んかい御用なたぐ
とう、夫婦ぐーりー、おじー、おぼーん。なー御主
加那志前んかい、芋がーくしじ食まちえーんりち、打首
やさやーりち、さーらガタないし行いし、前からん後
から首里城ぬ役人のー付ち、ガタないふつとーてい首里
城んかい、うんちけーさぐとう、褒美んぢやーり与ら
さつてら。

そして、その後に、隣へ行つた。隣はンムニーを食
べているところであつた。「もう、ンムニーは全部食べ
てしまつてどうしましょう。」と言つて、「しかし芋の
皮は残つています。」と「それじゃそれでもいいです。」
と言つた。白に芋の皮を入れてこねて、腹いっぱいあ
げると、「ありがとう」と出て言つた。

後になつて、首里城、城に、夫婦、おじいさん、お
ばあさんは御用になつた。もう御主加那志前に芋の皮
を上げたいということで、打首だねと、ガタガタ震え
て、前からも後ろからも首里城の役人が付き添つて、
ビクビクして首里城へ行つた。するとたくさんの褒美
を与えられた。

採集S 60・4・16 読谷ゆうがおの会 八知花香美・村山友江

注 坊主御主 尚瀬王（一七八七〜一八三四）のこと。第二尚氏十七代目の王（一八〇四〜一八三四）。病気のため、四二歳で長男尚育
に政治をまかせ、浦添市城間に隠居し、坊主御主といわれる。農耕に親しんで農作物を那覇の市場に売らしたという。

私達が聞ちよーしえー、くぬ字てー自分ぬ字ん、自分ぬ部落内うてい、美ら女ん子ぬ亡し。うり茶毘し、茶毘すしが二才達集まてーる話や。意地勝負というのはよ、誰が意地ぬあがやー、意地え弱さがやーりち、意地勝負すぬたみねー。とー今日や自分なー達字から、美ら女亡し、葬式し墓かい行ぢよーしが、なー意地しか意地勝負やぐとう。あぬ女墓から出じやしーすみ出じやちうまんかい連てい来すみ来さに賭し。

さぐとう、なー意地しかーや「はーいやーやなー、亡しちよーる女、いやーやなー墓から、あんしうまんかい担みてい来らりんなーひやし、恐るさんあれー。」ぬーりち。意地しかー話が、あんし話いさぐとう。「はないるするいやーや、死じる、けー亡ちるうるむんぬ、亡ちよーる人る墓から開きてい、うまから担みて

話者 大 城 利 徳 (明治四十一年四月二十四日生)

翻字 村 山 友 江

私達が聞いているのはね、この自分の字、自分の部落内で、美しい娘が亡くなった。この(美しい娘を)茶毘してからの、青年達が集まった時の話である。意地勝負というのはね、誰が意地があるだろう、また意地が弱いのは誰だろうかという、意地勝負をすることになった。今日は自分達の字から、美しい娘が亡くなり葬式もして墓に送つてあるんだが、意地勝負であるから、あの女を墓から出して来ることができるか、出してここに連れて来ることができるか、できないかと賭をした。

そうしたら、もう意地が弱い人は、「もうあんたは、死んだ女を墓から出して、ここに担いで来ることができるか、恐くて。」と、意地の弱い人がそういうふうな話をした。「できるよ、死んでいるんだから、墓を開けて死んだ人を、そこから担いで来れないということがあるか、できるよ。」「本当にできるか。」「できるよ、そ

い来うーさんりちんあんなー、ないるする。」「そーないみ。」ないるするひやー、うりならんりちんあんなー、ないるする。」「とーあんしえーないるんさー、銭何万貫取らすぐとう、あんし賭や。」「りち、賭そーるばーてー。死にん人担みてい来すみ、うまんかい墓から出じやちやーま、うままでい担みてい来うーすみりち、賭し。ないんりる男あうてーぬばーてー。

あんさーになー、ないんりる男ぬ、とーあんしえー、あれーないんり言るむん、なていからんだ、私先行ぢやーま、死にん人お側んかい出じやち、自分ぬ棺箱んかい入やーま。棺箱からかんしんちや、生ちちよーる人ぬ賭せーる人ぬ入ちよーぐとう、死にん人お、側んかい出じやち。自分ぬ棺ぬんかい入つち。担みてい、担みてい来んりる人ぬー来るうぐとう。うぬ人お担みらりやーま、墓から入ぢーにーぶく「いやーひやー。」「りち、腰打たつたぐとう、うぬ担みとーる人お、うまうていけー気絶なたんり。いちまでいぬ話いやさ。賭勝負おさぐとうなー、すんりる人やれーまた「いやーがないみ。」「ないん。」「ないみ。」「ないん。」「りち。ないんりる人お先、賭しえーる人お先入やーまなー、

れができないということがあるか、できるよ。」「じやできるんであれば、お金を何万貫出すから、じゃ賭けようね。」と、賭をしたわけだ。死んだ人を担いで来ることができるか、ここに墓から出してきて、ここまで担いで来ることができると、賭をした。できるといふ男はいたわけである。

そうして、できると言つた男が、よしそれなら、あれはできると言うんだから、できるんだから私が先に行つて、死んだ人は側に出して、自分が棺箱に入った。(死んだ人は)棺箱から出して、賭をした生きた人が入つたので、死んだ人は外に出した。自分は棺に入り、そこに担ぐ人は来た。その人は、担がれて墓から出た途端に、「おまえは！」と腰を打つたので、その担いでいる人はその場で気を失つたそうだ。それまでの話さ。

賭勝負をしたから、やるという人達は「おまえができるか。」「できる。」「できるか。」「できる。」と。賭をした人は先に(墓に)入つて、死人は棺から出して、

死にん人お棺から出じやちやーま、自分ぬ入つちよー
てーるばよー。自分ぬ入つち、なーないんりる人ん
入つちるうぐとう。棺から出じやちやーま、担みやー
ま墓から出して、なー出じたぐとう。「いえーひやー。」
し腰打つちやぐとう、担みとーぬ人が腰打つちやぐと
う、すぐばんまかち倒りやーま、気絶なたんりる話や
聞かさつたるばーてー。

自分が棺の中に入っていたわけ。自分が入って、もう
できると言った人がいるんだから、棺から出して、担
いで墓から出たわけだ。「おまえは！」と腰を打ったら、
すぐバンと倒れて気を失つたという話は聞かされた。

67 屁 こ き 嫁

話者 大城 ウ ト (明治四十一年九月二十日生)

翻字 村山友江

あのね、お母さんが娘さんのね、嫁入りの時の注意であつたでしょう。もうあんまり娘さんがね、おなら出しで
あつて、もういつも「踵どーマーシュー。」という言葉をね、言つたそうだ。それでその「踵どーマーシュー。」
を今になつても時々聞かれる時があります。

話者 大城 重輝（明治四十一年二月二十日生）

翻字 安里 和子

平敷屋朝敏は、その政治家でもあるし、また、非常に知能の発達した生き方でもあったといふことは、私達の話や聞きよーびーしが。うつさ山原歩ち、初みてい、命令ぐとうさーに山原旅、行き戻やーさぎーな、道中うてい、便入ぶさぬ、あんさーに、自分ぬ便入ちうまんじ、用たしてい、立つち家かい来んでいしーねー、便入つちえーん所んかい、山亀ぬ寝んとーてる。うぬ山亀ぬ上んかい、自分や便おいちさぐとう、しー立つち歩つちゆんでいしんせーるばーに、平敷屋朝敏が歩ちゆんりさくとう、うぬ山亀ん、一緒追てい来くとう歩ち。

歩ち、「珍しーむん。」とう、見じゃーいさくとう、やっぱりうぬ場に、平敷屋朝敏のー
 山原ぬ旅え 幾度んさしが
 糞ぬ旅すせー 今度初め
 と。歩ちやくとう、その自分のなんでただその人おー

平敷屋朝敏は、政治家でもあるが、また、大変頭のいい人だったといふことを私達は話を聞かされていたが、そんなに（たびたび）山原旅をしているのに、初めて、命令で山原の旅、行き来している時に、道中で便意をもようしたので、そこで、用をたして、家に帰ろうとした。すると、（その）大便をしたところに、山亀が寝ていたわけだ。その山亀の上に、自分は便をやつて立つて歩こうとすると、平敷屋朝敏が歩き出すと、その山亀も一緒について来て歩き出した。

それで、「不思議なことだ。」と見て、（そして）やっぱりその時に、平敷屋朝敏は、
 山原の旅は 幾度もしたが
 糞が歩くのは 今度が初めて
 と（歌った。）それで、自分でなんとなくその人は何も

ぬーんくい、歌詠りん上手やいみせーてーくとう。うつ
ちやんでいる歌あ伝え、私達あ話聞ちやびたん。

かも、歌を詠むのが得意でいらしたので、詠んだとい
う歌、伝え話を私達は聞きましたよ。

採集S52・2・22 読谷村民話調査団第十五班 八遠藤庄治

注 平敷屋朝敏 彌霸親方の長男として一七〇〇年(尚貞王三十二年)に首里に生まれ、父の後をついで地頭となったが、友寄安乗と謀って島津藩吏川西平左衛門の館へ投書して当路者(蔡温等)を誹謗した罪で一七三四年(尚敬王二十三年)安謝港に於て八付(死刑)の極刑に処せられた。平敷屋は和学に通じた才人で彼の作たる組踊「手水の縁」は組踊中の恋愛至上を賛美した作として有名である。

69 つんぼ 夫婦の話

話者 知花周一 (明治二十三年七月五日生)

翻字 島袋智子

あれー夜ぬむいやいびーんてー。あぬなー、みんな
じらー、夫婦みんなくじらーやるぐとーんやー。

これは夜の、睦言だね、もう耳の遠い、夫婦とも耳
が不自由だったんでしようね。

あんさぐとう、鼠おなー天井んかい上とーてい
話い聞ちよーるぐとーん。聞ちやぐとう、「あいえーやー、
うぬ里前たーや、あんし夜んピーリンパーランしーしー
しえーるやー。」りち、鼠のーさぐとう。鼠のー笑とー

それを、鼠は天井に上っていて、二人の話を聞いて
いたようだね。聞いたら、「かわいそうに、この夫婦は
睦言にしてみてもピーリンパーランと大声で話してる
ね。」と、鼠は笑ったんだね。耳が不自由だから、ピー

70 犬の足跡

るばー、みんくじらーりち、ピーリン、パーリンそーしが、まだすぐとう、部屋んかいさぐとう、「あいえーやー、忘らんさやー、里前やみんくじーたーや」ぬーんちなー、うぬ鼠ぬ話やたんり。

あんさぐとう、話物語する間ぬそーたしがやー、ちゃーピーリンパーリンしち、毎日うぬ日や忘らんさやーりち、うっさやたんりち。

人お犬とう寝んたらー、もう人間とー寝んらんそーうでありました。人、人間とー寝んらんてーるふーじやいびん。

あんさぐとう、あるところんかい、ぬぐわいやー、両方ぬ親父んちゃーが、「あれー何りち犬とう寝んとーんでいち分かいが。」りちやぐとう、「ありが背中調び

リン、パーリンとしていた。また、部屋に入り、「ああ、忘れられないんだね。二人とも耳が不自由な者たちよ。」と、その鼠が笑っていた。

だから、話、物語をしている間はいいのだが、もういつもピーリンパーリンしたら、色気もない。毎日その日のことは忘れられないんだねとそんな話。

採集S52・2・22 読谷村民話調査団第十四班 八伊芸弘子V

話著 松田長秀 (明治四十二年十一月二十七日生)

翻字 知花春美

人は犬と寝ると、もう人間とは寝られなかつたそうだ。

そこで、あるところで、両方の親父が、「あれはどうして犬と寝ていると分かるか。」と聞くと、「あれの背中を見れば分かることだ。」と、隣の人が言ったようだ。

れー分かいいさ。」りち、向こうぬ隣ぬ言ちえーるばーや
いびんてー。「うり分かいいれーありんやんよ。」りちや
ぐとう、背中調びらち、両方あんなたぐとう。

犬とう寝んたんりぬ話。犬ぬんかい抱かりわからし、
やつぱし背中んかい爪形が入るといふ。

「それが分かるのだつたらあの人もそうだ。」というこ
とで、背中を調べてみると両方そうであつた。

犬と寝たという話。犬に抱かれると、やつぱし背中
に爪形が入るそうだ。

採集 S 52・2・22 読谷村民話調査団第十五班 八遠藤庄治

71 犬の罰があつた夫婦

話者 喜友名 市太郎 (大正元年十一月二十三日生)

翻字 知花春美

犬が、若い夫婦よ、これもう結婚当時、犬がさがつたらしい。自分の玄関の前で、他の犬がさがりをしておつた
らしい。夫婦でね、交替交替ね、バケツに水を汲んできてね、すぐぶちかけたらしい。犬のところに。そうしても
抜けない。そうしたらね、後で、もう時間があれ過ぎたらね、ちゃんと離れるから。

そうしたら、その夫婦ね、その犬のね、いえばバチみたいなもの、そうしたら夫婦もその時から病院通いしてそ
の若夫婦だよ。そうしたら、その夫婦もね、犬みたように、犬同様に抜けんららしい。

そうしたら、近所の人がね、おかしいなあと思つて、いつもは朝早う起きるのにね、二人共稼いだから、おかし
いなあと思つてね、いつまでも人間のことだから近所の人もう恥ずかしがつて、そのまた、自分の家帰つて来て
ね。

また二回目行つたらしい、それでも同じ。そうしたら声もかけないさ、その夫婦は。そうしたらたいたいたらしいよ、頭をそうしたら、その人がね、その人も同じ先生を呼んで来てね。医者、産婦人科行つて、そしたら病院には行かないが、自分の宅で、そうしてしばらくしてから犬と同じように離れた話。

採集S 52・2・22 読谷村民話調査団第十班 八山城悦子V

72 犬

と

女

話者 喜友名 市太郎 (大正元年十一月二十三日生)

翻字 知花春美

那覇でね、あのうその主婦と犬と、とっても犬はかわいられていたらしい。その奥さんが、まあもちろん年若い、それで、主人はね、内地へ。そこは商売人だから店。行つて、そんであのう。セールスマンに行つて、約一カ月ぐらいまあ、かかったでしようね。その間まで帰つて来ない。そこはもう、店の卸問屋だから、その店は、そんでその従業員もおるし、店員。

そうしてから、その奥さんがね、とても犬とね、まあ愛深かったかどうか知らんがね。そうこうしてね、そんでもう長いこと、下の店員がね、見うけたらしいね。そうしたらあのう、病院行つてね、先生頼んできて、本人が動くことできないから、その店員らがね、あのう車乗せて、病院行つてね、そうしてから何か注射か何か、どうか知らんがね、そうしてやっつてからひき離れた話。

採集S 52・2・22 読谷村民話調査団第十班 八山城悦子

沖繩の始まり

話者 喜友名 市太郎（大正元年十一月二十三日生）

翻字 知花春美

国頭のね、もういちばん人間の住んだ所ね、国頭という話を聞いた。

それで、そこにね、アーマンチューはね、国頭に先来たらしいですが、それで、アーマンチューの子がね、ウナイ、イキー、男はヨナサン、女はナカサン、二人ね、来たらしい。

二、三月のときね、猫がもう恋をするのを見てそんなら人間もね、あつ動物もあういうふうになら、恋もできると思つて、その二人、ウナイ、イキーね関係したらしいね。

そうしてからあもう、その人はね、あつちこつち行つたし、こつちではもう人間が増えるでしょう。あつちこつち、沖繩、ちらばり、ちらばり、それで、門中も元のひとつだがあつちこつちにちらばつて、世の中の人間はその人が産し繁盛しないとできないって、アーマンチューはね、こつちも歩いてみたらね、こつちも

国頭に、人間が最初に住んだ所は国頭という話を聞いた。

そこに、国頭に、最初に天から人が降りて来たらしい。それで、天から来た人は兄妹で、男はヨナサン、女はナカサン、二人で来たらしい。

二、三月の頃、猫が交尾するのを見て、そうなら人間も、動物もあのようにできると思つて、その二人、兄妹も真似てみたようだ。

それからその人は、あつちこつち行き、子孫が増えていき、それが沖繩中にちらばつた。門中は元はひとつで、子孫があちらこちらに行つて、世の中の人間はその人たちが増していったということである。天から来た人は、こつちへ来ると、こつちも良い所で住めるな、またあそこも住めるなということ、世の中はあ

良い所、住めるな、またこつち行つても住めるな、そ
んで世の中、あまくまいうてそういうたとえ話。

ちらこちらというたとえ話である。

採集 S 52・2・22 読谷村民話調査団第十班 八山城悦子 V

74 夫 振 岩

話者 大 城 利 徳 (明治四十一年四月二十四日生)

翻字 上 原 ヨ シ

昔んかしえてし、金持いえま人ちゆぬ、うぬ女いなかぬ方かたん金持いえま人ちゆや、
男いみがぬ方かたん金持いえま人ちゆなていや、うぬ親うやん達ちやが、「な一貧乏ひんすう
な者むんぬんかいや、私達わったあ女いなかん子ぐわあくいららん、貴方いったあ
男いみがとうや、な一夫みーとう婦ななさな。」りちぬ話はなし、やるば
て。

昔、金持ちの、女の方も金持ち、男の方も金持ちだつ
たので、その親達が、「貧乏人には、私達の娘を上げる
ことはできません。貴方の息子と結婚させよう。」との話、
親同士の話であった。

あんやしいみがが、女いなかん子ぐわあ、美ちゆら一ちゆなていや、またう
ぬ男いみがりしえ、カンパチャ注①やるば一ちゆよ。カンパ
チャいなかなていや。あんしいなかさぐとう、くぬ女いなかぐわ一ちゆ
「あんぐと一ぬカンパわんチャーとう、ないんな。私わんね一
カンパいなかチャーいなかや好いかん。」り言いちよ一いなかるふ一いなかじて一いなか女いなかお。
あんやしいなかが親うやん達ちやや「あんしいなかえ一いなか合が点てんの一いなかあらんで一

そうであるが、娘は美しい人で、その男というのは
カンパチャーであった。それでこの娘さんは、「あんな
カンパチャーとは結婚できない。私はカンパチャーは
嫌いだ。」と言ったようだ。女の人はそうだけど、親達
は、「それでは納得ができない。各々、私達の家庭も大
丈夫だし何の不自由もなく生活もできる家庭だから、

な―各々、あがた―家庭やないるすぐとうや、何ぬ不自由ん無らん、なさり―る家庭やぐとう、ちやしんり―、貴方あ男とう私達あ女とうぐ―なさな。あんやしが、女ぬふと―んで、あぬ男あカンパチぬあんりちな―男あ私達あ女ぬふと―るふ―じやんれ―。りち、親ん達がな―話そ―るば―て―。

と―あんやら―、親ん達あ考や―、親ん達あ考さ―まや―、「貴方あ女んや―私達あ男んや―、いちか―あぬ浜ぬ、島ハンターぬ岩の上んじ二人ぐ―り―相談ぐわ―良い話さ―ま、でい―あままで―連てい行か。岩の上んじ連てい行ぢや―まあつた二人ぐ―なせし、あんさ―ま親ん達戻てい來。」りち、あんし、親ん達や戻てい來るば―よ。

あんさ―に、うぬ若女と若男とな―、あぬ岩んかい居るば―て―、あんしきぐとうな―、浜風んぶ―ないぶ―ないな―風ぬちや―ま、な―寒さしえ―や―女お寒さぬガタガターし、うぬ男んな―ガタガタンすしが、寒さんあしがや―、るく女ぬガタガターしな―、寒さぬ耐じらんな―ガタガターそ―る所んかい男ぬ綿着物ぐわ―、うち脱じや―いガタガターそ―る女ぐわ―んか

どうしても貴方達の息子と、私達の娘を一緒にしたい。だけど、娘が嫌っているようだ。あの男は、カンパチがあると私達の娘が男を嫌っているようだね。」と親同士が話をしていた。

そしたら、親達の考えで、親達の相談で、「貴方の娘も私達の息子もいつかあの浜、島の端の岩に、二人に良いように話をしてあそこまで連れて行こう。岩の上に連れて行き、二人きりにして私達は戻って来よう。」と計画した。そして、親達は戻って来たようだ。

そこで、その若い娘と若い息子は、あの岩の上のいたわけさ。すると今度は、海風がビュービュー吹き、もう寒いでしょう。娘は寒さにブルブル震えて、男も寒くはあるが、あんまり娘が、ブルブル震えて耐えられないぐらい寒そうにしているので、男が、綿入れの着物を脱いで震えている娘に着せてあげた。

いうち着していい。

温くなたぐとうやうぬ女りしえーやー、ふんとー
んちゃ肝心できていや、容貌え悪さーあていん肝心
でいきていんちや、うぬ男ぬ心おでいきていやー、な
私にんかい寒さガタガターそーし自分ぬヒーター
ぐわー、脱じやーまや女んかい、私にんかい着して
たさ、くぬ男あんちやなーただ思てーならんむんなー。

二ーカーや、二人や夫婦なりわるやる」りち。

互になー、女ん合点男んなー合点そーるばーよ。

なーカンパチャーやたんでーがん、夫すんりち、合点
しさぐとう。今度お、親ん達んやー、「うねひやーなま
ねーまた、若女んやカンパチャーんやー、なー夫婦
なてい互に合点そーびんでー。なーうんぐとーる大事
んある。ヒタイヒャー！でいきだちやんどー。」りち、嬉
しなー喜り家んかい帰てい来るばーてー、帰てい来。

あんしさぐとうなーお互いに男ぬ方ん女ぬ方ん喜さ
しなー祝し今度お祝ぬ通い。

うぬ夫婦達やー、あぬ岩ぬ、あてるすぐ互に、
夫婦あすぐぐーなていや、じこー良いあんべーなとー
しが。あれーやー、縁結ばする岩や名付きんしわるや

温かくなつたのでこの娘は、「ほんとうは心がいいん
だね。顔は悪くても心が良くて、もうその男はやさし
いね。もうブルブル震えている私に自分の着物を脱い
で、着せてくれた。この男の事はたやすく考えてはい
けない。将来は、二人夫婦になろう。」と思つた。

お互いにもう、娘も納得して、男も納得しているわ
けだね。カンパチャーであつても夫にしようとなつた。
今度は、親達は、「良かった。今は娘もカンパチャ
ーも夫婦になるとお互いに心が通じたようだね。とても
いい事だ。ヒタイヒャー！でかしたぞ。」と嬉しく思
喜んで家に帰つたわけだ。

そしてお互いに、男の方も女の方も喜んでお祝いし
た。

そして、その夫婦はあの岩があつたからお互いに、
夫婦になれて大変うまくいっているのである。あれは、
縁を結んでくれた岩だから、名付けしよう。あの岩は、

る。あぬ岩やあがたーがなーしぐ夫婦結ばちや、栄
い果報しみてーる岩やぐとうありんかいや、名んあり
わるないはにりち、夫振岩ややし注②が、あれー栄いの岩
りち今ん夫振岩り言いやすんよ。

私達を夫婦として結ぶ果報の岩だからあれには名前も
あつた方が良いだろう。夫振岩となつたが、あれは栄
えさせた岩だと、今も夫振岩と言われている。

採集S 52・2・22 読谷村民話調査団第十五班 八新垣修子V

注① カンパチャー 頭の傷跡などにできるはげのある人をいう。

注② 夫振岩 名護市羽地の源河のほほ真北一・四キロメートル沖にある海拔三・五メートルの岩礁をいう。

75 井戸水比べ

話者 知花周一 (明治二十三年七月五日生)

翻字 島袋智子

なー井戸ぬ、うくわんし、官人ぬ、字や全部廻てー
るぐとーんやし、廻たぐとう、んちやなー小湾ぬんか
い井戸ぬあてい、やしかなー、飲みわん飲みわん、まー
さーねーらんよー。

井戸の監視をするために、ある官人が、各字を廻つ
て歩いてた。廻ってみると、小湾の方に井戸があつ
たが水を飲んでもちつともおいしくなかつた。

さぐとう、あんさーまさぐとう、なー私達あ字ぬあ
まんかいシリミジりちあんでー、シリミジガー、うぬ

今度は、私達の字高志保にシリミジとってあるが、
そこへやつて来た。シリミジガーとってその水を

水飲らぐとうやー、くりやかりつばな水えねーらんりち。

さぐとう、あんしあんししち字廻てい歩ちやぐとう、また、座喜味ぬイリガー、イリガー、うぬ水飲みばー、くりん上等やつさーり。

あんし、喜名からありんけーありんけー、また伊良皆、シリジョーぬ井戸、うったつんけー、まーんかい上等。

さぐとう、なー、はーくれーうりやつさーりち、私達あ親んちやーから伝い話。親んちやーんまた、私とー同むん、まーからか聞ち、やたんりち、読谷山のー、うつぎ。

76 阿麻和利と護佐丸

ふんとーアマンジャナー^{注①}ぬ考さーに、首里城^{注②}んかい、

飲んでみると、これほどおいしい水はないと言った。

次に、こうこう字を廻り歩いて、座喜味に來た。座喜味のイリガーの水を飲めば、これまた上等だと言った。

こうして、喜名からあそこの方へ、伊良皆に行つたようだ。伊良皆のシリジョーの井戸にも上等だと言った。どこへ行つても上等だと。

こんなわけで、もう上等の井戸ばかりだったという話。私は親からこの話を聞いたんだよ。また、親も私と同じようにどこからか聞いたようだ。読谷山の井戸の話。

採集S52・2・22 読谷村民話調査団第十四班 八伊芸弘子V

話者 比嘉 徳太郎（明治二十五年一月十日生）

翻字 知花春美

ほんとうはアマンジャナーの考えで、首里城に、護

護佐丸ぐさまるおくまんかい戦いくさゆしかきーるために、敵討ていうちうち道具どうぐ、刃物道具はぶんどうぐうつちゆんりちやぐとう。まさか護佐丸おあんねーさんりち、王様おんさまの一言いんせーしが。嘘うそり思おもいらー、うまから使ちえやらち、使ちえやらちやぐとうやーさい。

くぬ森川もりかわぬ子しや首里城すいりじやうとーてい、勤ちとみてーるえーだし、西原にしげんぬひやー、いいるんさー、下役人ひちやくみやか、頭かしらやてーるちむてー。

自分じぶん一人ひとり行いちえーならんぐとう、二人ふたり行いきりち、二人ふたり首里城すいりじやうから使ちえたぐとう、くぬ屋慶名やけなアカーりしとう二人ふたりさーに、ジーンマ上うんかい待まつちよーてい、首里城すいりじやうぬ護佐丸ぐさまる様子よて見みがやらさつとーぐとう。王おうから行いぢやぐとう。

一人ひとりやたつ殺ころさーい、「いやーん本ほん当とうにあんやいびーたんりち言いいうすみ、言いいさんらー、いやーん殺ころすしが。」りちやぐとう、命いのちあたらささーい、「本ほん当とうに言いやびーん。」りち、アマンジャナーんかい返答へんたさーいやーさい。「首里城すいりじやうんかい、本ほん当とうにあんやいびたん。敵討ていうちうち道具どうぐうちやびたん。」りちされーやーさい。

「あーあんさー、あんしみてーならんぐとう、うま

佐丸さまるがここに戦いくさいを挑いちむために、戦道具いくさどうぐ、刃物はぶんの道具どうぐを作つくつていと告つげると、まさか護佐丸ぐさまるがそんなことことはしないと、王様おんさまは言いわれた。嘘うそと思うなら、使ちいをやつて（調しらべてみなさい）と言いつたので、使ちいの者ものをやつた。

この森川もりかわの子こは首里城すいりじやうで勤ちとめている間まは西原にしげんぬひやー、いえば下役人ひちやくみよりは上うだつたようだ。

一人ひとり行いつてはいけな、二人ふたり行いきなさいと、二人ふたり首里城すいりじやうから行いかされた。屋慶名やけなアカーと二人ふたりで、ジーンマの上うで待まつていた。首里城すいりじやうの王おうから護佐丸ぐさまるの様子よてを見みに行いかされた。

一人ひとりは殺ころされて、「おまえは本ほん当とうにそうだつたと言いえるか、言いえなければ、おまえも殺ころすが。」と言いわれたので、命いのちが惜あはしくなり、「本ほん当とうに言いいます。」とアマンジャナーに返答へんたした。「首里城すいりじやうに本ほん当とうにそう言いいます。」と。「戦道具いくさどうぐを作つくつています。」と報告ほうこくした。

（王様おんさまは）「あゝそうさせてはいけな、ここか

から、王ぬ旗あ上げてい行ぢ、戦ゆしかきり。」りち、護佐丸かい戦ゆしかきたぐとう。

護佐丸おあん言いさやーさい。「うー、私ねー敵道具討ち道具すしん、鍛冶すしん、王んかいぬ敵討ち道具おあらん、百姓んかい使用する鍬、ヒーラどう作とーる。いやーが嘘り思いらー、私あ胸ぬまくとう開きてい見しら。」りち、護佐丸ぬウナジャラン切腹し死ぬんどーさい、死ぬぐとう。

うぬぼーるやいびん。中城若松りーしえー、乳母ぬ乳いきうとーるばーてし、「くれー私にきうていたほり。」りやーい、うれー抱ちやーい逃ぎてい今帰仁湧川ぬ按司ぬ前んじ育わーち。中城若松りしえーあんやいびんうぬ根ぐいやいびんり。やぐとうあまんじ育いたぐとう。本当やあんねーあらん、アマンジャナーぬ企みやぐとう。くぬ護佐丸お自分くる切腹、私あ胸ぬまくとう開きてい見しらりち切腹さびーしえーや、護佐丸お。

あんさぐとう、後お戦寄しかきたぐとうや、アマンジャナーが首里んかい。あんさぐとうあまから追ていちゃーに、アマンジャナーぬ家来しんかんちやー追てい

ら王の旗を上げて行き、戦いを挑みなさい。」と、護佐丸のところへ戦いをおし寄せた。

護佐丸はこう言つた。「うむ、私が敵を討つ道具を作るのも、鍛冶をするのも、王に對する戦道具ではなくて、百姓に使用す鍬とかへらを作っているのだ。おまえが嘘と思うなら、私の胸の内を開けて見せよう。」と、護佐丸も妃も切腹して死んでしまった。

その時であつた。中城若松というのは乳母の乳をあけていた。「その子を私に下さい。」と、子供を抱いて逃げて、今帰仁湧川の按司のところ育てた。中城若松というのがその根本だそうです。そして、今帰仁で成長した。

本当はそうではなくて、アマンジャナーの企みであつた。しかし護佐丸は自分で切腹、私の胸の内を開けて、真実を見せてあげようと切腹したんでしよう、護佐丸は。

そうして、後に、アマンジャナーは首里に戦を挑んだ。すると、そこから追われて来て、アマンジャナーの家来たちは追われて来て、楚辺の戦前の牛モーへこ

ちやーに楚^す辺^{へん}ぬ戦^{せん}前^{ぜん}ぬ牛^{うし}モーやーさい、へうまーだてー
んぬ松^{まつ}やいびたさ。うままでいにちゆふあーらかちみ
らつたぐとう、うまーエンミさ^{注①}びたん、悪^{わる}さいびーた
んりぬ、エンミマーチューやーさい。

また読^{よん}谷^{たに}山^{じやう}大^う木^きやーさい、うぬアマンジャナーぬ家^け来^{らい}
ぬ追^おてい^{ちや}に逃^{ひん}ぎてい^だてーん。じーふぎとーる木^きぬ
中^{なか}んかい、入^いつちさぐとう、うぬ人^{ちよ}お殺^{ころ}さりーやさん
よーくーそーるばーやいびんてー。水^{みづ}え、都^と屋^やぬ上^いぬ
トウクブサーりち、井^か戸^いぬあいびんよー。都^と屋^やトウク
ブサーりちあしえー、うぬじーぬ中^{なか}んかい入^いつちよー
ていしまとーる家^け来^{らい}ぬ、都^と屋^やトウクブサーから水^{みづ}え飲^ぬ
り徳^{とく}ぬある武^ぶ士^しりちやいびんよー。

都^と屋^やトウクブサーや、くなげー信^{しん}じびーたしがよー、
私^わあ世^ゆなていからやいびんよー、あーうれー信^{しん}じらん
ていんしむん。都^と屋^やトウクブサーりしえーや。とに
かく阿^あ麻^ま和^わ利^りぬ考^{かん}さーい、くぬ森^{もり}川^{かわ}ぬ子^しぬ、いいるん
さーヒータかんでいあんたとーるちむやぐとう。

こにはたくさんさんの松があつた。そこまで逃げて来る間
にたくさんさんがつかまえられるので、「悪うございま
した。」ということだ。エンミ松です。

また読谷村大木です、アマンジャナーの家来がだ
いぶ追われて逃げて来た。ある人は、木の穴に入つて
いたので殺されずに済んだようだ。水は、都屋の上の
方に井戸があるよ。都屋トウクブサーとあるでしょう。
その穴の中に入つて、住んでいる家来は、都屋トウク
ブサーから水を飲んだので、徳のある武士といわれた
そう。

都屋トウクブサーは、以前は信じていたが、私の世
代になつてからは、それは信じなくてもいい。都屋トウ
クブサーというのはね、とにかく阿麻和利の計らいで
この森川子は脅迫されて嘘の報告をしたわけである。

採集S 52・8・14

読谷村民話調査団第十一班 〆知花利江子・上江洲康子・名嘉真宜勝

注① 阿麻和利 北谷屋良村に十五世紀初頭に生を受けた英雄である。十歳の頃まで体が弱く、山に捨児されていたが、山中で蜘蛛が

巢をはるのをみて網をつくりだしたという。成長の後、勝連按司につかえたが、勝連按司茂知附を亡ぼし勝連城主となる。また、海外貿易なども盛んにしたとされるが、護佐丸や第一尚氏と対立抗争し、一四五八年に越来按司（鬼大城）にひきいられた軍勢に亡ぼされてしまった。阿麻和利の墓と称されるものが大木のエンミ原にある。

注②

首里城 那覇市首里当蔵にある。中山王の居城であった。城の創建年代は不明であるが、尚巴志三山統一後の築城ではないかといわれる。今次大戦で壊滅され、僅かに城壁の一部を残すのみとなった。

注③

護佐丸 一四二〇年代の英雄、護佐丸はもと大北（読谷山、恩納）地方を領し、最初山田城にいたが、後に座喜味に城を築いて移った。ここで北山地方をおさえ、長浜港を利用して南蛮貿易を行ったといわれる。更に、その娘が尚巴志の妃（夏氏大宗由来記には尚泰久の妃）となり、北山も一四一六年に滅亡したので、一四四〇年頃に中城城を築造して移った。

注④

エンミ原 現在の大本部落で、古堅小学校西側一帯の原名。そこに、阿麻和利の墓がある。「ウェミ」とは方言で「降参する」意で首里の追手が阿麻和利を討取る時に言った言葉が小字名として使われるようになったといわれる。



阿麻和利の墓

77 阿麻和利〈網発見〉

話者 松田長秀(明治四十二年十一月二十七日生)

翻字 知花孝子

くれー、七ち八ちまでー、歩ちーさびらんよー。やつ
ばし、なー親ぬあきらみやーま、なー山んじ捨ていれー
りち。(うれー、例え話どうやいびんどー。)

あんさぐとうなー、上方見ちよーてい、蜘蛛ぬ自分
ぬ家かきーし見ちやーま、うりから網しちんじやち、
ぬー魚取いが、魚うつちーが行ちやーま、魚あ手柄あ
できたぐとう、うぬけー隣けー隣かいむる配じ、う
りからなー、ただいちゃんだし食まちやーま。

後ぬんずみねー、戦しかきたぐとう、なー自分やなー
親父ないんでいやーま、自分が魚食まちえーしえー、
味方にそーやーま、戦んかい連てい、うりから、きらつ
ているうぐとう行かねーないびらん。なー皆味方んか
いなやーい。あんしる屋良ぬアマンジャナーりしえー、
うぬ子あ、アマンジャナーりしえー。うりからぬ想像
やたんりさ。

これは、七つ八つになつても歩くことができないで
ね。それだから親も諦めて、もう山に捨てようといっ
て。(これは例え話であるんだよ。)

そうして(山に捨てられた阿麻和利は)上の方を見
ていると、蜘蛛が巣をつくっているのを見て、それか
ら網をつくり出した。それで魚取りに行き、大漁だつ
たのでその隣近所に配りただで御馳走した。

後には、戦争をしかけて、自分が大将になろうと。
自分が魚を配ってあげた人達を見方に連れて、戦争に
引き連れて、ただで魚をもらったものだから味方になつ
て行かなければということ、皆、味方についたそう
だ。それから、屋良のアマンジャナーというのはその
(立てなかつた)子を、アマンジャナーというさ。そ
れからの想像であつたそう。

並松を植えた国頭親方

話者 国 吉 真次郎 (明治二十七年二月八日生)

翻字 大城 純子

国頭親方という人は、ちようどモーイ親方の親の時代の人であつたらしいですが、私が聞きようとしては、その人が非常に、えー立派になつたことは、いえば世の中のためになつたことは、ちようど名護からか分からんが、私が覚えてゐるのは、山田から那覇までの両方、いえば県道の両方側、松植えて、その松は非常に成長して、戦争前までも、あつちこつちに残つていました。

そして、その人の記念であると。そして、その人も偉い人といわれたそうだ。その並松というのは、もう、今の六十以上の人だつたら分かると思うが、戦争前まで残つていた。とにかく残つてゐるのは、あのおう比謝の字の両方もある。そして、その人は並松植えて、偉い人と言われたそうだ。

採集 S 52・8・14 読谷村民話調査団第八班 八山城悦子・坂崎 弘 V

79 高志保城の話

話者 大城 重輝 (明治四十二年二月二十日生)

翻字 知花 春美

えー、高志保部落おおよそ今から四百四、五十年前にでいきとーんでい、私達やそーびーしが、また何で

高志保部落は今からおおよそ四百四、五十年前に出来たと、私達は思つてゐるが、どうしてそう言うのかと

そういう、何んりちあん言いがりーるんしえー。

その高志保に根人という屋号があしが、その根人ぬ人が、その昔、お互ぬ護佐丸城造いる時にうぬ人お、うまぬ地主なてい、地屋敷ぬ当番、やつぱし地当やんしえーたんだりぬ話聞ちゃーに。やしがうぬ人ぬうまにかいめーたんだりぬ話。あんさーに火ぬ神え、うぬ人ぬ作たんだり。うぬ話聞ちやぐとう。

やつぱしそうすると、うぬ人お元祖るやがやーまた元祖りーしえー、イリヘンサジぐわーるやし。くぬ人お、現在、根人りーしえー残ていんうらん。あれー屋敷え根人ぬ屋敷やたんだりち分かとしが、その方が何処んかいが行ぢよーらー分からん。

昔ぬ話ぬ、その、高志保ぬ部落ぬ名りーしえー、初めぬ言い方あマチヂカサ、ウチドウマイりちさつとーい、うりからタカムチりぬ部落ぬ名んかいは変わていちゃん。今変わてい、現在高志保ちそーしが。

うぬ字からし見じーねー、我々はいすぐしーねー、まじ、マチヂカサ、ウチドウマイりしえー、昔、城造いぬんしえー、うぬ造ていぬすばひらー町りち考てい、マチシチャりぬ言葉んあたんだりぬくとう。ま

いうことは（はつきりしない）。

高志保に根人という屋号があるが、その根人の人が、昔、護佐丸城（座喜味城）造る時に、その土地の主で、屋敷の当番、地当だつたという話を聞いた。その人はここにいたという話。それで火の神はその人が作つたという話である。

そうすると、その人が元祖なのだろうか。しかし、元祖はイリヘンサジぐわーだがね。現在根人というのは残っていない。屋敷は、根人の屋敷だつたと分かっているが、その方が何処へ行つたかは不明である。

昔の話だが、高志保部落の名は、最初は、マチヂカサ、ウチドウマイとなつて、それからタカムチという部落の名に変わつていった。現在は高志保になつてゐる。

その字から考えると、まず、マチヂカサ、ウチドウマイというのは、昔、城を造ると、その周辺を町と考えて、マチシチャという言葉もあつたということである。またマチシチャという言葉は按司から授かつたと

たマチシチャリぬ言葉、按司から授かたんりる話ん聞
ちよーい。

それからしーるんしえー、くぬ地頭りーしえー、
地当やたんりる人お、やつぱりうぬマチヂカサりる
言葉とうやーい、高志保ぬ村ん、按司ぬ下ぬ部落やぐ
とう、あんさーいマチヂカサ、ウチドゥマイりちさが
やー。またなーちえー字から考ていしーねー、那覇
ひんぬ町りぬすばぬウチドゥマイぬ字るとうみそー
ちやがやー、ウチグサどうやたがやーりち考いしが、
やつぱりさういところまでははつきしえーうらん
しえー。今、部落ぬ証拠んかい残てーうらんぐとう
残念にやんりちそーびーしが。

今ぬとうくろお高志保ぬ部落ぬ根元やイリヘンサジ
ぐわーというところに何されておるが。イリヘンサジ
ぐわーがやつぱり昔からぬ根所というなんで、そん
でそのう、拜所造たる人おイリヘンサジぐわーんかい
めんしえーる御元祖、うぬ人が拜所造たんりち崇めて
おられるさうですが、まあ、それは間違ーねーらん。
イリヘンサジグワーに根元や残とーるぐとーしが。

またくぬ部落んかい人ぬ住みちちやんでいしー

いう話も聞いている。

そうすると、その地頭、地当だった人は、やつぱり
マチヂカサという言葉をとつて、高志保は城のそばに
あるので、マチヂカサ、ウチドゥマイと付けたのであ
ろうか。またもうひとつは、字から考えると、那覇の
そばにあるウチドゥマイの字をとつたのか、ウチグサ
だったのかと考えるが、そこらへんははつきりしてい
ない。現在、部落に証拠も残つてないので、残念に思っ
ていますが。

今のところ、高志保部落の根所はイリヘンサジ
ぐわーというところだが、そのイリヘンサジぐわーが
昔からの根所で、イリヘンサジぐわーに根元は残つて
いるようですが、拜所を造つた人は、イリヘンサジ
ぐわーにいらつしやる御元祖、その人が拜所を作つた
というところで、崇めているさうですが、それは間違い
ありません。

またこの部落に人が住みついたとすると、水がなけ

ねー、水ぬねーらんねー、人間のー生ちからんでいち。
それで御嶽えイリヘンサジぐわーぬ造てーぐとう、
水えまた、安富祖一門ぬ造たんりる伝話い先輩ぬ
方々んちやーから聞ちよーびーしが。またやらり思
とーびん。水りーしえー、安富祖一門ぬ拝りからる他
ぬ人達あむる拝まぎーぐとう、井戸や必じ安富祖一門
が造てーんりち、私達あ先輩たーから聞かさつとーし
が、なるふどうあんやんやーというところ。
まず、字ぬ根所りーしが、根人りちやんてーん何
やがやーということが不安であると。拝所にちー
てー、もうメンデイラ、クシデイラ、うりから守い神、
大明神、不動、地ぬ神というなんで、残とーびーしが、
これも拝所、拝所はつきりしめーびーぐとう。

れば人間は生活できない。それで御嶽はイリヘンサジ
ぐわーが作ったので、水は安富祖一門が考えたという
伝え話を先輩の方々から聞きました。そうだと思いま
す。水は、安富祖一門が拝んでから他の人達は拝むの
で、井戸は確かに安富祖一門が造ったと、私達の先輩
から聞かされているので、なるほどそうだねというこ
とです。

まず、字の根所というのが、根人といっても何なの
かとはつきりしない。拝所については、メンデイラ、
クシデイラ、それから守い神、大明神、不動、地の神
というふうに、残っているが、拝所、拝所はつきり
している。

普天間権現の神かみえまささあみそーち。大刀え、うぬ人お唐旅とうたひかいめんそーち、唐旅とうたひからめんせーがとうー、普天間権現のー、まささあみそーち、くぬ大刀え預あひかていくいみそーりりち、手ていうさぎてい預あひかていくいみそーりりち。うぬ唐旅とうたひかい、めんそーち、うぬ唐旅とうたひしちえーる間ま、うぬ大刀え草ぬ中ちゆうんかいあたりにさりぬ、おじい達たおじい達たから語かたい話ばなしい聞きちやし

が。
あんしうぬ大刀持もちつち、盗人ぬすぬ来、行いきわー、またやまさつてーういし、うぬ大刀え、盗とうつてーならんむんならんむんなーりち、また元もとんかい返かへち来ちういし。幾人いくたいが、あんし大刀え持もちつち行いち盗ぬすり行いちやんりしが、くぬ大刀盗たういしえーあらん。くれー唐旅とうたひしめんせーるえーが、くぬ大刀え預あひかとーきりぬくとうなていくり預あひからんねーならんむーりち、大刀預あひかてい唐旅とうたひからめんせーがえーま、うぬ大刀えうまんかい普天間ふてんまかい

普天間権現の神様は、靈驗あらたかであつた。大刀を、ある人が唐旅に出るので、旅から帰るまでの間、普天間権現の神様が、この大刀を護り預かつて下さいと手を合わせた。そして、唐へ行き、旅をして来る間、その大刀は草の中にあつたということをおじいさんから伝え話を聞いた。

そして、その大刀はたびたび盗まれたが、盗んだ人に、また災禍ありて、その大刀は盗つてはいけないと、元に返した。何人かがそのように大刀を盗み持つて行くが、これは盗るものではないと。この大刀は、唐旅の間預かつて下さいということだったので、その願いを聞いてやらなければと唐旅から帰るまで、普天間神宮にあつたとの話です。

あたんりぬ話。

採集 S 52・2・22 読谷村民話調査団第十五班 八新垣修子 V

注 普天間権現 宜野湾市字普天間。普天間神宮内にある洞穴。戦前は森厳な森の中の大鍾乳洞窟の中にあつた。沖縄の古神道の神々と共に伝説の美女の普天間女神が祀られている。普天間権現という名称は洞内に観音像を祀つて熊野権現の信仰が移植され、普天間神宮寺とも呼ばれるようになってからであろう。

81 前寺の由来

久米島ぬヌール注①サングワナーしちやぐとう、舟乗ふにぬしてい流ながさつてーるぐとーびんよ。久米島ヌールお。
あんさぐとう、仲門親方ぬ釣なかにしやうえうかたりしーがめんそー
ちよーしあたてい。あまんかい前寺めんでいらでいちあんよー、
うぬ人お舟ちよから、久米島ヌールおひちあぎてい縁えんむす結り。
(前寺めんでいらでいちあまんかい、てーげー三百坪さんびやくつぼびかー
じ、私達わつたが二才にさいぐわーそーねー、うまんかい今いまぬボー
ロー飛行場ひこうじやうぬ中なかてー。うまんかいマーチューモーぬあ

話者 比嘉 徳太郎 (明治二十五年一月十日生)

翻字 知花 春美

久米島のヌールが浮気をしたので、舟に乗せられて流されたようだ。久米島ヌールはね。

そこで、仲門親方が釣りに行くと、(ヌールと)出会つた。あそこに前寺とあるが、久米島ヌールを舟から下ろして(二人は)縁を結んだ。

(前寺といつてあそこに、だいたい三百坪ばかり、私達が青年時代に、今のボーロー飛行場の中にあつた。そこにはマーチューモーもありましたが。)

いびーたしが。

めんそーやーい、とにかく縁のー結れーんしえーる
ちむやいびんてー。

あんされー、久米島ぬ札ぬかかてい、久米島ぬ国ぬ
札にかかたぐとう。是非あぬヌールおうんちけーさん
ねー村ぬいいくとうさんりぬふーじーなたぐとう、あ
まから来ぐとうよーさい。昔え唐船、馬艦でいち船え
あいびーぐとう、唐船でいちんあれー馬艦でいちあ
ん。馬艦ぬみー金持ちちーるんさー、連らすさりちさ
ぐとう。いんねーすんねー久米島から、馬艦ぬみー金
のー持ちちえーるふーじやいびんてー。あんさぐとう、
連らつていやらちやぐとう。

あまからうとうーしする火ぬ神、ウコール、ちよー
どうあぬうりやいびーしえー、うぬふーじーしコー
ルお作やーい。うまんかい線香立ていたい、何さいす
るか、ウグワンジュ、ウグワンジュおあいびー
しえーやー。うり三ちあいやさびんよー。うりからう
とうーしー、久米島んかいぬうとうーし、私達ん小
さるえーかー、小さがなさし風邪ぐわーひちよーいにん、
あまんじウートトウ、何相ぬ子供ぬちやーそーぐ

たどり着いて（久米島ヌールと仲門親方は）縁を結
んだようだ。

そうすると、久米島からおふれが出て、久米島の国
からおふれが出た是非あのヌールを連れ戻さなければ
村にとつて悪いという話があそこから来たわけだね。
昔は、唐船、馬艦と船はあるので、唐船というのもあ
れば、馬艦船というのもあった。馬艦船一杯のお金を
持つてくるのであれば、連れ帰つてもいいということ
であった。さつそく久米島から、馬艦船の一杯のお金
を持つてきたよ。そうして連れられて行った。

あそこに願ひ事をする火の神、香炉、その香炉を作つた。
線香をたいて願ひ事をする拝所があるでしょう。それ
が三カ所ある。そこから久米島への願ひ事をした。私達が
小さい頃、かわいさゆえに、風邪をひいてもあそこで
御願ひをした。何相の子供がどういふ状態であるのか、
お願ひすれば精神的にもいいということだね。久米島
ヌールであれば叶えてくれるだろうと。

とうりち、うさぎりわる精神のーうりやんでーさい。
うぬ久米島ヌールやれーうりぬぐわーしーすんなーり
ち。

採集 S 52・8・14 読谷村民話調査団第十一班 八知花利江子・上江洲康子・名嘉真宜勝

注① ヌール ヌル、ノロなどとも称す。沖縄本島区域で、公儀の祭祀を司るために村々におかれていた女の神職をいう。ノロの出る家柄は決まっており、ノロには首里王府から辞令が交付された。ノロの司祭する村の祭としては、中頭、島尻地方では麦と稲の穂祭と収穫祭、国頭地方ではそれ以外に、ウンジャミ、シヌグ、イモナイ折目などがあつた。

注② 馬艦船 近世中期以後、沖縄でもっとも普及したシナ式ジャンク型の島内船。十八世紀の初頭頃中国の福建地方から伝来した船型で、海場を馬のように軽走したことから「馬艦」の表記が使用され沖縄ではその唐音で「マールン」と呼ぶようになった。山原地方を往来した山原船もこの船の別称で、普通三〜四反帆船が多かつた。

82 明ぬ王の由来

話者 比嘉太郎 (明治四十年七月十五日生)

翻字 知花春美

高志保ぬ比謝ぬ前ぬ御神え、昔事の話によればです
よ、昔ぬ話 聞ちやる言葉なかい、明ぬ王ぬ神様り
ち、ひじょうに詳しい神様で、部落ぬ有志ぬ方々は、

高志保の比謝ぬ前の神は、昔の話によれば、話を聞
いたところによると、明ぬ王の神様といて、とても
りっぱな神様で、部落の有志の方々が、よくその神様

よくうぬ神様を信じて下さい、護つて下さい。
で、この明の王という方あ、いち、うまんかい休憩
しみそーち、休まりんそーち。馬あ休まして、またそ
の池の水に、池ぬクムイんかい、馬の足を洗つて一応
まだどこかに通つたということでございます。

83 位牌由来

な、一人ぬ息子ん、うりるやんりれ、るく酒飲
まーなてい、親孝行しーさんなたくとうよ、一人の
息子やよ、うりん男るやんろ、息子やうぬ、な、
親ぬ言いしむる聞かんたたくとう。お父さんが、
「な、いやーやな、ぬーん親ぬ言いしえーむる聞
かんくとうや出して行け。」りち、うりしちやく
とう。川あ越てい、川あ越ていてーまたあぬ山ぬ上
んかい逃ぎたんり。

を信じて下さい、護つて下さいと（おっしやつた。）
そこで、この明ぬ王という方は、池の所で休憩され
た。馬も休憩させて、池の水で馬の足を洗つて、また
どこか行かれたようです。

採集S 52・2・22 読谷村民話調査団第四班 八富村朝夫

話者 比嘉カメ（明治三十四年十一月三十日生）

翻字 津波古米子

一人息子がいたそうだがたいそう酒飲みで、親孝行
ひとつもできなかつたそうだ。そしたらその息子は、
親のいう事を聞かないものだから、父親が「おまえは
親の言うことを聞かないから、この家から出ていけ。」
と言つたので（息子は）家を出て行き、川を越え向こ
うの山の上まで逃げて行つた。

あんさくとう、うぬお父さんや、親のーなー子あかなはいせーや、私達息子おまー行ぢよーがやーし、搜めーてーみせーんてー。搜めーたくとうよー、うりやたんり。丸木橋越てい、上んかい行ぢやくとう、丸木橋来くとう、川ぬ丸木橋、昔え丸木橋ぬあたんりよー。丸木橋行ぢやれーうりるやんりれー。

うぬ丸木橋から越てい行ちゆんりさ。かーま山ぬ上んかいうぬ息子おうんなたくとう、搜めーてい行ちゆぬばーにどーあんされー、ちつけーりたくとうやー、うぬ丸木橋渡いんりしちやくとう、うぬ親加那志やけーりたんりー、けーりたくとう。けーりーせー上とーてい見ちよーてーんてー、あんさくとう、あびー私達親加那志やんせーさやーんち戻ていちやくとう、戻ていちちやくとう。

うりから木し作てーしが位牌やんり。私達お父さんのーやーし戻ていちやしが、木なてい。木じらーや今の位牌やうりし作てーしやんり。あんしうぬ話い、聞ちやるばーてー。

そしたら、その父親にしてみればかわいい息子なので、自分の息子はどこに行つてしまったのかと、心配して搜しまわつたそう。搜し歩いてるところだつた。丸木橋を渡つて上に行こうとし、その丸木橋まで来た時、昔の橋は丸木橋であるでしょう。その丸木橋まで来た時、こうだつたそうだよ。

その丸木橋を渡つて上まで行こうとした。その息子はずつと山の上にあつたので、搜しているときに(親が)転んだので、その丸木橋を渡ろうとして親は落ちてしまった。落ちるの上で見ていた息子は、あれ、自分の親ではないかと(丸木橋)まで来てみた。

それから木で作つたのが位牌である。私のお父さんは戻つてきたが、木の一片に変わつていた。今の位牌は木で作られているでしょう。(丸木橋)で作つたのが位牌だということだそうだよ。このような話を聞いたことがあるよ。

翻字 村 山 友 江

くれーかんしる聞ちやしが。あぬー昔よー、かーま
あぬー山ぬあてい、部落ぬあていや。あんさーいあぬーう
まうてい、あぬー途中うてい畑つし戻やーや、うぬ家
んかい入つちえーるばーてー。入つちさぐとう。

くれーうぬ前うていあぬーかーま山から、人食猪、
猪やあらん何がら獣ぬ降りてい来まや、人見じー
ねーなー人食いんり、あんし山からはーえーはーえー、
はーえーなやーま、うぬ部落んかい降りてい来たんり
ぬ話てー。

あんさぐとう、うぬ茶湯、一茶碗飲むし二茶碗な
飲みりしえーやー、一茶碗飲りすぐ家かい入じーねー
や、うぬ人食 獣んかいはつちやかいしえーやー。
はつちやかいぐとう。今度おなー一茶碗飲むる間や、
うぬ獣やはい越てい行ぢ、うまからはい越ぐとうや、
なー一茶碗のー飲りー行けー。あんしえー厄はんすん
どー。一茶碗飲り、なー御馳走さびたんし出じーねー、

これはこういうふう聞いたんだが。あのう昔ね、
山があつて部落があつたよ。そうしてそこで畑からの
帰りにね、ある家に入ったわけだ。

その前に、あのう遠い山から人を食う猪、いや猪で
はなくて何か獣が降りて来て、人を見たらもうその人
を食うために、山から突つ走つて降りて来るとい話
があつた。

そうだから、このお茶を一杯飲むのを二杯ずつ飲み
なさいというのはね、(お茶を)一杯飲んですぐ家から
出たらね、この獣に、人を食う獣に出会うでしょう。
出会うから、今度はもう一杯飲む間にはね、この獣は
通り越して、ここから通り越して行くからね、もう一
杯お茶を飲んで行きなさい。そうすれば災いを免れる
よ。お茶を一杯飲んで、「御馳走様でした。」と、(家か

なー狼おおかみえ山やまから降りてい来こねーすぐはいいちゃい
ねーなー、食くらりーしえー、うちゆ食かまりーぐとう。

あんしさーま、昔むかし人ひとぬい言葉ことばや、「茶ちやあ一茶碗いちちやわん飲ぬ
むしえーあらんどー、茶ちやあ飲ぬみるんさー二茶碗たちやわんまでー
飲ぬみよーやー。」りち。二茶碗たちやわん飲ぬむる間まねー、うぬ厄やく
はんちやんりる話はなしい。あんしる私達わつたや教おしたしがてー、
昔むかし人ひとおあんやたんり。うぬ話はなしいんなー、ぬー話はなしいる
やらー分わからんしが。山やまからなー人ひとうせーてい 獣いぢむし
降りてい来こま、うぬ部ぶ落らくんかい来こねー。

あぬー友達ともだちが来こ、私達わつたんかい来こ、うまうてい茶ちやあ
飲ぬむんりしーねー、「茶ちやん飲ぬり行いけー、うり。」りち。
一茶碗いちちやわんのー飲ぬまんよーていー、必かなじ二茶碗たちやわん飲ぬむる間ま
ねーうぬ人食ちやくえいぢむし 獣いぢむしえなー、うぬ門もんからなーはい越きてい行い
ぢなー、居うらんばーてー。あんしさぐとうなー、難なんぬ
ん免ぬがていやーりぬ、二茶碗たちやわん飲ぬだぐとう難なんのー免ぬがとーる
ばーてー。一茶碗いちちやわん飲ぬみーねーなーしぐさりーてーぬ
ばー。

ら) 出て行いつたら、もう山やまから降りてきた狼おおかみに出い会あつ
て食くわれてしまいうからね。

だから昔むかしの人ひとが言ういうには、「お茶ちや一杯いちぱい飲ぬむのではない
よ。お茶ちやを飲ぬむんだつたらね、二杯にぱいまでは飲ぬむんだよ。」
と、二杯にぱい飲ぬむ間まにはこの災わざいは免ぬがれるそうだ。そうい
うふうにして、私達わつたは教おしわつたんだがね、昔むかしの人ひとはそ
うだつたそうだ。この話はなしも、何なにの話はなしであつたか分から
ないが、山やまから人ひとを狙あつて獣いぢむしが降りて来こた。

あのお友達ともだちが私わたしの家いへへ来こて、そこでお茶ちやでも飲ぬもう
と、「お茶ちやでも飲ぬんで行いきなさい、どうぞ。」と。お茶ちや
を一杯いちぱいだけではなくて、必かなず二杯にぱい飲ぬむ間まにはこの人食ちやくえいぢむし
い獣いぢむしは、この門もんから通とり越きして居いなくなつてしまいう。
そうしたからもう、災わざいも免ぬがれてねと、お茶ちやを二杯にぱい飲ぬ
む間まに、災わざいは免ぬがれたわけだ。一杯いちぱいだけ飲ぬむと、もう
すぐやつつけられていたからね。

同年生を見舞うものではない

話者 奥原崇善（明治三十二年四月十日生）

翻字 村山友江

おじいさん達から、同じ年だから行くなって。それは何かと云ったら、その見舞いに行つてその病院に入院しているのは元氣になつて、それを入れ違ひにしてその見舞いに行つたのが死んだあれがあつたらしいです。だから、同じあれは行かん方がいいという話。

採集 S 60・2・24 読谷ゆうがおの会 八知花春美・村山友江

86 ハジキ由来

話者 大城利徳（明治四十一年四月二十四日生）

翻字 上原ヨシ

ハジキ、分かるだけね、私知つていただけね。

ハジキについて、私分かるだけ、話を聞いて知つていただけね。

これはね、あの、昔はよ、あの若い娘さん達はね、このお嫁にもう自分の配偶おつた場合にはね、すぐも入れ墨してねやりよつたらしいですよ。それがね、なぜするかと言つたらね、昔はもう力まかせにね、強

これはね、若い娘さん達は、嫁入り前、自分の婚約者が決まつた場合にはね、すぐ入れ墨をしたらしいですよ。それは、なぜそうしたかと言つたらね、昔は強い者が力まかせに美人だったら、美しい女であつたら、夫

い者がよ、美人であつたら美女ぐわーであつたら、もう夫が居ても、にんぐるぐわーは居ても、「おまえは私の家に来んか、おまえはもう美人だから、私の所に来てもうやりなさいよ。」と、やつたらしい。

それからあのー、入れ墨というものは、もう若い時には、私は男もいるし、もうお嫁に行っているから、もう、どうしてもこの自分がもう自分は他人の人から見た場合には、美しい人に見る場合には、私はもう夫は、居つても向こうに、力まかせに行かんならん時があるから、あの手で、手のいつぱいハジキ入れ墨してよ、手え見せたら、どんな顔はね、べつぴんであつても、手え見たら、もういやがるでしょうね。あれは、そのあーいう昔のあの例から、どつかに、悪いようにみてもあまり格好の悪いようにして、おかないと、いけないいうて。

「本土あたりでは、あのうお嫁に行つた晩はすぐ歯を染めよつたらしい。歯をね、若い娘さんは、お嫁に行つた女の人ね、歯染めてね歯がまつ黒けだつた。顔は美人であつても笑つた場合には、もう歯が黒いでしよう。あれは、自分は旦那さんは居つても、他の人

は居ても、婚約者が居ても「おまえは私の家に来ないか、おまえは美人であるから、私の家に来て生活しなさい。」としたらしい。

それから入れ墨というものが（始まつたわけだが）若い女の人に、恋人がいてもお嫁に行つていても、美人であれば力まかせに連れられることがあつた。それで、手にいつぱいに入れ墨、ハジキしたら、顔はどんなに美人でも、手を見たら、もういやがるでしょう。だから、その昔、そのたとえから、どこか格好の悪いように見せておかなければいけないということをやつた。

本土では、結婚した晩に、すぐ歯を染めたらしいですよ。歯をね。若い娘さんは、お嫁に行つたら、歯を染めて歯がまつ黒くしていたら、顔は美しくても、笑つた場合に歯が黒いでしょう。こうするのは、自分には旦那があつても、他人から見て美人だったら、（昔は権力

が、昔はべっぴんだから、「おいおまえは、私のものになれ。」とかいうふうにしても無理やりに連れて行かれたから、あーいうふうに入れ墨をしたとの話が聞かされたわけさ。

のある者が)「おまえは私のものになれ。」と無理に連れて行かれたから入れ墨はしたとの話聞かされたわけだよ。

注 ハジキ(針突)ハジキ。明治三十年代頃まで盛んに行われていた入墨習俗。

年頃十七、八歳の娘の手甲に、針と墨で施術をした。士族と平民の区別があり、また地域によっても多少異なっていた。宮古、八重山地方では織物の模様もあつたようだが、沖縄本島内は指には弓の矢、手の甲には枡形などの模様がある。これをしていないと後生で困るとか、大和に連れて行かれるとの伝説がある。



ハジキ

採集S 52・2・22 読谷村民話調査団第十五班 八新垣修子V

87 ハジキ由来

話者 奥原崇善(明治三十二年四月十日生)

翻字 天久加代子

あれがハジキつけたのが、薩摩の王様がこの沖繩の
女方はべっぴんで、あつちからあれにべっぴん組の、
募集されて行きよつたらしいです。

そうして、ハジキ突いたものは、どんなべっぴんだつ
ても、もう野蛮というふうに見て、取り残っているら
しいです。

それから、このハジキは始まったですよ。ハジキす
るのを見たことないですが、今沖繩で最後にやったの
は、今の百歳の方でしょう。

それから、ハジキがなくなつてですね。女の子は
向こうの薩摩にひっぱられていくから、ハジキ突いた
ら、あれですなあ。

ハジキを突いたのは、薩摩の王様が、沖繩の女は美
人だからと連れて行つたらしいです。

そして、ハジキを突いた人はどんなに美人であつて
も、野蛮人といつて連れなかつたそうです。

それで、ハジキは始まったそうです。ハジキするの
は見たことないですが、沖繩で最後にやったのは、今
の百歳の方でしょう。

後には、ハジキはしなくなりましたが、女の子は薩
摩にひっぱられていくのでハジキ突いたということ
です。

採集S 52・2・28 読谷ゆうがおの会 △知花春美・村山友江▽

話者 比嘉ン ト (明治三十七年十一月六日生)

翻字 村山友江

城女^{ぐすくいな}りちよ、美^{ちゆめ}らさしから田舎^{いなか}ぬうれー、上等^{じやうとう}から上等^{じやうとう}から連れて行く^いといつて、子^こを産^うんであつても夫^{おつと}がいても、すぐアズマぬ勝手^{かち}にひきあぎーたんり。

あんさぐとう、なーハジキえ突^ちかんねーひきあぎらりんりち、うぬたみにあんさーにまたハジキえ突^ちちやぐとうや。内地^{ないち}からゴロゴロ調^{しら}びーが来^{ちや}ぐとう。野蛮^{やばんじん}人^{じん}るやるりち、うぬくとうからハジキえ突^ちかんあい、うりさーい突^ちかんてーまん、あまからひきあぎらんたんり。

あんし昔^{んかし}、黒風呂敷^{くろふうしき}ぐわーんや、若^{わか}い者^{もん}はかんしさんねー、手拭^{てぬぐい}よりもこれは黒^{くろ}いでしよう。あんさぐとう、うぬ風呂敷^{ふうしき}かぶつたと。

城女^{ぐすくいな}といつてね、田舎^{いなか}の美しい女^めの人^{ひと}から、夫^{おつと}や子供^{こども}がいても (美しい人は) 上等^{じやうとう}だといつて、すぐアズマの人^{ひと}達が勝手^{かち}に連れて行^いつたそうだ。

だから、ハジキをしないと (アズマに) 連れて行^いかれるといふことで、そのためにハジキをしたからね。内地^{ないち}から調べに來た。そしたら、(ハジキをしている人は) 野蛮^{やばんじん}人^{じん}といふことで連れて行^いかなかつたそうだ。

また昔^{んかし}、若^{わか}い者は、手拭^{てぬぐい}よりも黒風呂敷^{くろふうしき}は黒^{くろ}いといふことで、それをかぶつたといふことである。

翻字 島袋 智子

あんすぐとう、二人夫婦、かなさし夫婦なとーしがやー。

なー夫、うぬ男あひえー病氣しえーぬばーてー。

「私あ病氣ぬ治らんでー、治らんぬあひえー、なーいやーや夫るむつちゆさやー。」りぬふーじーなたぐとう。「いかなしんあんねーさん。いかなしん夫おむたん。」りちさぐとう。「あー、あんやんなー。」りち、そーるむんぬ、あんやるしじやるんさー、あんすか疑いるしじやるんさー鼻うすじみしーん。」りち。鼻うすじやーにやなかーぎーなてーるばーてー。

あんさぐとう、男のーうれーにさぶやーい、また別からとうめーとーん。あんしからぬ幽霊、幽霊なたんりぬ話。

あるところに夫婦がいて、愛しあつて夫婦になったのだが。

あるとき夫の方が、病氣にかかつてしまった。「私の病氣が治らなかつたら、もうおまえは再婚するんだね。」と夫が言った。「どんなことがあつてもそんなことはない。絶対再婚はしない。」と妻は答えた。

「ああ、そうか。」と夫は言ったが、妻は「それじゃ、そんなに疑うのだったら鼻をそいでみせよう。」と言つた。そして、鼻をそぎおとしてみにくくなつてしまった。

その後、夫の方が妻を疎ましく思い、別の女の人といつしよになつてしまった。それから(死んで)幽霊になつてしまつたんだよ。鼻をそぎおとした妻の幽霊にね。

話者 比嘉 太郎（明治四十年七月五日生）

翻字 知花 春美

高志保ぬフエーガニクぬ浜、海岸端、海ぬ海岸端ぬ
岩んかい按司墓ぬあてい。按司墓は五つか六つあつた
わけ、ありました。今でもこの地形は分かれます。こ
れキジムナーじゃないです。話を聞いただけです。
話を聞きさびたぐとう。今でも話ははつきりしていま
すよ。おじいさん方は。

ひじように、そのお墓には、ちゃーぬ若女んぐわ、
埋みやーに護らつとーたらー、そしてその、若女ぬ
歌声や一人んあらん。たいがいこの時間的にじこー美
ら歌ぬあたん。

上句お分かいはし下句お分かなんとーんというこ
と。

そして、これがひじように美ら歌なてい。上句お分
かいはし、下句お分かなん。くれーキジムナーんあら
んしが、歌声ぬ、うまとーていかじぐとう歌てい、
不思議やつさーというその人は、聞いた人は、行って

高志保のフエーガニクの浜、海岸端の岩に按司墓が
あつた。按司墓は五つか六つありました。今でもこの
地形は分かれます。キジムナーのことではありません
が、話を聞いただけのことです。おじいさん方は現在
でも話ははつきり覚えていますよ。

そのお墓には、どれほどの若い娘が埋葬されていた
のか、若い女の歌声は一人でもなかつた。だいたいこ
の時間にとても美しい歌声が聞こえた。

しかし、上句は分かるが下句は分からないそうです。

そして、これはひじように美しい声であつた。上句
は分かるが下句は分からない。キジムナーではないが、
いろんな歌を歌っていた。その歌を聞いた人は不思議
だと、行つてみると、誰もいないし、たいそう寂しい

みたら何も人もないし、非常に寂しい所どうやぐとう、草もボーボーして、もう非常に寂しい所どうやぐとう、行ったら非常に、きーふくがーどうまーいたると言うこと。

91 久良波首里殿内

久良波んかいゆいやあがたぐとう。山田首里殿内入口やあしが……。入っちえー来しが出じてーはらんりーちやぬ、意味えてーさい。入口やあしが、出口やぬーらんりぬ、あぬ物語やーさい。

うぬ、ヒータイイサぐわーぬ屋敷んかい、ヒータイイサぐわー兵隊行ぢつちから屋敷え、家や造たぐとうよー、うまんじ竹え植くたぐとう、マータクから、人ぬ頭おむるかんし。

マータクゴーぬあん、あたまにうまー、鬼婆ぬ屋敷

所で、草ボーボーして気味が悪く鳥肌立ったということである。

採集 S 52・2・22 読谷村民話調査団第四班 八富村朝夫

話者 比嘉 徳太郎 (明治二十五年一月十日生)

翻字 島袋 智子

久良波にあるうわさがひろまった。それは、山田首里殿内入口はあるが……。入って来る人はいても出て行く人はいないという意味だよ。入口はあつても出口はないという物語だね。

そのヒータイイサぐわーの屋敷に、ヒータイイサグワーは兵隊へ行って来てから家を建てたんだ。そうしてそこへ竹を植えたら、マータクが頭蓋骨を持ち上げるようにのびていった。

マータクの根があつて、鬼婆の屋敷だったというこ

やたんりぬくとお、一般ぬんかい知りとーんりるばー。

とは、一般の人にも知られているようだ。

採集S52・2・22 読谷村民話調査団第十四班 八伊芸弘子V

注① 山田首里殿内 久良波首里殿内のこと。子孫は絶えてその屋敷跡が、元山田ドライブイン敷地内に残っている。そこには、戦前

まで久良波部落があった。

注② マークク 竹の一種。だいさんちく。りよくちく。高さ十メートル近くにもなる最も普通の竹。たけのこは食用、幹は竿・建築

用材などにする。

92 久良波首里殿内

話者 山城 英一（明治四十五年一月十三日生）

翻字 天久 加代子

浦添のね、小湾か、小湾浜つてあるでしよう。今、軍用地ぬ下むていにあるはず、城間の下むていにそこに軍用地があるでしよう。それが下、小湾という部落があるよ。そのの、女であったらしい。それと、首里から、何里主やたがや、なー、四十年前、なー、五十年前ぬ芝居やくとう。

うりとうさーま、ぐーなていそーしがて、男が浮気

浦添の小湾、小湾浜つてあるでしよう。今は軍用地の下の方にだと思いが。城間の方に軍用地があるでしよう。その下のの方に、小湾という部落がある。そののと、それから首里の何という里主だったか、もう四十年、五十年前の芝居で見たものだから……。

小湾の女と首里の侍は一緒になつて男が浮気したわ

したわけさ。ゆぬ侍やし、浮気さーい、浮気さぐとう、うぬ女お、大腹そーし、浜遊びしーが行ぢやーい、舟くぶりしみていさぐとう。久良波んかいゆいあぎていさーま、ゆいあがとーんどーし、男ぬ聞ちよーるばーて。

あんさーい、お産のー久良波んじそーるばーよ、あんさーま、あまんかい居ん、女お居んどーさぐとう、子産ちえーるりち、引きとういが来るばーて、子あ産ちえーる子あ男やぐとう、首里んかい引きとうてい行ぢやーい。

うにーから、うぬ人おやけうくさーい女お。なー、うにーから、女ん子一人や他所から、ちかなーやーいそーしが、ちかなてい。男ん子あ産ちえーる子あ連らりやーい、女ん子あ山田うていいてーるばーて、なー、うり育ていていそーし。

旅人、山原かい行ける旅人、国頭から来る旅人おむるうま宿やるばーよ。いいるんせー、中間宿ぐわーやてーるばーて久良波やぐとう。

あんさーい、一時あ、なあ、皆男んかい恨み晴らさんがたみに、男むるするばーよむる。あんさーに、

けだ。浮気したので、妻は妊娠しているが、浜へ舟遊びに行かせ、舟を遭難させた。そして、久良波に流れ着いて、それを男は耳にしていた。

それで、お産は久良波でやった。あの女はあそこにいるよ、子どもが生まれたそうだと聞いて引き取りに来たようだ。生まれた子どもは男の子だったので、その子を首里へ引き取って行った。

それから、女の人はやけをおこした。そうして、他所から女の子をもらった。自分の子は連れて行かれ、女の子を山田からもらって育てていた。

そこで、山原に行く旅人、国頭から来る旅人は久良波の宿で泊まった。久良波は中間宿になっていたので。

(その女は) 男の人皆に、恨みを晴らさんがために男の人を皆やつつけた。そして、夜包丁を研いでいる

うぬ女いながん子こぬかんにかんにし包ほう丁ちやうあ研けんじゆし見けんちや
まて、役人やくにんかいすぐ夜ゆどうどうーい通つう知ちさーい、通つう知ちさー
いしみらつてい、役人やくにんのうりていち、縛ならりーる、縛な
てい首すい里りんかい、あぎーるりちやしがて。

あんしさーま、うまんかい入いつち来ちゆせーうしが、人ぢよお
皆みな帰けいてー行いかんばー。あんさぐとう、入いつち来ちゆせーう
しが、出でじてい行いいせーうーらんりーしえーうりが由ゆ
来らい記き。

うり縛しばいが来ちやせー、自どう分ふが子こ、自どう分ふが子ことう親おやとう、子
のーむる分わからんばーどー、自どう分ふぬ親おやりぬ事ことおあん
せー、とーりちから、縛しばてい後あとから、うぬ女いながぬ夫うとうお分
かいせーや、ありんかい向むかかてい白はく状じやうさぐとう、あん
あんやたんどーりち。さぐとうなー、親おやあ女いなが親おやあう
まうていくん縛しばてい首すい里りんかい連ぞうてい行いぢ、泣なく泣なく。
「くまーなー、入いつち来ちゆる客ちやくおうたしが、出でじーる客ちやくお
うーらんどー、私わんねーうぬしわざしちゃんどー、うり
ん貴い方たうあ男いぬ親おやぬせーるわざるやぐとうや。」「りち、う
りんかいさーま、泣なく泣なくさーま縛しばてい連ぞうてい行いぢいし
が。

うれーまたでーじながんじゆーむん、武ぶかないぬ

のを娘むすめが見けんて、すぐ夜ゆのうち役人やくにんに連絡れんらくした。役人やくにん
はやつて来て、その人を縛なつて首里すいりの方かたへ連れて行いこ
うとした。

久良波くらなの宿しゆくに入いつて行く人ひとはいるが、そこから帰かへつ
て行く人ひとはいなかつたらしい。その宿しゆくは入いつて行く人ひと
はいるが、出て行く人ひとはいないという由来ゆらい記きがある。

その女むすめを捕とらえに來た役人やくにんは自じ分の子こと自じ分の親おやであつた。
子供こどもは自じ分の親おやであることを知らない。縛しばつてあとか
ら、この女の夫うとうは分かるのだが、子供こどもに向むかかつてそ
ういふことであつたと白はく状じやうした。女の親おやは縛しばられて、首里すいりに泣な
く泣なく連れて行いかれた。「ここは入いつてくるお客おきゃくさん
はいたが、そこから出ていく人ひとはいない。私はこれ
しでかした。これも貴方あなたの父ちち親おやのやつたことだから。」
と、子供こどもに言いつて、泣なく泣なく縛しばつて連れて行いかれた。

その女むすめはまた、とても強つよい人で、侍さむらいなので武ぶにもた

女、侍るやぐとう。てーげーぬ者のーくん縛いさんどー。ちやペーぬ、繩ひつかきーしが、ぼつてかち切つちえーしーしーし、下かたぐわーぬすしんちやーがあ、うすいさんばーよ。六、七人、うれー、捕いがりちるやしがて、六、七人し、うさみーんりしが、うさみーさん。繩かきてーしがよ。繩んはつとうばちえーしーしーさーい、自分ぬ子ぬ、すぐパンみかち、うすとーぐとうや。あんさーに男ぬ親あ大将なていかーまー後じーかいうるばーよ。

あんし、劇すたしが、あんさーに、うりからる、うぬ後る「くまー入つち来る人おうしが、出じてい行い人おうらん。」り。

あんさーな、うりからあまーたりぬちゆーさぬ何ん作ららん。今ちきてい空き屋敷やさ。久良波首里殿内りち、道ぬ側ぐわーんかい、何ん作ららん。

けていた。なみの者では縛ることはできないよ。太い繩をかけてもパット切つたりして、下つ端ではおさえることはできなかつた。六、七人でおさえに行つたがそれでもできず、繩をかけてもパット切つたりして、やつとその女の子がおさえた。父親は大将になつてずつと後の方で見ていた。

このように劇ではやつていたが、それから「久良波首里殿内に入つて来る人はいるが、そこから出て行く人はいない。」とね。

それで、そこはあたりがあつて何も作れない。今につけて空き屋敷である。久良波首里殿内といつて、道の側にあるが、何も作ることができない。

翻字 知花 春美

うぬフェーライなたる人おありるやんどーやー。
 首里、末吉、うまうてい前妻、後妻ぬあてーぬふーじ
 てー、侍ぬ、あんさーい、前妻ぬ子ん頭おでいき
 やー、後妻ぬ子あいひえー、うていとーるばーよー、
 兄ぬうつきーねーらんばーてー。

あんさぐとう、後妻なとーしが子あ世う継がさんが
 たみに、うま継がさんがたみに、後妻ぬ。兄弟とう、
 兄貴がやたらー弟やたらー、うれーさーじゃーとー
 覚とーうらんしがてー、兄弟さーい、謀ぐとうさー
 い、兄あ出じゃちやらちえーるばーよー。

あんさぐとう、きりばんばんしいかなしん行かんり
 ちやしが、きりばんばんしやらさーい、旅かい行ぢや
 ちやらちやぐとう。山ぐまいそーるばーよー、うぬ
 人おくまんかいういねー、首里下辺かいういねー、
 うつたーねー後おさりーがすらーりやーい、殺害さ
 りーがすらーりやーい、逃んぎてい来ま、初まいや

そのフェーライになつた人はこうなんだよ。首里末
 吉で、ある侍に前妻、後妻があつたようだ。前妻の子
 は頭は良かったが、後妻の子はすこし劣つて兄さんほ
 どではなかつたんだね。

それで、後妻は、自分の子に後継ぎをさせようと考
 えていた。兄弟、兄貴であつたか、弟であつたのか
 はつきり覚えてはいないが、謀いによつて兄さんは追
 い出されてしまった。

しかし、どうしても出て行かないと言っているが、
 追い立てるように旅に出してやったら、山にこもつて
 しまった。その人はここにいると、首里周辺にいと、こ
 の人たちに殺されるのかと逃げて来て、最初は山田に
 逃げて来たそうだ。

山田んかい逃んぎてい来たんりからー。

あんさぐとうなー山田うていん、だーうれー分から
んるあさい、旅ぬ者どうりやーい、軽蔑さりーる
しえーさに。

あんさぐとう、なーかんしえーならんりやーい、山
ぬ中んかいすくろーてーるふーじー。あんさーに山ぬ
中うていん、弱はんり思いしえー助きていやらち、う
ぬ山原から来てーる旅さーや、あがとーからぬ旅歩
ちる来さい、疲りていそーんり思いしえー、山ん中か
ら道案内しやらち。あんさーい、いひなーぐわーやま
かねーぐわーん何ん貰やーにさーい。あんさーい頑
強さんり思いしえー、うり武やかないる人やぐとう、
本当ぬなんたるーやあらん。ありすしるやぐとう頑強
はしえー、うまうていうちとうばするばーてー。

あんさぐとう、後お兄弟はつかかとーるばーよー。
兄弟、自分ぬ、後妻ぬ子ぬ、弟てー、はつかかやー
い、二人かきてい、なーうぬフェーライねー、かなー
ん。

さぐとう、えーりん二人がお守り持つちるうてーさ
に、あんさぐとううぬお守りさーい、兄弟やんりぬ

それで、山田では、その人は旅の者なので誰も分か
らなかつた。軽蔑されたんでしようね。

もうこうではいけないと、山の中にひそんでいたよ
うだ。山の中では、弱いと思うものは助けてあげて、
山原から来る旅人は、あんなに遠いところからの旅人
は疲れていると思う人には、山の中の道案内をしてあ
げた。そして、小遣いか何か貰っていた。また、強い
と思う人には、その人は武にもたけていて、ほんとう
は弱くはなかつたので、強い人はそこで退治した。

そうしているうちに、兄弟と会ってしまった。自分
の兄弟、後妻の子になる弟に会って、二人かけあつた
がそのフェーライには勝てなかつた。

すると、二人はお守りを持っていたのでしようね。
そのお守りで、兄弟だということが分かつた。どこの

事^{くとう}お分かやーい。ありしーが、芝居^{しばや}うていん、まーぬ芝居^{しばや}やたがやー、うりさぎーたしがてー。

また首里^{すい}んかい上^{かみ}やーい、う墓^{はか}ぬ前^{めい}んじ、手^{てい}やうさぎやーいなー示談^{じだん}なていありしえーる、しえーしやた

多幸山^{たこうやま}ぬフェーライりしえー、うぬ現場^{げんば}あ今^{いま}んあいやすんろー。フェーライさる岩^{いし}やあんどー。

芝居だつたか芝居であつたよ。

そして、首里に上つて、墓の前で手を合わせてお互いに話し合ったということである。

多幸山のフェーライという。その場所は現在もあるよ。フェーライの岩はあるよ。

採集 S 60・4・16 読谷ゆうがおの会 八知花春美・村山友江

注 多幸山 恩納村にある山の名で、読谷村との境界にある。旧道が残つてお

り一里塚も存在する。沖縄ではフェーレー（盗賊）の出没する場所として

多幸山のフェーレーは有名である。



フェーレー岩

翻字 村 山 友 江

多幸山フェーライといっていたでしょう。あれはもう私達が、親とか親戚方のおじさん、おばさんから聞いた話であつて、本当にあつたことかないことか、まあ分かりませんがよー。

あれは多幸山のフェーライが、読谷山向こうは、あの昔は読谷山多幸山つて、多幸山は読谷のものであつて。多幸山のフェーライというものは、昔え、那覇からこの侍さん方町民の方々が、国頭山原に用事があつたりして、もう那覇から那覇のあつちからまあ国頭奥山といつてまあ昔は国頭、国頭奥かいる旅に行きよつたそうですね。それで、まあ那覇から国頭に行く場合は、一泊は読谷の喜名か、楚辺、この読谷部落で一泊してから、あのう恩納村に、山原に行つた方がいんじやないかという昔話は、あの山原に行く人達にそういう話もあつたらしいですね。那覇から山原に行く場合は、もう一日では行かれないから、一泊は一晩は読谷の喜名とか座喜味に、泊まつて行つた方がいよいよという話は、聞いたが。

その聞いている人は、「今は大丈夫でしょう。もう一泊もしないで、多幸山も越えて行こうか。」という、そういう気持ちをもつて、あのう行く人がおつたらしいですね。そしたら行く人は、昔は荷物なんかは肩に担がないで、もう頭に載せて山原に行きよつたそうですね。

で、多幸山という高い山に、フェーライは高い山の中に隠れているつて。で、旅人はフェーライのいることもわからないで、こそこそと荷物も頭の上に載つかけていたらしいですね。そしてそのフェーライは、向こうから旅人が来るから、あれ持つているのを全部もう盗ろうじやないかといつて、隠れておつてあの山の上から荷物をこう背負つているから、山の上から荷物を盗つたら、盗られた人はいたという。高い山ですから追つかけて行くわけに

もいかないし。

で、多幸山というものは、フェーライ、乱暴もすれば物を盗る。フェーライをあれやって、向こう山原行く時は、多幸山の多幸山行かん手前の、読谷山喜名部落と座喜味部落に、一泊してから行きなさいよという話は聞かされてるんだが。行く人は平気だったら、もうそんなことあるか、行きなさいと、行く人はもう必ずフェーライに荷物なんか盗られたようなことを言っていた。で、あれは多幸山は、読谷山多幸、今でも多幸山といつてあるんだがね。多幸山のフェーライ、物盗りが多かった。

採集 S 60・2・24 読谷ゆうがおの会 八知花春美・村山友江 V

95 多幸山フェーレー

話者 大城重輝 (明治四十一年二月二十日生)

翻字 島袋 フジエ

昔、多幸山のフェーライりしえー、うみしーじゃんちやーから話聞ちるんせー、くぬ昔話んかいフェーライぬんじーんりしえーもとは廃藩世なていから。

昔の多幸山のフェーレーについては、大先輩から聞いた話によると、この昔話にフェーレーが出るということは、廃藩の世になつてからのことである。

首里那覇ぬ、侍方ぬ食かんでいーし、田舎んかい下りてい行ぢ働ちゆしかねー、フェーライないしえーましりち、働かんよーいフェーライになてい、人ぬ物

首里や那覇の侍方が、生活に困つたので、田舎へ行って働くよりおいはぎになつた方がよいとした。働かずにおいはぎになつて、人の物を盗って楽した方が

盗やーい樂すしえーましやんどーやーりち、というな
んである悪巧みからしーんじやちやる二人ぬ者ぬう
てーるぐとーしが。

一人やしかさぬ後おな、「うんな事おいちまりん
しえーならんりー、真面目なていいか。」り、一人ぬ者
のーぬぎたしが、一人ぬ者のーあくまでいすんりち
さーに。

後お、でーじなまた沖繩から頑丈者はつちやか
てい、うりが物盗いんりさしが、頑丈者はつちやかてい
さーに、うりんかいふるばさりやーい、情にゆつてい、
「いやーやいちまりんぬ物盗つてーならんどーやー。く
れーうんぐとーしえーならんどー、くぬ宝や私がきうー
ぐとう、とー今から心いりけーりよ。」というなんで、
その武士の情をうけて、後おうぬ人んフェーライやた
しん真面目なたりぬ話い聞ちゃんどー、昔話ぬ伝
ぬあんどーやーということですよ。

よいと。ある悪巧みからやりはじめた二人の男がおつ
た。

だが一人は、気が弱く、しまいには「いつまでもこ
のようなことをしてはならん。もう真面目に生きてゆ
こう。」と改心したが、他の一人は、あくまでも続ける
とやった。

後に、沖繩でもたいそう強い武士に出会い、その人
の物を盗ろうとしたが、その武士に退治され、その武
士の情によつて、「あなたはいつまでも人の物を盗つ
てはいけないよ。宝は私があげるので、今後は心をい
れかえ、立ち直つて生きて行きなさい。」と、武士の情
によつてその人は真面目に働くようになったという
話。

比謝橋から渡つて、そうして尾類売注①といつて行く
時に、

比謝橋の橋よ 私渡すために

情ねん人ぬ 造ていうちえさ

りち。

それから、もう辻に行つて、親父と一緒に金ももらつて。それから辻では、どんなべつびんでもどんな金持ちであつても、むこうの歌を返す者にはあれだが、返さん者には金を持つて行つても……。アンマーがは、あの人にやつて……。返す者にはやつたらしいです。それが歌の

流りゆる水に 桜花うきてい

色美らさあていゝ すくていんちやる

それから若い十七、八の人に

あがとう木の上に 下駄くり登てい

比謝橋を渡つて、尾類に売られて行く時に、

比謝橋の橋は 私を渡そうと思つて

情のない人が 造つておいてあるよ

と。

それから、もう辻に親父と一緒に行つて、金も受け取つた。(売られたわけだ。)それから辻では、どんなにきれいで金持ちであつても、歌を返す者には(喜んで呼ばれて)、返さない人にはどんなに金を持つていても(受け入れなかつた。)アンマーがはチルーに(お客をまわしてもね。)(歌を)返す者には、呼ばれていたらしいです。それが歌の

流れている水に 桜の花を浮かべてみたら

あまりの美しさに すくつてみた

それから若い十七、八の青年に

そんなに高い木の上に 下駄をはいて登っている

落ちていていすくないる ぶしじや二才ぐわー

けど

落ちたら大変なことだよ あまりにも若い青年よ

吉屋ウミチルや 年上ややていん

吉屋チルーは 年は上でも

抱きは下ないる 女童

抱けば下になる 女子供だよ

というふうには、歌が返せる者には、それがあれがしまいに、非常に金持ちで病氣持っておつたらしい。病氣持った人に、金をもらつてやったから、明くる日分かつて、それは死んだらしい。吉屋ウミチルは。

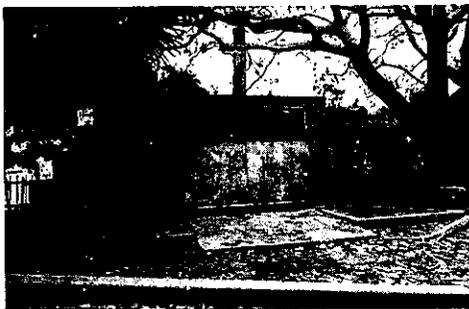
というふうには、歌が返せる者には（呼ばれた。） そういうふうにしていたのだが、しまいには、非常に金持ちであるが、病氣を持っている人がいたらしい。病氣の人に呼ばれ、明くる日それが分かり、吉屋チルーは死んだらしい。

注① ジュリ 女郎。遊女。娼奴。歌も歌い、三味線も弾くので、

芸者も兼ねている。「ジュリ呼ぶん」は女郎を買う。女郎遊びをする意。女郎屋の入口をたたいて女郎を呼び出すので「呼ぶ」という。

注② 吉屋チルー（一六五〇？一六六八？）恩納なべと並び称さ

れる女流歌人。十三歳（または八歳）のとき、仲島遊郭へ売られ、ある男と恋仲になるが、抱え主に人の嫌う病者の相手をさせられたためそれを苦に自殺したと伝えられる。



吉屋チルー歌碑

採集 S 60・2・24 読谷ゆうがおの会 八知花春美・村山友江

トウムシシチチャの話はなし

話者 比嘉 徳太郎 (明治二十五年一月十日生)

翻字 知花 春美

結ゆいてゐる髪かみぬわつくだごとう、「いやーやシチチャ
 とうそーぐとう合あ点ていさん。シチチャあ殺ころしわるない
 る。」りぬ、トウムシシチチャあうぬなみ為なに殺ころさつたり
 ぬ話はなし。トウムシシチチャあ。

赤木あかき赤虫あかむしが ハベルなてい飛とばわ

トウムシシチチャぬ 遺念いじんとう思うてい

りち、歌うた、昔歌むかしうたぬあぐとうや。

ふんとーな、かばつ人ひとなやーい、王おうぬウナザラぬ
 いっペー望ねじゆろーるちむてー。あんさーにうぬ結ゆいてゐる
 髪かみぬわつくだごとう、いやーやシチチャとう寝にんでー
 んりるふーじーなてい首くびえ断たたりぬ話はなし。王おうんかい殺ころ
 さつたりる話はなし。

(王妃の) 結ゆいえてある髪かみが乱みだれていたので、「おまえ
 はシチチャといつしよになつていたので許ゆるせない。シ
 チチャを殺ころしてやろう。」と、トウムシシチチャはその
 為なに殺ころされたという話はなしである。トウムシシチチャは
 ね。

赤木赤虫が蝶ちょうになつて飛とべば

トウムシシチチャの 遺念いじんと思ういなさい

と、歌うた、昔の歌があるよ。

(シチチャは) ほんとうに薰かり高い人で、王妃がた
 いそう思うつていたようだ。それで、結ゆいえてある髪かみが乱みだ
 れたので、おまえはシチチャと寝にたということ、(シ
 チチャは) 打首うちくびにされたという話はなしである。王おうに殺ころされ
 たという話はなしである。

採集 S 52・8・14

読谷村民話調査団第十一班 八知花利江子・上江洲康子・名嘉真宜勝

話者 大城 幸太郎（明治三十三年十一月十日生）

翻字 天久 加代子

王様の子がな。一人啞になつたそうです。啞に、長男が啞になつたそうです。そのまた次男坊がな、次男坊がもう、物言いよつたつて、そして、次男坊にな王様の後継ぎさせるからと言つたからな。

そして、そのヤカー（守り役）がおつてな。ヤカー（守り役）がまた、これまた次男にさせたらだめだよ。と言つてな。次男にさせると言つてその長男に話したらな。話したら、次男に王させるならばと言つて、長男が物を言つたと言つて。ただそれもそれだけしか分かりません。

次男に王様の後継ぎさせると言つて、長男が啞だつたもんだから、そして、また、次男坊の後継ぎさせると言つたから、物言つたと言つて。ただそればかりしか分かりません。それも枝ばかりしか分かりません。

採集 S52・2・22 読谷村民話調査団第十四班 八運天悦子 V

99 勝り山田

話者 国吉 真次郎（明治二十七年二月八日生）

翻字 名嘉真 宜勝

「勝り山田」でいちめんしえーたんでいしが。うぬ人ぬ話や学問のちゆうばー。山田親方でいしえー。

「勝り山田」という方がいらしたそうで、その方は学問が勝っていた。山田親方はね。

あんしさくとう、うぬ人おある一つぬ欠点ぬんじてい、島流しさりみそーちやんでい。うりうまんかい居ちよーちーねー、わざえーりーくとう島流しさつたれー。

昔え、唐とうぬうりぬ多さい。交際ぬ多さい。しーねー、唐から（今の支那てー）沖繩んかいぬ、いるいるぬ書物ぬ来くとう、うり分かいいしえーうーらん。くまぬ沖繩んかい居ぬ人ぬ。

あんしさくとう、「とー、くれ山田親方がる分かいみしえーくとう、でいー呼ばでい。」言ちさくとう。

「ぬーが、ちやーし私ねー罪うーている島流しさつとーる。ぬーんち私呼びーが。」「じちえー、かんかんぬ唐からぬ書物ぬ来、誰がん分からん。じひ貴方うんちけーしわるやる。」でい、「うん、私ねー、またとう沖繩んかい呼ばりーんでいしえー、ていーちから名譽やしが恥じかしーくとうやぐとう、あんやらー、ゆぬ同僚んかい、通堂ぬ港着ちーるんさー、誰やサバ持つち来、誰やまた杖持つち来、講みたよーにし。ゆぬ同僚るやしが、同僚にるやちえーさつとーる。」でいち「あんししわる私ねー沖繩んかい来る。」「貴方

そこで、その人に一つの失敗が生じ、島流しにあったそうだ。そいつをそこにおいておくと、ことが面倒になるので、島流しにされたというわけだ。

昔は、唐との交際が多かった。それで、唐から（今の支那ですね）沖繩に、いろいろの文書が送られて来た。この沖繩にいる人にはそれを読める人がいなかった。

そこで、「さあ、これは山田親方しかお分かりにならないので、呼びましょう。」ということになった。「どうして、私は罪があつて島流しされている。どうして私を呼ぶのか。」（と山田親方がいうと）「実は、しかじかの書物が唐から来て、誰も分からない。ぜひ貴方をお迎えしなければいけない。」と（説明すると）「そうか、私は再び沖繩に呼ばれるという事は、一つには名譽なことであるが、一方では恥ずかしいことでもある。それならば、通堂の港に着いたなら、同僚に、私を迎えるために、誰れ某氏は草履持ち、誰れ某氏は杖持ちという役を講みたようにしなさい。同僚ではあるけれども、私は彼等にあざむかれたから。そうする

が言みせーねーあんししむぐとう。」でい言ち。

サバ持つち行ちゆし、杖持つち、う供しーが行ち、うんちけーし来。さぐとう、うぬ人ぬ書物ぬ分かてい、あんさーに、唐とうぬとういけーや、ゆくゆくましなたんでい。それだけ覚とーん。

ならば私は沖縄に行く。「貴方がおっしゃるように、そうしてよろしいです。」と答えた。

草履を持って来る役、杖を持って来る役等のお供の人々が行つてお迎えして来た。それで、その書物は分かつて、唐との交際はますます良くなったということだ。それだけ覚えていゝる。

採集S 52・2・22 読谷村民話調査団第十四班 〔伊芸弘子〕

注 山田親方 未詳。那覇市真地の花城清光翁の話では山田親方は名護、具志頭の師。具志頭が山田を八重山に島流しし、三重城の碑

文を書かせるため、名護が硯と筆、具志頭が傘と草履を持って迎えに行く。途中、山田は海に身を投じていなくなる。彼を探すために船を出したことからハーリーが始まったとある。

100 花 売 の 縁

話者 比 嘉 徳太郎 (明治二十五年一月十日生)

翻字 知 花 春 美

千代松ぬ三ち四ちぬ頃からなたぐとう。七ち八ちんかいなてい物思い世なたぐとうやーさい、必じ男ぬ親あ何処がらんかいめーん、居ん、親みーぶさんり

(千代松が)七、八才になって物心つくようになつたので、必ず父親は何処かにいる。親に会いたいと、朝夕泣いて暮らしていた。

ち、朝夕さ泣ち暮らちさぐとう。

くぬウミチルーあんやるばー、夫おあんなとーてい
ん、良いう旦那かかてい、ひーじーぬ暮らしえー
千代松とう二人幸せに暮らちよーしが、朝夕くりが泣
ち暮らちするむのー心ぬしぬばらん、聞けー国頭、
津覇村んかいしまていうんりち聞ちよーぐとう搜めー
てい行ちゆんでいち、親子搜めーてい行ちやびん
どー。

途中でい猿ひきえ会ちやたぐとうや、猿ひきんかい
問いるばーてー。「やー猿ひき、首里方ぬ侍、森川
ぬ子、いちやる成りゆちに、なやいめが。」りち、く
ぬ女ぬ問いぐとうやーさい、「私や久志、辺野古ぬ者
どうでやびる、くぬ家ぬ様子ふかく知やびらん。あぬ
薪取いに尋にやいみそり。」うぬ猿ひきえ言ちや
しえーやー。

薪取いんかい「いやー薪取い、首里方ぬ侍、森川
ぬ子、いちやる成りゆちになやいめが。」りち、女
ぬ言いさやーさい。また千代松え「ゆるさうらちるさ、
にじららんあむぬ、たんりう情に聞かちたぼり。」り
ち、薪取いウスメーんかい願いさやーさい。

ウミチルーは、夫はああなつていても、良い旦那に
ついて日々の暮らしは千代松と二人幸せに暮らしてい
るが、朝夕これが泣いて暮らしているのを見て心が痛
く、聞けば国頭、津覇村んかい（森川の子は）住まっ
ていると聞いているので親子で搜して行くよ。

途中で猿ひきに会ったので、猿ひきに聞いたようだ。
「ねえ猿ひき、首里方の侍、森川の子どのようなり
ゆきでいるのですか。」と、この女が問うたので「私は
久志、辺野古の者なのでこの辺の様子はあまり分か
りません。あの薪取りに尋ねて下さい。」と猿ひきは言
た。

薪取りに「ねえ薪取り、首里方面の侍、森川の子は
どうなっているのですか？」と女は言った。また、千
代松も、「毎日が大変つらくて耐えることが出来ませ
ん。どうかお情けと思つて知つている分をお聞かせ下
さい。」と、薪取りのおじいさんをお願いをした。

「貴方な―二とうくるぬ、顔うがりな―びりわ、森川ぬ子がぐ―す方ぬむよ―やみしえ―しが、森川ぬ子んでい―しる二、三年前まで―くぬ浜端ぬいつかに暮らちうやびたん森川ぬ子んでいしる、侍ぬかどうおみぐとうにたていてい、人んすしらん、人にもすしららん、ふんと―ぬ男やいびたん。やいび―たしが、あ―ありが言ちやる言葉ぬ、あたる人間に生まりやいうてい、やしやし―とう暮らちよ―る暇あね―らんでいぬ物語で―んさびたん。花作れ―風ふちゆい塩たけえ雨ぬ降いしち、心とうんて―とうんたた―らんむよ―やいび―たん。うぬ年、八月十五夜ぬ月ながみぬばす、歌いむんどう―しえ―る歌ぬあいび―ん。

あん美らさていゆる十五夜ぬ月ん

雲に隠さりてい上じすじやさ

りち聞ちやる歌ぬあいび―しが、うぬ後から生ちちがうら―、死にがさら―、きう―ぬ行方ぬあていぬね―びらん。ありくりからみゆる、あぬ川、国頭、浜ぬ村どうやいびる、ありんかいめんそ―ち、隠りていゆる。急が急が。りち行ちやびんど―。

国頭、浜行ち―ね―、うまんかい出してい行ち―に

「貴方がた二人の顔をみてみれば、森川の子の御由緒方の御様子、森川の子という人は、二、三年前まではこの浜で暮らしていました。森川の子は侍としての威厳をりつぱに保ち、人をそしらず、人にもそしられず、男の中の男でありました。そうでしたが、あゝあの人の言った言葉に、人間は生まれていて、呑気に暮らしている暇はないという話をしていました。花を植えれば風が吹き、潮を焚けば雨が降りと、どうしようもなく途方にくれた様子でありました。その年の八月十五夜の月ながめの時、歌問答した歌があります。

あんなに美しく照る十五夜の月も

雲に隠されて上がれずにいるよ

と、歌がありますが、その後は生きていのか、死んでいるのか、行方が分かりません。あちらこちらに続くあの川、国頭、浜の村に行つてそこに隠れているかね。急ごう、急ごう。と行つた。

国頭、浜で、そこに森川の子が出てきて、「わたしが

んよー「くりる森川ぬ子、世間、御万人ぬ、うとうい
さかるいや、夏とう冬心、ない変わい変わいやしが。
たゆいぬありば、音じりん聞かん、天ぬみぐらしぬう
まりやらとうみば、泣ちやんでんちやすが。日々ぬ管みや
命ちぢゆる働ちんさねーならん。」りち、花売いが行
ちやびん。森川ぬ子や。

「やー千代松、あぬ花売いに梅ぬ花一枝たぼりやい。」
千代松が、女ぬ親ぬ言いぐとう、千代松が言ちやびん、
「やー花売い、梅ぬ花一枝あたぼりてい。」「お幸せ
やいる。作ていあぎやびら。」

あんしーねー、うぬ花売いるえーかー妻ぬ分か
いしが、てーげー分かとーるちむやいびん千代松が分
からんてー。

「花売いぬ踊い、一踊い踊てい見しり。」りち、
千代松が願いびーぐとう、「幸せどうやゆる。踊てい
うみかきら。」りち、うぬ踊い、花売いぬ踊いさびん
どー。

うにーねー、ちゃんとう千代松が分かてい、あま
んじ隠いびんよー。隠いねー女ぬ親二人さーに、語
だつてい、「首里ぬあんしたじゃたじゃなてい、

森川の子、世間、御万人の栄枯盛衰は、夏と冬のように
変わるものである。頼るところがあれば音信も聞く
ことができるのに、天から授けられたその生まれだと
泣いてもしようがない。毎日を生きるためには、命を
つなぐために働かなければならない。」と、花を売りに
行くよ。森川の子は。

母親が千代松に「ねえ、千代松、あの花売りに梅の
花を一枝下さい。」と言いなさいと。千代松が「ねえ花
売り、梅の花を一枝下さい。」と言うと、「幸せなこと
だ。作つてあげよう。」

それで、花を売っている間はだいたい妻が察したよ
うだ。千代松は分からない。

「花売りの踊り、ひとつ踊つて見せて下さい。」と千
代松が願うと、「幸せなことだ。踊つて見せよう。」と
その踊り、花売りの踊りをやるよ。

その時にはもう千代松も分かったので、(森川の子
は)隠れてしまった。隠れたので、母親と二人で、「首
里があんなことになって、私と千代松と二人貴方はい

私達千代松とう二人や貴方おうらんないん、いい
御旦那かかてい幸せに暮らちえーうしが、あまり
千代松が朝夕泣ち暮らちうれー心んしぬばらん、搜
めーてい来ぐとう。首里んたじやたじやなとーぐ
とう、親子ひち連りてい首里んじ育き。「りちよ。

採集S52・8・14 読谷村民話調査団第十一班 〆知花利江子・上江洲康子・名嘉真宜勝〷

注 花売の縁 組踊の一つ。高宮城親雲上（生没年不詳）作といわれる。創作年代不明。人情世話物で内容が夫婦、親子の情愛を深く描いている点で人気をあつめ、上演回数も他の組踊より多いが、冊封使接待の余興芸能として演じられた記録は見当たらない。

101 手 水 の 縁

話者 比 嘉 徳太郎（明治二十五年一月十日生）

翻字 村 山 友 江

知念山口ぬ盛小屋ぬなし子 玉津どうやゆる

（私は）知念山口の盛小屋の 玉津である

今日や波立ちる 三月ぬ三日

今日は波立つ 三月の三日

玉川に降りてい 髪洗に行ちゆん

玉川に降りて 髪を洗に行こう

髪洗いが行ちゆるばーてー。うぬふーじーや分かいは
が。玉川に降りてい、髪洗が行ちゆんやいびんよー。

髪を洗に行くのである。そういうことであることは
分かっているが。玉川に降りて、髪を洗に行くとい

行ちーねーくぬ波平真山戸、波平大主えーよー、子供
そーぬ間あ波平真山戸。波平真山戸が、うまから散歩
し歩ちゆるばーてー。

余り水欲さに しじららんあむる

無蔵よ御情に 呑まち賜り

りち、波平真山戸が、玉津前んかい行ちやびんどー。

「さりあぎやびら」りち、あぎーびんよー。

柄杓から賜りれば 情どうんやらわ

とうていん呑みぶさや 無蔵が手水

あんしーねー、玉津や

水呑みやなじき たはふれるやゆる

くまにうてい 島に急じ戻ら

急じ戻いびんどー。うにーにとーてい、縁のー結どー

ぬちむやいびんよー。あんされー男ぬ親のーくれー

サングワナーそーぐとう、生ちきとーてーならん。

志喜屋ぬ大屋子とう、山口ぬ西掟かい、知念バーマ

んじ殺しみーんりち。盛小屋ぬ親ぬてー、「サングワ

ナーそーぐとう生ちきとーてーならん。知念バーマン

じ殺し。」りち。

志喜屋ぬ大屋子りしとう、山口ぬ西掟りしえー、う

うことであるよ。波平大主というのは、子供の頃は波
平真山戸という名であった。波平真山戸が、そこから
散歩をしていた。

余りの水欲しさにがまんができないのだよ

貴女の御情で 呑まして下さい

と、波平真山戸が、玉津の前に行くわけです。(する

と)「さあどうぞ」と、(水を)あげるんですよ。

柄杓から汲んであげる 情であるならば

貴女の手水が とても呑みたいのです

そうすると、玉津は

水が欲しいというのは口実でたわむれである

ここにいてはいけない 急いで島に戻ろう

急いで戻ろうということである。その時に縁は結んで

あったということです。そうすると、父親は(玉津が)

男遊びをしたということ、生かしておくわけにはい

かない。志喜屋の大屋子と、山口の西掟に、知念バー

マで殺させようということである。盛小屋の親が「玉

津は)男遊びをしたということ、生かしておくわけに

はいかない。知念バーマで殺せ。」と言った。

志喜屋の大屋子と、山口の西掟というのは、この玉

り玉津ひかちえーぬ守あなーやんでー。あんさぐとう
二人んかい「サングワナーそーぐとう、殺ちくー。」り
ちやらさつとーぐとう。志喜屋ぬ大屋子がぬ言分のー
あんやるばー。

余り盛小屋や 義理だていぬ深さ
咲ちじゆぬ花ぬ 紅葉なす苦さ

「殺し。」りち、志喜屋の大屋子が、山口ぬ西掟んが
い願いぐとう。

やあ山口ぬ西掟 願ぐとうなりはいちやのない
が急じ殺り

急じ殺しりちやるばーてー。また、志喜屋ぬ大屋子が
朝夕守育ていしちやる わが思子
義理とうむてい 言ちやし紅葉なすが
りち、

志喜屋ぬ大屋子 うちばゆみそり

りち、いつペー玉津や

なー志喜屋ぬ大屋子 山口ぬ西掟
生ちちよりは哀り 死には忘りゆい

津の守り役であった。それで二人は、「男遊びをした
ので殺してこい。」と、行かされたのである。志喜屋の
大屋子の言い分は次のとおりである。

余りにも盛小屋は 義理固くて

咲いている花も 紅葉にして落としてしまふ苦し

さよ

と、もう仕方なく連れて行くのである。だから知念
バーマでは、次のようなことである。「殺せ。」と、志
喜屋の大屋子が、山口の西掟に願うのである。

山口の西掟よ（私の）願いはいつ果たすのか
急いで殺してしまえ

急いで殺せということである。また志喜屋の大屋子が
朝夕子守して育てた かわいい子よ
義理とはいえ どうして落とすことができようか
と、

志喜屋の大屋子が 殺して下さい

と、そして玉津は

志喜屋の大屋子と 山口の西掟よ
生きておれば哀れで 死ねば忘れられる

片時かたときんあぬ世よ 急いそじぶさあしが

哀かなし思おも里さとや 人ひとまさいでむぬ

御主うす加か那な志し願ねえ 果はたさはじでむぬ

願ねえ事ことしまち あぬ世よゆる時ときや

死し出でが山やま道みちに 御待うまちうしていやり

くぬ文ふみや里さとに 渡わたち賜たまり

り言いち。知ち念にん玉たま津つが、志し喜き屋やぬ大う屋ふ子やくかい、山やま口ぐちぬ

西にし掟じょうちんかい。山やま口ぐちぬ西にし掟じょうちえ

志し喜き屋やぬ大う屋ふ子やく うちばゆみそり

殺ころしみそーり、りちやるばーてー。うにーねーまたく

ぬ波は平へい真ま山さん戸どや

しばし待まちみそり 志し喜き屋やぬ大う屋ふ子やく 山やま口ぐちぬ

西にし掟じょうち 玉たま津つの生い命めい 我わ身みにきてい賜たまり

りち言いいねー、志し喜き屋やぬ大う屋ふ子やくや

やー山やま口ぐちぬ西にし掟じょうち 慈じ悲ひなさや 我わ身みぬ思おもちちよ

る事ことぬ

余あまり盛むり小屋くわや義ぎ理り立たていぬ深ふかさ

咲さちじゆる花はなん 紅もみ葉じなす苦くさ

玉たま津つが生い命めい 真ま山さん戸どに渡わたち

殺ころちちやーびたんでい 御報ごほううんぬきとーてい

少しでもあの世へ 急ぎたいのであるが

いとしい里は 人よりまさっているよ

やがて御主加那志の願いを 果たすであろう

願い事を果たして あの世界へ行く時は

死への山道が 待っているのだ

この手紙をあの人に 渡して下さい

と言った。知念玉津が、志喜屋の大屋子と山口の西掟

に(頼んだ。)山口の西掟は

志喜屋の大屋子が 殺して下さい

殺して下さいと、言ったわけだ。その時にはまたこの

波平真山戸は

ちよつと待つて下さい 志喜屋の大屋子 山口の

西掟 玉津の命を私に下さい。

と言うと、志喜屋の大屋子は

山口の西掟よ 情をかけようと 私は思っている

んだが

余りにも盛小屋は 義理固いのだよ

咲いている花も 紅葉にしてしまう苦しきよ

玉津の命を 真山戸にあずけて

殺してきましたと 報告していて

後々あとあとう になりは うちむとういのーさりぐとう
うにーねー玉津たまぢや

ああとーとう 天ていんぬ御助おたすけか神かみぬ引合ひちやわしか

里さととうむるとうむに なゆる嬉うれしさ

やんろー。なゆる嬉うれさりち、うにーにとーてい終うわいや
んろー。

後々になれば 心も変わるはずだから
その時玉津は

ああ 天の御助けか神の引き合わせか

あなたと一緒に なる嬉しさよ

ということである。その時で終りである。

採集 S 52・8・14 読谷村民話調査団第十一班 八知花利江子・上江洲康子・名嘉真宜勝

注 手水の縁 組踊の一つ。平敷屋朝敏（二七〇〇〜三四）作とい

われる。現存組踊四十九種中、唯一の恋愛物。創作年代不明。

村踊りなどによく演じられ、観る者の心を強くとらえた組踊の

一つ。

※ 「手水の縁」の写真三点は読谷村字楚辺公民館提供のもので、

昭和五十九年の楚辺まつりで青年会によって演じられたもの
ある。



玉津が波平真山戸に柄杓で水をあげようとしている場面



波平真山戸が「玉津の命を私に下さい。」と言う場面



波平真山戸が玉津の命を救って一緒になる場面

龜 甲 墓 偽 装

話者 知 花 ナ へ (明治四十年一月三十日生)

翻 字 天 久 加 代 子

唐船よ、唐からぬ、使いぬ船ぬよ、くぬ東支那海通
いんせーにてし、那覇ぬ町までい通いせーにや。

百姓ぬよ、今ぬ、今ぬ、龜甲墓りーせーよ、かっ
てに造ららんたんりよーや、あんすぐとう、あぬ、
金持ん人おなー、てーげーや、海岸そーている造い
そーしがや、てーげー、金持ん人やなー、あぬ部落近
くに造てーんせーるばーて。

あんすぐとう、上え偽装しちよ、モーガラ、植ん
せーるばーて、今にちけてよ、その、あんし、モーガ
ラ植てーんせーる、墓ぬよ、現に今、龜甲墓やしが
て、みんなモーがはいつておるよ。「あれよー、ぬー
やがや、あんりつばぬ龜甲墓にや、あんしモーガ
ラ植ていやる。」りち、私達が聞ちーねーや、モー、
草、偽装さつてるばーて。

あんしーねーよ、うぬおじいさん達やよ、私達んか
い、上ぬおじいさん達やよ、以前え唐船ぬや、唐ぬ船

唐船よ、唐からの使いの船は東支那海を通り、那覇
の町まで行つたそうだ。

百姓は、今の龜甲墓というのは、かつてに造られな
かったそうです。それで、(百姓は)墓はほとんど海岸
の方へ造つたが、金持ちは、部落近くに造つたそうで
ある。

そして、上の方は偽装して、モーガラを植えたそ
うである。今でもモーガラが植えられた龜甲墓があ
るよ。「あれはどうしてかな。あんなにすばらしい龜
甲墓にモーガラを植えるなんて。」と私達が聞いたら、
草で偽装をしたということである。

それで、そのおじいさん達が、年寄りのおじいさん
達が私達に言うことには、昔、唐船が、唐の船が、

ぬや、那覇んかいぬ使、琉球んかいぬ使ぬやいねー
や、あぬ、うぬ、東支那海通いんせーしえーや、唐船
ぬ船え。

だから、あれ百姓がよ、あぬ亀甲墓よきれいに
造ららんたんり、それぐらいよ、なあ、平民のーよ、
あぬてー、奴隷扱いさつとーてーるばーて、うぬあた
いやたんり。

那覇の使い、琉球への使いのときは、東支那海を通つ
てきた。

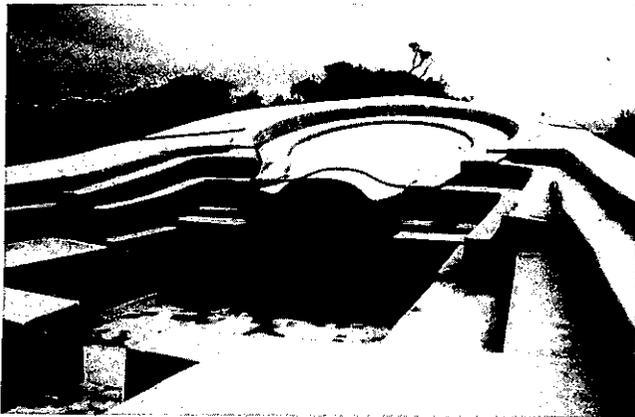
それで、百姓は亀甲墓を造ることもできなかつた。
それほど平民は奴隷扱いをされていたようである。

採集S 52・2・22 読谷村民話調査団第十四班 八連天悦子V

注 亀甲墓 外形が亀甲状になっている墓。沖縄の亀甲墓は華南系

墓式の影響を受けたもので、もつとも古いものは那覇市首里石

嶺町にある伊江御殿家の墓（二六八七年築造）である。



亀 甲 墓

四 チャーギの実^み

話者 知花ナへ（明治四十年一月三十日生）

翻字 島袋千代

男と女^{いなか}がいつペーなじみぬ仲^{なか}やんてー、ままーなららん。一緒^{いっしょ}に死^しじえーるばーてーや。あんさくとう、この女^{おんな}の家^やんやー、男^{いなか}ぬ家^やんなー、埋^うみてーるばーてーやー。あんさくとう、チャーギぬ木^きい植^いいたんりー。あんさくとう、後^ご生^{せい}んじん、ままーならんたんりー。うりし、チャーギの木^きや、ひとつは赤^{あか}いもの、ひとつは青^{あお}色^{いろ}ぐわー、やいびーんりーさに、青^{あお}色^{いろ}ぐわーやいびんりーろー、チャーギぬ実^みや。

男と女、たいそう恋仲であつたが、一緒になれないので、情死したそうだ。そうしたら、女の家も、男の家も、葬ったそうだ。そこで、チャーギ（イヌマキ）を植えたそうだ。それでもあの世でも一緒になれなかつたそうだ。そんなことで、チャーギの木は、一つは赤い実をつけ、もう一つは青い実になっているようだよ。

採集 S 52・2・22 読谷村民話調査団第十四班 八運天悦子 V

四 座喜味城^{ざきみじょう}を造^{つく}った話^{はなし}

話者 比嘉徳太郎（明治二十五年一月十日生）

翻字 名嘉真宜勝

注①
座喜味城^{ざきみじょう}ややーさい、山田^{やまだ}から座喜味溝^{ざきみみぞ}お造^{つく}りわる

座喜味城はですね、山田から座喜味溝を造らなけれ

ないでいち、あまんかい城お造りわるないでいちや、造たくとうやー。

あぬ、その時の王様あくぬ私達あ波平ぬ乗場ぐわーぬ、うまんかいイットウカグシクでいちあんよー。なまぬハルぬ名てーさい。イットウカグシクでいち、なまー呼れーうしが。

うぬ王様あ、んまうとーてい、座喜味城お二二九年までに落成なとーしが、落成なたしが、護佐丸おうまんかい住まいみそーらん。国頭からぬ戦えーかねー、中央からぬ戦うりやぐとうでいち。あれー、是非中城ぬ勤みしりわるないでいやーに、護佐丸お中城んかいめんそーちやくとう、座喜味城や座喜味大主でいしんかい授きやーに、護佐丸お中城んかいめんしえーちやんでいーる話。

その時の王様あ各国からかんし徴用や呼でい、城お落成なたしが、食まする物ぬ無らん。くぬ配給し食ますしが無らん。うーるうつさ死にあらしーやたんでい。死にあらしー、なー、食みわる生ちかりーさいやー。

ばいけない。あそこに城を造つてやろうと言つて造つたようだ。

その時の王様は、私たちの波平部落の（現在の）バス乗場の所にイットウカグシクというのがありますが、現在の原名ですね。

その王様はそこで、座喜味城は二二九年までに落成はしたが、護佐丸はそこにはお住みにはならなかつた。国頭からの戦より、中央からの戦が恐いということ、彼はぜひ中城を守つてもらいたいということ、護佐丸は中城へ移つて行かれたので、座喜味城は座喜味大主という方に譲つたという話である。

その時の王様は、各国から人夫を徴用して城は完成したが、食糧がなかつた。配給して食べさせるものがなかつた。ほとんどの人がバタバタと死んでいったということだ。死者が次々と出た。もう食糧があつてはじめて生きていけるでしょう。

うり、チブガマーから、ん瀬名波井戸注④かい、チビチリ注⑤かい、人ぬ骨こつえーよー。うにーぬ徴用臣下ちゆうようしんかやたんでい。

イーグルクぬチビチリやていん、マルチャぐわーんあたいたい、ホーチャーぐわーんあたんでいる話はなしやん。うぬ時ぬ徴用臣下ちゆうようしんかぬ帰かえいうーさん、死しじょーしんちやーが、くぬ長浜原岩ながはまのいわぬ下したん、むる人ぬ骨こつるやつさいやー。

あんさくとう、その時の王様おうさまあ「世の衰おとり」世やや衰ちりてい、食かますぬ物ものぬ無ならん、世よ衰ちりたれー、その時の王様おうさまあ、「私わいが死しじんやー先祖せんぞぬ所ところんかい、玉陵たまらかい私わいが、行いちうーさんくとう、行んぢえー無ぶ礼れいなくくとう、浦添うらしゆーどおりんかい、私わんねー送うつていとうらし。」でいる伝つたえやたんでい。

あんさくとう、なまー、二二九年ねんどうないくとうやー、二二九年ねん、三〇年ねんのー来年やがふーどうないる、うつさるないくとう、うぬ時の王様おうさまあ浦添うらしゆどうりんかい送りみそーちやしがや、浦添うらしゆどうりるやしが、行いちうーさんぬ、世よの衰おとり墓ぼかるやんでい。世よの衰おとり墓ぼかどうやんどー。

あんさーに、座喜味大主ざきみだいしゅしんかい授さぎやーに、城ぐしお。さくとう、座喜味ざきみの東上地あがりいぢえ、粟俵あわたらふとうちみ

私たちの村のチブガマに人骨がありますね。それはその当時の徴用した人夫のものだそうですね。私たちの村のチビチリ洞穴でもまな板や包丁があつたという話です。その時の徴用人夫が帰ることが出来ないで死んだ人々の骨で、長浜の岩の下は一杯ですよ。

そこで、その当時の王様は、「世の衰え」食べさすものがなくて世の中が衰えたので、王様は、「私は死んでも先祖のいる玉陵へ葬られることは出来ない。行ったら無礼になるので、浦添ようどれに私を葬って下さい。」と、いう伝えたつたそう。

そこで、今は二二九年しかないが、二二九年、三〇年は来年にはなるが、それだけしかない。その時の王様は、浦添ようどれに入った。浦添ようどれは、世の衰えた時の王様が葬られた墓という意味だそう。

そこで、座喜味城は、座喜味大主に譲つた。そこで、座喜味の東上地という方が、粟俵を解いて、その城の

そーやーに、うぬ城ぬ広場やん所んかい、むる粟あ時
ちほーてい。うぬ粟ぬできたとう、生ちちよーるうつ
さー、うぬ粟飯さーに命え生ちち。生ちちやぐとうる。

「ウートートウ、東上地ぬ富え、世代、うりしくみ
そーり。」んち、なまちきてい、東上地え金持人やん
どー。座喜味ぬ東上地よ、うぬ自分ぬ粟俵かんし時ち
ほーいんそーやーに。城お広場なているうくとう。
粟あできたとう、生ちちよーるうつさんかい配給
し食ましみそーやーに、あんさーに「ウートートウ、
東上地ぬ富え、世代うとうししみそーり。」でい
言ち。

広場に残らず粟の種を蒔いた。その粟が実ったので、
生き残った人々は、その粟飯で命拾いをしたようだ。

「ウートートウ、東上地の富貴は万代まで続くこと
をお祈りします。」と（人々は感謝したようだ。）現在
でも、東上地は金持ちだよ。座喜味の東上地はね、そ
の自分の粟俵を蒔いた。城は広場になっていて、粟は
実ったので、生き残っている人々に配給して与えたの
で、それで「ウートートウ、東上地の富貴は万代まで
続けさせて下さい。」と感謝されたそうだ。

採集S 52・8・14 読谷村民話調査団第十一班 八知花利江子・上江洲康子・名嘉真宜勝

注① 座喜味城跡 読谷村座喜味の城原にある古城跡で、十五世紀の初期に護佐丸によって築造されたものである。護佐丸は、この城
の北方眼下の長浜港を利用して、南方貿易をし巨大な富を得たといわれる。しかし、まもなくして、座喜味城跡のはるか東南の
中城へ移り（一四四〇年頃）、そこに名城中城城を築いた。座喜味城跡は、国指定史跡で環境設備もすすみ、松林の奥深くたたず
み、風光明媚なところで訪れる人も多い。

注② イットウカグシク 波平部落の西方、給油所裏にあるグスク。平坦な松山で石垣等の遺溝はない。伝承によると、護佐丸が座喜
味城を築造する際、一時ここに城を構えていたことから、イットウカグシク（一時の城）という地名が付いたという。

注③ 中城城 中城村伊舎堂にある。尚泰久王時代（一四五四〜一四六〇年）護佐丸が読谷山座喜味城から移り、一四五八年、勝連城

の阿麻和利に亡ぼされるまでの居城で、城も亦彼の計画に係るものという。内外城壁は今なお厳然としてほとんど完全に近いほど残っている。

注④ 瀬名波ガ― 瀬名波部落の北方海岸・川平原にある岩間から湧き出る泉井。水道が普及する以前(昭和四〇年頃)までは村の重要な井戸であった。

注⑤ チビチリ 読谷村字波平に鍾乳洞。先の大戦ではガマの中で集団自決があった。

注⑥ 玉陵 那覇市首里山川町にある第二尚氏王統歴代の墓陵。一五〇一年尚真王が築いたと伝えられている。沖縄における破風墓の元祖で規模も最大である。墓は東室・中室・西室の三墓からなり、一九七二年に国指定文化に指定された。

注⑦ 浦添ゆうどうり 浦添ようどれは英祖王(一二六〇～一二九九)と尚寧王(一五八九～一六二〇)の墳墓で浦添城跡の北がわの崖の中腹にある。自然の洞穴をさらに削りとって造られており、向かって右が英祖王陵、左が尚寧王陵である。(英祖王のころ僧禅鑑が来琉し初めて浦添に寺を建て、墓を建てたと伝えられる。第二尚氏の歴代王は尚円王以来、首里の王陵に葬られることになっていたが尚寧王に到って慶長の役の敗戦の責任を感じて浦添の墓に葬られた。)一六二〇年八月の建立である。「ドゥリ」は無風原義で転じて風の静かな事にも使われる。また「ようドゥリ」は極楽のオモロ名かと思われる。



座喜味城跡



瀬名波ガ-



浦添ゆうどれ

第二編 資料



話者別一覽表

凡例

- 一、話者番号は話者の数を表わす番号である。話者の配列は調査班の若い順に並べたが割り付上前後したのもある。
- 二、話者欄には、話者の氏名を示し、できるだけ写真を載せた。
- 三、住所欄については、話者のすべてが読谷村に住所を有するので、字名と番地を記入した。生年月日は、便宜上M(明治)、T(大正)、S(昭和)の略号を用いた。
- 四、話者番号に○を付したのは、翻字資料が掲載されていることを示す。
- 五、話者名欄のへはモチーフ名を表わす。話は調査年月日の古い順に、テープ収録順に並べた。また、同話者による同じ話の再録分については調査の古い順に並記した。
- 六、語りの欄の○印は方言、×印は共通語、△は方言共通語混じりの語りを表わす。
- 七、テープ欄には字ごとに編集したテープ番号を示した。
- 八、調査欄には調査年月日を示した。

話者番号	話者名	住所 生年月日	話者番号	話者名	翻字 番号	掲載頁	語り	テープ 番号	調査
1	大城 カマド	高志保二〇四 M 40・8・24	1	世間話(フエーレー) 話千両(白銀堂由来) モイ親方(勉強・難題) 真玉橋の人柱 姥棄山(難題) アカマタ智入(芋環型)	61	93	○ ○ × ○ × ×	1 A 17 1 A 24 1 A 25 1 A 26 1 A 30 1 A 31	S 52・2・22
2	津波 輝	高志保一六一 T 2・3・18	② 1	鍋蓋アカマタ 継子の芋掘り	32	45	○ ×	1 A 19 1 A 27	S 52・2・22

8	7	6	5	4	3
知花ハツ	比嘉ウト	比嘉ント	比嘉太郎	喜友名ヨシ	津波清吉
M 42・6・9 二一二 高志保二二四	M 37・6・25 高志保二〇〇	M 32・11・6 高志保一五四	M 40・7・15 高志保四四	T 元・8・10 高志保二三三	M 37・3・20 高志保三七
5 ④ 3 2 1	1	①	8 7 6 5 4 3 ② ①	③ 2 1	5 4 3 2 1
下男が歌った歌 大年の客 火正月 ハジチ由来 久良波首里殿内	継子話〈辛掘り〉	ハジキ由来	馬舞の話 高志保部落のこと キジムナー はしかにかかった年は葬式しない お茶二杯 猫の首吊り 墓から聞こえる歌 明ぬ玉の由来	継子話と二十日月 キジムナーと尻 クスケー	帽子くみの歌 お茶一杯 猫の首吊り 火正月 継子話〈麦と涙〉
43		88	90 82	35	
56		138	140 129	48	
○ ○ ○ ○ ○	○	○	△ △ △ △ △ ○ △ ×	× × ×	× × × × ×
1 A 11 1 A 7 1 A 6 1 A 2 1 A 1	1 A 4	1 A 3	7 A 11 7 A 10 7 A 9 1 B 16 1 B 15 1 B 14 1 B 11 1 B 10	1 A 28 1 A 23 1 A 21	1 A 29 1 A 22 1 A 20 1 A 18 1 A 16
	S 52・2・22	S 52・2・22	S 60・2・27	S 52・2・22	S 52・2・22

14	13	12
<p>比嘉カマ</p> 	<p>知花ナヘ</p> 	<p>国吉真次郎</p> 
<p>高志保八二 M 39・3・25</p>	<p>高志保四八 M 40・1・30</p>	<p>高志保三二七 M 27・2・8</p>
<p>⑨ 8 7 ⑥ ⑤ 4 ③ 2 1</p>	<p>10 ⑨ ⑧ ⑦ 6 ⑤ 4 3 2 ①</p>	<p>⑧ ⑦ 6 ⑤ ④ 3 ② 1</p>
<p>アカマタ智入〈芋環型〉 ハジチ由来 化物寺 姥棄山〈難題〉 天人女房 子供の寿命 真玉橋の人柱 兄弟の仲直り 孫の生肝</p>	<p>姥棄山〈難題〉 十二支由来 歌へあんでいん喜ぶな 子育て幽霊へウチカビ由来 継子と二十日月 継子話〈麦と涙〉 継子と爪 チャイゴの実 亀甲墓偽装 十二支由来</p>	<p>モーイ親方〈難題〉 勝り山田 沖繩のカタカシラ モーイ親方 並松を植えた国頭親方 石敢当由来 アカマタ智入 喜屋武ミ〜ぐわー</p>
<p>28 22 20 13</p>	<p>102 103 38 36 59</p>	<p>50 15 78 58 99</p>
<p>39 28 25 16</p>	<p>167 169 50 48 87</p>	<p>69 19 122 85 155</p>
<p>△ △ △ × △ × × × △</p>	<p>× ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○</p>	<p>○ ○ × × △ ○ ○ ○</p>
<p>2 2 2 2 2 2 2 2 2 A A A A A A A A A 28 27 26 25 24 23 21 20 18</p>	<p>5 2 2 2 2 2 2 2 2 A A A A A A A A A 15 14 12 11 10 9 8 7 5 3</p>	<p>5 5 5 5 5 2 2 2 A A A A A B B B 21 20 19 18 17 7 4 3</p>
<p>S 52 ・ 2 ・ 22</p>	<p>S 52 ・ 2 ・ 22</p>	<p>S 52 ・ 8 ・ 14</p> <p>S 52 ・ 2 ・ 22</p>

24	23	22	21	20
奥原ヨネ	大城ウト	大城ウサ	知花マサ	大城ウト
				
M 41・3・24 高志保一二六	M 41・9・20 高志保一五二	M 33・7・10 高志保二五〇	M 37・4・7 高志保二一四	T 元・12・20 高志保一一三
1	2 ①	③ ② ①	1	⑥ 5 4 3 2 1
盆十六日に水浴びしてはいけない	継子話 屁こき嫁	アカマタ嫁入 子育て幽霊 継子話へ茶腹・飯腹	五月五日の説明	雀孝行 鬼餅由来 鍋蓋アカマタ 昔の人が言うことば 火正月 普天間権現由来
	67	31 21 14		80
	105	44 26 17		126
×	×	×	○	○ ○ ○ ○ ○ ○
3 B 11	5 A 14 3 B 12	3 B 13 3 B 4 3 B 3	2 B 16	3 A 12 3 A 11 3 A 8 3 A 6 3 A 2 3 A 1
S 52・2・22	S 52・8・15 S 52・2・22	S 52・2・24	S 52・2・22	S 52・2・22

29	28	27	26	25
松田長秀 	松田芳英	大城亀次郎	新垣ゴセイ	知花スミ 
M 42・11・27 — 高志保一四九	M 45・5・10 高志保一四四	T 2・11・30 高志保五八	T 元・12・10 高志保二二五	M 39・8・17 高志保一五五
⑦ ⑥ ⑤ 4 ③ ② ①	② 1	1	4 3 ② 1	⑤ 4 ③ ② 1
阿麻和利〈網発見〉 犬の足あと 兄弟の仲直り 親食いかマンタ 鍋蓋アカマタ 猿長者 石マーマーの話	悪払い キジムナー〈魚取り〉	十二支由来	鍋蓋アカマタ 継子話へカラスと味噌 継子の唄 お茶二杯	鬼餅由来 継子の麦つき 継子とにが菜 猿長者 大年の客
77 70 45 16 41 25	11		33	42 37 30
121 108 58 20 52 32	13		46	55 49 43
△ △ △ △ △ △ △	○ ×	△	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○
4 B 9 4 B 8 4 B 6 4 B 5 4 B 3 4 A 5 4 A 3	2 A 22 2 A 17	1 B 13	3 A 17 3 A 9 3 A 7 3 A 5	3 B 10 3 B 7 3 B 6 3 B 5 3 B 1
	S 52・2・22 〃	S 52・2・22	S 52・2・22	S 52・2・22

33	32	31	30
奥原崇善	比嘉カメ	大城清一	大城重輝
			
M 高志保一〇〇 32・4・10	M 高志保一五八 34・11・30	T 高志保三五 3・10・21	M 高志保十四 41・2・20
6 5 4 3 ② 1	6 5 4 ③ ② ①	①	④ 3 ② ①
東廻い 美女に化けたアカマタ キジムナーが魚の目を食べた話 豚マジムン モイ親方〈殿様の難題〉 高志保部落の始まり	雨蛙不孝 位牌由来 雀孝行 継子の芋掘り 継子の麦つき 菖蒲由来	犬の脚	多幸山フェーレ 高志保城の話 キジムナーと屁 山原と団亀
18	1 83 4	7	68 79 95
22	1 130 4	9	106 122 150
× ○ × × ○ ×	○ ○ ○ ○ ○ ○	×	△ △ △ △
1 A 1 A 1 A 1 A 1 A 15 14 12 10 9 8	5 A 5 A 5 A 5 A 5 A 16 13 12 11 10 9	4 A 4 A 4	4 B 4 B 4 A 4 A 7 1 6 2
S 52 ・ 2 ・ 22	S 52 ・ 8 ・ 15	S 52 ・ 2 ・ 22	S 52 ・ 2 ・ 22

34											奥原崇善																	
 <p>大城利徳</p>																												
高志保二五一 M 41・4・24											高志保一〇〇 M 32・4・10																	
15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7
モーイ親方	キジムナー	男と女の節句の話	高志保の前ノ泉の由来	天人女房	鍋蓋アカマタ	モーイ親方	モーイ親方〈殿様の難題〉	お茶二杯	姥棄山〈難題〉	十二支由来	夫振岩	ハジチ由来	猫の首吊り	ムーチーの話	鬼餅由来	姥棄山	肝試し	吉屋チル	同年生を見舞うものではない	ハジキ由来	ヨーカビー	ナーチャミー由来	真玉橋由来	白銀堂由来	多幸山フェーレー	モーイ親方〈難題〉	アカマター	
56	9		19				84	60	5	74	86				8		96	85	87				53					
80	10		23				132	89	6	112	134				9		152	134	137				73					
○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
6 A 1	5 B 11	5 B 10	5 B 9	5 B 8	5 B 7	5 B 6	3 A 18	3 A 16	3 A 15	3 A 14	3 A 13	3 A 10	3 A 4	3 A 3	8 A 5	8 A 4	8 A 3	8 A 2	8 A 1	7 B 18	7 B 17	7 B 16	7 B 15	7 B 14	7 B 13	7 B 12	7 B 11	7 B 10
					S 52 ・ 8 ・ 14									S 52 ・ 2 ・ 2													S 60 ・ 2 ・ 28	

7	6	5	4	3	2	1				22	21	20	19	18	17	16	15	14	
チーグー王	護佐丸と阿麻和利	阿麻和利	高志保の前又泉由来	井戸水比べ	夫振岩	沖繩の始まり	伝	説		つんぼ夫婦の話	犬の顎があたつた夫婦	犬と女	肝試し	坊主御主	渡具知倉根の富を減らした人	尻ひり嫁	山原と団亀	稲苗の根洗い由来	
	1	1	2	1	1	2	1			1	1	2	4	1	1	1	3	2	5
26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	
勝り山田	吉屋チル	久良波首里殿内	多幸山フェーレ	墓から聞こえる歌	逆立ち幽霊	同年生を見舞うものではない	お茶二杯	ハジチ由来	位牌由来	ナーチャミー由来	男と女の節句の話	石敢当由来	普天間権現由来	イトトウカグシク	明ぬ王の由来	前寺の由来	高志保部落の始まり	国頭王の話	
	1	2	3	7	1	1	1	3	5	1	3	1	1	1	1	1	2	1	
									3	2	1			31	30	29	28	27	
総話数	歌	民俗	世間話					チャーギの実	亀甲墓をかくした話	座喜味城の話		その他		手水の縁	花売の縁	並松を植えた国頭親方	トウムシンチチャ	平敷屋朝敏	
244	15	20	16					1	1	2				1	1	1	1	1	

話型別梗概一覧

凡例 一、これは昭和五二年二月二日から昭和六十年四月十六日にかけて行なわれた高志保の民話調査で採集した全二四四話の話型別梗概一覧である。

二、昔話の分類は『日本昔話集成』（関敬吾著）に従って分類し、動物昔話、本格昔話、笑話の順に並べた。但し、伝説または世間話として語られている話でも、昔話の型で分類できるものについては、昔話の項に入れた。

三、伝説の分類は、遠藤庄治氏の「沖繩の伝説」（『沖繩地方の民間文芸』所収、三弥井書店）に準じた。

四、番号欄の「通し」は、全話型の通し番号、「話型」は分類項目ごとの話型番号、「類話」は各話型の類話数を示す番号で、話型ごとの採集話数を示すものとする。但し、採集話数が一話の場合は番号を付さなかった。また類話間は波線、話型間は実線で分けた。

五、話型名は『日本昔話名彙』（柳田国男監修）、『日本昔話集成』に対応する話は、なるべく、その話型名に従ったが「アカマタ掣入」

「真玉橋の人柱」「白銀堂由来」など地域に密着した題名についてはそれを用いた。△▽はモチーフ名を示す。

六、生年月日は、M（明治）、T（大正）、S（昭和）の略記号で示した。

七、語りの欄の○印は方言、×印は共通語、△印は方言共通語混りの語りを表わす。

八、テープ欄には字ごとに編集したテープ番号を示した。

一、動物昔話

1 (1)①	し型話 通話類	番号
雀孝行	話型名	話者名 (生年月日)
M 25・1・10	比嘉 徳太郎	梗概
3頁「雀孝行」参照		
○	語り	
2 B 1	テープ 番号	

10 ④	9 ③	8 ②	7 (2) ①	6 ⑥	5 ⑤	4 ④	3 ③	2 ②
			十二支由来					
大城 幸太郎 M 33・11・10	知花 ナヘ M 40・1・30	大城 幸太郎 M 33・11・10	大城 亀次郎 T 2・11・30	山城 英一 M 45・1・13	比嘉 徳太郎 M 25・1・10	比嘉 カメ M 34・11・30	知花 トキ M 38・10・15	大城 ウト T 元・12・20
ねずみは知恵があつたので、十二支を決める時牛の尾から右の角にあがつたので、決勝点で一番になった。	十二支を決める時、ねずみは連絡人であるが猫には伝えなかつた。それで猫は怒ってねずみを食べるようになった。	十二支を決める時、ねずみは連絡人であるが猫には伝えなかつた。それで猫は十二支には入っていない。	猫は頭がよかつた。ねずみは、猫に食べられるのを恐れて、動物の集まりがある事を知らせなかつた。	クラーグワは働き者で親孝行であつたので、米倉で米を食べて暮らしていた。カーラカンジューはいつもきれいな着物を着ているので、川で魚をとつて暮らしていた。	雀は破れた着物を着ていても、親孝行者であつたから、倉の下で生活するように言われた。カーラカンジューは、きれいな着物を着て親の死に目にも会えない親不孝者であつた。	1頁「雀孝行」参照	2頁「雀孝行」参照	美しい鳥は親が死ぬ時着飾つて行つたので、死に目に会えなかつた。雀はボロを着けたまま行つたので死に目に会うことができた。だから雀は親孝行である。
×	○	×	△	△	○	○	△	○
2 A 6	2 A 5	2 A 4	1 B 13	7 B 1	5 A 22	5 A 11	4 A 1	3 A 1

二、本格昔話

17 ②	16 (1) ①	鬼餅由来	大城ゴゼ M 39・5・19	男と女の兄妹がいた。兄が山にこもり人を食べたりにしたので、妹がシワーシムーチーを作って、兄の所へ持って行った。兄の口に餅を食べさせ、自分の恥の部分を見せて、これは鬼を食う口と言って兄にせまると、後へ転んでそのまま死んだ。それ以来シワーシムーチーは毎年つくるようになった。	○	1 A 5
大城ウト T 元・12・20				ウナイイキーの兄妹がいた。兄は失恋をしてやつれはてて山へ行き、鬼と化した。そして人間を殺して食べたので、ウナイがどうかしよ うとイキーの好きな餅を作って行き、「あんたの魂を持って来たよ。」	○	3 A 2

15 (5)	14 (4)	13 (3)	12 ⑥	11 ⑤
猿の赤尻	雨蛙不孝	犬の足		
大城利徳 M 41・4・24	比嘉カメ M 34・11・30	大城清一 T 3・10・21	知花ナヘ M 40・1・30	大城利徳 M 41・4・24
8頁「猿の赤尻」参照	4頁「雨蛙不孝」参照	9頁「犬の足」参照	動物に名を付けるということで、動物が集められた。猫には連絡がなかったのか十二支には入っていないかった。それで猫が一番になったね ずみをねたみ、ねずみを食べるようになった。	6頁「十二支由来」参照
×	○	×	×	○
6 A 3	5 A 9	4 A 4	5 A 15	3 A 14

22 (2)	21 ⑥	20 ⑤	19 ④	18 ③
五月五日由来				
比嘉カメ	奥原崇善 M 32・4・10	比嘉カマ M 39・3・25	山城英一 M 45・1・13	知花スミ M 39・8・17
戦争の時、菖蒲の中に入り、敵からまぬがれたので、五月五日に菖蒲	9頁「鬼餅由来」参照	昔、二人の兄妹がいた。兄は洞窟にいて、顔、形も異って人や動物を食べる鬼になっていた。それで皆で退治しようとしたが、妹が餅を作つてそれに固いのを入れて、兄が食べている時に、崖から落とした。	八日には餅を作るようになった。	と呼び出し、山の斜面へ登らせて、餅は食べさせずに突きおとした。 アフアチャカマーという鬼がいた。この鬼を役人達がつかまえようとするができなかつたので、その妹に頼んだ。その妹が言うには、「私の兄は餅が好きだから、兄をつかまえる為には、餅を食べさせれば兄は寄ってくるから。」と言う。また、女の恥は鬼が怖がるからと妹の恥によつて、洞窟に落として退治した。それから餅は鬼を退治する事ができるといふ事で作られるようになった。
○	×	○	×	○
5 A 16	8 A 5	6 A 4	3 B 2	3 B 2

28 ②	27 (4) ①	26 ④	25 ③	24 ②	23 (3) ①
	キジムナー△尻▽				キジムナー△魚取り▽
大城重輝 M 41・2・20	喜友名ヨシ T元・8・10	山城英一 M 45・1・13	大城貞保 M 36・1・16	大城利徳 M 41・4・24	松田芳英 M 45・5・10
キジムナーは、顔は猿に似て髪は赤で長く、人を騙すという。アダンの木に日なたぼっこをしている時があり、人間と良く遊ぶ。キジムナーと人間が友達になると、魚や蛸をいっぱい人間に取ってくれる。人間を背負って海を歩きながら漁をするので、その時には「尻をするな」と言いながら明りをつけて歩いた。	キジムナーとある人が友達になり、一緒に海に行く。キジムナーがその人に、「もし尻をいいたら海に突き落とすぞ。」と言った。	キジムナーと友達になったら、いつも大漁であったが、キジムナーと一緒に海に行くと、いつも魚の目玉が一つなくなつたらしい。それで魚の目が一つなくなつたら、キジムナーが食べたんだなということである。また、キジムナーと友達になったら、尻はするなといわれていた。でも尻は我慢することはできず、尻をやってしまったら海に溺れてしまったという話もあった。	キジムナーは、小人で赤い顔をしている。キジムナー火というのがあってキジムナーが歩くとその火が、あつちこつちに見えたそう。特に海の近くに見えた。そのキジムナーとあるおばあさんが友達になって、潮どきになると、キジムナーはおばあさんを起こして、蛸取りに行つていつも大漁であったそう。	10頁「キジムナー」参照	13頁「キジムナー△魚取り▽」参照
△	×	○	×	○	○
4 B I	1 A 23	7 B 5	6 A 7	5 B 11	2 A 22

36 ⑤	35 ④	34 ③	33 ②	32 (7) ①	31 (6)	30 (5)	29 ③
				アカマタ聾入	鬼婆の話	化け物寺	
山城 英一 M 45・1・13	国吉 真次郎 M 27・2・8	大城 ウサ M 33・7・10	比嘉 カマ M 39・3・25	大城 カマド M 40・8・24	比嘉 徳太郎 M 25・1・10	比嘉 カマ M 39・3・25	知花 トキ M 38・10・15
蛇が男に化けて忍んできたので、おばあさんがおかしいということに気づき、芭蕉をその男の髪にさして確かめたら、洞窟の中に入って行った。役人と一緒にその蛇を退治した。	19頁「アカマタ聾入」参照	17頁「アカマタ聾入」参照	アカマタが美男子に化けたので、女の人とその男に恋をしてしまった。それを側で見ていた人が、不思議に思い反物に糸を付けた。すると、朝になるとその男は穴の中にいた。これはアカマターであるということとで、不思議に思い、村のユタを訪ねたらアカマターの子を宿しているから海に行つて、身体を清めなさいということである。	アカマタが美男子に化け、女の所へやって来た。男に糸を通し、その後をたどつて行くと、穴の中にアカマタがいた。女の人は、アカマタに騙されてできた子供をたくさん生み下ろす。厄払いをするために、三月三日には海に行き身を清める。	14頁「鬼婆の話」参照	16頁「化け物寺」参照	12頁「キジムナー」参照
○	○	×	△	○	○	×	△
7 B 4	5 A 20	3 B 3	2 A 18	1 A 31	2 B 9	2 A 21	4 B 2

42 ③	41 ②	40 (8) ①	39 ⑧	38 ⑦	37 ⑥
		鍋蓋アカマタ			
知花トキ M 38・10・15	大城利徳 M 41・4・24	山城英一 M 45・1・13	喜友名市太郎 T 元・11・23	山城英一 M 45・1・13	奥原崇善 M 32・4・10
洞窟に入って死ぬ。	鍋蓋の下で育ったアカマターが若い美しい男に化けて、女の所に通う。浜下りをして子供を生ませると、ザルに一杯生まれる。アカマターは捨てる時は、松の木などの枝に吊るして捨てるよよい。	カマンタを地面に伏せておいたら、アカマターが孵化して美男子に化けて女を騙した。だからカマンタは使い終わったら、木に吊るしなさいということである。	21頁「アカマターと小便」参照	アカマターの話は、北谷で始まったことらしい。北谷にある美しい女の人がいた。その女の人を、本当の人間が望んでいたので、アカマターもこうしてはいけなないと、美しい男に化けて忍んでいた。そうしたら、その美しい女の人は妊娠してしまった。母親は不思議に思い、妊娠した娘を連れて、三月三日に浜遊びをさせたらアカマターの子が下りてきた。それから、三月三日の浜遊びをするようになった。アカマターは赤ハチマキをして化けて来るそうだ。	アカマターの由来は、昔のおじいさんから聞いた。アカマターが美しい男に化けて、祝いの場所とか人の集まる場所に来て、美しい女を騙した。それから年寄りには、若い女の人にどんな美男子がきてもよく注意するようにと言ったそうだ。
△	○	○	×	○	×
4 B 4	5 B 7	8 B 1	1 B 1	7 B 3	7 B 10

51 (12) ①	50 ②	49 (12) ①	48 ③	47 ②	46 (10) ①	45 (9)	44 ⑤	43 ④
真玉橋由来		子育て幽霊			天人女房	美女に化けたアカマタ		
知花ハツ M 42・6・9	大城ウサ M 33・7・10	知花ナヘ M 40・1・30	山城英一 M 45・1・13	大城利徳 M 41・4・24	比嘉カマ M 39・3・25	奥原崇善 M 32・4・10	大城ウト T 元・12・20	松田長秀 M 42・11・27
29頁「真玉橋由来」参照	26頁「子育て幽霊」参照	毎日なので、店の人は後を追ってみると墓に入った。店でお金をみたら、それは金ではなくてウチカビであった。後生の人は、ウチカビを使うのだなあと。それから、祖先の祭りには、ウチカビを添えるようになった。	大謝名のメーヌカーへ、女の人が浴びに来た。その女の人は天からではなく、ほんとうは首里から来た。その人が首里に行くと、天に帰ったといわれた。	23頁「天人女房」参照	25頁「天人女房」参照	22頁「美女に化けたアカマタ」参照	アカマターが、赤いタオルをかぶって美男子に化け、女を騙しアカマターの子が生まれた。カマンタをうつ伏せにした中から生まれたアカマターは、女を騙すのでカマンタは、うつ伏せにしてはいけない。	20頁「鍋蓋とアカマタ」参照
△	○	○	○	○	△	○	○	△
1 A 13	3 B 4	2 A 8	7 B 6	5 B 8	2 A 24	1 A 9	3 A 6	4 B 3

57 ②	56 (14) ①	55 (13)	54 ④	53 ③	52 ②
	子供の寿命	死んだ娘			
山城 英一	比嘉 カマ M 39・3・25	喜友名 市太郎 T 元・11・23	奥原 崇善 M 32・4・10	比嘉 カマ M 39・3・25	大城 カマド M 40・8・24
とても美しい娘がいた。姓名判断をしたら十八までの命だという。そ	28頁「子供の寿命」参照	31頁「死んだ娘」参照	この橋は、架けても架けても水に流されて壊れていた。誰かが橋の下に、七色ムーティーをしている人を埋めたら成功すると言った。そのことを言った本人の娘が、七色ムーティーをしていたのである。そしてその人を埋めたら橋は完成した。	女は人より先に物を言っではいけないということである。昔、真玉橋を造る時に、ある女が工事人に、この橋は人柱を立てないといけなと言った。また、この橋の下に、七色ムーティーを七結び結んでいる女を埋めなさいと言った。役人達は、あつちこつち探してもみつかることができなかった。それで、そういうふう最初に言った女の人を、探しなさいということ、やむなくその女の人を人柱にしたということ。だから、人より先に物を言っではいけないということである。	橋を架けても架けても流れてしまった。ある女の人が、七色ムーティーをした女の人を埋めると、その橋は架かるという。調べてみると、そのことを言った女の人が、七色ムーティーをしていた。それで女の人には埋められてしまう。女の方は、娘に人より先に物は言うなという。すると、娘は啞になった。娘が年頃になり、蝶々を見て「スーリアヤーハーベールー アンマームヌイラチャポリ ワンネークマンテイリツシンサビラ」と言い、それから話せるようになった。
○	×	×	×	△	×
7 B 8	2 A 25	1 B 3	7 B 15	2 A 26	1 A 26

64 ③	63 ②	62 (17) ①	61 ②	60 (16) ①	59 (15)	58 ③	
		継子話へ芋掘り✓		城間仲	石マーマの話		
比嘉 徳太郎 M 25・1・10	津波 輝 T 2・3・18	比嘉 ウト M 37・6・25	山城 英一 M 45・1・13	大城 利徳 M 41・4・24	松田 長秀 M 42・11・27	大城 利徳 M 41・4・24	M 45・1・13
芋の入っていない所を継子に掘らし、芋の入っている所を実子に掘らした。	45頁「継子の芋掘り」参照	継子と実子を芋掘りにいかせ、実子には芋がよく出る所をあたえ、継子には芋のない所をあたえた。	34頁「城間仲」参照	37頁「城間仲」参照	32頁「石マーマの話」参照	人間は、生まれた時から何歳までの寿命であるということは決められている。一合で一年である。八十八才のトーカーチになると、一斗升に米を盛って切るのである。そして切った残りは、子や孫の分だということである。	して十八になったのでその親は「今日限りの命だ。」と嘆いた。神様がそれを見て「娘の命を八だけ延ばそう。」といった。十八に八だということ、十八の上に八ということ、米という字になり八十八だということである。だから、八十八になると升に米を盛ってすり切り、残った米は子や孫のものであるという。そして、その人は八十八の祈願をして、すぐ亡くなったということである。
○	○	○	△	○	△	○	
2 B 14	1 A 27	1 A 4	7 B 2	7 A 5	4 A 3	7 A 8	

74 ⑥	73 ⑤	72 ④	71 ③	70 ②	69 (19) ①	68 ③	67 ②	66 (18) ①	65 ④
					継子の麦つき			継子と二十月	
山城英一	知花ナへ M 40・1・30	津波清吉 M 37・3・20	知花スミ M 39・8・17	比嘉カマ M 39・3・25	比嘉カメ M 34・11・30	大城ウト M 41・9・20	知花ナへ M 40・1・30	喜友名ヨシ T 元・8・10	比嘉カメ M 34・11・30
継子と実の子に麦を搗かせたら、継子の涙が麦の上に落ちたら上手にま搗かせた。	継母は、実子には水につけたふくらんだ麦を搗かせ、継子にはそのまま搗かせた。	昔、麦を搗く時水を入れずに搗いたので、あまりよく搗けなかった。麦を搗きながら難儀だったので、涙を落したら麦が搗きやすくなった。	43頁「継子の麦つき」参照	昔の大麦は皮がむけにくくてなかなか搗けなかった。継子にそれを搗かしたのがなかなかできなかった。濡れている所から麦の皮がむけるので、それから、麦を搗く時は水を入れるようになった。	継子が麦を搗こうとすると、涙が出てきたら麦がよく搗けるようになった。それで、麦は水を入れて搗くもんだなと分かったそうだ。	継子に夕飯を食べさせるため、十九日の月よりも二十日の月は早く上がる。	48頁「継子と二十日月」参照	48頁「継子と二十日月」参照	継母は、実子には畑の中の芋を掘らし、継子には側の土のかすの所を掘らした。継子の掘る所からは芋が多く出たそうだ。
○	○	×	○	○	○	×	○	×	○
8 B 2	2 A 10	1 A 29	3 A 5	6 A 5	5 A 13	5 A 14	2 A 9	1 A 28	5 A 12

82 ②	81 (25) ①	80 (24)	79 (23)	78 (22)	77 (21)	76 ②	75 (20) ①	
	継親念仏	継子と爪	継子とそら豆	継子とにが菜	継子話ハカラスと味噌▽		継子話ハ茶腹飯腹▽	
知花ハツ M 42・6・9	比嘉徳太郎 M 25・1・10	知花ナヘ M 40・1・30	山城英一 M 45・1・13	知花スミ M 39・8・17	新垣ゴゼイ T 元・12・20	大城幸太郎 M 33・11・10	大城ウサ M 33・7・10	M 45・1・13
40頁「継子話」参照	三才の時に、母親が亡くなったので、(父親は)後妻を迎えた。五才の時(亡くなった母親を)思い出し、七才の時母親を捜しに出かけた。七月のたなばたの時に、左の袖から母親を一目見ることができた。どうしてお母さんは、こんな遠くまでいらつしやったのかと。私は、継親とうまくいかないので、お母さんと一緒に行きたいですよというこ とである。継親念仏というエイサーの歌があった。	50頁「継子と爪」参照	50頁「継子とそら豆」参照	49頁「継子とにが菜」参照	46頁「継子話ハカラスと味噌▽」参照	継子と実子がいた。継母は、実子には御馳走をあげ、継子には芋とお茶をあげた。マラソン競争をさせたら、継子が優勝した。	44頁「継子の話ハ茶腹飯腹▽」参照	掲げるようになったので、それから妻は水を入れて搗くもんだと分かった。
△	○	○	○	○	○	△	×	
5A6	2B13	2A11	8B3	3B6	3A7	2A1	3B13	

89 (31) ①	88 (30)	87 ②	86 (29) ①	85 (28)	84 (27)	83 (26)	
猿長者	孫の生肝		兄弟の仲直り	親食いかマンタ	歌い骸骨	継子といばら	
M 39・8・17	知 花 ス ミ	比 嘉 カ マ	M 39・3・25	松 田 長 秀	M 38・7・5	知 花 ハ ツ	
泊まつて下さい。」と泊める。朝起きると、その人がお湯を沸かさせて	39頁「孫の生肝」参照	58頁「兄弟の仲直り」参照	仲良くなった。	ある兄弟は、仲が悪く友達と仲良くしていた。ある時、弟の畑を荒らす者がいるので、ある夜畑を見に行くと、人影が見えたので殺してしまつた。てつきり人を殺したと思ひ込んでしまつたのだが、実はイノシシであつた。そうとは知らず、弟は友達の家へ助けを求めると、誰も相手にしてくれなかつた。しかたなく仲の悪い兄の所へ相談に行くと、すぐに引き受けてくれた。二人で行くと、それは人間ではなくイノシシであつた。その時から兄弟よりいいものはないということ、仲良くなった。	カマンタの子が漁師の釣針にかかると、親の陰部に入る。それで、親まで一緒に釣り上げられてしまう。だから、カマンタの子は親を食うと言う。糸満の人の話である。	51頁「歌い骸骨」参照	47頁「継子が歌つた歌」参照
○	△	△	△	△	○	△	
3 B 7	2 A 28	4 B 6	2 A 27	4 B 5	2 A 19	5 A 8	

95 (34)	94 ②	93 (33) ①	92 ②	91 (32) ①	90 ②	
遊廓通いをやめさせた妻		火正月		大年の客		
喜友名 市太郎 T元・11・23	知花 ハツ M42・6・9	大城 ウト T元・12・20	知花 スミ M39・8・17	知花 ハツ M42・6・9	松田 長秀 M42・11・27	
57頁「遊廓通いをやめさせた話」参照	金持ちと貧乏人がいた。金持ちは、お金もたくさんあり御馳走もたくさん作った。貧乏人は、買おうと思ってもお金がなかった。山から薪を取って来て、「これで火正月をしようね。」と、お互いに言い合った。そして、火をぬくんで正月をしたので、「ヒーソーグワチ」ということで、いい正月になったということである。	金持ちと貧乏人がいて、金持ちは御馳走をたくさん買うのだが、貧乏人は火正月をしようとしていた。火正月がよい正月になった。	55頁「大年の客」参照	56頁「大年の客」参照	52頁「猿長者」参照	若水を浴びせると、老夫婦は若返った。そして、隣の金持ちの家にいくと、「どうして若返ったのか。」と問われたので、泊めてやった人が若くしてくれたと説明した。すると金持ちは、私達も若くなりたいということ、貧乏人を若返らせた人を連れてきて泊めた。そうして、その人達もお湯を沸かして浴びると、その家の人達は皆、猿や豚や犬等の動物になった。
×	○	○	○	○	△	
1B9	1A6	3A11	3B10	1A7	4A5	

三、笑 い 話

103 (6) ①	102 (5)	101 (4)	100 ③	99 ②	98 (3) ①	97 (2)	96 (1)
話千両	本部サールー	佐久川三良と喜屋武ミーぐわー			喜屋武ミーぐわー	勝連パーマ	渡嘉敷ペークー
大城カマド M 40・8・24	山城英一 M 45・1・13	山城英一 M 45・1・13	山城英一 M 45・1・13	大城利徳 M 41・4・24	国吉真次郎 M 27・2・8	山城英一 M 45・1・13	山城英一 M 45・1・13
仲のいい夫婦がいた。夫が勤めに出ている間、母親が男に変装して妻を守っていた。夫が帰って来て、その男の人を見て刀を抜いた。しかし夫は「イジヌイジラーティーヒキ」という言葉を思い出し、氣をはずめて男の人を見たら、それは自分の母であった。その言葉のおかげで互いに助かった。そのよいことを祭つてある所が白銀堂である。	70頁「本部サールー」参照	72頁「佐久川三良と喜屋武ミーぐわー」参照	63頁「喜屋武ミーぐわー」参照	67頁「喜屋武ミーぐわー」参照	69頁「喜屋武ミーぐわー」参照	60頁「勝連パーマ」参照	61頁「渡嘉敷ペークー」参照
×	○	○	○	×	○	○	○
1 A 24	8 A 8	8 A 10	8 A 9	7 A 2	5 A 21	8 B 5	7 B 7

109 ②	108 (9) ①	107 (8)	106 ②	105 (7) ①	104 ②
	モーイ親方八殿様の難題▽	主人と下男の話		下男が歌った歌	
大 城 利 徳 M 41 ・ 4 ・ 24	奥 原 崇 善 M 32 ・ 4 ・ 10	知 花 ハ ツ M 42 ・ 6 ・ 9	知 花 ハ ツ M 42 ・ 6 ・ 9	知 花 ハ ツ M 42 ・ 6 ・ 9	奥 原 崇 善 M 32 ・ 4 ・ 10
モーイは、ほんとは知恵があるのだが、片足にぞうり、片足に下駄をはいて街を歩いたので、馬鹿扱いされた。ある時、薩摩から三つの難題が琉球に来た。モーイに聞いてみようということになり、ある侍が	難題が出た。困っていたら、モーイ親方が自ら進んで引き受けた。モーイ親方は、薩摩の役人に恩納岳を運ぶ船を造って下さいと言った。薩摩は、そんな大きな船を造ることができなかったため降参した。それから、また薩摩は雄鶏の卵を持って来いと難題を出した。すると、モーイ親方は、それも引き受けて薩摩に出かけて行つた。薩摩の役人が、父親に頼んだはずだと言うと、モーイ親方は「父親は、お産で来ることが出来ません。」と言った。薩摩の役人が「男が子供を生むか。」と言つたら、モーイは「雄鶏も男です。」と答えて、問題を解いたという事である。	75頁「主人と下男の話」参照	金持ちに使われている下男が歌った歌である。「私董とうむてい、くならばくなせ くなしたる稲ぬ あぶし枕」金持ちの人が、いつも下男を馬鹿にしていたが、この歌の文句ひとつで、自分よりかしこいことを知った。	78頁「下男が歌った歌」参照	73頁「白銀堂由来」参照
○	○	○	△	△	×
3 A 18	1 A 14	8 A 7	1 A 11	5 A 7	7 B 14

113 ⑥	112 ⑤	111 ④	110 ③	
奥原崇善 M 32・4・10	国吉真次郎 M 27・2・8	大城利徳 M 41・4・24	国吉真次郎 M 27・2・28	
<p>薩摩から雄鶏の卵を持って来なさいという御用がきた。お父さんは大変困ったので、モーイが代わりに行った。そうして「お父さんは、お産もようで代わりに私が来ました。」と言ったら、「男がも妊娠するか!」</p> <p>「じゃ雄鶏がも卵を産めるか。」ということでも聞いた。次に、灰で縄を縛って来なさいというのには、お盆にそのまま縄を置いて焼き、そのまま持つて行き解いた。三問目は、恩納岳をこわして持つて来なさい</p>	<p>85頁「モーイ親方」参照</p>	<p>琉球に薩摩から難題が三つ来た。灰縄と雄鶏の卵と恩納岳を持つて来いという。雄鶏の卵は、自分の父親は今産気づいているといったら、男が子を産むかと言われたので、雄鶏が卵を産むのかとやり返した。恩納岳は、それを運ぶだけの船を持つて来たら、恩納岳をこわして持つて行くと言った。それをモーイが解いたのである。</p>	<p>モーイ親方は利口であった。父が公儀に呼び出されたのに、モーイが行った。「父を呼んだのに、お前が来たか。」というと、「父は産気づいて来れません。」といった。それでも公儀は、男がお産をするかと言ったので、モーイは雄鶏がも卵を産みますかと言った。それから、黒縄御用の話もある。</p>	<p>使いでモーイに聞いた。第一問は、灰縄を持つて来いという。縄を縛って、それを焼き、その灰を持つて行った。第二問は、雄鶏の卵を二つ持つて来いという。「王様はお産だから、もう少し待つて下さい。」と言おうと、「男が妊娠するか」という。「男が妊娠できないのに、雄鶏の卵があるはずがない。」と解く。第三問に恩納岳を持つて来いという。「恩納岳を運ぶ船を持つて来て下さい。」と解く。</p>
×	△	○	○	
7 B 12	5 A 17	5 B 6	2 B 3	

120 ③	119 ②	118 (13) ①	117 (12)	116 ②	115 (11) ①	114 (10) ⑦	
		姥棄山	松川童子		モーイ親方 △複数モチーフ▽	モーイ親方△勉強▽	
比嘉カマ M 39・3・25	知花ナヘ M 40・1・30	大城カマド M 40・8・24	比嘉徳太郎 M 25・1・10	大城カマド M 40・8・24	大城利徳 M 41・4・24	大城利徳 M 41・4・24	
昔のおばあさん達は、年をとったら用はないとどこかに捨てに行かれる。ある人は大事にしていたので、見つからない所におばあさんを隠しておいた。難題を出されて、灰で縄を縛って来なさいと言われた。その難題を、おばあさんから聞いて聞いたので、その時から年寄りを大事にするようになった。	87頁「姥棄山」参照	93頁「姥棄山」参照	94頁「松川童」参照	モーイが勝った。 モーイが勝った。 モーイ親方は、人には遊ぶふりをしていたが、だがとても勉強がよくなってきた。また、政府から雄鶏の卵と灰縄を持って来いと父親に難題がきた。父親が解けなかった難題を、モーイが解いて持っていったので、モーイが勝った。	80頁「モーイ親方」参照	84頁「モーイ親方」参照	ということであった。「じゃその恩納岳を乗せる船を準備して下さい」と言ったら、こんな大きな船はあるはずがなく、これで難題は問いた。
×	○	○	○	○	○	△	
2A 23	2A 3	1A 30	5B 4	1A 25	6A 1	6A 2	

128 (16)	127 ③	126 ②	125 (15) ①	124 ②	123 (14) ①	122 ⑤	121 ④
屁ひり嫁			山原と団亀		稲苗の根洗い由来		
大城 ウツト M 41・9・20	山城 英一 M 45・1・13	大城 重輝 M 41・2・20	比嘉 徳太郎 M 25・1・10	山城 英一 M 45・1・13	山城 英一 M 45・1・13	奥原 崇善 M 32・4・10	大城 利徳 M 41・4・24
105頁「屁こき嫁」参照	ある人が山原の旅の途中、前の人が山亀の上に糞をやったので、その亀が山道から歩いてきたので、「山原ぬ旅や 幾旅んさしが 糞ぬ歩ちゆしえー今度初みてい」と歌った。	106頁「山原と団亀」参照	山原の旅をしながら糞がしたくなったので、松葉が落ちていた所に糞をした。したら、その下に亀がいたらしくその亀が歩きだしたので旅人は、歌を詠んだ。「山原ぬ旅や 幾旅んさしが 糞ぬ歩ちゆしや今度初み。」	98頁「稲苗の根洗い由来」参照	稲植えの稲を運ぶ時、あるなまけ者の下男は、知恵はついていたので、その苗についている土を落として軽くして持つて行った。したらこの水で洗った稲が大変よく育ったという話。	金持ちのおじいさん、おばあさんでも、六十一才になれば土手の下に捨てに行つた。薩摩から命令で若い者が返答できない時に、「それは簡単だよ。」ということ年寄りが解いた。その時から年寄りは大切にしなさいということである。	89頁「姥棄山」参照
×	○	△	○	×	△	×	○
3 B 12	8 A 14	4 B 7	2 B 27	3 B 9	8 A 4	8 A 4	3 A 15

129 (17)	トグチクラニーの富を減らした人	比嘉 徳太郎 M 25・1・10	99頁「トグチクラニーの富を減らした話」参照	○	2 B 17
130 (18)	坊主御主	山城 英一 M 45・1・13	101頁「坊主御主」参照	○	8 A 11
131 (19) ①	肝試し	奥原 崇善 M 32・4・10	人が亡くなった晩に墓に行くことができるかどうかという賭をした。そして、他の人が白い着物を着て墓の上に立っていたら、幽霊だと思っ て負けたという話。次にコップの水を何分で飲めるかという賭けもあつ た。でも飲んでも、何分かつと少しづつ底に水がたまるので負けた という話。	×	8 A 3
132 ②		大城 利徳 M 41・4・24	103頁「肝試し」参照	○	7 A 4
133 ③		山城 英一 M 45・1・13	墓に行つて香炉をひっくり返して、そこに杭を打つてくることができ るかという賭。そして杭を打つ時に、自分の着物も一緒に打ちつけて しまった。先回りして墓に行った人が、上から声をかけたので、びっ くりして逃げようとしたが動けず、そこで死んでしまったという話。	○	8 A 12
134 ④		山城 英一 M 45・1・13	この話は、山城さんが二十才前後に、実際に肝試しをした話である。 墓に立てられている立て札を取つてくることができるかという賭であ る。できるという人が一人だけいて、実際に取つて来たので、山城さ んらは負けてしまった。また、亡くなってから4、5日たっている墓 に行つて、棺箱の蓋をひっくり返して来ることができるとかという賭。 できないと言つた人達は、できると言つた人達よりも意地が強かつた。 そして、その人達は、先回りして、死人は外に出して、棺箱の中に入つ	○	8 A 13

四、伝 説

141 ②	140 (2)① 夫振岩	139 (1) 沖繩の始まり
山城 英一 M 45・1・13	大城 利徳 M 41・4・24	喜友名 市太郎 T元・11・23
ある百姓の青年が、女を嫁にしようとするが、女は嫌がる。そこで、青年男女が集まって必ず一緒にさせようとした。海中の岩の上に連れて、モーアシビをしてから、時をみはからって仲間達は、二人を置き去りにして帰った。女は寒さのあまり、とうとう嫌な男の所にくっついてきた。男が着ているものをかぶせてくれたので、女は(男の)	112頁「夫振岩」参照	111頁「沖繩の始まり」参照
○	○	×
3 B 14	3 A 13	1 B 8

138 (22) つんぼ夫婦の話	137 (21) 犬の罰があたった夫婦	136 ②	135 (20)① 犬と女
知花 周一 M 23・7・5	喜友名 市太郎 T元・11・23	松田 長秀 M 42・11・27	喜友名 市太郎 T元・11・23
107頁「つんぼ夫婦の話」参照	109頁「犬の罰があたった夫婦」参照	108頁「犬の足跡」参照	110頁「犬と女」参照
○	×	△	×
2 B 24	1 B 5	4 B 8	1 B 4

た。死んだ人だとばかり思って、担いで外に出たら途中で、肩にかみついたのでびっくりしてその場で気を失なってしまった。

147 (7)		146 (6)	145 ②	144 (5) ①	143 (4)	142 (3)	
チーグー王		護佐丸と阿麻和利		阿麻和利	高志保のメーヌカー	井戸水比べ	
大城 幸太郎 M 33・11・10		大城 貞保 M 36・1・6	比嘉 徳太郎 M 25・1・10	松田 長秀 M 42・11・27	大城 利徳 M 41・4・24	知花 周一 M 23・7・5	
155頁「チーグー王」参照	護左丸は北山城に対抗するために、山田城を築いていた。しかし、そこよりは座喜味の方が物資を得るためにも、港が近くて良いので座喜味に移った。勝連城の阿麻和利は、護左丸がじやまなので、首里の王の所へ行き、護左丸は戦いの準備をしていると言った。首里の王は、密偵を出したが、その密偵は阿麻和利に脅されて、首里の王に護佐丸は戦う準備をしていると、嘘の報告をした。王は怒って夜、中城を攻めた。	116頁「阿麻和利と護佐丸」参照	121頁「阿麻和利へ綱発見」参照	昔、高志保の部落は、今ほど大きくなくメーヌカーのある所は山であった。そこから湧き出る泉の水は、アガリヌカー、ナカヌカー、イリヌカーと三つあり、アガリヌカーとイリヌカーは飲み水とし、ナカヌカーは洗濯をする所とされていた。また、ナカヌカーでは、お産の時の汚れものを洗ったりもした。高志保の人は、このカーの水を飲み大きくなった。人間が多くなってきたので、ためるようになり、今はそこを平坦にして三つの泉を一つにし八月十五日や九月九日は拝む。	115頁「井戸水比べ」参照	容姿はまずいが心は真面目なのだ二人夫婦になった。	
×	×	○	△	○	○	○	
2 A 13	6 A 6	5 B 2	4 B 9	5 B 9	2 B 26		

156 (15)	155 (14)	154 (13)	153 (12)	152 (11)	151 (10)	150 ②	149 (9) ①	148 (8)
男と女の節句の話	石敢当由来	普天間権現由来	イトトウカグシク	明ぬ王の由来	前寺の由来		高志保部落の始まり	伊平屋王の話
大 城 利 徳 M 41 ・ 4 ・ 24	国 吉 真 次 郎 M 27 ・ 2 ・ 8	大 城 ウ ト T 元 ・ 12 ・ 20	松 田 政 太 郎 M 43 ・ 11 ・ 5	比 嘉 太 郎 M 40 ・ 7 ・ 15	比 嘉 徳 太 郎 M 25 ・ 1 ・ 10	大 城 重 輝 M 41 ・ 2 ・ 20	奥 原 崇 善 M 32 ・ 4 ・ 10	比 嘉 徳 太 郎 M 25 ・ 1 ・ 10
女の子の節句は三月三日で、その日には川べりにあるツマ木の葉に餅を包んで、お隣近所に「どうぞわかってめしあがれ」と配ってあげた。男の子の節句は五月五日で、女の子と同様に作りむいてめしあがれと	ムンヌキヌクとって悪いことをのけさせるといふことである。	126頁「普天間権現由来」参照	戦に敗けたある人が、そこに一夜泊まったからイトトウカグシクという名が付いた。	129頁「明ぬ王の由来」参照	127頁「前寺の由来」参照	122頁「高志保城の話」参照	初めは伊波トクという人の子孫が、ヘンサチ小門中になっており、ザチミ（座喜味）城を造る時からいた。ヘンサチ小は、御嶽を作ることから始めた。今、この伊波トクという人は、西サチ小に祭られている。	伊平屋王加那志は、童名「いりい松金」といっていた。伊平屋に流されたが、美男子だったので、女達にかしずかれた。彼が作る田は、芋もよく実ったので、彼は伊平屋の王になった。
×	×	○	×	×	○	△	×	○
5 B 10	5 A 19	3 A 12	1 B 12	1 B 10	5 B 1	4 A 6	1 A 15	2 B 28

163 ③	162 ②	161 (18) ①	160 (17)	159 ③	158 ②	157 (16) ①	
		ハジチ由来	位牌由来			ナーチャミー由来	
大 城 利 徳 M 41 ・ 4 ・ 24	比 嘉 ン ト M 32 ・ 11 ・ 16	知 花 ハ ツ M 42 ・ 6 ・ 9	比 嘉 カ メ M 34 ・ 11 ・ 30	奥 原 崇 善 M 32 ・ 4 ・ 10	大 城 利 徳 M 41 ・ 4 ・ 24	大 城 利 徳 M 41 ・ 4 ・ 24	
134頁「ハジキ由来」参照	138頁「ハジキ由来」参照	唐の人が、夫も子供もいる人を妻にした。それで、唐の人は沖繩人を馬鹿にしているといい、この分だと皆唐に連れて行かれるというので、手の甲に野蠻人だよという印のつもりで、ハジチをしたという。	130頁「位牌由来」参照	葬式の翌日墓に行ったら、その死んだ人が生き返っていた。それからナーチャミー（ミジマチー）をするようになった。	那覇の町には貧しい人達もたくさんいた。そして、どこの誰が亡くなったという話を聞いたら、その貧しい人達は、葬式の日は一晩中起きていて、墓を開けて死人の身につけている物を全部はぎとった。それから、町の人は朝も夜も一週間ずっと通った。	死んだという事で墓に入れたんだが、二〜三カ年後の骨あげの時に墓を開けてみたら、墓はあるんだけど骨は箱の側に出ていた。死んだという事で墓に入れたんだが、生きていたんだなあ、生きていて箱から出てから死んだんだなど、不思議がった。それから翌日の朝墓に行つて、その様子を見るために、一週間墓に通った。これがナーチャミーの始まりである。	配ってあげた。
×	○	○	○	×	○	○	
3 A 10	1 A 3	1 A 2	5 A 10	7 B 16	7 A 7	7 A 6	

173 ②	172 (23) ①	171 (22)	170 (21)	169 (20)	168 ③	167 ②	166 (19) ①	165 ⑤	164 ④
	多幸山フェーレー	逆立ち幽霊	墓から聞こえる歌	い 同年生を見舞うものではない			お茶二杯		
奥原崇善 M 32・4・10	大城利徳 M 41・4・24	比嘉徳太郎 M 25・1・10	比嘉太郎 M 40・7・15	奥原崇善 M 32・4・10	大城利徳 M 41・4・24	知花ハツ M 42・6・9	比嘉太郎 M 40・7・15	奥原崇善 M 32・4・10	山城英一 M 45・1・13
た。多幸山フェーレーは、金持ちの物は盗るが、貧乏人の物は盗らなかつた。	149頁「多幸山フェーレー」参照	139頁「逆立ち幽霊」参照	140頁「墓から聞こえる歌」参照	134頁「同年生を見舞うものではない」参照	132頁「お茶二杯」参照	お茶を一杯だけ飲んで出ると早いので、だから二杯飲む間には、運も変わるからお茶は二杯飲むものである。	ある所を訪ねた時、お茶を出されたら、一杯飲むと危険がある。ある先輩が言うには二杯飲んで行くと、危険に合わないという。	137頁「ハジキ由来」参照	昔、グシク女といって武士のための遊女を、若い女達の中から選んだそうです。それに遊ばれないようにとハジキという入れ墨をしたそうです。
×	×	○	△	×	○	△	△	×	×
7 B 13	7 A 1	2 B 11	1 B 11	8 A 1	3 A 16	5 A 5	1 B 15	7 B 18	3 B 15

183 ②	182 (25) ① 吉屋チルー	181 ③	180 ②	179 (24) ① 久良波首里殿内	178 ⑦	177 ⑥	176 ⑤	175 ④	174 ③
大 城 利 徳	奥 原 崇 善 M 32 ・ 4 ・ 10	比 嘉 徳 太 郎 M 25 ・ 1 ・ 10	知 花 ハ ツ M 42 ・ 6 ・ 9	山 城 英 一 M 45 ・ 1 ・ 13	大 城 重 輝 M 41 ・ 2 ・ 20	喜 友 名 市 太 郎 T 元 ・ 11 ・ 23	比 嘉 徳 太 郎 M 25 ・ 1 ・ 10	知 花 ハ ツ M 42 ・ 6 ・ 9	山 城 英 一 M 45 ・ 1 ・ 13
吉屋チルーは、ジュリ売いされてからジュリ屋で大変苦労したので、	152頁「吉屋チルー」参照	141頁「久良波首里殿内」参照	山原から那覇に荷物を運ぶ時に、ちょうど久良波がさし向いにあつたので、その宿屋に泊まったら二度と出てくることはなかつた。泊まつた人は、そこで殺されて埋められていたそうだ。	142頁「久良波首里殿内」参照	150頁「多幸山フェーレー」参照	多幸山フェーレーは、貧乏人でもないし金持ちでもなかつた。そして、夜ではなく昼盗みをする。金が目当てでなくいたずらでやっていた。	多幸山に山賊が隠れていて、人が通ると頭上の包みを引っかけて盗っていた。	多幸山は昔、うっそうとした山だったそうだ。そこを山原から那覇に、また那覇から山原にと金持ちが旅をしていた。そこには盗賊がいて、ふろしきに金を持っている旅人を殺して、その金を盗んでいた。	146頁「多幸山フェーレー」参照
○	×	○	○	○	△	×	○	△	○
7 A 3	8 A 2	2 B 10	1 A 1	7 B 9	4 A 2	1 B 7	2 B 8	5 A 4	8 A 15

190 (32)①	189 (31)	188 (30)	187 (29)	186 (28)	185 (27)	184 (26)	
座喜味城の話	手水の緑	花売の縁	並松を植えた国頭親方	トウムシシチチャ	平敷屋朝敏	勝り山田	
比嘉 徳太郎 M 25・1・10	比嘉 徳太郎 M 25・1・10	比嘉 徳太郎 M 25・1・10	国吉 真次郎 M 27・2・8	比嘉 徳太郎 M 25・1・10	比嘉 徳太郎 M 25・1・10	国吉 真次郎 M 27・2・28	M 41・4・24
座喜味城を造る時、食糧が十分になかったので、城が完成するまでにたくさんの人が亡くなった。それで城近くのチブガマーという洞窟の中には、人の骨がたくさんあった。その時の王は、世の衰えであると嘆いた。そして、私が死んだら玉陵に埋めるのではなく、浦添ゆうどりに埋めてくれと言った。それで、その時の王は浦添ゆうどりに埋めら	161頁「手水の緑」参照	157頁「花売の縁」参照	122頁「並松を植えた国頭親方」参照	154頁「トウムシシチチャの話」参照	友寄、平敷屋は美男子で勝りのよい男であった。王様のウナジャラが、その人を望んでいたのので、ウナジャラの髪が乱れているだけで、「お前は彼と寝たな！」と疑われた。そのため、友寄、平敷屋は打首になり、赤木の赤虫になって、城の赤木についた。それが蛾になれば、友寄、平敷屋の遺念だと思えということである。	155頁「勝り山田」参照	「比謝橋ぬ橋や誰が架きというちえが 私渡さたみに架きというちえさ」という恨みの歌を歌った。
○	○	○	×	○	○	○	
5 A 25	2 B 15	5 B 3	5 A 18	5 A 23	2 B 21	2 B 4	

五、その他、世間話、民俗、歌

197 (5)	196 ②	195 (4) ①	194 (3)	193 (2)	192 (1)
豚マジン		火正月	フェーレー	チャーギの実	亀甲墓をかくした話
奥原崇善 M 32・4・10	大城幸太郎 M 33・11・10	津波清吉 M 37・3・20	大城カマド M 40・8・24	知花ナヘ M 40・1・30	知花ナヘ M 40・1・30
昔、夜中高志保の遊び場の前に、豚マジンンは現われて東の方に行つた。その道は、話によると神ん人の道であつたらしい。また、現在の風呂屋の後にも豚マジンンは現われて、下の畑の方に行つたといふことである。高志保には、その二カ所に豚マジンンが現われたといふことである。	貧乏人は、御馳走もないから地炉を囲んで火正月をする。	貧乏人は、食べるのも何もないので火をぬくんで火正月をした。	人通りの少ないウフギバンタや、渡慶次小学校の近くのウーシンニーという所にフェーレーが立っているといわれていたので、そこを歩くのが恐かつたといふことである。	169頁「チャーギの実」参照	167頁「亀甲墓偽装」参照
×	△	×	×	○	○
1 A 12	2 A 2	1 A 22	1 A 17	2 A 12	2 A 14

191 ②		
比嘉徳太郎 M 25・1・10		
169頁「座喜味城を造つた話」参照	れた王である。ゆうどうりといふ意味は、世の衰えといふ意味である。	
○		
2 B 6		

203 (8)	202 ④	201 ③	200 ②	199 (7) ①	198 (6)
影を幽霊とまちがえた話				キジムナー	クスケー
喜友名 市太郎 T元・11・23	奥原 崇善 M32・4・10	比嘉 太郎 M40・7・15	奥原 崇善 M32・4・10	喜友名 市太郎 T元・11・23	喜友名 ヨシ T元・8・10
漁師が、夜海に行った時、月の光のせいで水たまりの水に自分の影が写っているのを見て、自分が動くたびに大きくなったり小さくなったりするので、幽霊と間違えてびっくりして家に帰った。そして、他の人を二、三人連れて来てその現場に来た。そこで自分の影に騙されていたということに気づいたということである。	十二、三才の頃、夜海に行った時、キジムナー火（遺念火）というのを見た。そしてこつちに向かってくるんだが、すれ違う時には見えず、後をふり返るともうすであつちに行っていた。大正七、八年頃まで、砂糖時期になると、大変よくキジムナー火は見えたという。	高志保では、旧の八月にキジムナー火が出たという。八月の十五夜の季節に木の上に棚を架いて、その上に登って見た。海の上で、その火がよく見えたという。	十二、三才の頃、夜父親と一緒に海に行った時の話である。昔は電灯もなかったの、松の木に火をつけて持つて行った。そして前の方から火が近よつて来た。これを「キジムナー火」といった。その時に、父親が、何も言わず黙っておきなさいということと言つたそう。家に帰つてみると、取れた魚の目は全部くり抜かれていたということである。	キジムナーに押されたら動くこともできなかったそう。目方も三百斤以上であつて、息することも動くこともできず、五分程して目がさめた時に、キジムナーに押されたことに気づいたということである。	男の人達が、いくら酔つていてもくしゃみをしたら「クスタツケー」と返す。「クスタツケー」と返すいわれが昔からあつた。
×	×	△	×	×	×
1 B 6	7 B 11	7 A 9	1 A 10	1 B 2	1 A 21

210 (15)	209 (14)	208 (13)	207 (12)	206 (11)	205 (10)	204 (9)
東廻り	ヨーカビー	馬舞の話	誠の人に弓矢はたたない	姥棄山	チルミヌタントウイホータ 飯	名護親方
奥原崇善 M 32・4・10	奥原崇善 M 32・4・10	比嘉太郎 M 40・7・15	知花ハツ M 42・6・9	知花ハツ M 42・6・9	山城英一 M 45・1・13	比嘉カマ M 39・3・25
東廻りというのは、昔は十三年に一回行なわれた。それは一週間かかった。現在では五年に一回、一日で廻っている。最初は、崎樋川、崇元	ヨーカビーとはキジムナー火（遺念火）である。ヨーカビー前には、みんなで棚を作った。	馬舞は、約三百年前から伝えられているといわれているが、三百年前ではなくて、古くて二百〇七十年位前だと思ふ。戦前は太鼓打ち一人、馬乗り六人であったが、現在では太鼓打ちは二人となっている。太鼓打ちをする人は、元気で秀れていなければいけないということで名譽であった。服装は現在と変わらない。	昔、戦争があつたが弓矢の当る人と当らない人がいた。誠をした人には弓矢も刀もたたなかつた。そういうことから「マクトウヨー マクトウヨー クワウマガンカイチチュンドー アクユクヌミチン チヂュンドー」という諺があつた。	昔、沖縄は食べる物もなかつたので、五十才余になつたら役にも立たないということで、畑のあぜ道に捨てられてしまう。	毎月ウユミ（御馳走の日）があつたのだが、一月から九月までは月に一回ウユミがあつた。しかし、立冬（タントウイ）の月は、十月は御馳走もなにもないので、「もう今月は何もないから、チルミヌタントウイホータ飯しよう。」と行つたので、それからこの言葉が今も残っている。	昔、名護親方という人がいた。その人は、おとなしくて頭が良く魚を取る網もその人が考えた。おとなしい人には、昔よく名護親方といつてあだ名をつけた。
×	×	△	△	△	×	△
1 A 8	7 B 17	7 A 11	5 A 3	5 A 2	3 B 8	2 A 29

219 ②	218 ①	217 ③	216 ②	215 ①	214 ②	213 ①	212 ②	211 ①	
カンカー行事	ハシカの年は家では葬式はしない			猫が死んだら木に吊るす		鍋蓋アカマタ		お茶二杯	
大城 幸太郎 M 33・11・10	比嘉 太郎 M 40・7・15	大城 利徳 M 41・4・24	比嘉 太郎 M 40・7・15	津波 清吉 M 37・3・20	新垣 ゴゼイ T 元・12・20	津波 輝 T 2・3・18	新垣 ゴゼイ T 元・12・20	津波 清吉 M 37・3・20	
旧八月の始めの戌(つちのえの日)に、昔は村の入口に悪風が来ないように、縄をし牛の骨を埋め祈願する。	麻疹に子供がかかった年月には、死人があると家では葬式はせずに、村はずれのホーグ(保護林)に出て葬式をする。	猫が死ぬと、地面に埋めずに木に吊るす。そうすると、病気になるはずにすむ。	猫が死んで地面に埋めると、シミチャー(喘息)になるからというこ とで、木に吊るしなさいという昔の言葉がある。	猫が死んだら土に埋めるのではなく、首をひもで結び木に吊るす。そ うしないと猫を埋めた人が喘息にかかる。	鍋の蓋は、うつ伏せて捨てるとアカマタが生まれるので、あお向けに 捨てる。	芋を炊く時に使う大きな鍋のふた(カマンタ)が、古くなったらどこ にでも捨てるのではなく木にぶらさげないといけない。そうしないと、 カマンタの下からヘビが化けて出てくることがある。それでカマンタ はかならず木に吊るす。	仏壇には、お茶は一杯しかそなえないので、生きた人が一杯飲むと死 んだ人のようにだから、一杯飲んではいけない。	亡くなった人が一杯のお茶を飲むのであって、生きている人は二杯以 上のお茶を飲む。	寺、首里の樋川、弁ガ岳、与那原の大井、受水走水、斉場御嶽、玉城 村の仲村渠、百名の三穂田を東廻いしてから、今帰仁城に行く。
×	△	×	○	×	○	×	○	×	
2 A 15	1 B 16	3 A 4	1 B 14	1 A 20	3 A 5	1 A 19	3 A 17	1 A 18	

226 (26)	225 (25)	224 (24)	223 (23)	222 (22)	221 (21) ②	220 (20) ①
ハブは神のつかい	五月五日の話	イリガサチュラガサの話	ハジチ由来	悪払い		浜下り
比嘉 徳太郎	知花 マサ M 37・4・7	比嘉 徳太郎 M 25・1・10	比嘉 カマ M 39・3・25	松田 芳英 M 45・5・10	知花 ハツ M 42・6・9	大城 トミ M 43・3・24
ハブは、神のつかいであるから人を咬まない。人がハブに咬まれるの厄払いをした。	人が死んだ時、家族の者は菴蒲を頭にくびったり髪にさしたりして、厄払いをした。	昔、イリガサやチュラガサにかかった人は、死なないうちから箱に入れて、村はずれに捨てた。すると、病人は箱から出て死んでいた。それで昔は、ナーチャミーは朝茶を持って行った。三日見に行つて、動かなかつたらそのままにした。	大人になつたしるしとして、入れ墨をする人がいた。十七、八才の時にやった。なおるまでは、あつち行つたりこつち行つたりして楽しんでだ。	大正五、六年の頃、一家に人が亡くなつた場合悪払いをした。青年二人でボーフィを振り呪文を唱えながら、悪魔を追い払うのを見た。また、家の柱の周囲を呪文を唱えながら三回程廻つて、家の前に置いてある臼をけとばして倒し、字のホーグの方まで、ボーフィ、ボーフィと、悪魔を追い払うのをよく見た。	昔の家は開けっぱなしであった。それで雀が入ると縁起が悪いということであつた。家族全員一晩寝泊りした。そして翌日帰る時は、親戚の人がお盆に御馳走をのせて持つて行き、夕方になつてから帰つた。帰つてくるとすぐに台所の灰を見に行つた。その灰がかきまぜられていとけがれているといつたらしい。	朝、家に鳥が入つたら、その家族は食べ物やむしろを持つて、浜に下りなければいけない。また、親類の家々を廻つて厄払いをしなければいけないということです。
○	○	○	×	×	○	×
2 B 20	2 B 16	2 B 12	2 A 20	2 A 17	8 A 6	2 A 16

231 (31)	230 (30)	229 (29)	228 (28)	227 (27)
歌	帽子編みの歌	高志保部落の話	盆の翌日は水浴びをしてはいけない	ムーチーの話
知花ナへ M 40・1・30	津波清吉 M 37・3・20	比嘉太郎 M 40・7・15	奥原ヨネ M 41・3・24	大城利徳 M 41・4・24
貧乏人が人を泊めた。その人が出て行く時に「あていん喜ぶな 失な ていん泣くな 人ぬ吉悪や後るしゆる（あつても喜ぶな 失つても泣	女の人達が集まり、帽子を編んだりした時に歌った歌である。歌の内 容は、帽子のてっぺんを編むのはむつかしい。それを男の人が編んで やるから、嫁に来ないかということである。しかし女の人は、いくら 帽子を編みあげても嫁には行かないということである。	以前、高志保部落はマチヂカサと呼ばれていたが、その後高志保に改 名した。高志保には城はなく、神アサギがあり二つの石の神様があつ た。最初に出来た井戸が、高志保の公民館前にある井戸だといわれて いる。そして、もう一つの井戸は北の方のシルミジの井戸、一つは前 又井戸、またヌール井戸というのがあり、この水のおかげで高志保部 落は繁盛した。また八月のりっぱなよい日を選んで、悪風返しのカン カー祭りがある。昔は豚をつぶしてやった。高志保には、七十才以上 の方々に祈願役人という役目の方がいる。また、旧の八月に、マチ（部 落）の御願という大きな行事がある。いろんな行事の場合六十五才以 上の老人が中心となって進められている。	お盆の翌日は、お盆をしに来ていたあの世の人が、体についているス スを落とす為に、お盆のすんだ十六日に海や川に行つて浴びるとい う。そして、生きている人は、十六日に海や川に行つて浴びたり遊んだり すると、その後戻つて来てから病気をすると治らないそうだ。	子供のたくさんいる家は、十二月の八日には必ず餅を吊るして、一年 の家庭内の無事を祈る。
○	○	△	×	×
2 A 7	1 A 16	7 A 10	3 B 11	3 A 3

232 32	夫婦の歌	比嘉 徳太郎 M 25・1・10	<p>く。人の吉し悪しは後で分かるのだから」と歌を歌って出て行った。その人は、普通の人ではなく神様であった。金持ちにあんまり馬鹿にされていた。でも金持ちの人は、そのみすばらしい姿をした神を泊めなかったが、貧乏人は喜んで泊めた。神様に助けられたということである。</p> <p>「妻ぶりのまぶり しみさるんなぎいてい 夫ぶりのまぶり 芭蕉ばーらなぎてい」夫婦があまりほれ合つてはいけない。夫は何もかもなげ出し、妻は芭蕉をつむぎ入れる籠までなげすてる。「かし足らじ足らじ命までいん足らじ かなし思里とう あしび足らじ」あまり満ち足りてはあふれるのであつて、いつでもいく分か足りない方がよいということである。</p>
233 33	家庭の法律	比嘉 徳太郎 M 25・1・10	<p>女は御飯を作るのが仕事、男はお金をもうけて家族を養うのが仕事である。</p>
234 34	沖縄のカタカシラ	国吉 真次郎 M 27・2・28	<p>「唐やヒラグン 大和やカンブー！さらば沖縄前カタカシラ」と言つて、武士はカタカシラを大切にし、めつたに切らさなかつた。</p>
235 35	人をバカにするな	比嘉 徳太郎 M 25・1・10	<p>「揃ていめえる人達ぬちゃー 誠うでえいち悪欲問答すしに流さりさ 銭金もおきゆらあ欲にふちりてい 人ふりむんなち騙ちやいすな とーいや栄えていん後お悔やむん 銭ぬ道からる親とうん子とうん兄弟とうん友達とうんくわいぐとう 貧乏やそーていんちりふあるでえいち」集まつているみなさんよ 誠が第一だよ悪欲をもっている人にほだされるなよ お金をたくさんもうけたら欲が出てきて 人を馬鹿にして騙したりするな 今は栄えても後は悔やむよ、お金のことから親、子、兄弟、友達とも気まづくなるのだから 貧乏であつてもそのつながりが大切だよという歌である。</p>

243 (42)	242 (41)	241 (40)	240 (39)	239 (38)	238 (37)	237 ②	236 (36) ①
教訓歌	継子の歌	昔の人の言うことば	読谷の高さの話	子どもが生まれた時の歌	赤田御門の歌		柳節
知花ハツ M 42・6・9	新垣ゴゼイ T 元・12・20	大城ウト T 元・12・20	知花周一 M 23・7・5	比嘉徳太郎 M 25・1・10	比嘉徳太郎 M 25・1・10	比嘉徳太郎 M 25・1・10	比嘉徳太郎 M 25・1・10
人の言うことを聞かず、返事をするだけで心に染めないのは何の意味もないという歌。	私を育ててくれないのに、どうして私を生んだのかという歌。	昔の人が言うには、女が落ちぶれたら蛇になるよ。大変だよ、恐いものだよ、私はそれを見に行くよということである。	読谷は、昔からよい所であり高い所であった。特に芋酒がよい。次の歌があった。「読谷山高さ芋とう御酒 うりやかね高さ座喜味城」。	「女ん子生さわはいまあみぐらち 男ん子生さわ茶わん御酒」の返し歌として、「今年くぬ御世に生まりたる女 きいすくわしりらんむちみあがみ」という歌がある。また「上がい太陽拝むうまん人ぬ御願げ 御見守んてい賜り御太陽御月」という歌。	「赤田門に立ちゆる黒目眉二才ぐわー 城見ぞよ怒うるしむん であんなくとう ええつちやーすがやあ うりひるましむん 居りわん立ていわん一人顔見い見い」という子守歌である。	「柳は緑 梅は匂い 糸はたれない 人は情」柳は豊かにたれ下がっている緑が自慢で、梅は香ばしい匂いが自慢である。糸は腐れないのがよい。人はただ情が大切で、誠があつて情のある人が誰からも好かれるという歌である。	「梅は匂い 糸はたれない 人はただ情」梅は匂い、糸は腐れない、人はただ情が大切だという歌。
△	○	○	○	○	○	○	○
5 A 1	3 A 9	3 A 8	2 B 25	2 B 23	2 B 22	5 A 24	2 B 19

244 43	知事の銅像を立てた時の歌	比喜徳太郎	奥武山にその当時の知事の銅像を立てた時の歌である。
M 25	1	10	
		○	
		5 B 5	

◆ 高志保の民話調査者名簿 (二十四名・五十音順)

沖縄国際大学口承文芸研究会

遠藤庄治(顧問教授)・天久節子・新垣修子・石原敏代・上江洲康子・
上間京美・運天悦子・大官見光一・佐和田茂美・知花利江子・富村
朝夫・仲村渠清美・宮里光雄・宮平享安・屋比久直美・山城悦子

読谷ゆうがおの会

知花千代子 上地吉子

読谷村立歴史民俗資料館

◎天久加代子◎知花春美◎名嘉真宜勝・村山友江

注 ◎印はゆうがおの会会員

その他(那覇民話の会)立命館大学

伊芸弘子・坂崎弘



読谷ゆうがおの会の皆さん

翻 字 者 一 覧 表

番号	翻字者名	翻字番号	話柄	話者	掲載頁
1	安里 和子 北谷町桑江 四七八―十二	45 68	兄弟の仲直り 山原と団亀	松田長秀 大城重輝	58 106
2	天久 加代子 読谷村字波平 六五	13 26 32 35 39 40	化物寺 城間 仲 継子の芋掘り 継子と二十日月 継子とそら豆 歌い骸骨 渡嘉敷ベークー 白銀堂由来 主人と下男の話 ハジキ由来 久良波首里殿内 チーグー王 亀甲墓偽装	比嘉カマ 山城英一 津波 輝 喜友名ヨシ 山城英一 屋良ツル 山城英一 奥原崇善 知花ハツ 奥原崇善 山城英一 大城幸太郎 知花ナヘ	16 34 45 48 50 51 61 73 75 137 142 155 167
3	上原 ヨシ 読谷村字瀬名波 二二一―六	74 80 86	夫 振 岩 普天間権現由来 ハジキ由来	大城利徳 大城ウト 大城利徳	112 126 134
4	大城 純子 読谷村字波平 二四〇	15 58 78	アカマタ嫁入 モーイ親方 並松を植えた国頭親方	国吉真次郎 国吉真次郎 国吉真次郎	19 85 122
5	具志堅 タケ 読谷村字高志保 二五六―二	41	猿 長 者	松田長秀	52

番号	翻字者名	翻字番号	話柄	話者	掲載頁
6	国吉 トミ 読谷村字楚辺 一三一―七―五	31 42 63	継子話〈茶腹飯腹〉 大年の客 稲苗の根洗い由来	大城ウサ 知花スミ 山城英一	44 55 98
7	島袋 喜美子 読谷村字座喜味 一四七	11 20 22	キジムナー〈魚取り〉 天人女房 子供の寿命	松田芳英 比嘉カマ 比嘉カマ	13 25 28
8	島袋 守成 千代 沖繩市美里 五一九	36 59 103	継子と二十日月 姥 棄 山 チャーギの実	知花ナヘ 知花ナヘ 知花ナヘ	48 87 169
9	島袋 智子 沖繩市仲宗根 六一―十	33 64 69 75 89 91	継子話〈カラスと味噌〉 トクチクラニーの寓を減らした話 つんぼ夫婦の話 井戸水比べ 逆立幽霊 久良波首里殿内	新垣ゴセイ 比嘉徳太郎 知花周一 知花周一 比嘉徳太郎 比嘉徳太郎	46 99 107 115 139 141
10	島袋 フジエ 読谷村字伊良皆 四九七	2 7 25 95	雀 孝 行 犬 の 足 石マーマーの話 多幸山フェーレー	知花トキ 大城清一 松田長秀 大城重輝	2 9 32 150
11	知花 孝子 読谷村字大木 三七三―二	29 34 77	継子話 継子が歌った歌 阿麻和利〈網発見〉	知花ハツ 知花ハツ 松田長秀	40 47 121
12	知花 春美 読谷村字長浜 一七九四―一	8 9 10	鬼餅由来 キジムナー キジムナー	奥原崇善 大城利徳 知花トキ	9 10 12

◆ 参 考 文 献

- 1 『日本昔話名彙』柳田国男監修 日本放送協会編 日本放送出版協会 昭和四九年二月 二版
- 2 『日本昔話集成』関敬吾著 角川書店 昭和二五年―三三年
- 3 『沖繩語辞典』国立国語研究所編 大蔵印刷局 昭和五十年三月 四版
- 4 『琉球史辞典』中山盛茂編著 文教図書 昭和五十年
- 5 『沖繩大百科事典』沖繩タイムス社編 一九八三年五月
- 6 『今婦仁方言辞典』仲宗根政善著 角川書店 昭和五八年二月
- 7 『沖繩ことわざ事典』仲井真元楮著 月刊沖繩社 一九八二年五月
- 8 『日本昔話通観第26巻 沖繩』稲田浩二・小澤俊夫編 同朋舎出版 一九八三年七月二十五日
- 9 『沖繩の伝説2』大城立裕・星雅彦・茨木憲著 角川書店 昭和五一年二月
- 10 『組踊全集』當間清弘編集 一九七七年一月
- 11 『伊平屋島民俗散歩』上江洲均著 ひるぎ社 一九八六年一月
- 12 『読谷の文化財第一集』読谷村教育委員会 昭和五三年三月
- 13 『伊良皆の民話』読谷村立歴史民俗資料館編 昭和五四年三月
- 14 『喜名の民話』読谷村立歴史民俗資料館編 昭和五五年三月
- 15 『長浜の民話』読谷村立歴史民俗資料館編 昭和五六年三月
- 16 『瀬名波の民話』読谷村立歴史民俗資料館編 昭和五七年三月
- 17 『儀間の民話』読谷村立歴史民俗資料館編 昭和五八年三月
- 18 『宇座の民話』読谷村立歴史民俗資料館編 昭和五九年三月
- 19 『渡慶次の民話』読谷村立歴史民俗資料館編 昭和六十年三月

編集後記

『高志保の民話』の発行は、第七集『渡慶次の民話』につぐもので、その準備は昭和六十年四月から行い、一カ年の歳月をかけた。この本が出来上がるまでには多くの人々の御協力があった。その経過は次の通りである。

一、高志保の民話資料集は、高志保民話調査として、昭和五二年二月二十二日から昭和六十年四月十六日にかけて行われ、二四四話（90分録音テープ八本）の資料を採集した。これは沖繩国際大学遠藤ゼミ、同大学口承文芸研究会、読谷ゆうがの会、読谷村立歴史民俗資料館等による協同調査、及び単独調査によるものである。また、他に立命館大学の協力もあった。本文中の〈読谷村民話調査団〉とは、三者の協同調査のことをいう。

二、翻字作業については、採集総話数二四四話のなかから一〇四話を選定し、読谷ゆうがおの会々員にひとりあたり、四〇五話ずつの翻字を依頼した。

三、翻字原稿の点検作業は、資料館に於て行われた。会員から提出された原稿を再度テープを回し、方言で語られていることばひとつひとつを点検していった。そして、段落や対訳についても検討し、原稿の空白部分は直接話者のところへ出向いて埋めるようにした。それらが済むと所定の原稿用紙（24字×20行の上下二段組）に清書した。

四、部立ては、前編に翻字資料、後編に資料編を持つてきた。話

者の顔写真は、紙幅の都合で話数の多い方だけにしぼった。また本文中の写真も最小限にとどめた。

五、校正作業は、名嘉真、知花、天久、村山が担当し五校正を行った。装丁は前の集と同じである。

六、写真は、泉川良彦（読谷村史編集室臨時職員）、知花、村山の撮影によるものである。

現在、九集、波平の民話、刊行の為の翻字作業準備中である。索引や型式分類等は、最終的に全字のを一冊にまとめて刊行する予定でいる。

最後に、『高志保の民話』の刊行にあたっては、高志保老人会、公民館長をはじめ職員の方々の多大な御協力があったことを銘記し、感謝申し上げます。

昭和六十年十二月二十日

館長 名嘉真 宜勝

編 集 者

館 長 名嘉真 宜 勝
事務主事 知 花 春 美
非常勤 村 山 友 江
” 天 久 加代子

高志保の民話 読谷村民話資料集 8

印刷年月日 昭和61年2月20日

発行年月日 昭和61年3月31日

編集・発行 読 谷 村 教 育 委 員 会

歴 史 民 俗 資 料 館

編集責任者 名 嘉 真 宜 勝

〒904-03 沖縄県読谷村字座喜味708-4

電 話 098958-3141

印 刷 文 進 印 刷 株 式 会 社

沖縄県那覇市上間567番地

電 話 0988 (55) 2323(代)
